

山根Ⅲ遺跡
上原Ⅳ遺跡
幸神遺跡(2)

ハツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

山根Ⅲ遺跡(2) 上原Ⅳ遺跡 幸神遺跡

ハツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第17集



二〇〇八

国土交通省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

2008

国土交通省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

山根Ⅲ遺跡(2)
上原Ⅳ遺跡
さいの幸 かみ神 遺跡

ハツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

2008

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



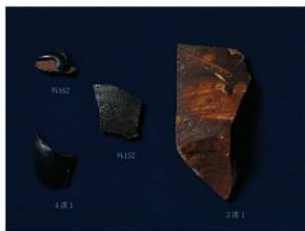
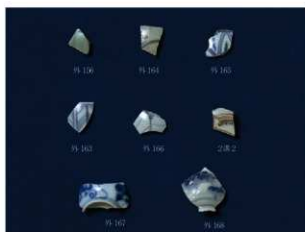
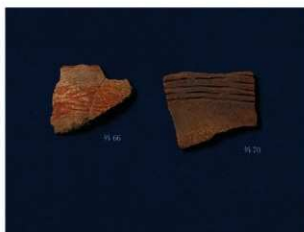
1. 上原IV遺跡から丸岩を望む



2. 上原IV遺跡上調査区全景



1. 上原IV遺跡1号列石遺構全景



2. 上原IV遺跡赤彩土器及び中近世陶磁器

序

ハツ場ダムは、首都圏の利水および治水を目的に計画され、現在は吾妻郡長野原町ならびに同東吾妻町を中心に工事が進められています。ハツ場ダムの建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成6年度から開始され、本年度で14年目を迎えました。

今回報告します山根Ⅲ遺跡・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡は、吾妻川を挟んだ兩岸に点在しています。小規模な調査ではありますが、縄文時代中期から後期・晩期、弥生時代前期まで充実した成果がありました。なかでも、山根Ⅲ遺跡は横壁地区の縄文時代中期から後期にわたる大集落横壁中村遺跡に近く、幸神遺跡も同時期の大集落長野原一本松遺跡に隣接しています。こうした大集落の周辺に展開する小規模な集落の存在も、対比資料として重要なものです。また、上原Ⅳ遺跡の弥生時代前期のまとまった資料も、出土資料の少ない時期の遺物として、注目されるものと思われます。

今回の報告書刊行に至るまでには、国土交通省ハツ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、ならびに地元関係者の皆様に多大なるご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げるとともに、本書が基本的な歴史資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成20年 3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

1. 本書は、ハツ場ダム建設工事に伴う山根Ⅲ遺跡(2)、上原Ⅳ遺跡、幸神遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。山根Ⅲ遺跡は、『ハツ場ダム発掘調査集成(1)』2002において24区の一部が報告済であるため、本報告が遺跡通番で第2集となる。なお、幸神遺跡の遺跡名称は、平成9年度まで長野幸神遺跡であったが、その後の変更により、本報告が正式名称となる。

2. 遺跡所在地

山根Ⅲ遺跡	吾妻郡長野原町大字山根425-2
上原Ⅳ遺跡	吾妻郡長野原町大字林1110、1111、1112-1、1113-1、1136、1205
幸神遺跡	吾妻郡長野原町大字長野原1139、1140-2、1141、1143-1、1144、1150、1151、1152、1146-2

3. 事業主体

国土交通省

4. 調査主体

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査期間及び担当者

(1)発掘調査

山根Ⅲ遺跡	平成13年(2001)8月27日～同年9月25日	藤巻幸男	諸田康成
	平成18年(2006)4月17日～同年5月23日	飯森康広	田村邦宏
上原Ⅳ遺跡	平成15年(2003)8月1日～同年9月15日	原 信行	飯森康広
幸神遺跡	平成8年(1996)4月1日～同年9月31日	綿貫邦男	山口逸弘 榑澤健二
		金井 武 関 俊明	諸田康成
	平成9年(1997)7月1日～同年12月19日	山口逸弘	関 俊明 諸田康成 石田 真
	平成14年(2002)12月18日～同年12月20日	麻生敏隆	原 信行 飯森康広
	平成17年(2005)11月24日～同年12月9日	麻生敏隆	友廣哲也 森田真一

(2)整 理

3遺跡共通	整理期間	平成19年(2004)1月10日～同年3月31日
		土器の接合・復元作業は、籠原正洋、新山保和(嘱託員)が補佐した。

山根Ⅲ遺跡	整理主担当	瀧川伸男	副担当	中沢 悟
-------	-------	------	-----	------

上原Ⅳ遺跡	整理担当	飯森康広
-------	------	------

幸神遺跡	整理主担当	中沢 悟	副担当	瀧川伸男
------	-------	------	-----	------

(3)事 務

理事長	小野宇三郎(平成13～16年)	高橋勇夫(同17・18年)			
常務理事	菅野 清(平成8・9年度)	吉田 豊(平成13・14年)			
	住谷永市(同15・16年)	木村裕紀(同17・18年)			
事業局長	原田恒弘(平成8・9年度)	赤山容造(平成13年)			
	神保佑史(同14～16年)	津金澤吉茂(同17・18年)			
副事業局長	赤山容造(平成9年度)				
総務部長	矢崎俊夫(平成17・18年)				
管理部長	蜂巣 実(平成8年度)	渡辺 健(同9年度)			
	住谷 進(同13年)	萩原利通(同14・15年)			
	矢崎俊夫(同16年)				
総務課	平成8年度	小沢 淳	笠原秀樹	國定 均	須田朋子
		吉田有光	柳岡良宏	宮崎忠司	
	平成9年度	小沢 淳	笠原秀樹	井上 剛	須田朋子
		吉田有光	柳岡良宏	岡嶋伸昌	宮崎忠司

平成13年度 大島信夫 笠原秀樹 小山健夫 須田朋子
 中沢 悟 吉田有光 森下弘美 片岡徳雄
 ハツ場ダム調査事務所長 水田 稔(平成14・15年) 市 隆之(同16～18年)
 同調査研究部長 津金澤吉茂(平成14・15年) 佐藤明人(同16～18年)
 同調査研究課長 担当課長 岸田治男(平成8年度) 能登 健(平成9年度)
 下城 正(平成13・14年度) 齊藤和之(平成15年度)
 中沢 悟(平成17年度)
 同庶務係長 野口富太郎(平成14～16年) 町田文雄(同17年)
 同庶務GL 吉田有光(平成18年)
 同庶務係 矢嶋知恵子(平成14・15年) 富澤よねこ(同16・17年)

6. 報告書作成関係者

- 3 遺跡共通 3 遺跡の合冊編集作業及び本文執筆第1章 飯森康広
 19年度校正作業他 瀧川仲男
 縄文土器の型式判定 藤巻幸男 石村鑑定 渡辺弘幸 遺物写真撮影 佐藤元彦
 金属器保存処理 関 邦一 小村浩一 津久井桂一 多田ひさ子 長岡久幸
 機械実測 田所順子 伊東博子 岸 弘子
 木器保存処理および実測・樹種同定プレバレート作成 小池 縁 佐々木茂美 野沢 健
 整理補助員 株式会社 歴史の杜からの派遣
- 山根Ⅲ遺跡 編 集 瀧川仲男 中沢 悟
 (第2章) 本文執筆 第4節2、第5節1の一部、2(2)、4 飯森康広
 第6節 藤巻幸男 上記以外第2章 瀧川仲男
 遺物観察については、中沢 悟が担当し、藤巻幸男、小野和之、山口逸弘、麻生敏隆、
 大西雅広、篠原正洋の指導、助言を仰いだ。
- 上原Ⅳ遺跡 編 集 飯森康広
 (第3章) 本文執筆 第6節第3項 篠原正洋、左記以外第3章 飯森康広
 縄文時代晩期以前の土器型式判定 藤巻幸男
 同晩期～弥生時代遺物の年代判定 設楽博己、篠原正洋
 古墳時代遺物の年代比定 坂口 一、平安時代遺物の年代比定 神谷佳明
 中国陶磁器型式判定 小野正敏、瀬戸美濃系陶磁器型式判定 藤澤良祐
 縄文時代未掲載遺物のカウントは藤巻幸男に、近世陶磁器の観察については黒澤照弘の
 指導、助言を仰いだ。
- 幸神遺跡 編 集 中沢 悟
 (第4章) 本文執筆 第5節3の一部・第6節2麻生敏隆、第6節3山口逸弘、第5節4諸田康成、
 上記以外第4章中沢 悟、住居及び土坑の遺構図作成 友廣哲也、遺物観察については、藤
 巻幸男、小野和之、山口逸弘、麻生敏隆、篠原正洋の指導、助言を仰いだ。

- 自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボ、株式会社古環境研究所に委託して行った。
- 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略、順不同)
 国土交通省関東地方整備局ハツ場ダム工事事務所、長野県教育委員会、秋本太郎、小野正敏
 齋藤慎一、設楽博己、白石光男、富田孝彦、藤澤良祐
- 調査資料は一括して、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。
- 発掘調査にあつては、地元長野原町をはじめとし、嬭恋村、六合村、草津町、東吾妻町、中之条町などから多くの方々が作業に従事していただいた。ここにあらためて感謝の意を表します。

凡 例

1. 3遺跡を合本で報告するにあたり、挿図番号、表番号、写真図版は通番で付番してある。以下の凡例も、原則共通である。

2. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

3. 遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。

住居跡・堅穴状遺構 1 : 60 住居跡の炉 1 : 30 土坑・ピット 1 : 40
溝 1 : 80 配石遺構・焼土遺構・集石遺構 1 : 30

4. 遺構図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。



5. 遺物図の縮尺は原則下記のとおりであり、それ以外の場合、各挿図番号に()書きを付した。

石鏃・ドリル 1 : 1
石匙・スクレイパー・石核・砥石・鉄器・縄文早期土器破片 1 : 2
ミニチュア土器、杯・椀・皿類、陶磁器・土器破片 1 : 3
たたき石・打斧・磨斧・磨石・くほみ石・石棒 1 : 3
縄文土器、弥生土器、土師器甕、須恵器羽釜、石皿 1 : 4
下駄・桶底板・板類 1 : 4
大形土器・石鉢・杭・大形木製品 1 : 6

6. 遺物図中のクリーントーンは、下記のとおりある。



また、縄文早期から、前期前半の繊維を含む土器には、断面に●を印した。

7. テフラについては、略称を使用している。

YPk 浅間草津黄色軽石(As-YPk) 浅間B軽石 浅間Bテフラ(As-B)
柏川テフラ 浅間柏川テフラ(As-Kk)

8. 遺物写真は、原則実測図とはほぼ同じ縮尺で掲載してある。

9. 遺物観察表(土器)の法量は、口径を口、底径を底、器高を高と略した。推定径には全て()を付した。遺物観察表(石器・鉄器類)の規模は、欠損品の数値の場合()を付して完形品と区別した。

10. 遺物観察表(土器)の色調は、農林水産省農林水産技術会議 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』を参考に色名を使用した。

11. 堅穴住居跡の主軸方位は、柄鏡型については柄部を縦断する軸線を主軸とし、その他は傾斜に対して直交方向に近い壁面方位を、主軸として計測した。

12. 遺構番号の呼称は、中グリッド別に付番し、グリッド名を冠して呼称することが、八ッ場地区の原則である。例えば、「84区1号住居跡」などと呼称する。ただし、上原IV遺跡は報告部分がすべて「84区」であるため、報告書中での名称は中グリッド名を省略して掲載してある。

13. 写真図版上での遺物Noは、「号」を省略するなど適宜行った。
14. 山根Ⅲ遺跡・上原Ⅳ遺跡の遺構名称及び付番は、原則調査時点のものをそのまま使用するよう努めた。このため、以下のとおり欠番が生じた。この場合、遺構番号の振り替えなどにより欠番とならなかったものは除外する。

山根Ⅲ遺跡

土坑 23区7

上原Ⅳ遺跡

住居 84区2号住P3、P6

土坑 84区5

ピット 84区3～9・11・16・18

15. 上原Ⅳ遺跡では遺構名称として、単独のピットと住居内のピットが存在する。前者の場合、本文及び図中では〇〇号ピットと記し、後者は(〇〇住居)P〇〇と記した。やや煩雑であるが注意を願いたい。
16. 本書は、整理担当3名がそれぞれ分担する遺跡を責任編集・執筆する方針で行った。使用する語句、図版の体裁は共通理解のもとに進めたが、写真図版のキャプションや遺物観察表の体裁など不統一となった。各遺跡ごとには、統一されている。
17. 山根Ⅲ遺跡は24区の一部が報告済みであるため、遺構名称は通番を踏襲した。このため、例えば24区1号住居跡は既報告であり、本書では24区2号住居跡から付番して報告している。なお、土坑及び溝も同様である。

基本文献・参考文献

- ・大川清・鈴木公雄・工業善通編 1996 『日本土器事典』 雄山閣
- ・西田泰民 1989 「堀之内式土器・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観4』小学館

目 次

口絵

序

例言

凡例

本文目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 地理的環境と歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 山根Ⅲ遺跡	11
第1節 調査に至る経緯と経過	11
第2節 調査の方法	11
第3節 調査区の設定	11
第4節 遺跡の立地と基本土層	12
1. 遺跡の立地	12
2. 基本土層	12
第5節 検出された遺構と遺物	16
1. 竪穴住居跡	16
2. 土坑	26
3. 溝	31
4. 採石遺構	31
5. 出土遺物	33
第6節 まとめ(藤巻幸男)	45
出土遺物観察表	47
第3章 上原Ⅳ遺跡	57
第1節 調査に至る経緯と経過	57
第2節 調査の方法	57
第3節 調査区の設定	58
第4節 遺跡の立地と基本土層	60
第5節 検出された遺構と遺物	62
第1項 縄文時代	62
1. 竪穴住居跡	62
2. 土坑・ピット	72
3. 列石遺構・配石遺構・集石遺構・焼土遺構	74
第2項 中世～近世	79
1. 溝	79
2. 旧河道	81
第3項 時期不明	85
1. 竪穴状遺構	85
2. ピット	85
3. 焼土遺構	85
第4項 遺構外出土遺物	85
第6節 まとめ	96
第1項 遺構	96

第2項	遺物	96
第3項	ハッ場ダム地域における縄文晩期終末から弥生前期の土器(篠原正洋)	100
第4項	中(近)世内耳属	108
第5項	下駄	111
第7節	上原IV遺跡出土木材の樹種同定	114
	出土遺物観察表	119
第4章	幸神遺跡	133
第1節	調査に至る経緯と経過	133
第2節	調査の方法	134
第3節	調査区の設定	134
第4節	基本土層	134
第5節	検出された遺構と遺物	136
	1. 概要	136
	2. 堅穴住居跡	141
	3. 土坑	146
	4. 竪跡	158
	5. 遺構外出土遺物	162
第6節	まとめ	181
	1. 遺跡内出土土器について	181
	2. 遺跡内出土土器について(麻生敏隆)	181
	3. 幸神遺跡における縄文中期土器(山口逸弘)	183
第7節	幸神遺跡の自然科学分析	186

挿図目次

第1図	周辺遺跡の位置図(1/37500)	6
第2図	周辺遺跡の位置図(長野県都市計画図)	7
山根Ⅲ遺跡		
第3図	山根Ⅲ遺跡基本土層	12
第4図	山根遺跡位置図(1/10,000)	13
第5図	山根Ⅲ遺跡グリッド設定図	14
第6図	山根Ⅲ遺跡13年度調査全体図	15
第7図	山根Ⅲ遺跡18年度調査全体図	15
第8図	24区2号住居跡(1)遺物出土状況	17
第9図	24区2号住居跡(2)	18
第10図	24区2号住居跡(3)	19
第11図	24区3号住居跡(1)	20
第12図	24区3号住居跡(2)遺物出土状況	21
第13図	24区4号住居跡(1)	22
第14図	24区4号住居跡(2)遺物出土状況	23
第15図	24区4号住居跡(3)	24
第16図	24区4号住居跡(4)	25
第17図	土坑(1)	27
第18図	土坑(2)	28
第19図	土坑(3)	29
第20図	土坑(4)	30
第21図	24区1号溝	31
第22図	24区3号探石遺構	32
第23図	24区2号住居出土遺物(1)	33
第24図	24区2号住居出土遺物(2)	34
第25図	24区2号住居出土遺物(3)	35
第26図	24区3号住居出土遺物(1)	36
第27図	24区3号住居出土遺物(2)	37
第28図	24区4号住居出土遺物(1)	38
第29図	24区4号住居出土遺物(2)	39
第30図	24区4号住居出土遺物(3)	40
第31図	23・24区土坑出土遺物	40
第32図	遺構外出土器(1)	41
第33図	遺構外出土器(2)	42
第34図	遺構外出土器(3)	43
第35図	遺構外出土器(4)	44
上原IV遺跡		
第36図	調査区設定図(No27区)	59
第37図	基本土層図	60
第38図	全体図(上調査区)	61
第39図	1号住居跡遺物出土状態	62
第40図	1号住居跡	63
第41図	1号住居跡掘り方	64
第42図	1号住居跡出土遺物(1)	65

第43図	1号住居跡出土遺物(2)	66
第44図	2号住居跡	67
第45図	2号住居跡遺物出土状態	68
第46図	3号住居跡	69
第47図	2号住居跡出土遺物	70
第48図	3号住居跡出土遺物(1)	70
第49図	3号住居跡出土遺物(2)	71
第50図	4号住居跡出土遺物	71
第51図	4号住居跡	72
第52図	1・4・6・7号土坑、1・2・10・17・19号ピット	73
第53図	1号列石遺構	75
第54図	1号列石遺構出土遺物	76
第55図	1・2号配石遺構	77
第56図	1号集石遺構	77
第57図	1号列石・1号配石・1号集石遺構出土遺物	78
第58図	2号配石遺構出土遺物	78
第59図	2・3号焼土遺構	79
第60図	全体図(中調査区)	80
第61図	1・2号溝	80
第62図	3・4・5号溝	81
第63図	1・2号旧河道跡	82
第64図	2号溝出土遺物	83
第65図	3号溝出土遺物	83
第66図	4号溝出土遺物	83
第67図	5号溝出土遺物(1)	83
第68図	5号溝出土遺物(2)	84
第69図	2号旧河道跡出土遺物	84
第70図	1号壑穴遺構・1号焼土遺構・12-15号ピット	86
第71図	縄文・弥生時代出土遺物分布図	87
第72図	縄文～弥生時代遺構外出土土器(1)	88
第73図	縄文～弥生時代遺構外出土土器(2)	89
第74図	縄文～弥生時代遺構外出土土器(3)	90
第75図	縄文～弥生時代遺構外出土土器(4)	91
第76図	縄文～弥生時代遺構外出土土器(5)	92
第77図	縄文～弥生時代遺構外出土土器(1)	92
第78図	縄文～弥生時代遺構外出土土器(2)	93
第79図	縄文～弥生時代遺構外出土土器(3)	94
第80図	古墳時代遺構外出土土器	94
第81図	平安時代遺構外出土土器	94
第82図	中世遺構外出土土器・木器	95
第83図	土器・石器割合図・表	99
第84図	川原馬場沼遺跡出土土器	104
第85図	下原遺跡出土土器(1～4)・立馬遺跡出土土器(5～29)	

第86図	榎本町遺跡出土土器(1～12)・久々戸遺跡出土土器(13)・三平遺跡出土土器(14～17)	105
第87図	中世在地土器調査実例(1/4)	109
第88図	県内遺跡出土土器の概観および規格	113
幸神遺跡		
第89図	39地区2区基本土層図	134
第90図	幸神遺跡位置・調査区域と調査年度・グリッド図	135
第91図	28地区100区・29地区91区(A・B区)土坑全体図	137
第92図	29地区92区(C区)江戸時代の高塚全体図	138
第93図	29地区92区(C区)住居・土坑全体図	139
第94図	39地区1・2区(G区)土坑・小穴全体図	140
第95図	29地区92区 1号住居跡	142
第96図	29地区92区 2号住居跡	143
第97図	92区1号住居出土遺物	144
第98図	92区2号住居出土遺物(1)	144
第99図	92区2号住居出土遺物(2)	145
第100図	29地区91区 1号土坑・29地区92区 1～7号土坑	148
第101図	29地区92区 8～15号土坑	149
第102図	29地区92区 16・18～24号土坑	150
第103図	29地区92区 25～30・33号土坑	151
第104図	29地区92区 32号土坑	152
第105図	39地区1区 1・2号土坑 2区 1号土坑	153
第106図	39地区2区 2～5号土坑	154
第107図	39地区2区 6～10号土坑	155
第108図	39地区2区 12～14・17号土坑	156
第109図	92区 19・32・33 2区 10・12号土坑出土遺物	157
第110図	29地区92区 西側品 平面図	159
第111図	29地区92区 東側品 平面・断面図	160
第112図	29地区92区 西側品 断面図	161
第113図	29地区92区 西側品部分 土層断面図	161
第114図	遺構外出土遺物(1)	162
第115図	遺構外出土遺物(2)	163
第116図	遺構外出土遺物(3)	164
第117図	遺構外出土遺物(4)	165
第118図	遺構外出土遺物(5)	166
第119図	遺構外出土遺物(6)	167
第120図	遺構外出土遺物(7)	168
第121図	遺構外出土遺物(8)	169
第122図	遺構外出土遺物(9)	170
第123図	遺構外出土遺物(10)	171
第124図	遺構外出土遺物(11)	172

表目次

第1表	周辺遺跡の一覧	4
山根町遺跡		
第2表	八ッ場地域 主要遺跡一覧	45
第3表	土坑一覧表	46
第4表	出土遺物観察表	47
上原IV遺跡		
第5表	遺構・グリッド別遺物出土数一覧	97
第6表	下原遺跡出土中世陶器類一覧と古瀬戸・大甕集計表	110

第7表	県内遺跡出土土器一覧	112
第8表	出土遺物観察表	119
幸神遺跡		
第9表	住居跡出土遺物観察表	145
第10表	土坑一覧表	147
第11表	土坑出土遺物観察表	158
第12表	遺構外出土遺物観察表	173
第13表	遺跡内時期別出土土器集計表	182

写真図版目次

口絵 1	1. 上原IV遺跡から丸岩を望む	2.	同24号土坑セクション (西から)
2	上原IV遺跡上調査区全景	3.	同25号土坑セクション (北から)
2	上原IV遺跡1号同石遺構全景	4.	同26号土坑全景 (北から)
2.	上原IV遺跡赤彩土器及び中近世陶磁器	5.	同27号土坑セクション (西から)
		6.	同28号土坑全景 (東から)
		7.	同29号土坑全景 (東から)
		8.	同30号土坑全景 (東から)
山根田遺跡		P.L.11	1. 24区31号土坑セクション (北から)
遺構写真		2.	同32号土坑全景 (西から)
P.L.1	1. 23・24区遠景 (南西から)	3.	同33号土坑セクション (南から)
2.	平成18年度調査区全景 (北西から)	4.	同34号土坑全景 (南西から)
P.L.2	1. 平成13年度調査第1面全景 (北東から)	5.	同35号土坑全景 (北東から)
2.	24区J-2グリッド露出土状況 (東から)	6.	同36号土坑全景 (北東から)
P.L.3	1. 24区2号住居跡全景 (東から)	7.	同37号土坑セクション (北から)
2.	同掘り方全景 (即・雑ガメ除く) (北から)	8.	同38・39号土坑全景 (西から)
P.L.4	1. 24区2号住居跡が横出状況 (西から)	P.L.12	1. 24区40号土坑セクション (南から)
2.	同切セクション (南から)	2.	同37・40・41号土坑セクション (北東から)
3.	同切全景 (西から)	3.	同42号土坑全景 (東から)
4.	同切全景 (南から)	4.	同43号土坑セクション (南から)
5.	同埋ガメ確認及び横出土状況 (北から)	5.	同43号土坑全景 (南から)
6.	同埋ガメ出土状況セクション (北から)	6.	同44号土坑全景 (南から)
7.	同埋ガメ全景 (北から)	7.	同45号土坑全景 (東から)
8.	同埋ガメ掘り方全景 (北から)	8.	同1号溝全景 (北から)
P.L.5	1. 24区3号住居跡使用面全景 (南から)	P.L.13	1. 24区3号探石遺構セクション (南から)
2.	同セクション (南から)	2.	同その1 (東から)
3.	同掘り方全景 (南西から)	3.	同その1 (南から)
4.	同遺物出土状況近景 (南から)	4.	同その2 (南から)
5.	同遺物出土状況近景 (西から)	5.	同その3 (南から)
P.L.6	1. 4号住居跡遺物出土状況 (東から)	6.	同その4 (北から)
2.	同使用面全景 (南東から)	7.	同掘れ口近接 (東から)
P.L.7	1. 24区4号住居跡掘り方全景 (東から)	8.	同取り上げ状況 (東から)
2.	同遺物出土状況 (東から)		
3.	同石囲切全景 (西から)	遺物写真	
4.	石囲切掘り方東西セクション (南から)	P.L.14・15	24区2号住居(1)(2)
5.	同石囲切掘り方全景 (西から)	P.L.16・17	24区3号住居(1)(2)
6.	同石囲切掘り方全景 (西から)	P.L.18・19	24区4号住居(1)(2)
7.	同石組全景 (西から)	P.L.20	2324区土坑・遺構外出土遺物(1)
8.	同P5全景 (東から)	P.L.21	遺構外出土遺物(2)
P.L.8	1. 23区2号土坑セクション (南東から)	P.L.22	遺構外出土遺物(3)
2.	同3号土坑全景 (東から)		
3.	同4・5号土坑全景 (北東から)	上原IV遺跡	
4.	同6号土坑セクション (北から)	P.L.23	1. 遺跡周辺風景 (南から王城山方面)
5.	同7号土坑セクション (南から)	2.	遺跡遠望 (青葉川対岸丸岩遺跡より)
6.	同8号土坑セクション (南から)	P.L.24	1. 上調査区全景
7.	同9号土坑全景 (北から)	2.	中調査区全景
8.	同6・8・10・11号土坑全景 (南東から)	3.	上調査区近景
P.L.9	1. 23区12号土坑全景 (東から)	P.L.25	1. 1号住居跡全景
2.	同14号土坑セクション (北東から)	2.	同遺物出土状態
3.	24区17号土坑セクション (東から)	3.	同土層断面
4.	同18号土坑全景 (西から)	4.	同掘り方全景
5.	同19号土坑全景 (西から)	5.	同掘り方土層断面
6.	同20号土坑全景 (南から)	P.L.26	1. 1号住居跡晩土確認状況
7.	同21号土坑全景 (東から)	2.	同掘部石出土状態
8.	同22号土坑セクション (西から)		
P.L.10	1. 24区23号土坑セクション (北から)		

	3. 同内土坑全景		P L 35	1. 1号配石遺構全景
	4. 同内土坑土層断面			2. 同遺物出土状態
	5. 同石囲全景			3. 同埋設土器出土状態
	6. 同石囲掘り方全景			4. 同埋設土器土層断面
	7. 同P1全景			5. 2号配石遺構全景
	8. 同P3全景		P L 36	1. 2号配石遺構遺物出土状態
P L 27	1. 2号住居跡全景			2. 2号配石遺構土層断面
	2. 同掘り方全景			3. 1号集石遺構全景
	3. 同敷石部分近景			4. 1号集石遺構土層断面
	4. 同遺物出土状態			5. 2号焼土遺構確認状況
	5. 同柄部石出土状態			6. 2号焼土遺構断ち割り断面
P L 28	1. 2号住居跡P11全景			7. 2号焼土遺構掘り方全景
	2. 同P9全景			8. 3号焼土遺構全景
	3. 3号住居跡全景		P L 37	1. 3号焼土遺構断ち割り断面
	4. 同全景			2. 1号溝全景
	5. 同遺物出土状態			3. 2-4号溝全景
	6. 同遺物出土状態			4. 2-4号溝全景
	7. 同遺物出土状態			5. 2号溝全景
	8. 同掘り方土層断面		P L 38	1. 2号溝土層断面
P L 29	1. 3号住居跡印全景			2. 3号溝遺物出土状態
	2. 同印土層断面			3. 4・5号溝全景
	3. 同P15全景			4. 4・5号溝全景
	4. 同P15土層断面			5. 4号溝土層断面
	5. 同P6全景		P L 39	1. 4・5号溝土層断面
	6. 同P6石棒出土状態			2. 4号溝キセル出土状態
	7. 同P16全景			3. 4号溝底版出土状態
	8. 同P16ミニチュア土器出土状態			4. 5号溝全景
P L 30	1. 4号住居跡全景			5. 同石出土状態
	2. 同遺物出土状態			6. 同下駄出土状態
	3. 同遺物出土状態			7. 同下駄出土状態
	4. 同遺物出土状態			8. 同本材片出土状態
	5. 同P1土層断面		P L 40	1. 2号溝土層石投棄状況
P L 31	1. 1号土坑全景			2. 1・2号旧河道跡全景
	2. 1号土坑土層断面			3. 同全景
	3. 2号土坑全景			4. 同西壁土層断面
	4. 3号土坑全景			5. 同西壁土層断面
	5. 3号土坑土層断面		P L 41	1. 2号旧河道跡石跡出土状態
	6. 4号土坑全景			2. 同石跡出土状態
	7. 4号土坑土層断面			3. 1号壑穴状遺構全景
	8. 6号土坑全景			4. 同P1号全景
P L 32	1. 6号土坑土層断面			5. 同P1土層断面
	2. 7号土坑全景		P L 42	1. 1号壑穴状遺構P2全景
	3. 7号土坑土層断面			2. 同土層断面
	4. 1号列石確認状況			3. 12号ビット土層断面
	5. 1号列石全景			4. 13号ビット全景
P L 33	1. 1号列石全景			5. 14号ビット全景
	2. 同北側部分遺物出土状態			6. 15号ビット全景
	3. 同注口土器出土状態			7. 1号焼土遺構確認状況
	4. 同下層断面			8. 同断ち割り断面
	5. 同掘り方全景		P L 43	1. 1号焼土遺構掘り方全景
P L 34	1. 1号列石掘り方全景			2. 1・J-10-12グリッド遺物出土状態
	2. 1号ビット土層断面			3. K-9・10グリッド遺物出土状態
	3. 2号ビット土層断面			4. I-11グリッド下駄出土状態
	4. 10号ビット土層断面			5. 2号トレンチ調査状況
	5. 1・2号配石遺構全景			6. 1号トレンチ調査状況

	7. 上調査区調査前の風景		7. 同18号土坑 (東から)
	8. 中調査区墓土下状況		8. 同19・20号土坑 (東から)
P.L.44	1. 下調査区調査前の風景	P.L.64	1. 92区21号土坑 (西から)
	2. 下調査区調査前掘り物置礎石状態		2. 同22号土坑 (東から)
	3. 3号トレンチ調査状況		3. 同23号土坑 (東から)
	4. 下調査区西脇墓地		4. 同24号土坑 (東から)
	5. 薬師堂		5. 同25・26号土坑 (北から)
	6. 薬師堂裏の中世宝塔		6. 同27・28号土坑 (南から)
	7. 伝朝林寺跡供養地蔵		7. 同29・30号土坑 (西から)
	8. 同由来説明板		8. 同32号土坑 (西から)
	遺物写真	P.L.65	1. 92区32号土坑 (南から)
P.L.45-47	住居跡出土遺物		2. 同 (東から)
P.L.48	1号列石・1号配石出土遺物		3. 同33号土坑 (南から)
P.L.49	2号配石・1号集石・溝・2号旧河道出土遺物		4. 1区1号土坑 (西から)
P.L.50-54	遺構外出土遺物		5. 同2号土坑 (西から)
			6. 2区1号土坑 (北から)
			7. 同2号土坑 (北から)
			8. 同セクション (南から)
	幸神遺跡		
	遺構写真	P.L.66	1. 2区3号土坑 (北から)
P.L.55	1. 調査区全景 (29地区91区) (西から)		2. 同4号土坑 (南東から)
	2. 調査区全景 (39地区1・2区) (西から)		3. 同5号土坑 (南東から)
P.L.56	1. 調査区全景 (39地区1・2区) (北から)		4. 同6号土坑 (北から)
	2. 調査区全景 (39地区1・2区) (北東から)		5. 同7号土坑 (北から)
P.L.57	1. 92区西側 (南東から)		6. 同8号土坑 (西から)
	2. 同中央部分 (北西から)		7. 同9号土坑 (南から)
	3. 同東側 (北西から)		8. 同10号土坑 (北から)
	4. 同東側 (南東から)		
	5. 同西側丘陵全景 (北西から)	P.L.67	1. 2区12号土坑 (南から)
P.L.58	1. 92区東側丘陵全景 (南東から)		2. 同13号土坑 (南から)
	2. 同西側丘陵全景 (北西から)		3. 同14号土坑 (東から)
P.L.59	1. 92区1号住居跡全景 (南から)		4. 同17号土坑 (南から)
	2. 同遺物出土状況 (南西から)		5. 92区L-20グリッド遺物出土状況
	3. 同遺物出土状況 (南東から)		6. 同M-23グリッド遺物出土状況 (南から)
	4. 同石圍炉セクション (西から)		7. 同N-23グリッド遺物出土状況 (西から)
	5. 同石圍炉 (南から)		8. 同19年2月19日現在の幸神 (北から)
P.L.60	1. 92区2号住居跡全景 (南から)		遺物写真
	2. 同埋設炉 (西から)	P.L.68	住居跡出土遺物
	3. 同埋設炉	P.L.69	土坑出土遺物
	4. 同埋設炉断面 (西から)	P.L.70-79	遺構外出土遺物
	5. 同埋設炉断面 (南西から)		
P.L.61	1. 92区土坑群 (東から)		
	2. 92区土坑群 (西から)		
P.L.62	1. 91区1号土坑 (南東から)		
	2. 同 (北から)		
	3. 同2号土坑 (北から)		
	4. 同3号土坑 (北から)		
	5. 同4号土坑 (南から)		
	6. 同5・11号土坑 (西から)		
	7. 同6号土坑 (西から)		
	8. 同7号土坑 (北から)		
P.L.63	1. 92区8号土坑 (西から)		
	2. 同9・10号土坑 (西から)		
	3. 同12号土坑 (西から)		
	4. 同13・14号土坑 (西から)		
	5. 同15号土坑 (東から)		
	6. 同16号土坑 (東から)		

第1章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

長野原町の中心部を流れる吾妻川は、深い峡谷を刻んで東流している。今から200～100万年前、浅間山に重なる領域には別の火山活動があり、三原付近(嬭恋村)に湖を形成していた。この湖に堆積した粘土は「吾妻粘土」などの名で呼ばれ、厚さ50m以上で標高1,100m辺りまで分布し、湖の最高水位を知ることができる。この湖は浅間山の活動以前には埋没して現在の吾妻川の流路が現れ、渓谷を刻み始めたらしいが、その後も浅間火山活動による堆積物によって埋没が繰り返され、流域に河岸段丘地形を形成した。段丘は最上位・上位・中位・下位の概ね4つにまとめられている。

吾妻川は南北を除いた山地に囲まれている。北側

の高間山・王城山は90万年前くらいに活動していたもので、激しい浸食を受けて現形を留めていない。南側の管峰(かんぼう)も古い火山で、活動時期は100万年ほど前と言われ、岩峰丸岩を形成する溶岩を流出している。更に南方には現在も活動する浅間山がそびえる。噴火活動はおおよそ10数万年前からとみられ、天仁元年(1108)に浅間B軽石、天明3年(1783)に浅間A軽石を降下させた噴火は、前掛山山頂の釜山を火口としている。

山根Ⅲ遺跡は吾妻川右岸の中段段丘面、上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡は吾妻川左岸の上位及び最上位段丘面に位置する。個別の地形・立地条件については各章で評述する。

第2節 歴史的環境

旧石器時代 遺構は未発見だが、柳沢城跡(43)で細石器文化期の珪質頁岩製のスクレイパー1点が出土する。

縄文時代 草創期では表土採集遺物ながら、横壁勝沼遺跡(5)で槍先形尖頭器1点が発見されている。

早期では、表裏縄文・燃糸文・押型文などの土器群と獣骨の出土した石畑岩陰遺跡(39)が著名であるが、近年調査された榎木Ⅱ遺跡(31)は、燃糸文期の堅穴住居跡17軒が調査された全国的にも希少な遺跡である。また、立馬Ⅰ遺跡(28)では燃糸文期の堅穴住居跡1軒を含み、押型文土器、中部系沈線文土器、条痕文系土器の破片多数が出土している。また、隣接する立馬Ⅱ遺跡(29)および三平Ⅰ遺跡・三平Ⅱ遺跡(36・37)でも、同様な内容を持つ土器群が出土しており、林地帯・川原畑地区に集中分布する様相がわかりはじめています。

前期では、坪井遺跡(41)で前期初頭(花積下層式期)の住居跡1軒、暮坪遺跡(42)で前期前葉(二ツ

木式期)の住居跡2軒、長畝Ⅱ遺跡(40)で関山→黒浜式期の住居跡2軒、榎木Ⅱ遺跡では黒浜式・有尾式→前期後半(諸磯式)の住居跡9軒、三平Ⅰ遺跡(36)では前期後半(諸磯a・b式期)住居跡2軒が調査されている。

中期初頭～前半期の集落は希少であったが、立馬Ⅱ遺跡(29)で堅穴住居跡10軒が発見され、五領ヶ台式土器のほか、阿玉台式土器や勝坂式土器、北陸系土器が共伴して多数出土している。また、中期前半では榎木Ⅱ遺跡(31)で住居跡2軒が調査されている。幸神遺跡(3)でも、完形に復元される阿玉台式土器を持つ円形土坑1基が発見され、続いて中期中葉の焼町土器が出土した住居跡1軒がある。上ノ平Ⅰ遺跡(38)では中期中葉の焼町土器や三原田式土器を伴う堅穴住居16軒が見つかっている。

中期後半～後期になると、広い範囲で集落が見られる。山根Ⅲ遺跡(1)では中期後半(加曾利E式期)の住居跡4軒、上原Ⅳ遺跡(2)では後期中葉(堀之

内Ⅱ式～加曾利B2式期)の住居跡4軒が調査されたが、いずれも調査面積が少なく全容は不明である。周辺の大集落としては、横壁中村遺跡(4)で中期後半(加曾利E式期)から後期中葉(加曾利B式期)にわたる住居跡250軒余が見つかっている。幸神遺跡(3)の西方に近接する長野原一本松遺跡(33)でも、中期後半(加曾利E式期)から後期中葉(加曾利B式期)にわたる住居跡250軒以上が報告されている。

晩期では石畑岩陰遺跡で水式や安行式、千綱式土器などが収集されている。立馬Ⅰ遺跡(28)では水式期の前段階で長野原松本市出土を標識とする女鳥羽川式土器を伴う住居跡1軒が発見され、水式土器や千綱式土器もややまとまって出土した。上原Ⅳ遺跡(2)でも、遺構は明確ではないが、同様な内容を持つ土器群が多く出土している。また、川原湯勝沼遺跡(35)では晩期から弥生時代初頭に属する土坑2基が調査され、再葬墓の可能性が指摘され、注目されている。

弥生時代 吾妻地域では、中期前半の岩櫃山式土器の標識遺跡である岩櫃山・鷹ノ巣岩陰遺跡(吾妻町)など当期を代表する遺跡があり、資料の増加が期待されていた。横壁中村遺跡では樫王式土器の甕を埋設する再葬墓の可能性のある土坑1基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡(28)では、中期後半の土器棺墓がほぼ完全な遺存状態で発見された。同遺跡では、前期の沖Ⅱ式土器も出土しており、同じく林地区では下原遺跡(8)でも、遺構は伴わないながら、沖Ⅱ式土器がややまとまって出土している。

古墳時代 吾妻川流域の古墳の分布は、確実な面では吾妻町岩島付近が西限となっている。集落については林地区の林宮原遺跡Ⅱ(27)で5世紀末～6世紀初頭の住居跡1軒が調査され、八ッ場地区では初めての発見となった。ついで、下原遺跡(8)でも同時期の住居跡1軒が調査されている。

古代 律令制下の上野国内の郡・郷の状況は、10世紀の『和名類聚抄』の記載に詳しいが、吾妻郡では長田・伊参・大田の3つの郷しか記載がなく、本地域を含む吾妻地域の状況を知ることはできない。

平安時代の調査遺跡では住居跡が点在する程度のものが多かったが、楡木Ⅱ遺跡では9世紀後半から10世紀前半の住居跡17軒が発見された。中でも、「三家」の墨書を有する土器が数点あることは注目される。「ミヤケ」は古代朝廷の直轄領を指しており、県内では緑野屯倉や佐野三家の存在が『日本書紀』や『山ノ上碑』の記載で知られていた。吾妻郡内ではその存在の可能性を初めて示す資料となり、非常に重要な成果である。また林集落の中央部に位置する林宮原遺跡Ⅱ(27)では、わずかに200㎡の調査面積の中で、9世紀後半から10世紀前半の住居跡6軒が重複して発見されており、周辺に同期の大きな集落が広がる可能性を見ている。上ノ平Ⅰ遺跡(38)では9～10世紀の住居跡20軒が発見され、県内2例目となる皇朝十二銭の貞観永寶が出土している。

中世 仁治2年(1241)、本地域は三原荘と呼ばれ海野幸氏の領有であった(『吾妻鏡』)が、正確な荘域は不明である。海野一族は下屋・鎌原・西窪・羽尾などの一族を輩出して本地域各所に広がり、領主層として勢力を温存していった。林地区は羽尾氏の勢力下であったらしく、永禄8年(1565)に嶽山城攻略に戦功のあった湯本氏は、武田信玄から羽尾領之内林村で20貫文の領地を得ている(『加沢記』所載文書)。なお、羽尾氏は武田氏の吾妻経略の中で没落を遂げる。同じく林村を領有した地侍に横谷氏がある。寛文8年(1668)に所領を安堵された横谷勘十郎は、横谷村・松尾村・林村で合わせて359石余を相続している(上田横谷家文書)。領有開始の時期は不明だが、吾妻沃谷を挟んで横谷村・林村両方を領有していた点で注目される。

中世城郭では長野原城(52)や丸岩城(44)があるが、発掘調査によって常滑焼・珠洲焼の大甕をはじめ、多彩な出土遺物を有することが判明した柳沢城(43)も注目される。また、河原畑の三平Ⅱ遺跡(37)では掘立柱建物7棟を伴う中世屋敷跡が見つかり、立地から暫的な側面も想定されている。

林地区では地名「堀之内」(46)の伝承地や中世城郭「林城」(45)の存在が知られている。王城山神社

(49)の裏山には「林の烽火台」跡(47)が良好に残存しており、林集落との関わりが想像される。上原Ⅳ遺跡は、そのすぐ東麓に位置しており、大手口にも近い。隣接する薬師堂(50)の裏には、中世に比定される宝塔の塔身部が安置されている。

調査された遺跡では、楡木Ⅱ遺跡で信仰物「つぶらっこ様」との有機的な関係を思わせる掘立柱建物群があり、一つ東側の谷地に位置する二反沢遺跡(10)でも14~16世紀の遺物を有する区画遺構が発見された。吾妻川に面する下原遺跡(8)では15世紀代の中世屋敷遺構が調査されている。以上から、林地区の西端部に中世遺跡がやや多く分布することがわかってきた。

近世 天正18年(1590)小田原合戦によって北条氏が滅び、徳川家康が江戸に入部することとなったが、永祿年間以来吾妻地域を支配してきた真田氏は、豊臣秀吉との結びつきを背景に勢力を温存していた。そうした関係も関ヶ原合戦では悪い方向に左右することとなったが、一族分離で乗り切った末、真田信幸が沼田藩領に加え、信濃国上田までも領有することとなった。やがて真田氏は本家にあたる上田藩(松代藩)と沼田藩に分かれることとなり、天和元年(1681)には真田信利・信澄の悪政のためか沼田藩が改易となり、以後長野原地域のほとんどが天領(幕府領)となされた。この真田信利が実施した寛文2年(1662)の伊賀守検地では、長野原地域の中で林村が571石余と最大の石盛りとなっている。

天明3年(1783)の浅間山噴火による泥石流被災の遺跡では、八ッ場ダム関連の発掘調査をはじめ、県内各所の吾妻川・利根川流域で知跡などの調査事例が増加してきている。中でも、泥石流に被災した小林助右衛門屋敷跡(53)は広く知られた長者屋敷であり、

杉田玄白の手記によっても被災の状況が伝えられてきた。近年、一部発掘調査されて礎石建物跡などが発見されている。尾坂遺跡(34)でも調査面積は少ないが、同様に被災した礎石建物が調査されている。

上原Ⅳ遺跡東北部に隣接する知地は、朝林寺跡(51)として伝承されており、報告する溝や河道跡出土遺物の性格を判断する好材料である。参考のため、以下に関係者により造立されている碑文を転載する。

「由来／其の昔此の地に朝林寺という寺があり、
／お坊さんが火災の為に寺もろとも非／業の最後を
逃げられたと伝えられます。／当林地区に於いても
火災により尊い／生命を失った人が数名あります。
／私も遺族の一人としていつの日か／それら故人の
供養を志しておりました。／齢八十路を迎え、皆さ
ま方の協力を／得て、ようやく念願が叶い、此処に
地藏／尊を建立する運びとなりました。／時に平成
の時代、人代り世は移つ／ても、無病息災を願うは
人の常／永遠に平成の名に相応しい人の世で／ある
事を祈願したいと思います。／合掌／平成元年十二
月十七日(下略)。(句読点、筆者による。)

参考文献・引用文献

- 長野原町 1976 『長野原町誌』上巻
 長野原町 1988 『長野原町の自然』
 長野原町 1993 『長野原町の民俗』
 長野原町 2004 『町内遺跡Ⅳ』
 松原孝志編 2002 『八ッ場ダム発掘調査集成 (1)』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 沼田康成編 2002 『長野原一本松遺跡 (1)』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 山崎 一 山口武夫共著 1972 『吾妻郡城歴史』

第1章 地理的環境と歴史的環境

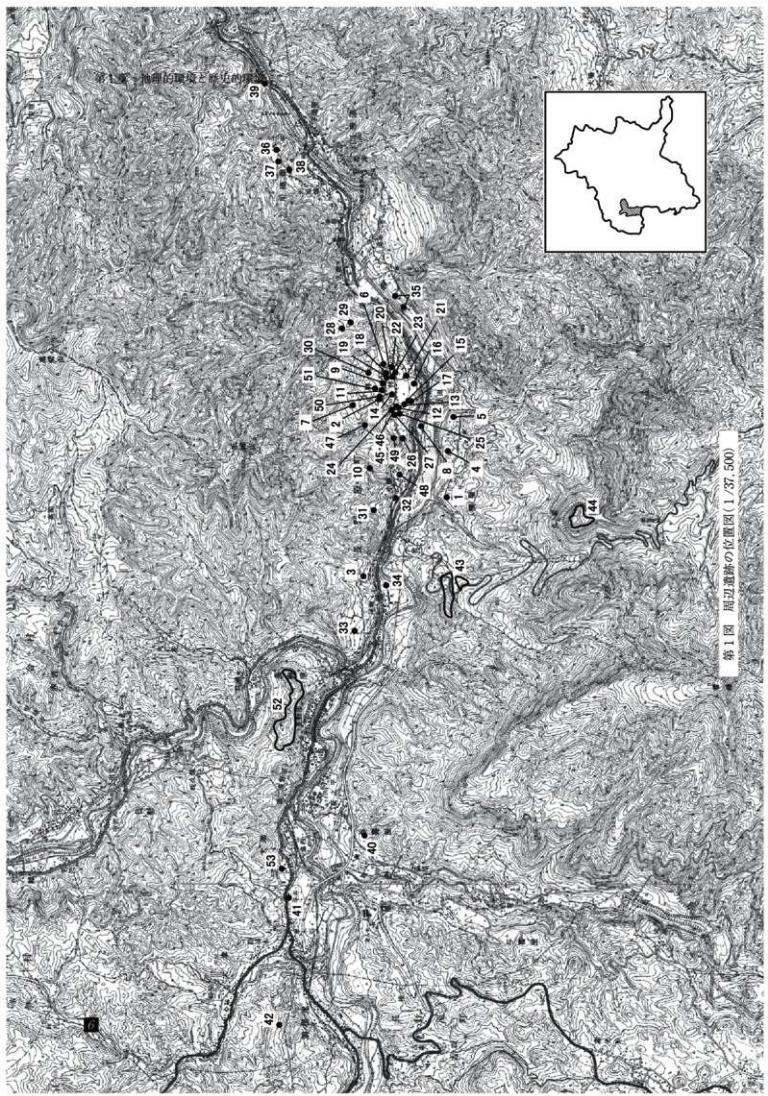
第1表 周辺遺跡の一覧

No	遺跡名	所在地	概要	文献等
1	山根Ⅰ遺跡	横壁	縄文時代中期後半住居跡3軒、土坑39基、中近世の溝1条はか検出。	本報告書
2	上原Ⅳ遺跡	林	縄文時代後期散石住居跡4軒、晩期の土器包含層、近世の河道路検出。	本報告書
3	幸神遺跡	長野原	縄文時代中期住居跡2軒はかを検出。	本報告書
4	横壁中村遺跡	横壁	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心とする集落跡。平安時代の住居跡も含め、250軒以上を検出。中世の屋敷跡1カ所。近世のお堂跡、「一字一石経」を伴う経塚1基検出。	郡理文2003「久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」、同2005「横壁中村遺跡2」、同2006「横壁中村遺跡3」、同2006「横壁中村遺跡4」、同2006「年報25」
5	横壁勝沼遺跡	横壁	縄文時代土坑数基。槍先形尖頭器1点表採。平安時代住居跡1軒検出。	郡理文2002「ハツ場ダム発掘調査集成(1)」
6	東原Ⅰ遺跡	林	縄文時代土坑1基、平安時代住居跡1軒が確認され、保存措置が採られた。	長野原町教委2006「町内遺跡Ⅴ」
7	上原Ⅱ遺跡	林	トレンチ調査の結果、遺構は検出されなかった。	郡理文2005「年報24」
8	下原遺跡	林	古墳時代中期住居跡1軒、平安時代住居跡1軒、中世の屋敷跡1カ所（15世紀代）、中世から近世の畑跡3面検出。	郡理文2003「久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」、同2006「下原遺跡Ⅱ」
9	林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡	林	縄文時代・平安時代の遺物が出土した。	郡理文2005「年報24」
10	二反沢遺跡	林	中世の石垣を伴う土坑ほか、鍛冶関連遺物。近世の畑跡検出。	郡理文2006「上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡」
11	上原Ⅳ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2003「町内遺跡Ⅲ」
12	林中原Ⅰ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2003「町内遺跡Ⅳ」
13	林中原Ⅱ遺跡Ⅱ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2004「町内遺跡Ⅲ」
14	林中原Ⅰ遺跡Ⅳ	林	縄文時代後期散石住居跡1軒はかを検出。	長野原町教委2004「町内遺跡Ⅳ」
15	林中原Ⅰ遺跡Ⅴ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2005「町内遺跡Ⅴ」
16	林中原Ⅰ遺跡Ⅵ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2006「町内遺跡Ⅵ」
17	林中原Ⅰ遺跡Ⅶ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2006「町内遺跡Ⅵ」
18	林中原Ⅱ遺跡	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2004「町内遺跡Ⅳ」
19	林中原Ⅱ遺跡Ⅱ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2005「町内遺跡Ⅴ」
20	林中原Ⅱ遺跡Ⅲ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2005「町内遺跡Ⅴ」
21	林中原Ⅱ遺跡Ⅳ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2005「町内遺跡Ⅴ」
22	林中原Ⅱ遺跡Ⅴ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2006「町内遺跡Ⅵ」
23	林中原Ⅱ遺跡Ⅵ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2006「町内遺跡Ⅵ」
24	林宮原遺跡	林	試掘調査の結果、縄文時代の包含層検出。	長野原町教委2003「町内遺跡Ⅲ」
25	林宮原遺跡Ⅱ	林	平安時代住居跡1軒確認。	長野原町教委2005「町内遺跡Ⅴ」
26	林宮原遺跡Ⅲ	林	試掘調査の結果、遺構は検出されなかった。	長野原町教委2005「町内遺跡Ⅴ」
27	林宮原Ⅱ遺跡	林	古墳時代後期住居跡1軒、平安時代住居跡（9～10世紀）6軒検出。	長野原町教委2004「林宮原Ⅱ遺跡」
28	立馬Ⅰ遺跡	林	縄文時代早期前半の住居跡2軒・包含層遺物多数、晩期住居跡1軒、弥生時代中期住居跡2軒、平安時代住居跡3軒のほか、縄文時代～平安時代の隔し穴多数検出。	郡理文2006「立馬Ⅰ遺跡」
29	立馬Ⅱ遺跡	林	縄文時代中期前半～後半の住居11軒。縄文時代早期包含層遺物多量出土。縄文時代～平安時代の隔し穴多数検出。	郡理文2006「立馬Ⅱ遺跡」
30	花畑遺跡	林	平安時代の住居3軒、隔し穴51基などを検出。	郡理文2002「ハツ場ダム発掘調査集成(1)」
31	楡木Ⅱ遺跡	林	縄文時代早期前半（弥生文）の住居17軒、前期住居3軒、中期住居2軒。平安時代住居（9～10世紀）17軒。「三家」と書く磨石土器、削字「称」を持つ石製紡錘車あり。中世の掘立柱建物群多数検出。信仰石「つぶらっこ様」と関係か。	郡理文2001「年報20」、同2002「年報21」、同2005「年報24」、同2006「年報25」
32	楡木Ⅰ遺跡	林	縄文時代前期、弥生時代前期を中心とする包含層検出。	Nc30と同じ。
33	長野原一本松遺跡	長野原	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心とする集落跡。平安時代の住居跡も含め、250軒以上を検出。調査継続中。	郡理文2002「長野原一本松遺跡(1)」、同2007「長野原一本松遺跡(2)」、2001～2005「年報20～24」
	尾坂遺跡	長野原	天明泥炭で埋没した民家と竈畑を検出。	郡理文2006「年報25」

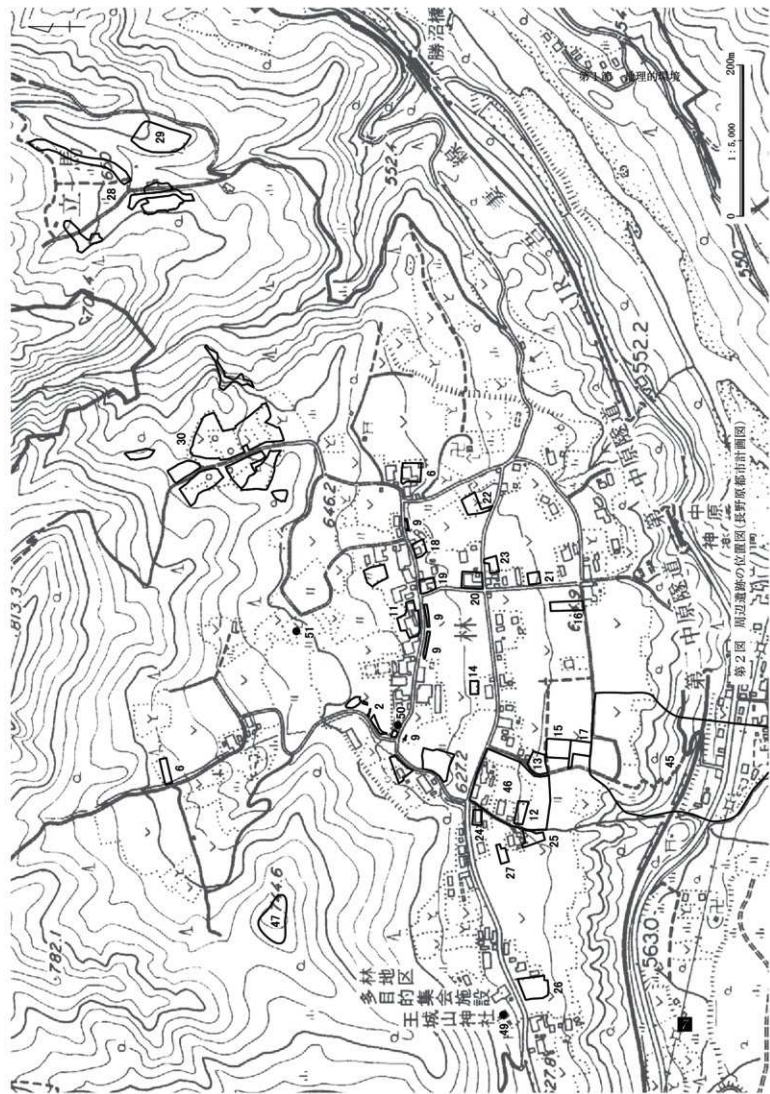
NO	遺跡名	所在地	概要	文献等
35	川原湯勝沼遺跡	川原湯	縄文時代晩期の埋蔵2基。平安時代の住居跡3軒、天明三年の燬跡検出。	群像文2006『川原湯勝沼遺跡』(2)
36	三平Ⅰ遺跡	川原湯	縄文時代前期住居跡2軒・土坑6基ほか、平安時代以降の掘立柱建物3棟・焼土10基などを検出。	群像文2006『三平Ⅰ遺跡・三平Ⅱ遺跡』
37	三平Ⅱ遺跡	川原湯	縄文時代草創期～前期の土器・石器を多量に検出。掘立柱建物7棟ほかを含む中世屋敷跡1カ所。	群像文2006『三平Ⅰ遺跡・三平Ⅱ遺跡』
38	上ノ平Ⅰ遺跡	川原湯	縄文時代中期中葉の住居跡16軒、陥し穴134基、9～10世紀の住居跡20軒が発見され、県内2例目となる皇朝十二銭の貞観水書が出土している。	群像文2006『年報25』
39	石畑岩除遺跡	川原湯	縄文時代草創期～晩期の包含層検出。	『群馬県史』資料編1
40	長畝Ⅱ遺跡	与喜原	縄文時代前期住居跡2軒、中期後半住居跡2軒検出。	長野原町教委1992『長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡』
41	坪井遺跡	大津	縄文時代前期初頭住居跡1軒、中期後半住居跡19軒、平安時代住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟ほかを検出。	長野原町教委1992『長畝Ⅱ遺跡・坪井遺跡』、同2000『坪井Ⅱ遺跡』
42	暮坪遺跡	羽根尾	縄文時代前期前葉住居跡2軒ほかを検出。	長野原町教委2001『暮坪遺跡』
43	柳沢城	横壁	土器や銅を調査。珠洲境の大妻ほか中国陶磁器片出土。	長野原町教委
44	丸岩城	横壁	草津道の垣尾尾崎を守護する山城。	県教委1988『群馬県の中世城館跡』
45	林城	林	地名「ジョウ」と呼ばれる。遺存状態良好。詳細は不明。	県教委1988『群馬県の中世城館跡』
46	園之内	林	地名「園ノ内」という以外詳細不明。中世屋敷跡か？	地元伝承による。
47	林の烽火台跡	林	王城山神社の裏山に所在。堀切2本。最上部に円形の凹みを遺す。	池田誠作「上野吾妻 林鎮壇場」(同「狼煙の研究」『中世城郭研究』第13号1999)
48	中標の菅跡	林	伝承のみ、詳細不明。	県教委1988『群馬県の中世城館跡』
49	王城山神社	林	元来は諏訪神社。明治期の合祀により改称。王城山頂に奥宮を持つ。創建年不明。	長野原町教委1910『郷土誌』
50	薬師堂	林	林西組信徒18戸の薬師信仰により造営。創建年不明。	『長野原町誌』下巻
51	朝林寺跡	林	焼失したと伝承されている。	長野原町教委『林地区伝承地名地図』
52	長野原城	長野原	長野原中心部の裏山にある拠点的な城郭。	県教委1988『群馬県の中世城館跡』
53	小林跡右衛門屋敷跡	長野原	天明泥流に埋没した吾妻の分限者小林跡右衛門屋敷の一部。礎石建物跡2棟、土蔵跡1棟ほかを検出。	長野原町教委2005『小林家屋敷跡』

略称：群像文：財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、県教委：群馬県教育委員会、長野原町教委：長野原町教育委員会

第1圖 繪圖的區域と周辺の地形



第1圖 周辺道路の位置図(1/37,500)



第1図 地理的関係

1:5,000
0 50 100 200m

第2図 周辺遺跡の位置図(長野県都市計画図)

林地区
多目的地区
王城山神社
集会所
施設

山根Ⅲ遺跡(2)

第2章 山根Ⅲ遺跡

第1節 調査に至る経緯と経過

山根Ⅲ遺跡の調査は、ハッ場ダム建設に伴う国道145号線建設事業及び町道拡張工事に伴い調査された遺跡である。平成10年度に当遺跡西端の沢にかかると橋脚掛け替えに伴う町道拡張工事に伴い2ヶ所発掘調査が実施された。国道145号線建設事業に伴い平成13年と18年度に調査を行った。今後さらに国道145号線建設に伴う工事が予定されており、発掘調査は継続される予定である。

平成10年度の調査概要（28地区 23・24区）

平成10年4月から8月にかけて発掘調査が行われ、縄文時代中期後半の住居1軒と土坑17基等が検出された。詳しい内容については、『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集2002年で報告済みである。

平成13年度の調査概要（28地区 24区）

平成10年度に調査された南側部分である。発掘調査は平成13年9月から10月にかけて実施された。その結果、縄文時代の住居1軒と縄文時代の土坑16基が検出された。また、遺構は検出されなかったが、前期相当の縄文土器が検出されている。

平成18年度の調査概要（28地区 23・24区）

平成13年度に調査された西側部分である。発掘調査は平成18年4月から5月にかけて実施された。その結果、縄文時代中期の住居2軒と縄文時代の土坑23基が調査された。

第2節 調査の方法

発掘調査においては、バックホーによる表土掘削を行い、作業員による遺構検出作業と精査により順次作業を進めた。

竪穴住居や土坑などの調査は、埋設土層堆積状況の観察用ベルトを任意に設定し、平安以降遺物包含層(Ⅲ層)及び縄文遺物包含層(V層)はグリッド設定線を使用して適宜観察用ベルトを残し、移植ゴテ等

により掘削を行った。

遺物取り上げについては、分布範囲の地点的な集約を想定し、4mグリッド一括取り上げ、及び地点別取り上げを適宜行った。

遺構平面測量にあたっては、測量業者委託によるデジタル平板測量を基本として、縮率1/20を基準に、任意に1/10・1/40・1/100・1/200を選択して行った。遺構断面測量も平面測量に準じた。

遺構写真については、地上写真は現場担当者が行った。平成13年度調査では35mm版白黒フィルムとカラーズライドフィルムを用い、必要に応じて6×7版白黒フィルムを使用して撮影した。平成18年度調査では、35mm版白黒フィルムとカラーズライドフィルムに代わり、デジタル撮影を導入した。航空写真撮影は測量委託業者が行った。

第3節 調査区の設定

平成6年度からは始まったハッ場ダム建設に伴う発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて「ハッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。以下、本報告書でもそれに準拠し必要部分について掲載する。

① 調査における遺跡番号は、ハッ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区（1：川原畑、2：川原湯、3：横壁、4：林、5：長野原）に番号を付し、ハッ場ダムの略号(YD)に続ける。ハイフン以下は各地区内に所在する遺跡に対して調査順に通し番号を付し、遺跡番号とする。

② 基準座標は、国家座標（2002年4月改正以前の日本測地系）に基づく日本平面直角座標第Ⅲ系を使用し、東吾妻町大柏木付近を原点（座標値X=+58000.0、Y=-97000.0）とした1km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。本遺跡はこのNo.28地区に所在する。

③ 1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。本遺跡の場合、23・24区にまたがっており、それぞれの遺跡の区毎に遺構名称・番号が付されているので留意されたい。

(例) 山根Ⅲ遺跡 23区1号土坑

④ 「区」の100m方眼は、さらに4m方眼で625区画に分割され、その4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを、南北には1～25までの算用数字を用いながら、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

また、遺構図や本文中の記載において、特に混乱が予想されない場合は地区番号を略して用いている。

第4節 遺跡の立地と基本土層

1 遺跡の立地

遺跡は、吾妻川右岸の中段段丘上の緩やかな北向きの傾斜地にある。この段丘は、横壁地区の中で最も広く、東端には横壁勝沼遺跡、中央には横壁中村遺跡が存在する。

標高はおおよそ590～600mの間で、西側は深沢、北側は吾妻川に浸食されており、南側は山岳傾斜地帯である。

2 基本土層

調査区は緩やかに傾斜する地形であるため、吾妻川に向かって遺構確認面までの深度が深くなる傾向を持つ。調査は2面調査を行い、Ⅲ層上面で縄文時代中期後半の住居跡を検出し、Ⅳ層上面で縄文時代土坑を再検出した。

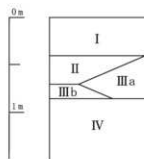
平成10年度調査区で存在したⅣ層ローム漸移層は本調査区では見られず、本調査区Ⅳ層が平成10年度調査Ⅴ層に相当している。

23区の東側ではⅠ層下で大礫を多く混入するⅢ'層(Ⅲa層と同層位)が露呈し、遺構は確認できなかった(第7図の露呈範囲)。Ⅲ'層は23区以東に広く分布域を持つため、本基本土層では省略してある。また、平成18年度試掘調査では、23区以東にⅢ'層が厚く堆積することが確認され、調査対象外となっている。

なお、24区Bラインに重なって真北方向に走向する小流路をⅣ層上面で確認したが、砂利はわずかであり表流水程度であった。第7図はⅢ層面を図化した

が、コンタの変化によって、この微地形をうかがうことができる。Ⅲb層は谷地形に分布域を持っており、この小流路に重なる位置関係にある。

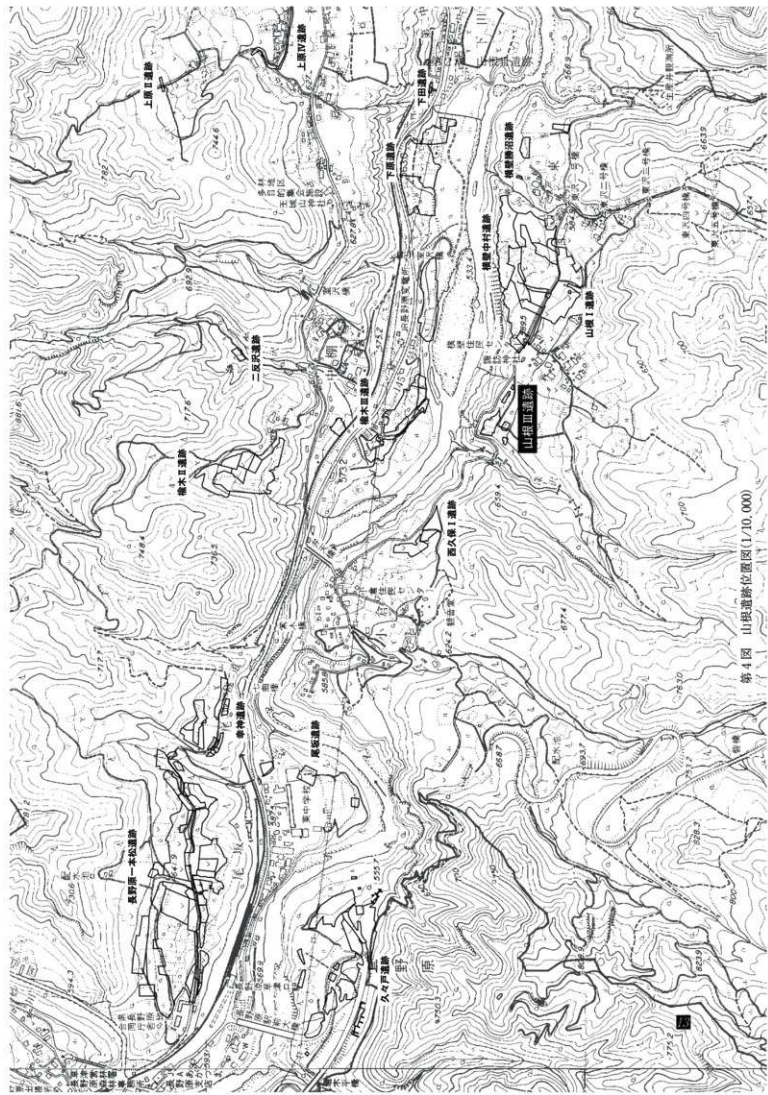
(飯森)



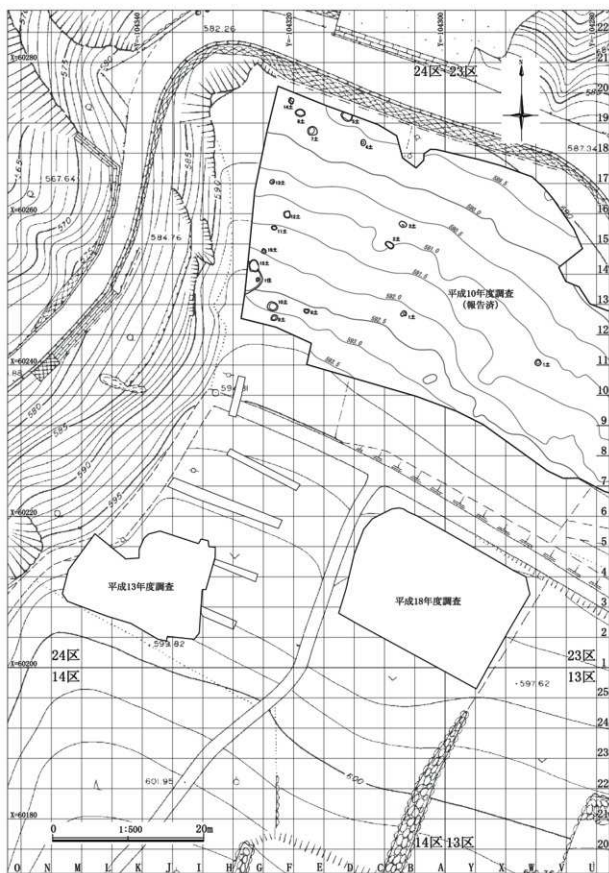
基本土層

- Ⅰ 暗灰褐色～黒褐色土 表土。小礫を少量含み、しなりに欠く。
- Ⅱ 黒褐色土 粗粒黄褐色軽石、細粒白色軽石、粗粒褐色お片をやや多く含む。
- Ⅲa 暗褐色～黒褐色土 粗粒黄褐色軽石、大礫を含む。ロームをモザイク状に含む。
- Ⅲb 黒褐色土 細粒白色軽石をやや多く含み、しまる。谷地形に見られる。
- Ⅳ 黄褐色土 シルト～砂質。礫を多く含み、よくしまる。

第3図 山根Ⅲ遺跡基本土層



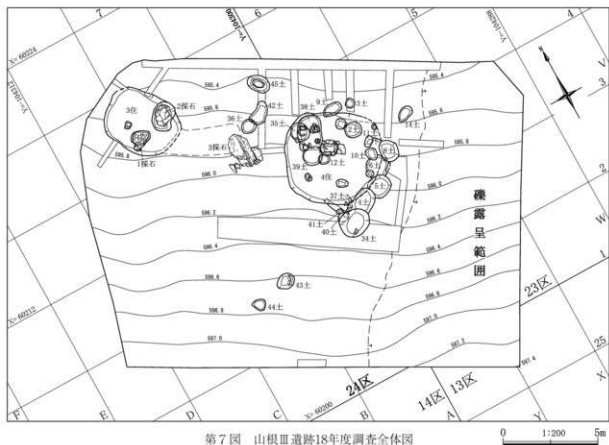
第4図 山根遺跡位置図(1/10,000)



第5図 山根Ⅲ遺跡グリッド設定図



第6図 山根Ⅲ遺跡13年度調査全体図



第7図 山根Ⅲ遺跡18年度調査全体図

第5節 検出された遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

24区2号住居跡 (第8~10図、第23~25図、P L 3・4・14・15)

位置 L-4グリッド **重複** なし

長軸方位 N-57°-W

規模 (推定) 長軸6.98m 短軸5.82m

壁 崩れの影響で斜面側である北壁が不明瞭。

西辺32cm、南辺45cm、東辺10cmの壁高。

炉 炉体土器を伴う石囲い炉で明確な焼土は、検出されず。規模(長径127短径117深さ28cm)。掘り方規模(189・106・38cm)。

内部施設 北東壁よりに埋壺を設置している。

掘り方調査終了時には20本以上のビット状の掘り込みが検出されている。

床 底面は硬化面もなく不明であったが、北東壁よりに埋壺を床面と判断して検出した。

埋没状況 埋没土が分かりにくく、詳細は不明である。おそらく崩れによる自然埋没と推定される。

遺物出土状態 炉体土器、埋設土器が出土している。時期としては加曾利E3式期である。

24区3号住居跡 (第11・12図、第26・27図、P L 5・16・17)

位置 B-5グリッド **重複** なし

長軸方位 N-28°-W

規模 長軸4.05m 短軸3.18m。

壁 試掘時のトレンチが入っており、南壁を失っていた。西辺40cm、東辺35cmの壁高。

炉・焼土 なし

内部施設 ビット2基、巨石2基を検出した。

ビットの規模(長径・短径・深さcm) P1:(38・26・15cm) P2:(40・31・13cm)。巨石は底面から突きだしており、周囲を溝状(最大幅29cm)に掘り込まれている。おそらく、掘り起こそうとした結果であろう。2号巨石は打ち欠いた痕跡を示す打痕が明確に認められる。巨石の規模(長径・短径・断面から

確認できる厚さ・床からの露出高cm) 1号巨石:(92

・79・36・22cm)、2号巨石:(112・93・44・30cm)。

床 底面は平坦であったが、1・2号巨石が地山から突きだしており、床面とは見なしがたい。

埋没状況 三角堆積もみられるが、大中礫と土器大破片が混入投棄された人為埋没と思われる。

遺物出土状態 底面よりもむしろ、埋没土上層・中層で石に混じって出土するものが目立つ。

備考 底面に巨石が突きだし、炉も造られておらず、住居として機能していたとは思われない。おそらく、住居構築を断念して投棄されたものではないだろうか。調査時の呼称を継承したが、本来竪穴状遺構と呼ぶのが至当であろう。(飯森)

24区4号住居跡 (第13~16図、第28~30図、P L 6・7・18・19)

位置 Y-3グリッド

重複 23区2号土坑、24区35号土坑より前出。23区4・10・11・12号土坑、24区37・38・39号土坑より後出。23区5・6・8・9号土坑と新旧関係不明。

長軸方位 N-29°-E

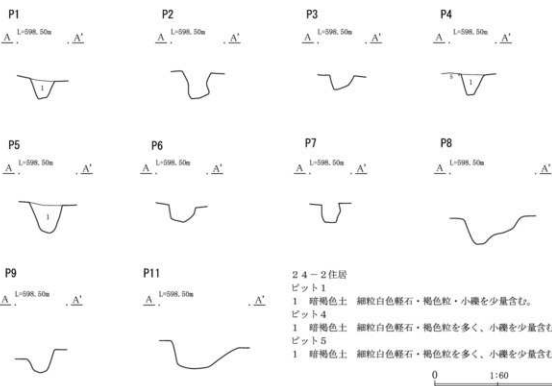
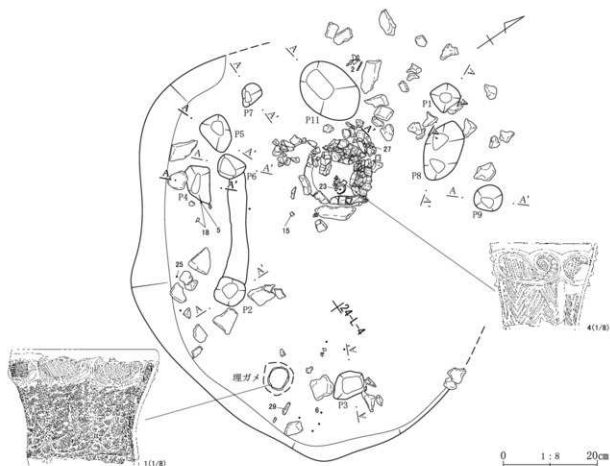
規模 南北約5.34m

壁 南壁は重複による欠損が著しいうえ、埋没土が分かりにくかったため、明確に検出できなかった。北辺8cm、西辺32cmの壁高。

炉 石囲い炉。中央やや北にあり、正方形。焼けは良くない。北西角の石は磨り石(4住-36)である川原石を立位に転用しており、信仰的な意図を感じさせる。規模(長径136・短径86・深さ25cm)。掘り方規模(156・111・43cm)。

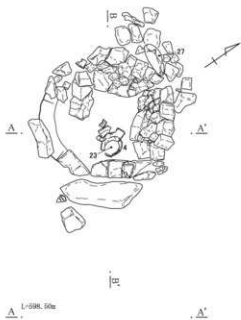
内部施設 ビット12基を検出した。P10・12は炉の下位で見つかっており、掘り方に属する。前出する38号土坑は埋没土の黒みが強く、重複したP4・6・8・9の上部及び一部を検出できなかった。

ビットの規模(長径・短径・深さcm) P1:(58・54・26cm) P2:(63・42・24cm) P3:(45・31・41cm)

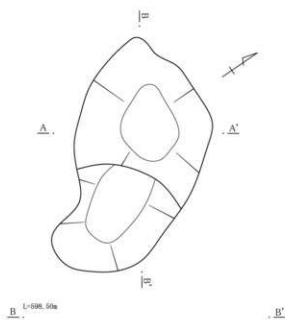


第8図 24区2号住居跡(1) 遺物出土状況

炉



炉(掘り方)

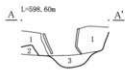
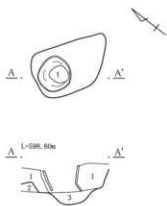


24-2住居

炉

- 1 褐色土 褐色粒・黄褐色土を少量含み、粘性をもつ。
- 2 褐色土 黄色砂質ブロックを多く含み、粘性をもつ。

埋ガメ



埋ガメ(掘り方)



24-2住居

埋ガメ

- 1 暗褐色土 細粒白色軽石・褐色粒・小礫を少量含む。
- 2 暗褐色土 床面構築土。黄褐色土を多く含む。
- 3 褐色土 黄色砂質ブロックを多く含み、粘性をもつ。

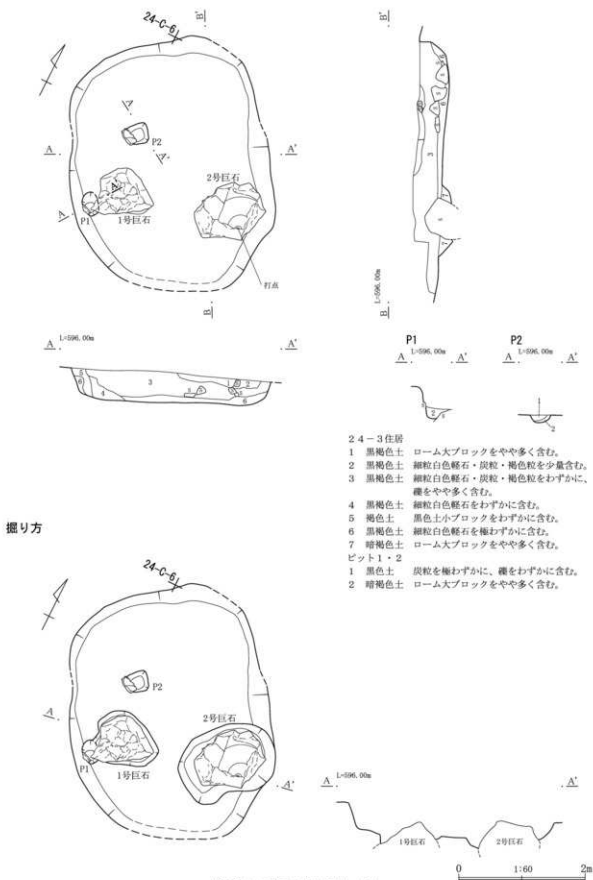
0 1:30 1m

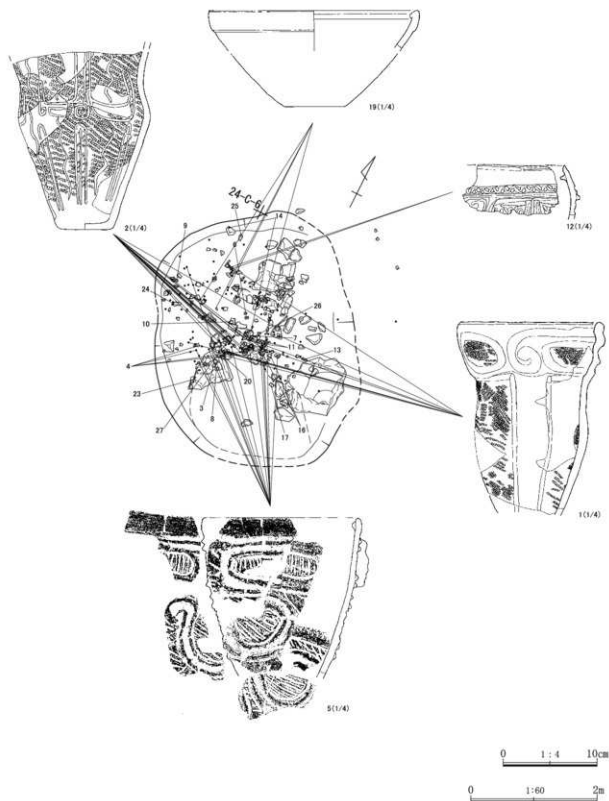
第9図 24区2号住居跡(2)

掘り方

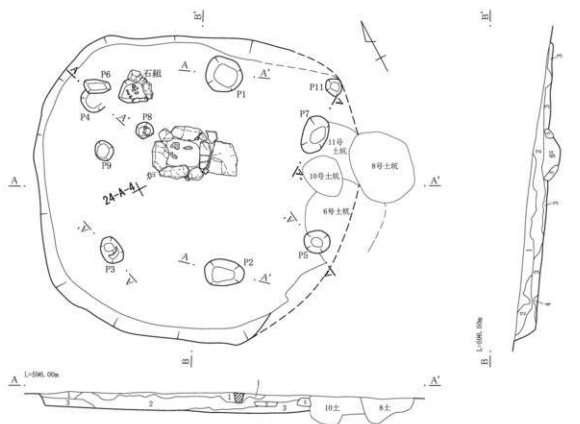


第10図 24区2号住居跡(3)





第12図 24区3号住居跡(2) 遺物出土状況



24-4住居

- 1 黒褐色土 ややしまりに欠く。
- 2 黒褐色土 ローム大ブロックを少量、細粒白色軽石・褐色粒をわずかに含む。
- 3 黒褐色土 褐色粒をわずかに含む。
- 4 黒褐色土 ローム大ブロックをやや多く含む。

P1

L=596.00m



P2

L=596.00m



P5

L=596.00m



P3

L=596.00m



P4

L=596.00m



ピット5

- 1 黒褐色土 褐色粒・白色粒をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 黒褐色土小ブロックを少量、褐色粒・白色粒をわずかに含む。

P7

L=596.00m

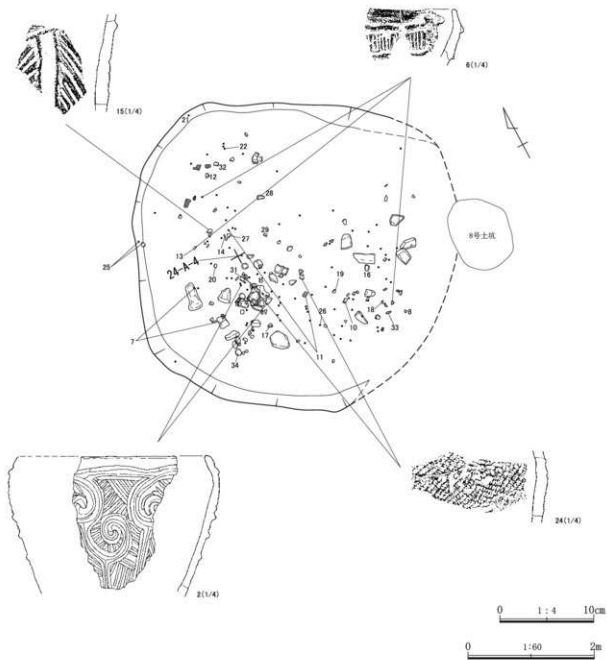


ピット7

- 1 黒褐色土 小礫をわずかに含む。しまりに欠く。
- 2 黒褐色土 褐色土小ブロックをわずかに含む。

0 1:60 2m

第13図 24区4号住居跡(1)



第14図 24区4号住居跡(2) 遺物出土状況

P 4 : (40・31・24cm) P 5 : (41・36・42cm) P 6 : (42・22・36cm) P 7 : (62・40・25cm) P 8 : (28・27・24cm) P 9 : (32・29・37cm) P 11 : (28・25・31cm)。

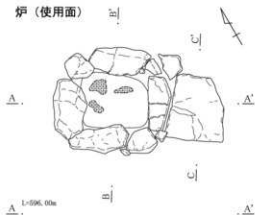
石組 西辺を除く3辺をコの字形に囲む。埋没土に炭を多く含んでおり、旧時の炉を想定したが、相応する住居プランを見いだせなかった。規模(長径55・短径53・深さ16cm)。

床 底面は硬化面もなく不分明であったが、炉南の敷石を床面と判断して検出した。

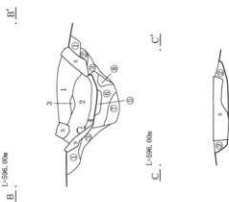
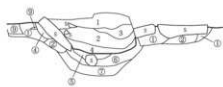
埋没状況 自然埋没。

遺物出土状態 少なく、小片が多い。(飯森)

炉 (使用面)



L=596.00m

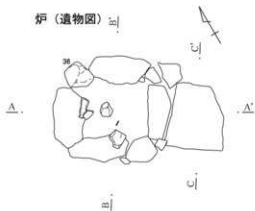


L=596.00m

炉

- 1 黒褐色土 ローム大ブロックを少量、細粒白色軽石・褐色粒をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 褐色粒をわずかに含む。
- 3 黒褐色土 ローム大ブロックをやや多く、炭をわずかに含む。
- 4 赤褐色土 やや焼けの悪い焼土。
- ① 黒褐色土 白色粒をわずかに含む。
- ② 黄褐色土 黒色土小ブロックをわずかに含む。
- ③ 黒褐色土 ローム小ブロックをわずかに含む。
- ④ 黒褐色土 しまりに欠く。
- ⑤ 黒褐色土 白色粒をわずかに含む。
- ⑥ 橙色土 やや焼けのよい焼土。
- ⑦ 褐色土 炭・焼土の小ブロック・黒色土小ブロックをわずかに含む。
- ⑧ 黄褐色土 シミが入り、よごれた感じ。
- ⑨ 黄褐色土 砂質土。礫を多く含む、よくしまる。
- ⑩ 褐色土 盛り床の一部。

炉 (遺物図)



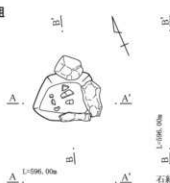
L=596.00m

炉 (掘り方)



L=596.00m

石組



L=596.00m



石組 (掘り方)



L=596.00m

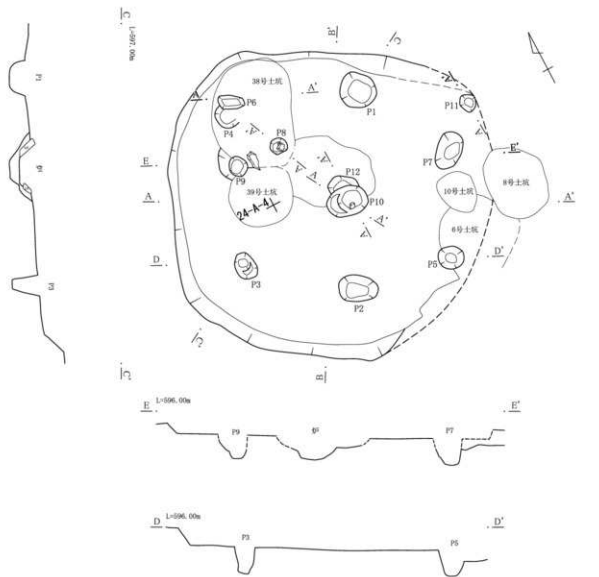
石組

- 1 黒褐色土 炭をやや多く、褐色土小ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 炭・褐色土小ブロックをごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 炭をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 褐色土小ブロックを少量含む。
- 5 黒褐色土 炭・褐色土大ブロックをやや多く含む。

0 1:30 1m

第15図 24区4号住居跡(3)

掘り方



- ピット6
 1 黒褐色土 小礫をわずかに含む。しまりに欠く。
 2 黄褐色土 シミが入り、よごれた感じ。しまりに欠く。
 ピット8
 1 にぶい褐色土 砂質土で均質。

- ピット10
 1 黒褐色土 細粒白色軽石粒を多く含む均質。
 2 黒褐色土 褐色土大ブロック20%含む。地山か。
 3 黒褐色土 褐色土大ブロック10%含む。地山か。
 ピット11
 1 黒褐色土 小礫5%含む。しまりに欠く。



第16図 24区4号住居跡(4)

2. 土坑 (第17～20図、第31図、第3表、P.L.8～12、20)

(1) 土坑の概要

縄文時代14基、縄文時代相当と思われる17基、古代から中近世3基、近世以降5基の合計39基の土坑が調査された。規模や位置等は第3表土坑一覧表参照。

縄文時代の土坑 (14基)

時代の特定できる遺構との切り合い関係や調査時の記録から次の土坑が縄文時代に比定される。

23-4土坑、23-5土坑、23-6土坑、23-8土坑、24-31土坑、24-37土坑、24-38土坑、24-39土坑、24-40土坑、24-41土坑、24-42土坑、24-43土坑、24-44土坑、24-45土坑

なかでも23-4号土坑は、縄文時代の堅穴住居である24-4号住居との切り合い関係から明らかにそれよりも古い。また、23-6号土坑、24-31号土坑では縄文中期後半の土器片が出土している。

縄文時代相当と推定される土坑 (17基)

調査時の記録や土層から次の土坑が縄文時代相当と推定できる。

23-9土坑、23-10土坑、23-11土坑、23-12土坑、24-17土坑、24-18土坑、24-19土坑、24-20土坑、24-21土坑、24-25土坑、24-26土坑、24-28土坑、24-29土坑、24-30土坑、24-32土坑、24-33土坑、24-34土坑

古代から中近世と判断できる土坑 (3基)

24-22土坑、24-23土坑、24-24土坑については、24-2号住居を掘り込んでおり、基本土層Ⅱの土を主体としている。

近世以降の土坑 (5基)

調査時の記録や基本土層Ⅰの土を主体とすることから、次の土坑が近現代のものと推定できる。

23-2土坑、23-3土坑、23-14土坑、24-35土坑、24-36土坑 (縄文土器は混入)。

(2) 調査所見

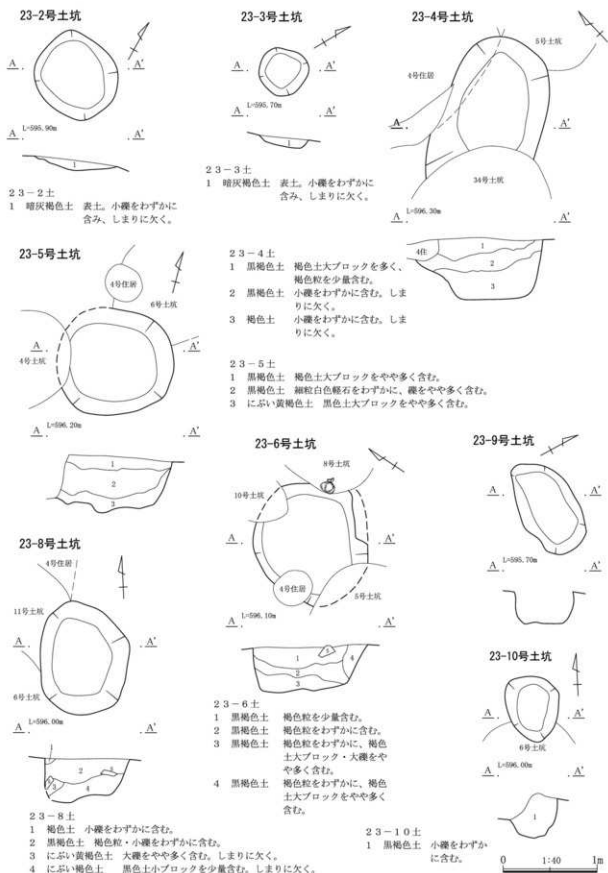
第1面では縄文時代中期後半の住居跡を確認し、あわせて土坑の遺構確認に努めたが、確認は困難で

あった。24-34土坑は試掘調査で遺構確認されており、本調査でも試掘トレンチの断面によって確認できたに過ぎない。層位・埋土から縄文時代の陥し穴と考えられるが、確認プランも不分明で、壁面も土離れが悪かった。平面形は上面が楕円形で底面が方形に近いタイプであった。以下、土坑は壁面で新たに確認される経過により、数珠繋ぎに23-4・5・6土坑の順で発見された。

24-38号土坑は24区4号住居跡内で石組と重複して発見された。黒みが強く埋土に炭を含み、比較的平面プランは明確で、底面は平坦で整った隅丸方形を呈する。石組との関係から24区4号住居跡より前出と考えられる。

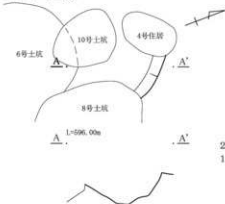
18年度調査区ではⅢ層が北側に向かって厚く堆積しており、サブトレンチを東西・南北方向に7本入れることで下層の遺構確認を図った。その結果、24-42・45土坑を発見した。なお、Ⅳ層上面まで下げた結果、24-43・44土坑を追加確認した。

近現代の土坑5基は円形か楕円形を呈し、しまりのないⅠ層で埋まっていた。現代耕作に伴う可能性はあるが、確認面の層位が深い点も考慮して土坑として調査を行った。遺物は縄文土器を混入する以外出土しなかった。(飯森)

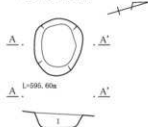


第17図 土坑(1)

23-11号土坑

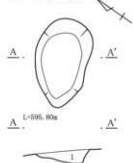


23-12号土坑



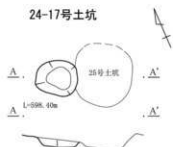
23-12土
1 にぶい黄褐色土 黒色土小ブロックをわずかに含む。

23-14号土坑



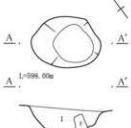
23-14土
1 暗灰褐色土 表土。小礫をわずかに含み、しまりに欠く。

24-17号土坑



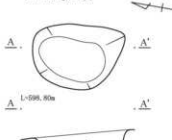
24-17土
1 黒褐色土 黒色土を主体とし、褐色土がブロック状に混じる。

24-18号土坑



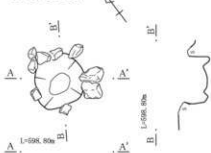
24-18土
1 暗褐色土 黒色土と褐色土の混土

24-19号土坑

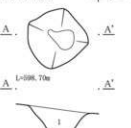


24-19土
1 暗褐色土 黒色土と褐色土の混土

24-21号土坑

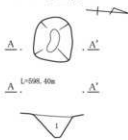


24-20号土坑

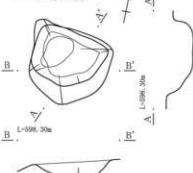


24-20土
1 暗褐色土 黒色土と褐色土の混土

24-23号土坑

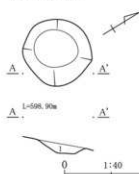


24-22号土坑



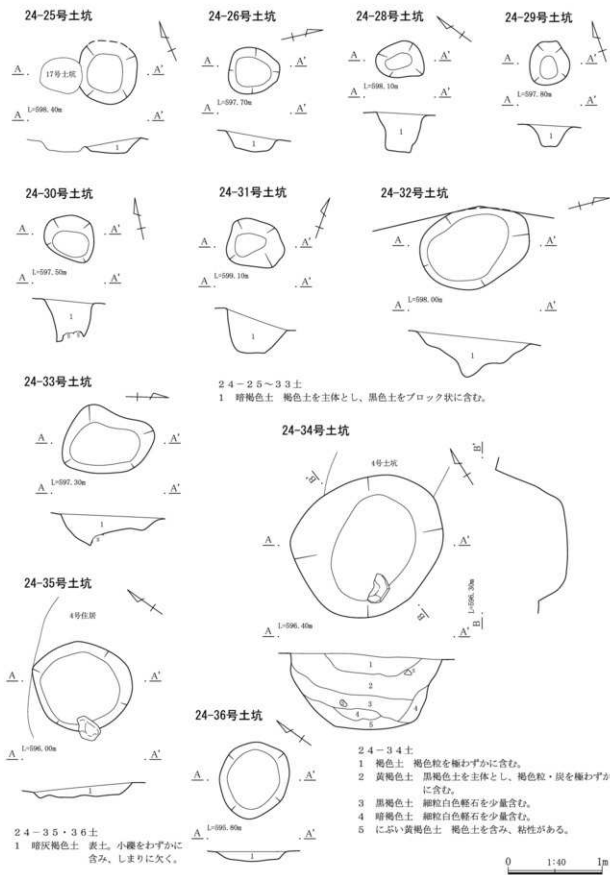
24-22~24土
1 黒褐色土 黒色土を主体とし、褐色土をブロック状に含む。

24-24号土坑



0 1:40 1m

第18図 土坑(2)



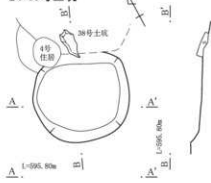
第19図 土坑 (3)

24-37号土坑



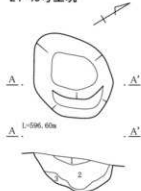
- 24-37土
 1 黒褐色土 白色粒・小礫をわずかに含み、黒みが強い。
 2 褐色土 ローム小ブロックをわずかに含む。
 3 黒褐色土 ローム大ブロックをわずかに含む。

24-39号土坑



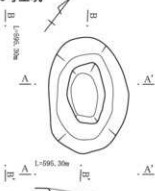
- 24-39土
 1 黒褐色土 褐色土大ブロックをやや多く含む。
 2 黒褐色土 白色粒・褐色土大ブロックをやや多く含む。

24-43号土坑



- 24-43・45土
 1 黒褐色土 白色粒・褐色粒・礫をわずかに、ローム大ブロックをやや多く含む。
 2 黒褐色土 ローム小ブロックをわずかに含む。
 3 褐色土 ローム大ブロックをやや多く含む。

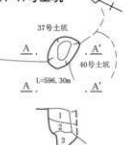
24-45号土坑



24-40号土坑



24-41号土坑



24-38号土坑



- 24-38土
 1 黒褐色土 炭粒を少量含む。
 2 黒褐色土 白色粒・炭粒をわずかに含む。
 3 褐色土 黒褐色土小ブロックをわずかに含む。

- 24-40・41土
 1 黒褐色土 白色粒・褐色粒を少量含む、締まる。
 2 黒褐色土 白色粒・褐色粒をわずかに含む、締まる。
 3 褐色土 黒褐色土小ブロックを少量含む。

24-42号土坑



- 24-42土
 1 黒褐色土 炭粒を極わずかと褐色土大ブロックを含む。
 2 黒褐色土 炭粒を極わずかに、大礫をわずかに含む。

24-44号土坑



- 24-44土
 1 黒褐色土 白色粒礫をわずかに含む。
 2 黒褐色土 褐色土大ブロックを少量含む。
 3 黄褐色土 黒褐色土大ブロックをやや多く含む。

第20図 土坑(4)

0 1:40 1m

3. 溝

24区1号溝 (第21図、P L12)

位置 L-4グリッド。

遺物出土状態 なし。

重複 なし

表土掘削後の精査で長さ約9mにわたって検出された。部分的な検出のために詳細は不明である。上幅50cm下幅25cmを基本としていて、北から南に向かって流れる。平均勾配は、11.4%。

4. 採石遺構

基本土層V層土中に含まれる巨礫のうち、人為的な加工痕跡を持つものを、採石遺構として扱う。24区1・2号採石遺構は、24区3号住居跡底面で確認されており、同本文中で記述した。

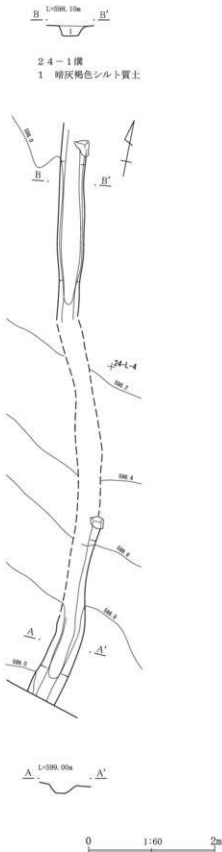
24区3号採石遺構 (第22図、P L13)

位置 A-4グリッド。

重複 なし。

第1面確認面でも一部露呈していたが、遺構として認識していなかった。第2面調査段階で、平石が周辺に倒れていることに気づき調査対象となった。巨礫は地山に入っており、全体的な大きさは不明である。露呈規模で(長径195・短径107・厚さ36cm)。巨礫の性質は、板状摂理であり、比較的容易に平石が採取できる。倒壊していた平石は最低でも6枚あり、最も初期段階の倒壊礫である剥片(3号採石-1)両面に、剥離によるリングが認められる。なお、巨礫本体にはこの剥片と接合する部分があり、打点を図化した。打点は矢状を呈している。遺物は掘削初期段階で、縄文土器小片1点が出土したのみである。

(飯森)

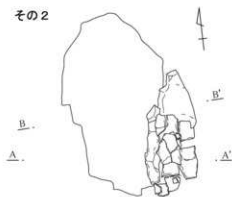


第21図 24区1号溝

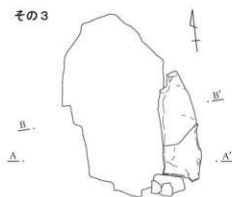
その1



その2



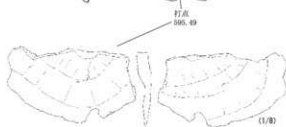
その3



A. L=596.00a



その4



B. L=596.00a



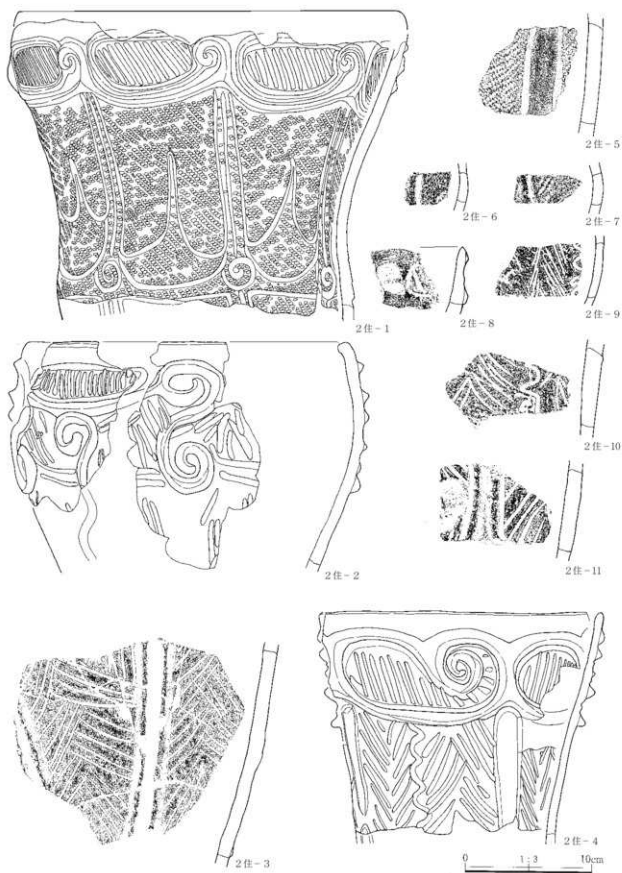
3号採石遺構

- 1 黒褐色土 白色粒・黄色粒をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 黒褐色土大ブロックをやや多く含む。
- 3 褐色土 シミが入り、よごれた感じ。しまりに欠く。

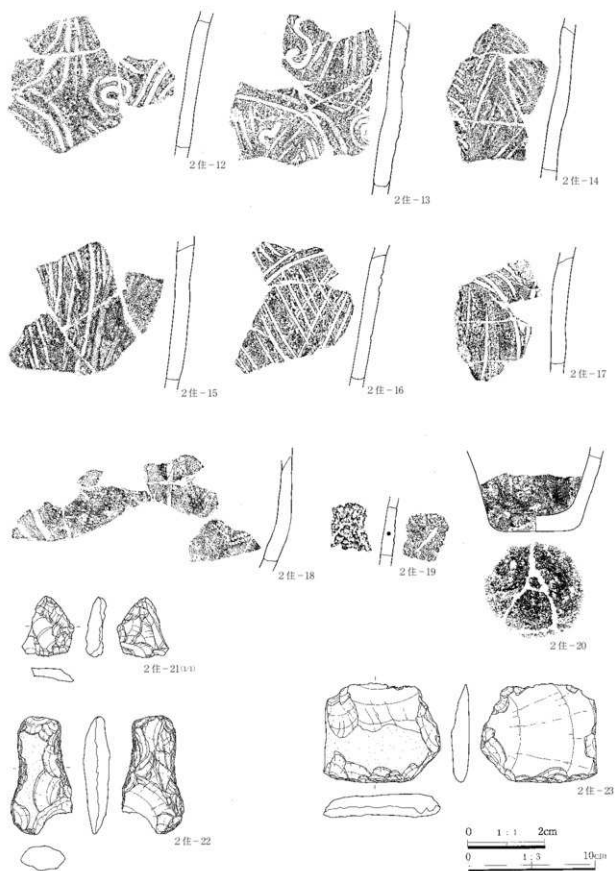
0 1:8 20cm

0 1:40 1m

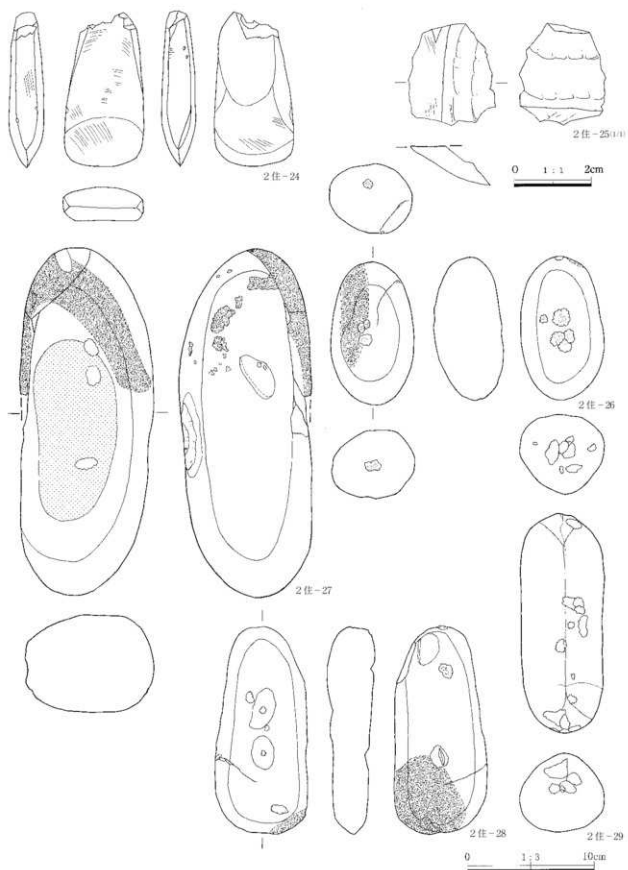
第22図 24区3号採石遺構



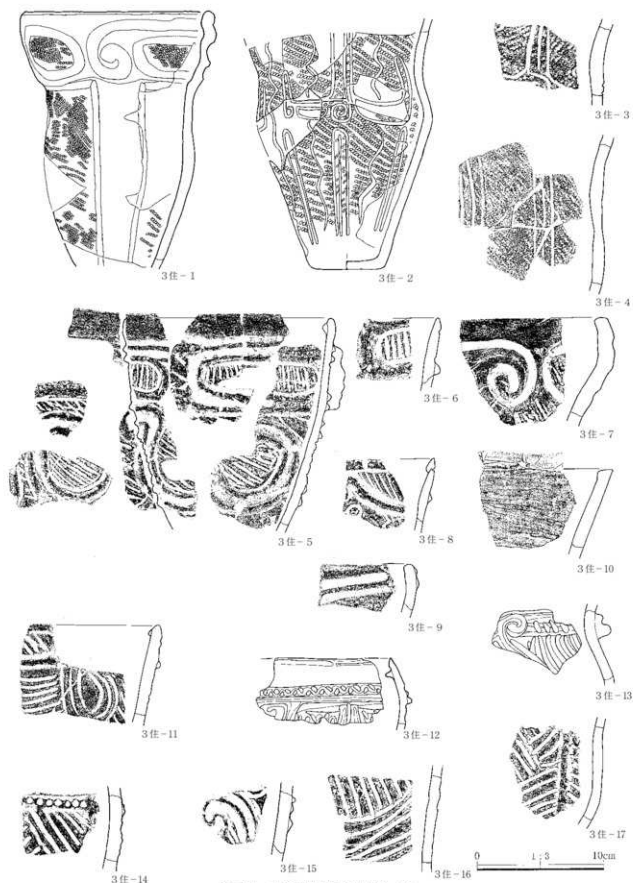
第23図 24区2号住居出土遺物(1)



第24図 24区2号住居出土遺物(2)

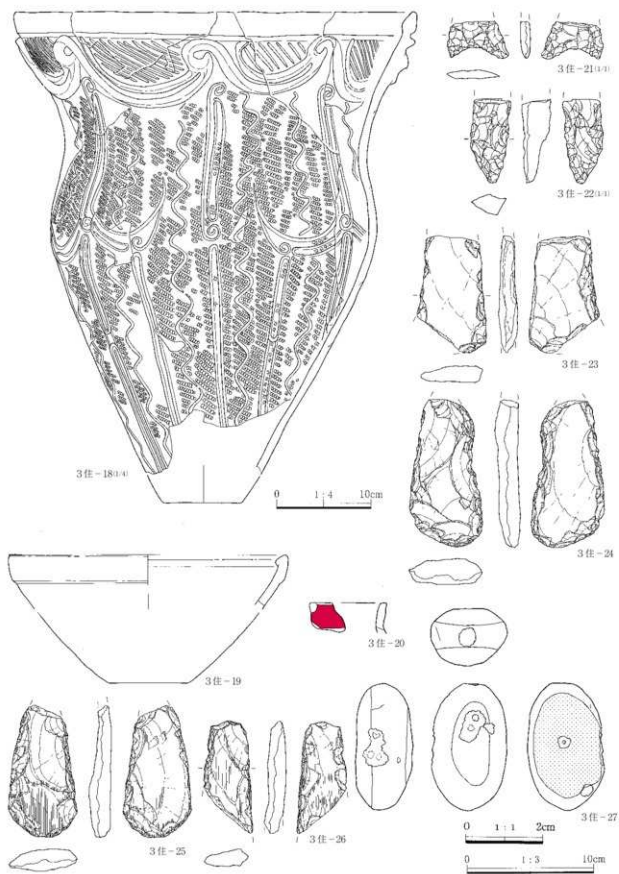


第25図 24区2号住居出土遺物(3)

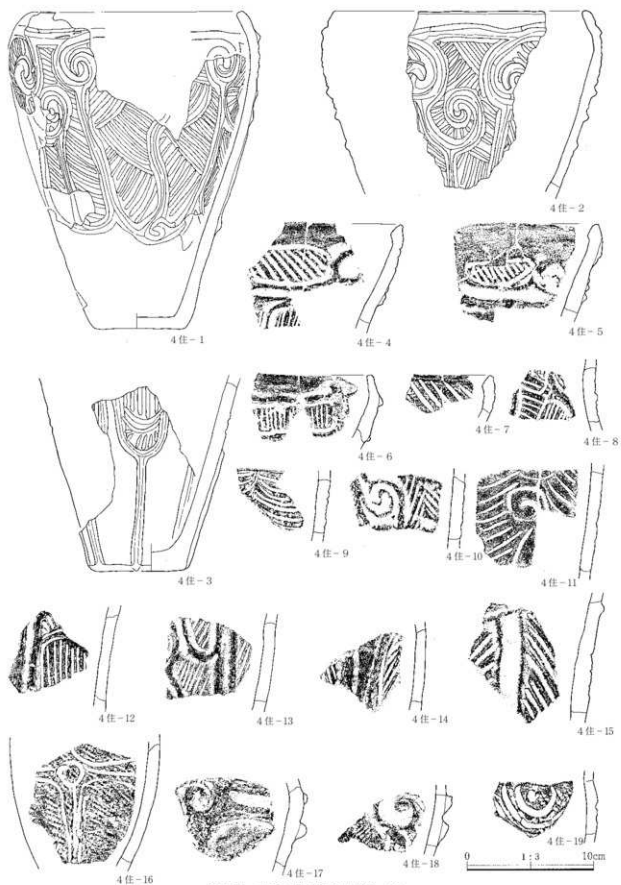


第26図 24区3号住居出土遺物(1)

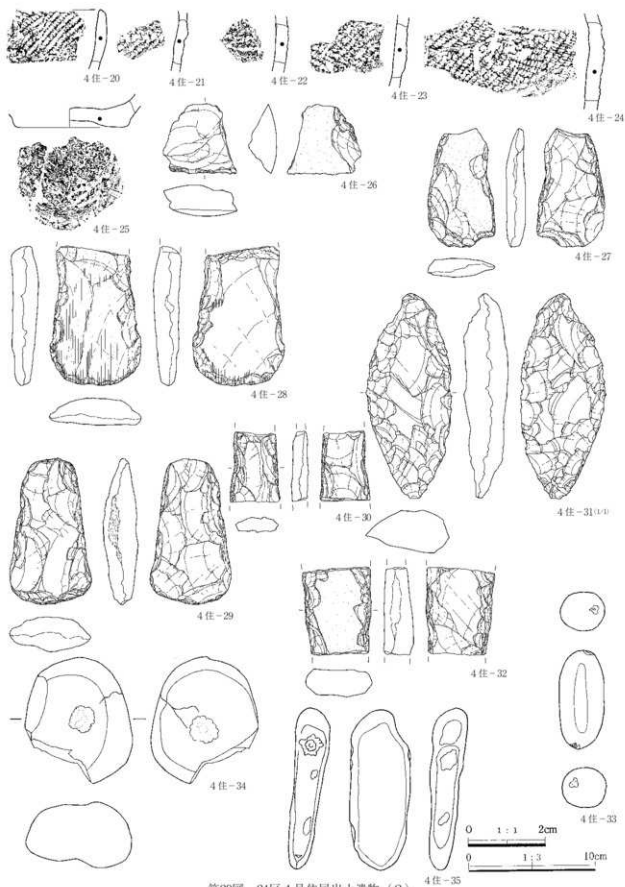
第5節 検出された遺構と遺物



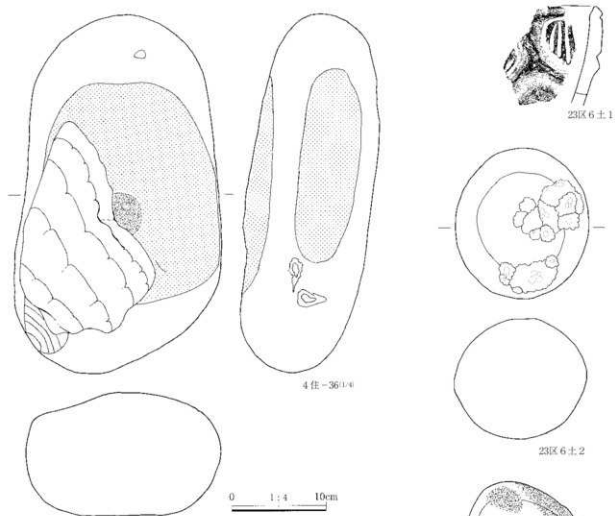
第27図 24区3号住居出土遺物(2)



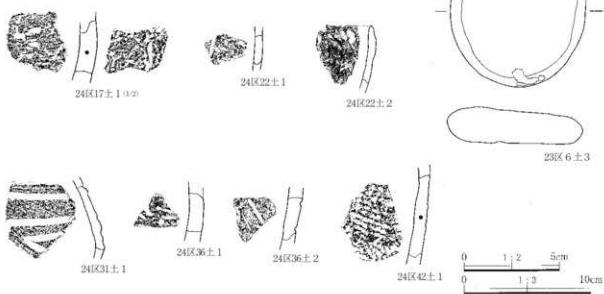
第28図 24区4号住居出土遺物(1)



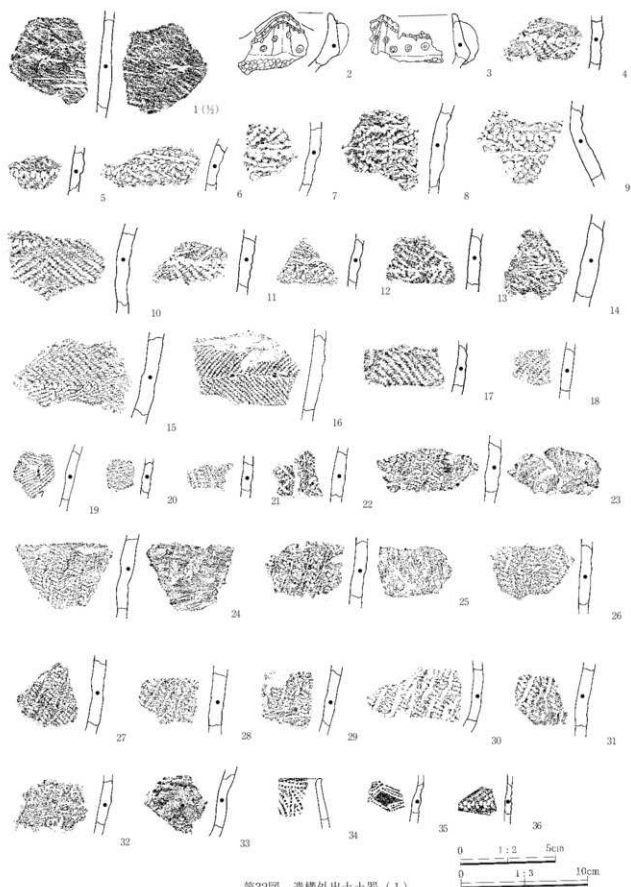
第29図 24区4号住居出土遺物(2)



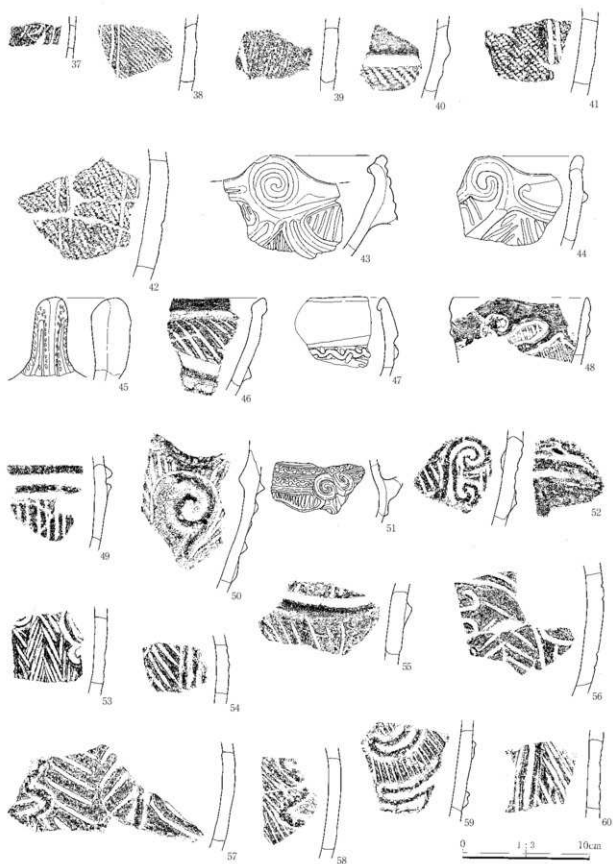
第30图 24区4号住居出土遺物(3)



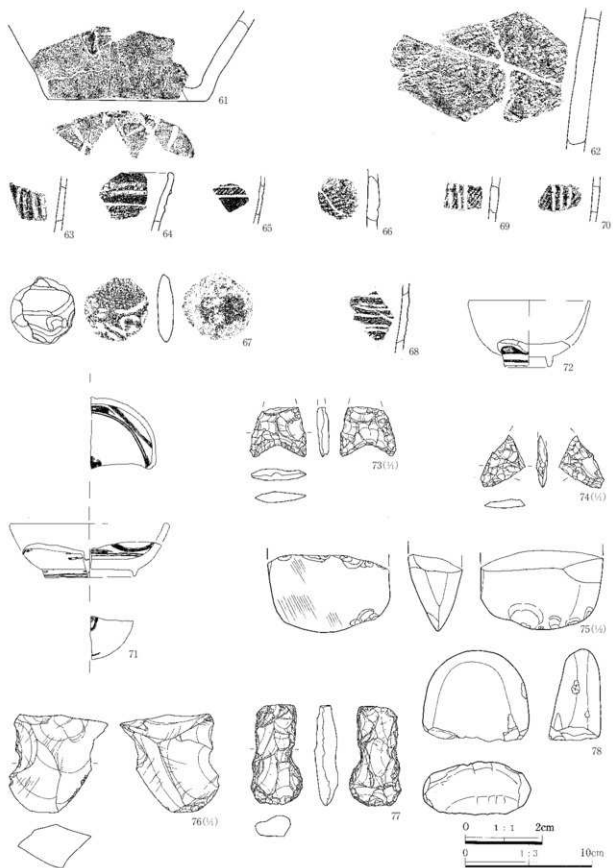
第31图 23・24区土坑出土遺物



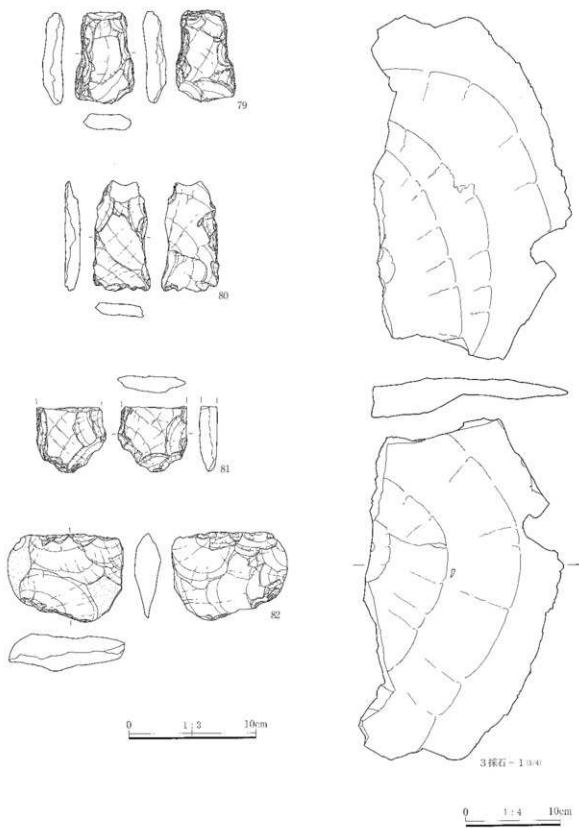
第32図 遺構外出土土器(1)



第33图 遺構外出土土器(2)



第34図 遺構外出土土器(3)



第35図 遺構外出土土器(4)

第6節 まとめ

今回の報告は、平成13年度と平成18年度に実施した山根Ⅲ遺跡の発掘調査の報告である。同遺跡は平成10年度にも、町道拡幅・深沢橋橋台建設に伴って吾妻川右岸緑道を発掘調査しており、その報告はすでに「八ッ場ダム発掘調査集成(2)」として刊行されている。

今回の報告地点は、そのすぐ南側に位置しており、前回の調査と、ほぼ同様の結果が得られている。検出された遺構は、縄文時代中期後半加曾利E3式期の竪穴住居3軒のほか、土坑39基、溝1条、包含層であった。包含層では、縄文時代早期後半期の条痕文系土器、前期では関山式～黒浜式および前期末葉の一群、中期では加曾利E1式～同3式期の土器群、後期では堀之内2式土器、弥生時代では中期前半期の一群が出土しており、縄文時代中期後半加曾利E3式期を中心に、この場所が長期にわたって断続しながらも使用されていたことを示している。土坑では、近世以後が5基、古代から中・近世が4基、その他の28基は縄文時代の所属と想定される。そのうち、24区17号と22号から縄文時代早期後半期の土器、24区42号から前期中葉期の土器、24区31号から弥生時代中期前半期の土器がそれぞれ出土しているが、その多くは中期後半の時期に比定されるものと思われる。溝は近世かその後のものであろう。

山根Ⅲ遺跡は、北側に傾斜する斜面の広範囲にわたって遺跡地に認定されている。これまでの3回にわたる発掘調査箇所は、遺跡地認定範囲の北西隅の一面にあたるが、この場所は東沢が吾妻川に合流する地点でもあり、その点では東沢に依拠した右岸台地上の遺構群と捉えることができる。

今回の調査結果に、すでに報告されている前回の調査結果を合わせて、現在までに判明した山根Ⅲ遺跡の継続状況の概要を第2表に示す(●は住居あり、数字は確定した軒数。○は遺構あり、遺物多量。○は遺物多量。△は遺物のみあり。)比較のために、本遺跡の東側に隣接する横壁中村遺跡と、西側に隣

第2表 八ッ場地域 主要遺跡一覧

時代・時期	型式等	西久保1	山根Ⅲ	横壁中村		
縄文	草前期	隆起段文				
		彫形文				
		多縄文				
	草中期	表裏縄文				
		撫糸文				
		押型文				
		三戸式				
		田戸下層式				
		田戸上層式				
		子母口式				
		野島式				
		船ヶ島台式				
		茅山下層式				
		茅山上層式	△			
		絡状帯圧痕文地				
縄文	前期	花積下層式	△			
		二ツ木式		△		
		関山式		△ △		
	前期	黒浜式・有尾式	△ △	△ △		
		諸磯a式	△	△		
		諸磯b式		△		
		諸磯c式		△		
		十三善提式		△ △		
		五箇ヶ台式	△	△		
		勝坂1式	○	○		
		勝坂2式		●		
		勝坂3式	△	●		
		中期	加曾利E1式		△	●
			加曾利E2式		△	●
			加曾利E3式	●1	●4	●
加曾利E4式	●4			●		
称名寺1式				●		
代	後期	称名寺2式		●		
		堀之内1式	△	●		
	堀之内2式	△ △	●			
	加曾利B1式			○		
	加曾利B2式		△	○		
	加曾利B3式		△	○		
	高井兼式			○		
	安行1式					
	安行2式					
	晩期	安行3a式			△	
安行3b式						
安行3c式						
安行3d式						
千瀬式				○		
弥生	水式	△		○		
	弥生時代中期前半	△	△	○		
	弥生時代中期後半	△		○		
弥生時代後期	△		△			

第2章 山根Ⅲ遺跡

接する西久保Ⅰ遺跡の調査結果も合わせてみた。横壁中村遺跡は縄文時代中期後半～後期前半期の住居が200軒以上も確認された大規模集落、西久保Ⅰ遺跡は規模や継続期間が本遺跡と類似する小規模遺跡である。これらの遺跡が立地する吾妻川右岸中位段丘面は、ローム層の堆積が認められない比較的新しい段丘で、吾妻川が運んだ砂礫層と、南側の山地から崩落した多量の礫を含む土砂で構成された、北向

きの傾斜地になっている。対岸の上位及び最上位段丘面では、縄文時代草創期から人の活動が開始されているが、中位段丘面の横壁地区ではやや遅れて、今のところ早期後半頃から生活の舞台として利用されたようである。3遺跡共に継続性や断絶期に共通する傾向がうかがえ、横壁中村遺跡を中心に回帰的な活動が行われていたことが想定される。(藤巻)

第3表 土坑一覧表

土坑番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	位置	出土遺物	備考
23-2号土坑	92	86	34	23区-Y-4		近世以降
23-3号土坑	52	50	34	23区-Y-4		近世以降
23-4号土坑	-	112	80	23区-Y-3		縄文時代
23-5号土坑	126	114	82	23区-Y-3		縄文時代
23-6号土坑	134	122	70	23区-Y-3	土器1、石2	縄文時代
23-8号土坑	122	96	74	23区-Y-3		縄文時代
23-9号土坑	110	66	56	23区-Y-4		縄文時代相当
23-10号土坑	70	60	66	23区-Y-3		縄文時代相当
23-11号土坑	-	-	65	23区-Y-3		縄文時代相当
23-12号土坑	61	52	34	23区-Y-3		縄文時代相当
23-14号土坑	98	60	38	23区-X-3		近世以降
24-17号土坑	46	40	34	24区-K-3	土器1	縄文時代相当
24-18号土坑	75	54	50	24区-J-4		縄文時代相当
24-19号土坑	98	70	45	24区-K-3		縄文時代相当
24-20号土坑	68	58	47	24区-K-3		縄文時代相当
24-21号土坑	60	52	64	24区-J-2		縄文時代相当
24-22号土坑	90	86	42	24区-L-4	土器2	古代から中近世
24-23号土坑	48	42	48	24区-K-3		古代から中近世
24-24号土坑	74	68	38	24区-L-3		古代から中近世
24-25号土坑	70	62	35	24区-K-3		縄文時代相当
24-26号土坑	56	50	40	24区-I-4		縄文時代相当
24-28号土坑	50	42	58	24区-I-3		縄文時代相当
24-29号土坑	46	44	43	24区-I-3		縄文時代相当
24-30号土坑	56	46	62	24区-H-4		縄文時代相当
24-31号土坑	62	50	70	24区-K-2	土器1	縄文時代
24-32号土坑	120	86	70	24区-J-4		縄文時代相当
24-33号土坑	90	72	55	24区-H-5		縄文時代相当
24-34号土坑	164	142	98	24区-A-2		縄文時代相当(陥し穴)
24-35号土坑	100	100	40	24区-A-4		近世以降
24-36号土坑	83	74	24	24区-A-4	土器2	近世以降
24-37号土坑	-	106	58	24区-A-3		縄文時代
24-38号土坑	176	130	42	24区-A-4		縄文時代
24-39号土坑	103	95	34	24区-A-4		縄文時代
24-40号土坑	62	54	78	24区-A-3		縄文時代
24-41号土坑	37	28	59	24区-A-3		縄文時代
24-42号土坑	130	82	55	24区-A-4	土器1	縄文時代
24-43号土坑	102	80	59	24区-B-2		縄文時代
24-44号土坑	70	62	34	24区-B-2		縄文時代
24-45号土坑	124	86	42	24区-A-5		縄文時代

第4表 出土遺物観察表

24区2号住居 遺物観察表(土器)

図版番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	1/2残存 推定口径 30.0cm 残存高 17.5cm	白色軽石粒を少々含む。 良好。にぶい赤褐色。	口唇部欠損。口縁部は2条の断面三角形の隆線による渦巻文と楕円状区画文、区画は7単位を数える。区画内は沈線文を横線として斜位沈線文を充填する。体部は中央の沈線渦巻文を中核として3条の沈線で区画される。区画内は剣先状意匠を当てる。地文の縄文は縦位R L、口縁部にスス付着	埋設土器 加曾利E式平行
2	深鉢	口~胴部片 推定口径 25.0cm	白色軽石を多く含む。 普通。にぶい褐色。	口縁部文様帯は2帯に分帯される。上位は渦巻文と楕円状区画文、下位は渦巻文を正位・逆位交互に配す。空白部は斜位沈線を充填する。体部は垂下沈線による懸垂文構成か?	加曾利E式平行
3	深鉢	胴部片	細かな石英をわずかに含む。 良好。にぶい赤褐色。	2条の隆線を垂下させ、空白部は魚鱗状沈線を充填する。	加曾利E式平行
4	深鉢	1/2残存 口径 22.2cm 残存高 17.4cm	白色軽石粒を含む。良好。 にぶい褐色。	口唇部被熱。口縁部文様帯は隆線による渦巻文を主とした楕円状区画文。区画内は斜位沈線を充填する。体部文様は沈線による縦位文と縦位流状文による懸垂文構成。空白部は縦位矢羽状沈線文を充填する。	空体土器 加曾利E式平行
5	深鉢	胴部片	白色軽石粒、砂粒を少々含む。 普通。にぶい赤褐色。	2条の沈線を垂下させ沈線の間の縄文を磨消。空白部は縦位R Lの縄文。	加曾利E 3式
6	深鉢	胴部片	白色軽石粒を少々含む。 良好。灰褐色。	2本の隆線を垂下させ、隆線の間に浅い凹線。地文の縄文は縦位R L。	加曾利E 3式 7と同一
7	深鉢	胴部片	白色軽石粒を少々含む。 良好。灰褐色。	2本の隆線を垂下させ、隆線の間に浅い凹線。地文の縄文は縦位R L。	加曾利E 3式 6と同一
8	鉢	口縁部片	白色軽石粒を少々含む。 良好。灰褐色。	口縁部は隆線による渦巻文と楕円状区画文、区画内は沈線文を横線として斜位沈線を充填する。口縁外側に赤色塗彩の痕跡がある。	加曾利E式平行
9	鉢	胴部片	細かな石英をわずかに含む。 良好。黒褐色。	縦位矢羽状沈線。	加曾利E式平行
10	深鉢	胴部片	白色軽石粒を少々含む。 良好。にぶい褐色。	魚鱗状沈線と蛇行沈線を垂下させる。	加曾利E式平行
11	深鉢	胴部片	細かな石英を多く含む。良好。赤褐色。	直2本の隆線を垂下させ、隆線の側面に添って沈線。空白部は斜位沈線。	加曾利E式平行
12	深鉢	胴部片	小礫、砂粒を含む。良好。 にぶい褐色。	渦巻文とその周辺に沈線による弧状文。	加曾利E式平行
13	深鉢	胴部片	細かな石英をわずかに含む。 良好。にぶい褐色。	渦巻文とその周辺に沈線による弧状文と蛇行沈線文。	加曾利E式平行
14	深鉢	胴部片	小礫、砂粒を含む。良好。 にぶい褐色。	矢羽根状の浅い沈線で文様を構成する。	加曾利E式平行
15	深鉢	胴部片	小礫、砂粒を含む。良好。 にぶい褐色。	楕円状区画文。	加曾利E式平行
16	深鉢	胴部片	小礫、砂粒を含む。良好。 にぶい褐色。	楕円状区画文。	加曾利E式平行
17	深鉢	胴部片	小礫、砂粒を含む。良好。 にぶい褐色。	楕円状区画文。	加曾利E式平行
18	深鉢	胴部片	小礫、砂粒を含む。良好。 にぶい褐色。	2条の垂下沈線と縄文縦位R L。	加曾利E 3式
19	深鉢	胴部片	繊維、金雲母をわずかに含む。 良好。にぶい褐色。	縄文を施文。原体は判読できない。繊維を多く含む。	前期 中業
20	深鉢	底部残存 底径 7.8cm 残存高 5.6cm	白色軽石粒を多く含む。 良好。赤褐色。	無文で素朴な仕上げだが、白色軽石が表面に浮き出るように磨いたか。内側に炭化物が付着する。	加曾利E式

24区2号住居 遺物観察表(石器)

図版番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
21	石鏃	一部欠損	16	13	3	0.7	黒曜石	未製品
22	打製石斧	刃部一部欠損	93	48	12	89.5	頁岩	
23	削器	一部欠損	68	90	14	163.2	安山岩	
24	磨製石斧	上部欠損	82	42	18	108.2	蛇紋岩	

第2章 山根Ⅲ遺跡

図版番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
25	磨製石斧	一部残存	27	23	5	4.6	蛇紋岩	
26	くぼみ石	完形	112	65	54	556.0	安山岩	
27	台石?	完形	275	105	77	3500.0	安山岩	
28	くぼみ石	完形	163	73	37	671.3	安山岩	
29	たまり石	完形	174	64	6	1014.7	安山岩	

24区3号住居 遺物観察表(土器)

図版番号	器種	残存状態・計測値	胎土・地色・色調	彫形・文様の特徴	備考
1	深鉢	底部欠損 口径 14.5cm 残存高 19.4cm	金雲母をわずかに含む。良好。黒色。	口縁部は渦巻文と栴門区画が連続し、4単位を数える。区画線は凹線、体部は磨消による懸垂文構成、縄文は縦位と横位の充填縄文。	加曾利E3式
2	深鉢	口縁部欠損 底径 6.0cm 残存高 18.5cm	白色粒、金雲母をわずかに含む。良好。にぶい赤褐色。	体部は上下2帯に分かれる。上位は渦巻文を中心として横位弧線文で分帯される。縦位は縄文が施される。下位は逆U字状文と縦位による懸垂文構成。地文はRL縦位地文。	加曾利E5式平行
3	深鉢	胴部片	白色粒、砂粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	沈線渦巻文と3条の沈線で区画される。地文の縄文は縦位L.L.	加曾利E5式平行
4	深鉢	胴部片	白色粒を主体とした砂粒に石英、金雲母をわずかに含む。良好。暗褐色。	3条の垂下沈線、地文は縦位L.R.	加曾利E5式平行
5	深鉢	口縁部片 最大口径 16.0cm 残存高 16.2cm	砂粒、金雲母を含む。普通。暗褐色。	口縁部は2条の隆線による栴門区画文とねじりを加えた小突帯、隆線の間は刺突文。区画内の縦線は沈線。区画内は縦位の沈線。体部上半は2条の隆線による渦巻文と栴門区画文、区画及び空白部は斜位沈線で充填する。	加曾利E5式平行
6	深鉢	口縁部片	白色粒、砂粒を少々含む。にぶい赤褐色。	隆線と沈線による栴門区画。区画内は縦位沈線文。	加曾利E5式平行
7	深鉢	口縁部片	白色粒をわずかに含む。良好。黒褐色。	口縁部は凹線による渦巻文と栴門区画文、区画内は斜位L.R.、内外面磨かれて光沢を持つ。	加曾利E3式 内面磨彩か?
8	浅鉢	口縁部片	白色粒を少々含む。良好。赤褐色。	口唇部は折返状に肥厚。口縁部は沈線による栴門区画文、区画内は斜位沈線を充填し、体部は渦巻文と波状沈線か?	加曾利E5式平行
9	深鉢	口縁部片	細かな白色粒を多く含む。良好。黒褐色。	口縁部に2条の隆線。	
10	深鉢	口縁部片	白色軽石粒、砂粒を少々含む。良好。にぶい赤褐色。	口唇部は折り返し状に肥厚。器表面内外横位研磨により光沢を持つ。	加曾利E5式平行
11	深鉢	口縁部片	白色粒、砂粒に石英をわずかに含む。良好。暗褐色。	口唇部に内折気味の肥厚。口縁部は隆線による栴門区画か、区画内は斜位沈線。体部は対弧線状意匠と横位沈線。	加曾利E5式平行
12	深鉢	口縁部片	白色軽石粒、砂粒を少々含む。良好。暗褐色。	口唇内側に1条の突出する隆線、口縁部下段に交互刺突文による蛇行文、横位隆線により胴部と口縁部を区分、隆線が垂下し、空白部に交互刺突文。	加曾利E5式平行
13	深鉢	胴部片?	細かな白色粒を多く含む。良好。黒褐色。	胴部に隆線による渦巻文、体部は弧状沈線文。	加曾利E5式平行
14	深鉢	胴部片	白色軽石粒、砂粒を少々含む。普通。にぶい赤褐色。	横位隆帯に多数刻目、体部は交互の斜位沈線。	加曾利E5式平行
15	深鉢	胴部片	細かな白色粒、砂粒を少々含む。良好。黒褐色。	2条の隆線による渦巻文。縦線は沈線。	加曾利E5式平行
16	深鉢	胴部片	細かな白色粒を少々含む。良好。黒褐色。	弧線状沈線による区画文か、区画内は斜位沈線。	加曾利E5式平行
17	深鉢	胴部片	白色軽石粒、砂粒を少々含む。良好。外面赤褐色・内面黒色。	縦位隆線による懸垂文、体部は交互斜位沈線。	加曾利E5式平行
18	深鉢	口縁4/5~胴下半1/3残存	白色粒、砂粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	口唇部は内側に肥厚する。口縁部は大小2本の隆線による渦巻文が8単位。渦巻文の内側は斜方向的沈線。体部は沈線文様を用いて、上下2段左右4単位に文様を振り付けている。上下は横位の刺先状で区画し、左右は3条単位の渦巻文を伴う縦位の沈線文で区画する。蛇行沈線は胴上部から底部まで連続する線が4条、上部だけが4条。地文の縄文は縦位L.R.	加曾利E5式平行

図版番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	彫形・文様の特徴	時期・備考
19	浅鉢	口縁部片 推定口径21.7cm	白色軽石粒、砂粒を少々含む。良好。にぶい赤褐色。	口唇部が肥厚し内凹気味に突出する。内外面とも丁寧な焼成を施し、内外面赤色塗彩する。	
20	小型壺	口縁部片	白色粒を少々含む。良好。赤色。	口縁部は直立気味、頸部で強く屈曲する。外面赤色塗彩。	

(石器)

図版番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
21	石鏡	先端部欠損	10	16	2	0.6	黒曜石	
22	石鏡	振り部欠損	22	10	5	1.6	黒曜石	
23	打製石斧	刃部3/4欠損	90	54	13	79.1	安山岩	
24	打製石斧	ほぼ完形	115	56	20	130.0	華蘇輝石普通輝石 安山岩	
25	打製石斧	ほぼ完形	103	54	17	102.2	華蘇輝石普通輝石 安山岩	
26	打製石斧	刃部欠損	90	46	12	53.6	安山岩	
27	くぼみ石	完形	100	59	44	386.1	粗粒輝石安山岩	

24区4号住居 遺物観察表(土器)

図版番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	彫形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口-胴部片 口径 16.4cm 高さ 24.8cm	白色粒、砂粒を少々含む。良好。暗褐色。	口縁部無文。口縁部と体部を隆線にて区画。隆線の側面に沿って沈線。体部は文様を持つ上半と無文の下半に分かれる。体部上半は隆線による渦巻文と蛇行隆線により文様が構成され、隆線の側面に沿って沈線、空白部分は魚鱗状沈線で充填している。	加曾利E式平行
2	深鉢	口縁部片 推定口径 20.0cm 残存高 13.8cm	白色粒、砂粒を少々含む。良好。暗褐色。	1にはば共通している。同一個体の可能性もある。	加曾利E式平行
3	深鉢	底部片 底径 8.0cm 残存高 14.4cm	白色粒、砂粒を少々含む。良好。暗褐色。	隆線によるU字状と垂下沈線による懸垂文が区画される。隆線は底部縁部まで達する。区画内は弧状沈線と縦位沈線で充填される。体部下半は縦位へちまきで充填を持つ。	加曾利E式平行
4	深鉢	口縁部片	細かな石英、白色粒を含む。良好。暗褐色。	口唇部は内側に肥厚する。口縁部は2帯に分かれる。隆線と沈線による渦巻文と楕円区画文。区画内は斜行沈線。	加曾利E式平行 5と同一か
5	深鉢	口縁部片	細かな石英、白色粒を含む。良好。暗褐色。	口唇部は内側に肥厚する。口縁部は隆線と沈線による渦巻文と楕円区画文。	加曾利E式平行 4と同一か
6	深鉢	口縁部片	細かな石英、白色粒を含む。良好。暗褐色。	口縁部は隆線による渦巻文と楕円区画文が、隆線の側縁は沈線。区画内は縦位沈線。	加曾利E式平行
7	深鉢	口縁部片	白色粒、砂粒、金雲母をわずかに含む。良好。黒褐色。	口唇部は内側に肥厚する。口縁部は斜位沈線文。	加曾利E式平行
8	深鉢	胴部片?	白色粒、砂粒を少々含む。良好。黒褐色。	隆線による区画か、区画内は弧状及び斜行沈線で充填する。	加曾利E式平行
9	深鉢	胴部片	白色粒、砂粒を少々含む。良好。暗褐色。	体部に魚鱗状沈線が施文される。	加曾利E式平行
10	深鉢	胴部片	細かな石英を含む。良好。にぶい赤褐色。	隆線による渦巻文と縦位矢羽状沈線が施文される。	加曾利E式平行
11	深鉢	胴部片	白色粒、金雲母をわずかに含む。良好。暗褐色。	沈線による渦巻文と魚鱗状沈線文が施文される。	加曾利E式平行
12	深鉢	胴部片	白色粒をわずかに含む。良好。にぶい赤褐色。	弧状沈線と縦位沈線文が施文される。	加曾利E式平行
13	深鉢	胴部片	白色粒をわずかに含む。良好。にぶい赤褐色。	懸垂文構成、斜行沈線文を施文する。	加曾利E式平行
14	深鉢	胴部片	白色粒、金雲母を含む。良好。赤褐色。	2条の隆線、斜位沈線が施文される。	加曾利E式平行
15	深鉢	胴部片	砂粒、細かな石英を含む。良好。暗褐色。	2条の隆線、斜位沈線が施文される。	加曾利E式平行
16	深鉢	胴部片	砂粒、細かな石英を含む。良好。暗褐色。	沈線による渦巻文を中心として、縦位横位の沈線文で区画する。地文の横文は縦位L.L.	加曾利E式平行
17	深鉢	胴部片	白色粒、砂粒を少々含む。良好。にぶい赤褐色。	2条の隆線と渦巻文。	加曾利E式平行
18	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。暗褐色。	隆線による渦巻文、地文の横文は縦位L.R.	加曾利E式平行

第2章 山根Ⅲ遺跡

国取番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	彫形・文様の特徴	時期・備考
19	深鉢	胴部片	白色粒、金雲母をわずかに含む。良好。暗褐色。	沈線による渦巻文が施文される。縄文縄文は縦位R L。	加曾利E式平行
20	深鉢	口縁部片	白色細粒をわずかに含む。繊維を含む。良好。黒褐色。	口唇部は断面が尖る。縄文は横位L R。末端に結節が認められる。	前期中葉
21	深鉢	胴部片	わずかに細かな砂粒を含む。繊維を含む。やや不良。赤灰褐色。	縄文縄文は横位L R。末端に結節。	前期中葉
22	深鉢	胴部片	わずかに細かな砂粒を含む。繊維を含む。普通。赤灰褐色。	結縄帯による施文か。縄文はL R。	前期中葉
23	深鉢	胴部片	白色粒をわずかに含む。繊維を含む。やや不良。にぶい赤褐色。	縄文は横位L R・R Lの文情成か。	前期中葉
24	深鉢	胴部片	白色粒をわずかに含む。繊維を含む。やや不良。暗褐色。	縄文縄文は横位L R。上下2段にわたり施文。末端に結節。下段の一部に横位R Lを使用し施文している。	前期中葉
25	深鉢	底部片	白色粒をわずかに含む。繊維を含む。やや不良。にぶい赤褐色。	底部中央くぼむ。縄文R Lか。	前期中葉

(石器)

国取番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
26	削器	一部欠損	55	52	24	72.0	安山岩	
27	打製石斧	刃部一部欠損	93	52	15	91.4	安山岩	
28	打製石斧	上部一部欠損	106	72	22	221.4	粗粒輝石安山岩	
29	打製石斧	完形	115	64	28	309.3	粗粒輝石安山岩	
30	打製石斧	上部刃部欠損	54	39	11	37.5	頁岩	
31	石匙	完形	54	22	11	13.7	チャート	
32	打製石斧	上部刃部欠損	69	54	22	133.3	安山岩	
33	たたき石	完形	78	35	31	117.0	安山岩	
34	くばみ石	一部欠損	100	85	52	441.2	安山岩	
35	たたき石	完形	126	47	22	251.5	安山岩	
36	磨り石	一部欠損	382	219	131	16900.0	粗粒輝石安山岩	伊石に転用されていた。

23区6号土坑 遺物観察表(土器)

国取番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	彫形・文様の特徴	備考
1	深鉢	口縁部片	砂粒をわずかに含む。良好。にぶい赤褐色。	縁帯と沈線による渦巻文と横四区画文か。区画内は縦位沈線を施文している。	加曾利E式平行

(石器)

国取番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	形状などの特徴
2	たたき石	一部欠損	117	105	94	1425.9	安山岩	
3	砥石	刃部一部欠損	139	107	27	634.8	安山岩	

24区17号土坑 遺物観察表(土器)

国取番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	彫形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。繊維を含む。普通。暗褐色。	一部に縄文R Lが施文されている。	早期

24区22号土坑 遺物観察表(土器)

国取番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	彫形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。普通。にぶい赤褐色。	垂下する沈線が1条施文されている。他無文。器面磨滅。	中期後半
2	深鉢	口縁部片	白色粒を少々含む。普通。にぶい赤褐色。	無文の小形土器。縄文の施文無し。内外面とも、凹凸が顕著。	早期か

24区31号土坑 遺物観察表(土器)

国取番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	彫形・文様の特徴	備考
1	壺?	胴部片	砂粒をやや多く含む。良好。にぶい褐色	太い沈線。変形工字文。三角連繫文か	珠生前・中期

24K36号土坑 遺物観察表 (土器)

図版番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	白色細粒をわずかに含む。 普通。にぶい赤褐色。	沈線あり、縄文の施文無し。	中期
2	深鉢	胴部片	白色細粒をわずかに含む。 普通。にぶい赤褐色。	沈線あり、縄文の施文無し。	中期

24K42号土坑 遺物観察表 (土器)

図版番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	白色細粒をわずかに含む。 繊維を含む。普通。赤灰褐色。	地文縄文は横位LR、端末に結節。	前期中葉

遺構外 遺物観察表 (土器)

図版番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	備考
1	深鉢	胴部片	砂粒、細かな石英を含む。 繊維を含む。良好。にぶい 橙色。	内外面に象眼様の押痕を施す。	早期後半
2	深鉢	口縁部片	白色粒、繊維を少々含む。 良好。にぶい橙色。	波状口縁、口縁部に山形の突起を貼り付け、円 形刺突文、突起の上部に平行沈線とその後の刺 突文。突起の上部にループ文。	前期 岡山～黒 浜式期
3	深鉢	口縁部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	2と同一個体か。	前期 岡山～黒 浜式期
4	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	R L と L R のループ縄文で羽状縄文を構成。	前期 岡山～黒 浜式期
5	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	4と同一個体か。	前期 岡山～黒 浜式期
6	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	R L と L R のループ縄文で羽状縄文を構成。結 節部の回転施文を伴う。2・3の胴部片であら う。	前期 岡山～黒 浜式期
7	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	6と同一個体。	前期 岡山～黒 浜式期
8	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	6と同一個体。	前期 岡山～黒 浜式期
9	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	6と同一個体。	前期 岡山～黒 浜式期
10	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	R L と L R のループ縄文で菱形羽状文を構成。	前期 岡山～黒 浜式期
11	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	6と同一個体。	前期 岡山～黒 浜式期
12	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	6と同一個体。	前期 岡山～黒 浜式期
13	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を含む。良好。 にぶい橙色。	10と同様。	前期 岡山～黒 浜式期
14	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を少々含む。 良好。にぶい赤褐色。	結束羽状縄文で菱形を構成。	前期 岡山～黒 浜式期
15	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を少々含む。 普通。にぶい赤褐色。	14と同一個体。	前期 岡山～黒 浜式期
16	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。普通。 にぶい橙色。	R L と L R で羽状縄文を構成。内面に押痕。	前期 岡山～黒 浜式期
17	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を少々含む。 良好。暗褐色。	R L と L R で菱形羽状縄文を構成。	前期 岡山～黒 浜式期
18	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を少々含む。 良好。にぶい橙色。	17と同様。	前期 岡山～黒 浜式期
19	深鉢	胴部片	白色粒、繊維を少々含む。 良好。にぶい橙色。	無筋Lを縦横に施文して羽状縄文を構成。	前期 岡山～黒 浜式期
20	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普 通。にぶい橙色。	19と同一個体か。	前期 岡山～黒 浜式期
21	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普 通。にぶい橙色。	輪縄LRにLR縄を巻いた付加縄第2種縄文を 施文。内面に凹凸あり。	前期 岡山～黒 浜式期
22	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普 通。にぶい赤褐色。	21と同様。	前期 岡山～黒 浜式期

図取番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	彫彩・文様の特徴	備考
23	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。にぶい橙色。	輪襷R LにL R線を巻いた付加襷第2種縄文を施文。内面に凹凸あり、内面に条痕様・押痕様の広い調整痕が残る。	前期 岡山～黒浜式期
24	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。外面黒褐色内面橙色。	23と同様。	前期 岡山～黒浜式期
25	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。外面褐色内面黒褐色。	23と同様。	前期 岡山～黒浜式期
26	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。灰褐色。	23と同様。	前期 岡山～黒浜式期
27	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。褐色。	23と同様。	前期 岡山～黒浜式期
28	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。褐色。	23と同様。	前期 岡山～黒浜式期
29	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。灰褐色。	23と同様。	前期 岡山～黒浜式期
30	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。にぶい橙色。	23と同様。	前期 岡山～黒浜式期
31	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。にぶい赤褐色。	23と同様。	前期 岡山～黒浜式期
32	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。にぶい橙色。	内外面に条痕様・押痕様の広い調整痕が残る。23～31の胴部下半の破片であろう。	前期 岡山～黒浜式期
33	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。普通。褐色。	内外面に条痕様・押痕様の広い調整痕が残る。23～31の胴部下半の破片であろう。	前期 岡山～黒浜式期
34	深鉢	口縁部片	砂粒を少々含む。良好。暗褐色。	施文に横位集合沈線、結節浮線文が添付される。	前期末
35	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。良好。にぶい橙色。	内皮使用の結節浮線文による変形意匠か。	前期末
36	深鉢	胴部片	砂粒、繊維を少々含む。良好。にぶい橙色。	L R・R Lによる。結節羽状縄文。	前期末
37	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	縦位平行沈線及び縦位波状沈線。施文に縦位R L。	加曾利E 1式
38	深鉢	胴部片	白色粒にわずかな石英を含む。良好。にぶい赤褐色。	2条の沈線による懸垂文構成か、施文の縄文は縦位L R。	加曾利E 1式
39	深鉢	胴部片	白色粒をやや多く含む。良好。にぶい橙色。	上位に弧状沈線、体部は沈線による懸垂文か、縄文は縦位L R。	中期
40	深鉢	胴部片	白色粒をやや多く含む。良好。にぶい橙色。	隆帯による口縁部区画、胴縁には凹線。縄文は縦位R L。	加曾利E 3式
41	深鉢	胴部片	白色粒、砂粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	2条の垂下沈線による懸垂文構成か、施文は縦位L R。	加曾利E 5式平行
42	深鉢	胴部片	白色粒、砂粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	2条の垂下沈線による懸垂文構成か、施文は縦位L R。	加曾利E 5式平行
43	深鉢	口縁部片	白色粒にわずかな石英を含む。良好。褐色。	口縁部満色き状突起より2条1組の隆線が派生し、口縁部区画文を画する。胴縁は沈線。区画内は縦位・斜位沈線を充填する。	加曾利E 5式平行
44	深鉢	口縁部片	白色粒にわずかな石英、黒雲母を含む。良好。褐色。	口縁部満色き状突起より、1条の隆線が派生し口縁部区画文を画する。体部は矢羽状交互沈線。	加曾利E 5式平行
45	深鉢	突起部片	白色粒を少々含む。良好。褐色。	隆帯の口縁部突起、口唇部に刷目を描し、突起に添って円形刺突文を施す。	加曾利E 5式平行
46	深鉢	口縁部片	白色粒を少々含む。良好。褐色。	口唇部内側肥厚、口縁部隆線による積凹区画文、胴縁は沈線。区画内は斜位沈線。	加曾利E 5式平行
47	深鉢	口縁部片	白色粒を少々含む。良好。黒褐色。	口唇部肥厚、口縁部無文。交互刺突による波状文。	加曾利E 5式平行
48	深鉢	口縁部片	白色粒を少々含む。良好。暗褐色。	直立気味の口縁部、満色文を波頂部とし肌隆線により口縁部区画文を配する。区画内は縦位沈線。体部は熱赤文縦位施文。	加曾利E 5式平行
49	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	2条の横位隆帯。以下縦位沈線が施される。	加曾利E 5式平行
50	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。普通。にぶい赤褐色。	波状口縁。直下に隆線による満色文が配される。空白部は沈線が充填される。	加曾利E 5式平行
51	深鉢	胴部片	白色粒、砂粒を少々含む。良好。暗褐色。	満色文による双環状突起。平行沈線施文後の交互刺突による連続弧状文を胴部に施す。以下は縦位の沈線が充填される。	加曾利E 5式平行

図版番号	器種	残存状態・計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	備考
52	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	口縁部内面に横位隆線。外面2条の隆線による縦位渦巻文の連接。空白部は横位の沈線を施す。	加曾利E式平行
53	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	隆線による渦巻文か、沈線による渦巻文が施される。空白部は縦位矢羽状沈線。	加曾利E式平行
54	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	内皮使用の平行沈線が垂下する。空白部は斜位沈線。	加曾利E式平行
55	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	隆線による口縁部横帯区画か、区画内は縦位沈線を施す。体部は斜位沈線を施す。	加曾利E式平行
56	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	沈線のみは施文か、弧状沈線・縦位羽状沈線が施される。	加曾利E式平行
57	深鉢	胴部片	白色粒、砂粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	垂下隆線と流状隆線による懸垂文構成か、空白部は縦位羽状沈線。	加曾利E式平行
58	深鉢	胴部片	白色粒をやや多く含む。良好。にぶい橙色。	縦位流状隆線。空白部は斜位沈線。	加曾利E式平行
59	深鉢	胴部片	白色粒にわずかな石英、雲母を含む。良好。暗褐色。	2条の隆線による大柄の渦巻文。空白部は細流線文が施される。	加曾利E式平行
60	深鉢	胴部片	白色粒・石英・雲母を含む。良好。にぶい赤褐色。	2条の隆線による懸垂文構成。空白部は斜位沈線を施す。	加曾利E式平行
61	深鉢	底部片 底径 12.5cm	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	垂下隆線未端。横位沈線が見られる。底面も沈線か。	加曾利E式平行
62	深鉢	胴部片	白色粒にわずかな石英を含む。良好。にぶい橙色。	L R横位施文が覆う。	加曾利E式平行
63	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい橙色。	2条の細隆線が弧状に添付される。渦巻文か。	瀬之内2式
64	深鉢	口縁部片	砂粒をわずかに含む。良好。灰褐色。	口唇部内屈、口縁部に横位細隆線と「8」の字状の貼付文。以下横位沈線文と充填縄文。	瀬之内2式
65	深鉢	胴部片	砂粒をわずかに含む。良好。灰褐色。	横位沈線の内側に横位R Lの縄文で充填。	瀬之内2式
66	深鉢	胴部片	白色粒を少々含む。良好。にぶい赤褐色。	細流線が施される。地文の縄文は横位L R。	瀬之内2式
67	深鉢	円盤状破片	白色粒、砂粒を多く含む。良好。にぶい橙色。	体部中位の縦片。沈線による弧線文が施される。	土製円盤か
68	皿?	胴部片	白色粒、砂粒を少々含む。良好。橙色。	横位・斜位沈線が密接に施される。	弥生か
69	深鉢	胴部片	砂粒をわずかに含む。良好。にぶい橙色。	2条の垂下隆線による懸垂文構成か。縄文はR L縦位施文。	晩期-弥生
70	深鉢	胴部片	砂粒をわずかに含む。普通。橙色。	2条の垂下隆線による懸垂文構成か。縄文はR L。69と同一個体。	
71	碗 磁器	底部片 底径 7.2cm	良好。	染付碗。	渡佐見系・18世紀中期-後半
72	皿? 磁器	底部片 底径 3.8cm	良好。	染付皿。見込にコンニャク印判五弁花文。高台内の裏銘は判読出来ない。	渡佐見系・18世紀中期-後半

(石器)

図版番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
73	石鎌	先端部欠損	13	14	3	0.2	黒曜石	
74	石鎌	脚部残存	14	10	3	0.2	黒曜石	
75	磨製石斧	上部欠損	42	65	28	96.7	総紋岩	
76	石核	一部欠損	27	25	11	5.7	黒曜石	
77	打製石斧	ほぼ完形	80	41	16	59.9	頁岩	
78	スタンプ形石器	ほぼ完形	73	83	41	350.8	安山岩	
79	打製石斧	ほぼ完形	84	45	12	58.5	安山岩	
80	打製石斧	ほぼ完形	72	46	12	65.0	安山岩	
81	打製石斧	刃部欠損	55	51	14	49.9	紫麻輝石普通輝石 安山岩	
82	石鎌?	上部欠損	70	91	23	157.5	安山岩	

24区3号採石遺構 遺物観察表 (石器)

図版番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
1	-	-	255	154	27	996.7	安山岩	

上原 IV 遺跡

第3章 上原IV遺跡

第1節 調査に至る経緯と経過

ハッ場ダム建設事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、建設省関東地方建設局(現 国土交通省関東地方整備局)と群馬県教育委員会、長野県教育委員会、吾妻町教育委員会が協議し、平成6年3月18日「ハッ場ダム建設事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定書」を、建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の両者で締結し、発掘調査事業の実施計画が決定された。同年4月1日、関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で発掘調査受託契約を締結し、同日同教育長と群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の両者で発掘調査委託契約が締結され、調査が開始された。

上原IV遺跡の調査は、周知の遺跡(長野原町遺跡台帳44)であることから、平成15年度工事予定とする林地区内町道拡幅工事に際して調査対象となった。具体的には、平成15年3月19日のハッ場ダム関連調整会議の席上、はじめて調査予定対象地として協議されている。当初は東西道路部分(上原II遺跡)も予定となっていたが、協議の過程で西端S字部分を先行調査することとなり、同年7月8日ハッ場ダム関連調整会議席上、8月1日調査着手予定が決定された。

第2節 調査の方法

調査区は3カ所に分かれており、すべて中グリッド名で84区に含まれるため、便宜上北側山手より上・中・下調査区と呼称し、遺構名については中グリッド単位の原則に基づき付番を行った。表土採集遺物に関しては、中グリッド使用による混乱を避けるため、上・中・下調査区を冠して管理することとした。

表土掘削は、掘削機(バックホー)によって行った。

堅穴住居跡・土坑などの調査は、埋没土層堆積状

日誌抄録

平成15年

8. 4 表土掘削開始
- 5 下調査区遺構確認着手
- 6 前日の大雨により、中調査区冠水
水抜き及び雨水流入防止作業
- 7 上調査区1号住居跡調査開始
- 8 台風対策(週末大雨)
- 11 斉藤課長台風後の現場視察来跡
- 18 上調査区1号列石遺構調査開始
- 25 ハイライザーによる全景写真
- 26 中調査区盛土層掘削開始
- 29 中調査区溝群調査開始
9. 9 中調査区旧河道調査開始
- 11 調査終了
- 16 埋め戻し

況の観察用ベルトを任意に設定し、ジョレン・移植ゴテほかに掘削を行うとともに、遺構断面(縮尺1/20) 測量および写真撮影を行った。

遺構平面測量にあたっては、業者委託によるデジタル平板測量を基本として、任意に縮尺1/10、1/20、1/40、1/100を選択して行った。

記録写真の撮影には、基本的に6×7、35mmのモノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用した。

縄文時代晩期・弥生時代包含層遺物については、

稀少な遺物であるという判断から、可能な限り出土位置を平面実測し、出土地点観測に努めた。なお、出土位置を実測しなかった包含層遺物についても、将来的な分布範囲の地点的な集約を想定して、4mグリッドごとに分別した。

中調査区では、水田下盛土層に縄文時代晩期の遺物が混入することから、便宜的に4mグリッドごとに分別取り上げを行った。下層に埋設していた旧河道については、水中ポンプを随時使用して湧水処理を行った。掘削は巨礫を混入する砂礫となるため、掘削機で大部分を掘削して、最終的な遺構面の検出作業のみ人力とした。なお、木器出土が比較的多か

ったため、濡れタオル等を使用して、随時乾燥に備えながら、調査を行った。

中調査区北半分は、旧建物敷地と通路及び斜面となるため、T P 1・T P 2を設定して遺構確認を行った。T P 1は斜面であり遺構は発見されなかった。T P 2は旧作業小屋敷地であり、IV b層まで削平されていることが判明した。

下調査区は薬師堂に隣接する物置であったため、旧時の遺構を精査したが、近世遺物が採集されたのみであった。なお、T P 3を設定して下層観察を試みたが、基盤層であるVI層が露呈されており、人力による掘削は困難で、深度0.5mで作業終了した。

第3節 調査区の設定

国家座標(2002.4改正以前の日本測地系を使用)に基づく。長野原町域を含め、八ッ場ダム関連の建設事業に及ぶ吾妻町大戸付近に至る範囲に方眼がすでに設定されている。全体的な設定状況については、群埋文2002『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』に詳述されているため、参照願いたい。

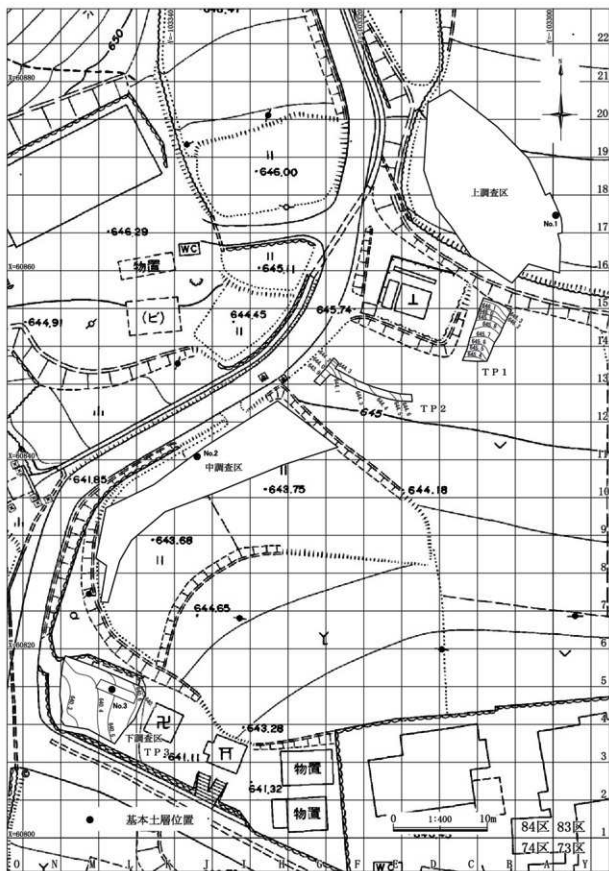
1km方眼をもとに地区(大グリッド)が設定され、本遺跡はNo27地区に所在する。グリッドの設定は、日本平面直角座標第IX系を使用しており、方眼の原点は南東隅にあたる東吾妻町大柏木付近の座標値 $X = +58000.0$ 、 $Y = -97000.0$ の地点である。大グリッドはこの地点から北西に向い60区画が設定されている。さらに100m方眼をもとに、区(中グリッド)が設定される。

グリッドの最小単位として、4m方眼によるグリッド設定がある。A-1-Y-25。100m方眼の中の

中グリッド内を4m方眼で625区画に分割する。グリッドの番号はX軸にアルファベット、Y軸に算用数字を用いる。X軸は東から西へA-Yまで、Y軸は南から北へ1-25までの番号を付す。グリッドの呼称は、南東隅のグリッド番号を使用し、中グリッド名たとえば84区などを冠して呼称した。

八ッ場ダム関連埋蔵文化財調査では、別に便宜的な遺跡略称を設けており、本遺跡は4:林地区にあることから、YD4-13が付番されている。

通例、八ッ場地区調査では中グリッド名を優先して、遺構名及び遺物を把握し遺物注記を行う。しかし、本遺跡では3つに分かれた調査区がすべて同一の中グリッドに属し、立地や遺構の性格も異なるため、調査時の便宜的呼称である上・中・下調査区を存続して、補助的に使用することとした。



第36図 調査区設定図 (No.27区)

第4節 遺跡の立地と基本土層

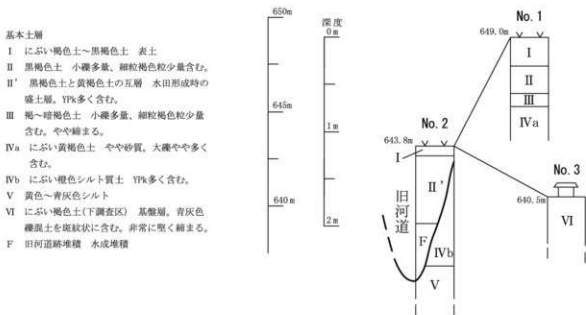
本遺跡は吾妻川左岸、林集落の載る扇状地地形の西側扇端部に位置し、集落では西組と呼ばれる屋敷地である。西方は小谷地を挟んで王城山に連なる山岳部となる。西側谷地を流れる押手沢川は水量も多く、旧時に扇状地地形を形成した流路の一つである。地形的に表流水が集まるため、増水による氾濫もあり、流域は県砂防指定区域となっている。また、流路は中調査区附近で西に折れ、下調査区が大地の突端となって、以南は水田耕作に利用される低地となっている。この低地は押手沢川旧流路に形成された埋没谷である。この流水が、現在は水田を満たす用水にもなっている。

調査地は傾斜に沿って南北S字形に分布する。標高は約640～649mである。基本土層観測地点は第36図に示してある。

上調査区は、斜面であることから黒色土が比較的厚く堆積する。大小礫を包含するのは、背後に山岳部を持つためであろう。IVa層はにぶい黄褐色を呈し、やや砂質であるのは、扇状地地形による表流水の影響であろうか。固く締まっており、人力による

掘削を寄せ付けない。Ⅲ層との層境あたりから大～巨礫が増えてくる。

中調査区は調査前水田耕地であったことから、良好な遺構の遺存が期待されたが、著しい地形変化が判明した。調査区の西半分は近時の造成によって平坦にされたものであり、元來は押手沢川の旧流路に運ばれてきた砂礫によって埋没した斜面であった。その後、おそらく周辺の土を削平して盛土され水田の床土が形成されたようである。したがって、元來の縁辺部であった東半分もIVb層まで削平され、黒色土内に形成された遺構は消滅していた。IVb層はYPkを含むがシルト質で、ロームとしても二次堆積に近い様相である。旧河道の河床面は黄色～青灰色シルトであり、基盤層が押手沢川の流路変更によって削り込まれた結果であることが判明した。



第37図 基本土層図



第38図 全体図 (上調査区)

第5節 検出された遺構と遺物

遺跡の概要

上調査区(第38図) III～IV層上面を確認面とする1面調査である。遺構の主体は縄文時代後期であり、竪穴住居跡4軒が重複し、更に重なって列石遺構・配石遺構や土坑6基ほかが検出された。1号住居跡周辺では、縄文晩期から弥生時代の遺物がやや多く出土した。整理段階で帰属する遺構の把握を目指したが、該当するものがなく、遺構外出土遺物として掲載した。

遺構確認面が浅い北壁近くでは、1号竪穴状遺構とピット4基、及び焼土遺構1基が発見されたが、出土遺物がなく、時期不明として扱った。

中調査区(第60図) 現耕作水田の床土として造成した盛土層が厚く堆積しており、その下層から溝5条、更に下層で旧河道跡を検出した。旧河道跡は出土遺物から中世以降に埋没したと考えられる。近世の溝から木器が多く出土している。

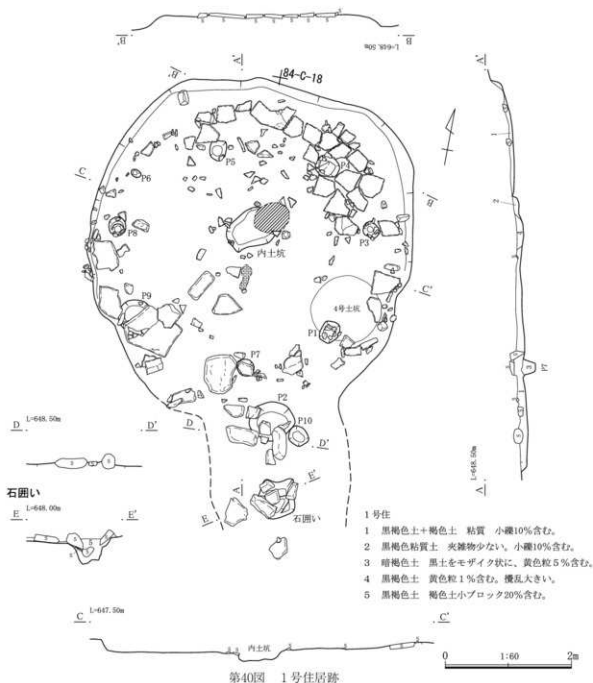
第1項 縄文時代(上調査区)

1. 竪穴住居跡

1号住居跡(第39～41図、第42・43図、P.L.25・26・45・46)



第39図 1号住居跡遺物出土状態



第40図 1号住居跡

位置 84-B・C-16・17グリッド

重複 1号列石遺構より前出か並存、2・3号住居跡より後出。

形態 柄杓形敷石住居

主軸方位 N-18°-W

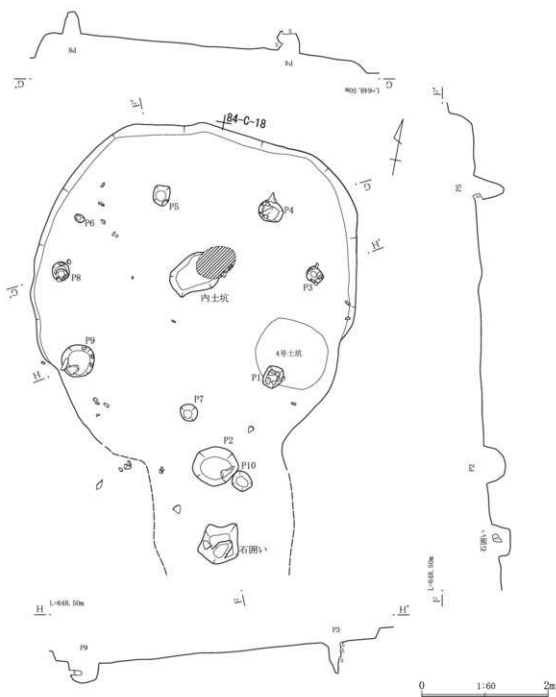
規模 長軸5.35+1.85(柄)=7.2m 短軸5.12m

壁 東壁17cm、西壁28cm、南壁14cm、北壁28cm

炉 未検出。中央部やや南よりの床面に滲んだ焼土が確認されたが、掘り込みはなかった。

内部施設 内土坑：中央部に位置し、炉を想定した

が焼土は含まれていない。断面観察から、後出の可能性もある。長軸(69cm)短軸61cm深さ27cm。石囲い：柄杓部分で検出。覆土が浅いため、攪乱を受ける。長軸69cm 短軸65cm 深さ40cm。ピット10基を検出した。P1やP3など、柱の周りに石を充填した様相のものが見られる。ピットの規模(長径・短径・深さcm) P1:114、104、33、P2:72、60、30、P3:27、24、46、P4:39、35、33、P5:30、25、46、P6:16、11、15、P7:30、25、26、P8:30、



第41図 1号住居跡掘り方

27、38、P9：53、50、32、P10：32、31、17

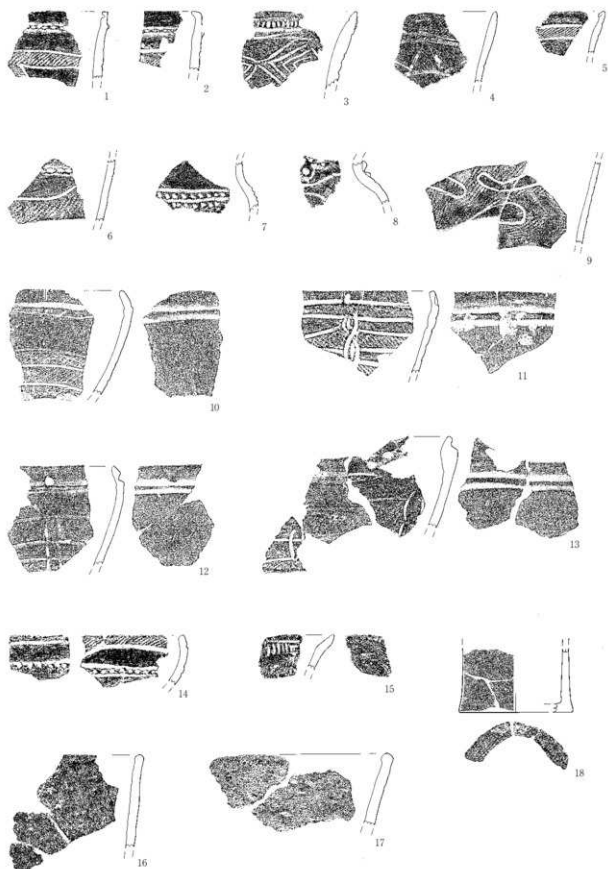
床 まばらながら平石により敷石が施される。敷石表面に黒斑が目立ち、被熱の可能性あり。

掘り方 北壁際で5～10cm確認できるが、全体として明確でない。

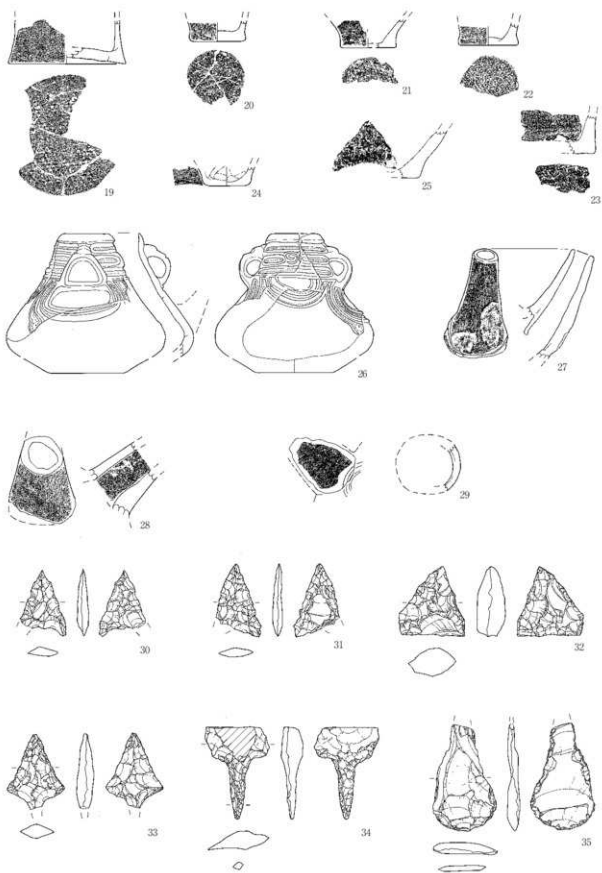
埋没状況 調査当初、北東角付近で出土した大礫を、住居廃絶後の混入礫として、記録を残さず除去して

しまった。調査経過からみて、それらは1号列石遺構からの崩落であろう。ただし、それらも住居の中心軸までは達しておらず、1号列石遺構が後出と確定するには至らない。

表土は厚いが、埋没土の黒みは強く、敷石を確認して初めて住居と認識できたため、埋没状況の観察はできていない。 **遺物出土状態** 破片遺物が多い。



第42図 1号住居跡出土遺物(1)



第43图 1号住居跡出土遺物(2)

2号住居跡 (第44・45図、第47図、P L27・28・46)

1号列石遺構の南側約1.5m離れて大きな平石が3枚敷かれており、周辺のピットの分布も加味して住居と認定した。単独の配石遺構とするには平石以外の石が少なかった。

位置 84-A・B-16・17グリッド

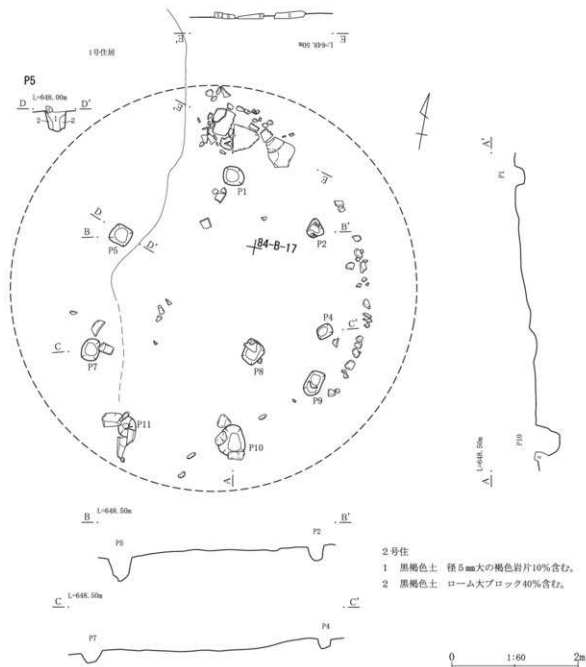
重複 1号住居跡・1号列石遺構より前出。

主軸方位 不明 **規模** 推定径6.4m

壁 不明 **炉** なし

内部施設 ピット11基を検出した。**ピットの規模** (長径・短径・深さcm) P1:32, 29, 15, P2:31, 26, 25, P4:25, 20, 15, P5:37, 36, 30, P7:35, 30, 20, P8:37, 31, 21, P9:40, 26, 33, P10:54, 42, 27, P11:34, 28, 73

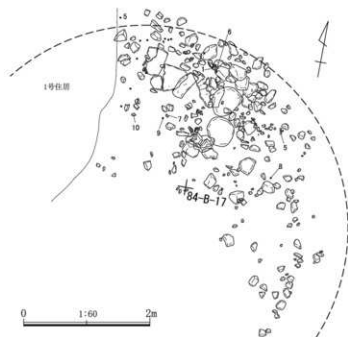
床 P1北側に敷石3枚、中央部やP11で平石が散在するが、床面は明確でない。



第44図 2号住居跡

2号住

- 1 黒褐色土 径5mm大の褐色碎片10%含む。
- 2 黒褐色土 ローム大ブロック40%含む。



第45図 2号住居跡遺物出土状態

3号住居跡 (第46図、第48・49図、P L 28・29・46・47)

1号列石遺構の北側約1m離れて細長い平石が敷かれており、周辺のピットの分布も加味して住居と認定した。遺物が一部に集中するなど、住居の認定に疑問が残るが、中央部に炉の痕跡もあるため、住居として扱った。

位置 84-A・B-16・17グリッド

重複 1号列石遺構より前出。 **主軸方位** 不明

規模 推定径7.5m **壁** 不明

炉 石圓いもないが、比較的明瞭な焼土が掘り込んだ底面にみられる。17号ピットに壊されており、遺存状態は悪い。長軸(64cm)短軸52cm深さ20cm。**内部施設** ピット19基を検出した。P15はやや規模が大きく、柄鏡形住居の付け根部に散見されるいわゆる対ピットを思わせる。**ピットの規模**(長径・短径・深さcm) P1:44, 20, 10, P2:39, 34, 18, P3:31, 25, 25, P4:48, 46, 45, P5:47, 37, 25, P6:36.5, 33, 58, P7:22, 21, 24, P8:25.5, 23, 21, P9:22, 21, 11, P10:47, 46, 38, P11:55.5, 51.5, 49, P12:35, 22.5, 34, P13:30, 28, 15, P14:28, 26, 12, P15:64, 56, 35,

掘り方 三角形の平石から北に約70cm離れて深さ5cm程の掘り方が断面で認められたが、平面的には図化できなかった。

埋没状況 不明

遺物出土状態 破片遺物が多い。後出する1号列石遺構の遺物である可能性残る。1号列石遺構の南側にはほぼ並行するが、カーブの強い小礫列があり、位置関係から本遺構の輪郭に配された群葬と考えられる。

P16:57, 54, 93, P17:32, 22.5, 10, P18:32.5, 23, 35, P19:27, 24, 13,

床 北西隅の敷石以外不明。 **埋没状況** 不明

遺物出土状態 敷石周辺に偏在する。住居の認定を含めて疑問を残す。P6中層から石棒(12)、P16底面近くで完形のミニチュア土器(5)が出土する。

4号住居跡 (第51図、第50図、P L 30・47)

調査区東壁に沿ってわずかに検出され、大部分は調査区域外に残る。輪郭に沿って丸い川原石の小石4つがカーブをなし、内側に平石2つが並び、範囲を推定した。

位置 83-Y-17, 84-A-17グリッド

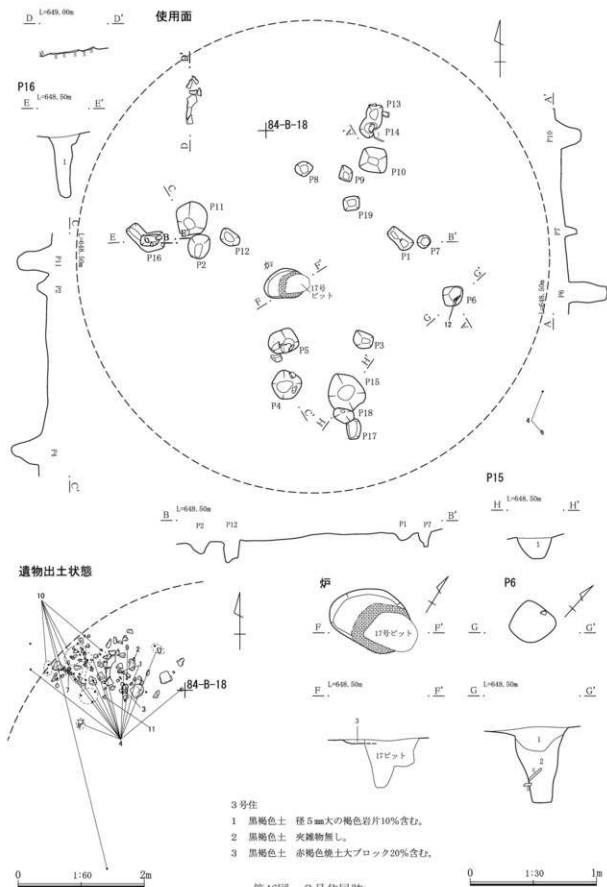
重複 なし **主軸方位** 不明

検出規模 長軸(4.45m)短軸(0.73m)

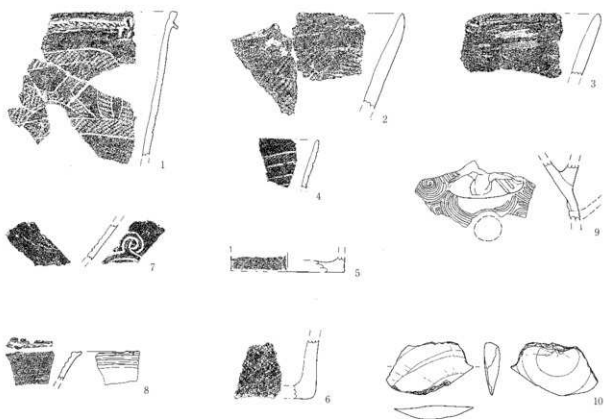
壁 北壁約20cm **炉** 未検出

内部施設 ピット2基を検出した。 **ピットの規模**(長径・短径・深さcm) P1:42, 37, 24, P2:38, 37, 50

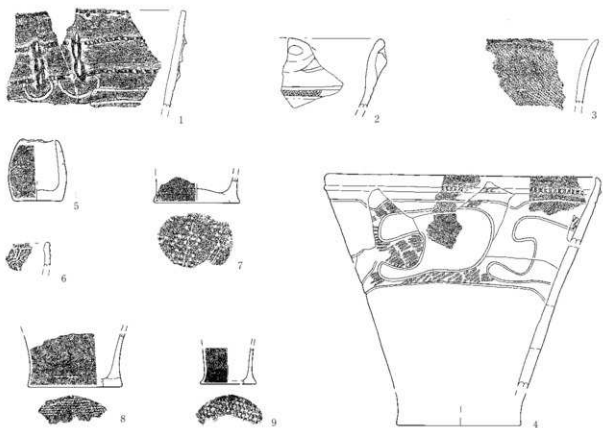
床 不明 **埋没状況** 埋没土の黒みが強く、土層観察困難により不明。 **遺物出土状態** 輪郭に沿って小礫が廻っており、完形のミニチュア土器(4)が横転して出土した。



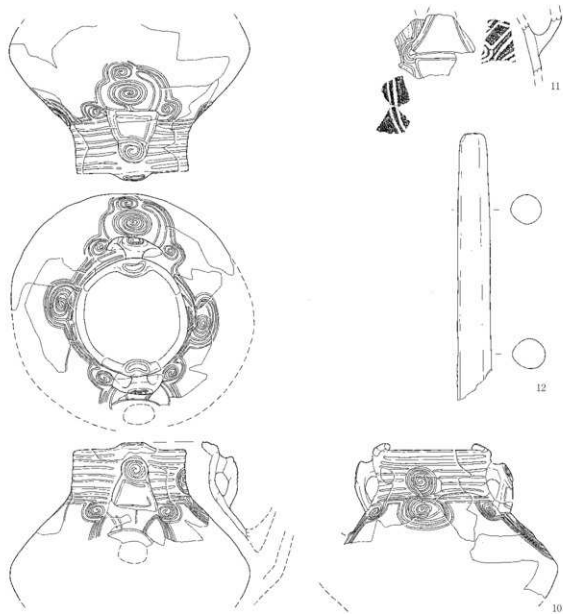
第46図 3号住居跡



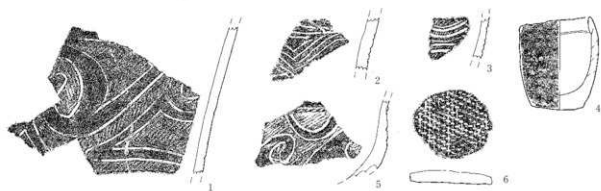
第47图 2号住居跡出土遺物



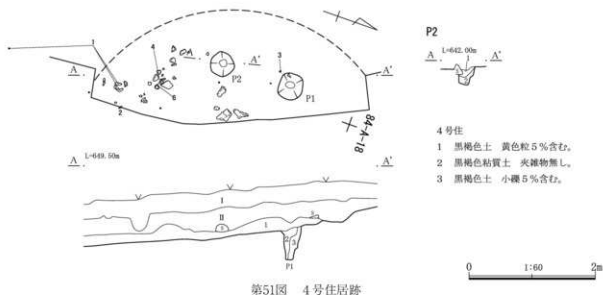
第48图 3号住居跡出土遺物(1)



第49図 3号住居跡出土遺物(2)



第50図 4号住居跡出土遺物



第51図 4号住居跡

2. 土坑・ピット

出土遺物がないが、埋没土や確認層位から縄文時代の所産として扱う。

1号土坑（第52図、P L31）B-18・19グリッド。上下面ともやや整った楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は、長辺137cm、短辺122cm、深さ29cmである。

2号土坑（第52図、P L31）A-18グリッド。東側約半分は調査区域外に含まれる。平面形態不明。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は、長辺175cm、短辺100cm、深さ30cmである。

3号土坑（第52図、P L31）A・B-18グリッド。上下面ともやや整った楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は、長辺140cm、短辺129cm、深さ60cmである。

4号土坑（第52図、P L31）B-17グリッド。1号住居跡より後出。上下面ともほぼ円形。壁は丸みを持って斜めに立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は、長辺115cm、短辺104cm、深さ25cmである。1号住居跡の敷石面を壊して構築されており、平石が一部立ちあがるが、意図的なものか判断できない。出土遺物は1号住居からの混入と判断される。

6号土坑（第52図、P L31・32）B-18グリッド。上下面とも楕円形。壁は斜めに立ち上がる。底面は丸みを持つ。規模は、長辺60cm、短辺40cm、深さ12

cmである。大中礫の混入多い。

7号土坑（第52図、P L32）C-18グリッド。上下面とも不整楕円形。西壁は緩やかに、東壁はやや垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦。規模は、長辺110cm、短辺100cm、深さ34cmである。

1号ピット（第52図、P L34）A-16グリッド。規模は、長辺23.5cm、短辺23cm、深さ18cmである。2号配石遺構最下面で確認され、前出する別遺構と判断した。

2号ピット（第52図、P L34）A-16グリッド。規模は、長辺29cm、短辺29cm、深さ14cmである。

10号ピット（第52図、P L34）B-17・18グリッド。規模は、長辺33.5cm、短辺31cm、深さ23cmである。

17号ピット（第52図）A-17グリッド。3号住居跡炉より後出する。規模は、長辺41cm、短辺29cm、深さ13cmである。

19号ピット（第52図）A-17グリッド。規模は、長辺72cm、短辺66cm、深さ23cmである。

3. 列石遺構・配石遺構・集石遺構・焼土遺構

1号列石遺構 (第53図、第54・57図、P.L.32～34・48、口絵2)

A・B-16～18グリッド。2・3号住居跡より後出で、1号住居跡より後出か並存する。1・2号配石遺構が南端に付加される。北端部は幅1～1.5m程度石が集まっており、第1面として図化を行った。人頭大の山石が25個前後並び、北西端は2列気味になり、第2面とした。規模は、長さ9.35m、幅76cmである。人頭大山石は一段であり、掘り方面より浮いているものも見られる。列石の下位は、溝状に掘り込まれており、掘り方として図化した。深さは7～10cmである。出土遺物はやや多いが、石に混入する感じで、使用状態を示すものではない。

1号配石遺構 (第55図、第57図、P.L.34・35・48)

A-16グリッド。1号列石遺構の石列に派生する形で東側を人頭大の石列で囲む。長円形。規模は、長軸1.55m短軸1.03mである。内側は土坑状の掘り込みはなく、石の下端を底面としてとらえた。東壁中央付近では、長さ20cm幅10cm程度の焼土が滲んだ状態で確認された。西壁近くには上端部を欠く深鉢(1)が、正置されて見つかった。掘り込みは不明だが、底面に埋め込まれた様子である。出土遺物は少ない。

2号配石遺構 (第55図、第58図、P.L.34～36・49)

83-Y-16、A-16グリッド。1号配石遺構の東壁を共有する形で、楕円形に大中礫の石列で囲む。

規模は、長軸1.54m短軸1.28mである。石は1号配石遺構に比べ厚さが無い。配石の内側を掘削すると、凸凹して地山石が露呈し、掘り込みなどは確認できなかった。遺物もバラバラと散漫に検出された。

1号集石遺構 (第56図、第57図、P.L.36・49)

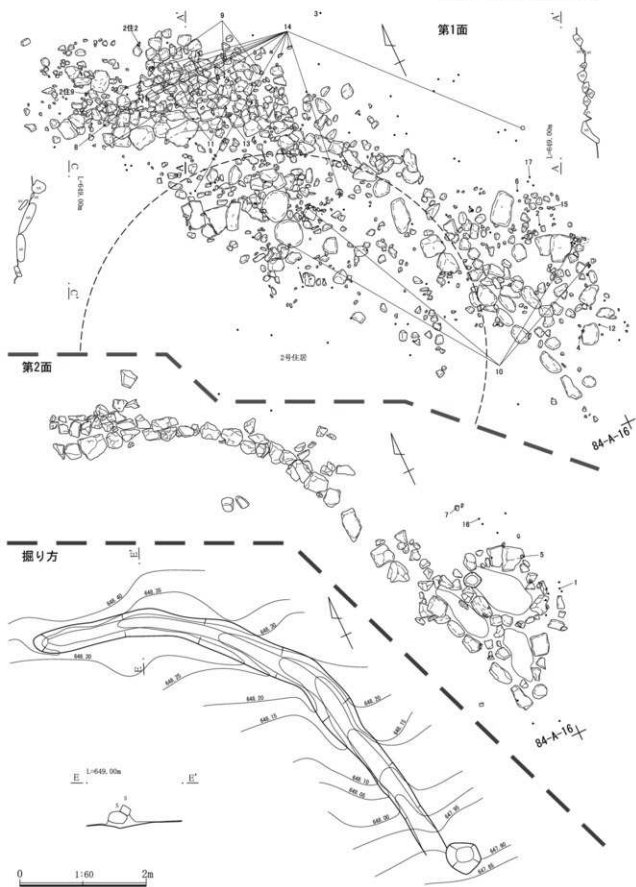
C-17・18グリッド。径50cm大の巨円礫の周りに小礫群がまとまって検出された。規模は、長軸1.92m、短軸1.31mである。断ち割り調査の結果、集石は表面のみであり、IVa層上面で丸みを持つが、地形的な傾斜変換点でもあるため、疑問が残る。遺物は石に混入して深鉢(1)などが出土した。

2号焼土遺構 (第59図、P.L.36)

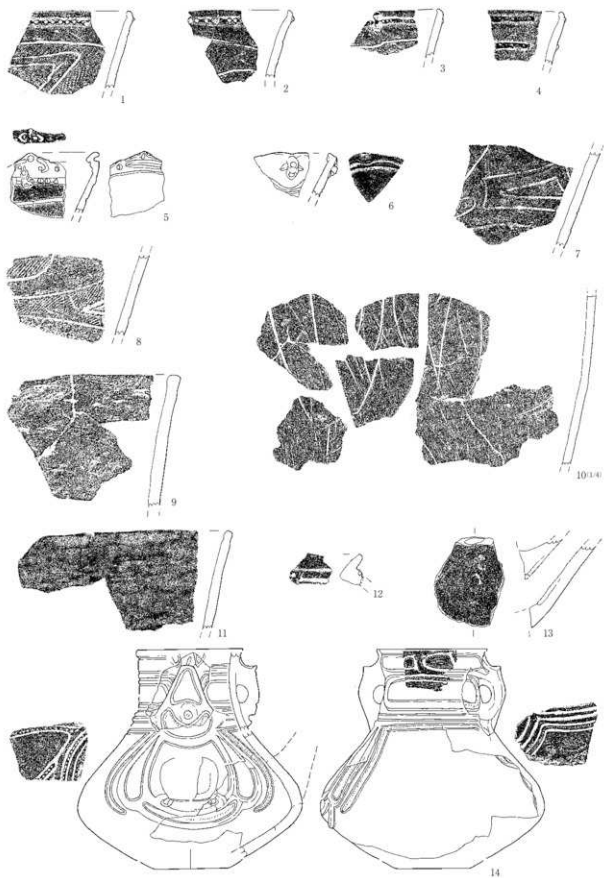
C-17グリッド。1号住居跡より後出で、埋没後構築される。焼けの悪い焼土であり、黄褐色を呈する。規模は、長辺43cm、短辺42cm、深さ4cmである。出土遺物はない。

3号焼土遺構 (第59図、P.L.36・37)

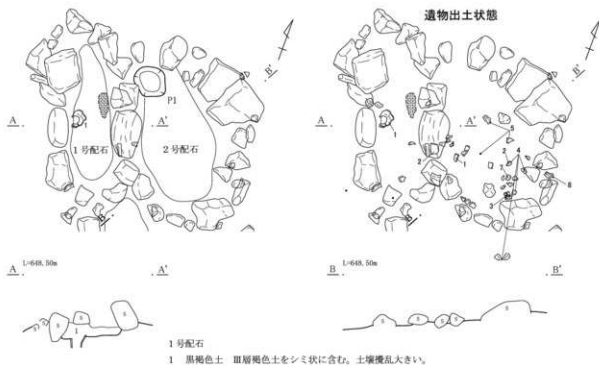
A-16グリッド。2・3号住居跡のビットよりも前出であり、遺存状態は悪い。確認段階で地山礫が露呈する隙間に焼土混土が確認できた。規模は、長辺61cm、短辺52cmである。掘り込み面もわずかであり、全容は不明である。掘り込み深度6cm。2号住居跡の炉が未検出のため、その炉に充てたいところであるが、東に寄りすぎており、ビットとの位置関係からも別遺構とした。出土遺物はない。



第531図 1号列石遺構



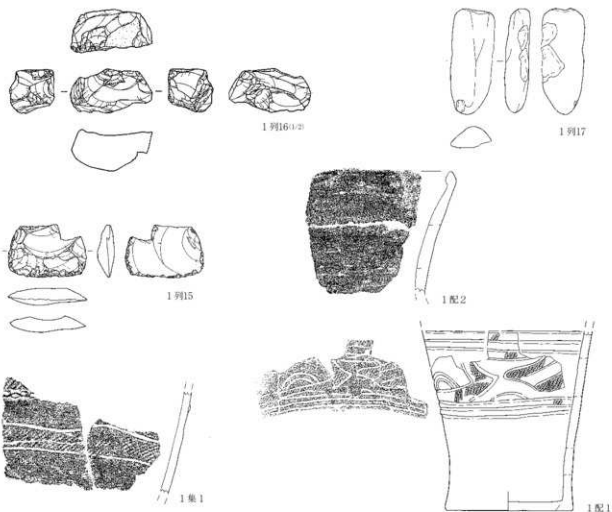
第54图 1号列石遺構出土遺物



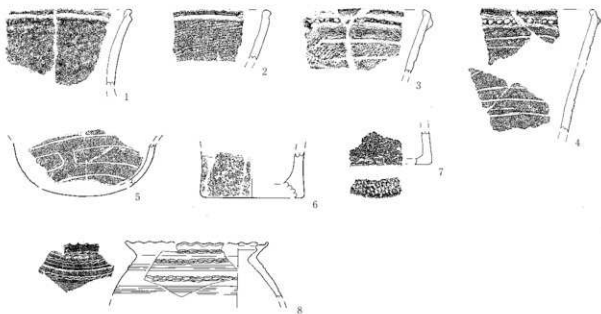
第55図 1・2号配石遺構



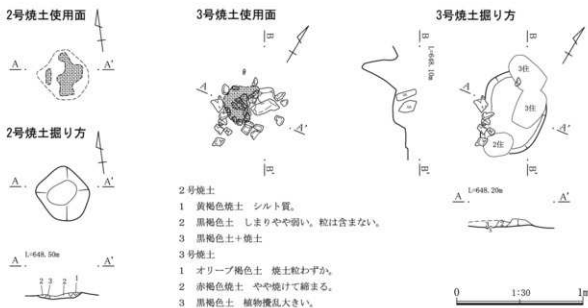
第56図 1号集石遺構



第57図 1号列石・1号配石・1号集石遺構出土遺物



第58図 2号配石遺構出土遺物



第59図 2・3号焼土遺構

第2項 中世～近世 (中調査区)

1. 溝

溝は5条あるが、1号溝は台地平坦面を掘削しており、2～5号溝は旧河道が埋没してできた斜面上位に造られており、同じような意図を持った一連の遺構であろう。

1号溝 (第61図、P.L37)

G-11グリッド。規模は、長さ3.2m、幅20～34cm、深さ4～6cmである。IVb層を掘り込む。遺構全体を盛土層Ⅱ'が埋める。等高線に平行であり、水路の底面を思わせる。出土遺物はない。造成時の削平により上半部を消失したものと考える。

2号溝 (第61図、第64図、P.L37・38・40)

G・H-11・12グリッド。IVb層の縁辺に沿って弓なりに走向する。規模は、長さ5.82m、幅65～118cm、深さ31～51cmである。埋没土中に流水痕跡を示す砂礫層も見られるが、概して泥炭質の黒色土で埋まっており、低湿状態のまま埋没したものと推測される。土層観察から一度掘り直されていると見られる。4号溝に合流し一体として機能したかもしれない。北壁部は大礫で埋まるが、水田造成時の人為的な投棄と判断する。陶磁器(1・2)を伴う。

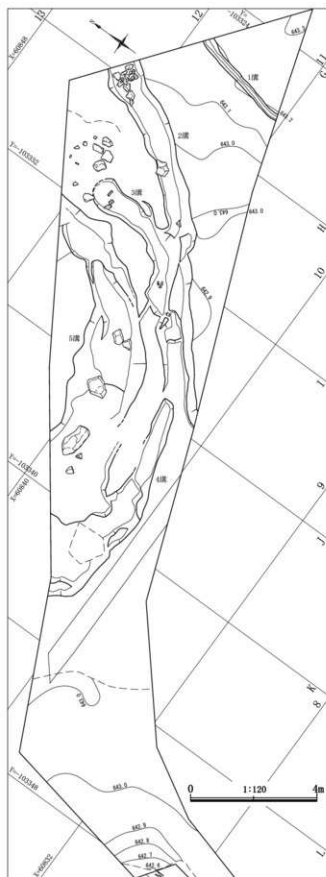
3号溝 (第62図、第65図、P.L37・38・49)

H・I-10・11グリッド。2号溝と重複する形で、弓なりに走向する。規模は、長さ4.82m、幅54～97cm、深さ9～31cmである。埋没土は砂礫の度合いが多いため、常時流水があったことを思わせる。4号溝よりも一段高く、5号溝へ合流する様子もある。遺物は2号溝と重複する部分に集中が見られる。この部分は強くクランクする部分でもあるため、とどまった可能性が高い。すり鉢(1)は摩滅少なく、近辺からの混入か。埋没年次を示すとすれば、17世紀と思われる。

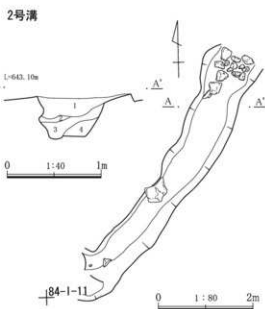
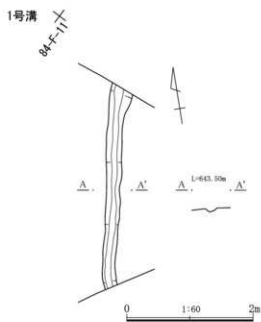
4号溝 (第62図、第66図、P.L37～39・49)

I・J・K-10グリッド。3号溝延長上に走向し、一段下がる。規模は、長さ9.36m、幅55～180cm、深さ24～62cmである。埋没土は砂礫の度合いが多いため、常時流水があったことを思わせる。土層観察から一度掘り直されていると見られる。遺物では雁首(2)などがある。出土地点は台地が西に張り出して、溝が強くクランクする部分であるため、とどまった可能性が高い。

5号溝 (第62図、第67・68図、P.L38・39・49)



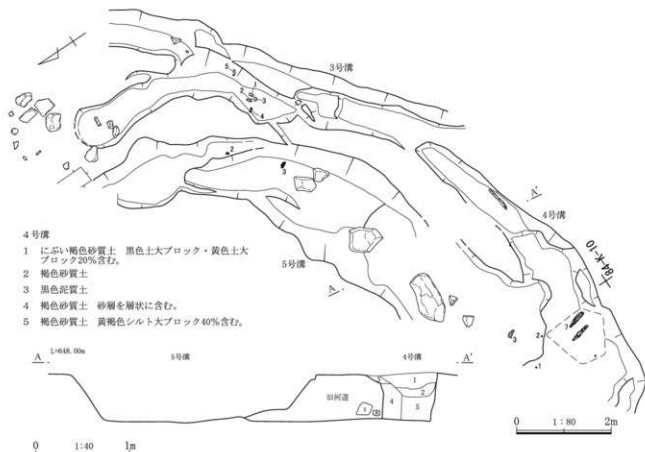
第60図 全体図 (中調査区)



2号溝

- 1 暗褐色粘質土 泥炭質。腐食に富み、砂含む。
- 2 褐色砂礫
- 3 黒灰色粘質土 砂40%含む。
- 4 黒灰色粘質土 黄灰色シルト粒5%含む。

第61図 1・2号溝



第62図 3・4・5号溝

I・J-10・11グリッド。溝では最も大きく、谷寄りに位置する。規模は、長さ8.84m、幅96~225cm、深さ32~47cmである。黒い砂利で埋まる。埋没土上層から巨礫が多く混入する。流水はあったであろうが、巨礫を運ぶほどではないため、周辺からの投棄であろうか。盛土以前の混入であり、水田造成以前、巨礫を含むⅡ・Ⅲ層が堆積していたことを示すと思われる。遺物は木器が多い。

2. 旧河道

一連の旧河道であろうが、北端で分岐して二筋になっているため、分岐部分を1号河道跡として、本流を2号河道跡と呼称した。実際は同時存在するものであろう。埋没土の大部分は砂礫であり、湧水の

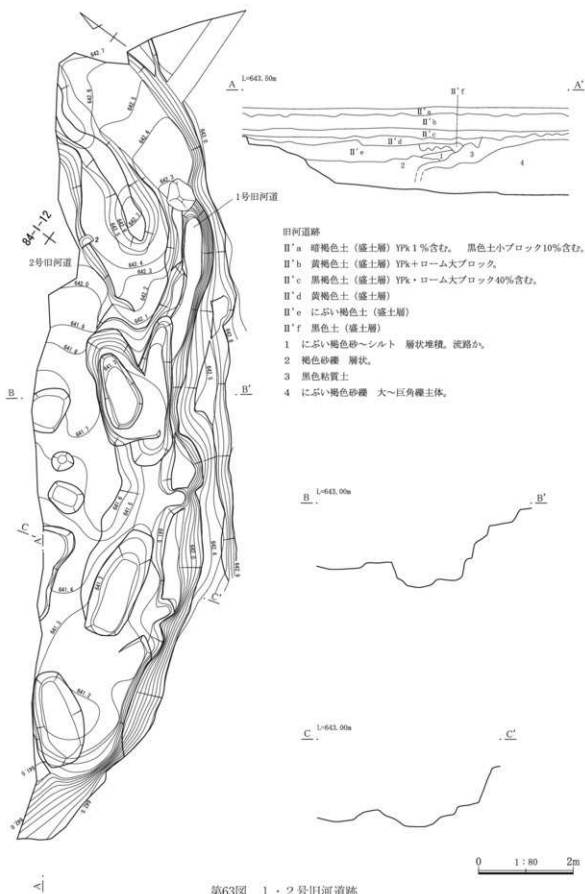
影響もあって人力での掘削は断念し、遺構面の仕上げのみを人力で行った。

1号旧河道跡 (第63図、P L40)

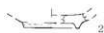
G・H-11・12グリッド。規模は、長さ6.5m、幅3.6m、深さは0.5~1.0mである。途中に巨礫があり、下流側がえぐる。これは流水による浸食作用であろう。

2号旧河道跡 (第63図、第69図、P L40・41・49)

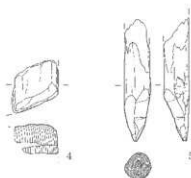
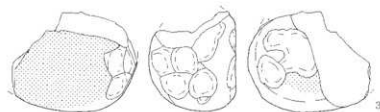
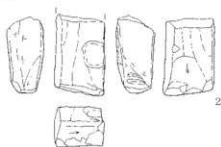
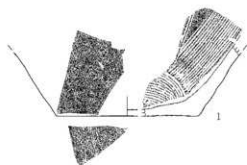
I・J・K-10・11グリッド。規模は、長さ17m、幅3.54~4.06m、深さ最大1.5mである。底面は基盤層であり、流水浸食による落ち込みが点在する。掲載した出土遺物は、すべて埋没砂礫層中である。



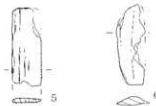
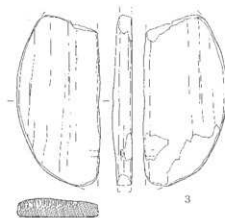
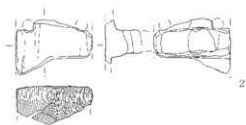
第63図 1・2号旧河道跡



第64図 2号溝出土遺物

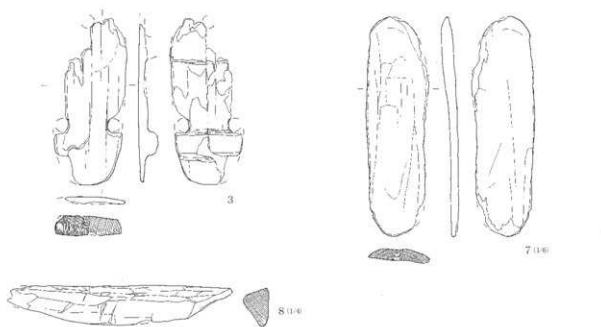


第65図 3号溝出土遺物

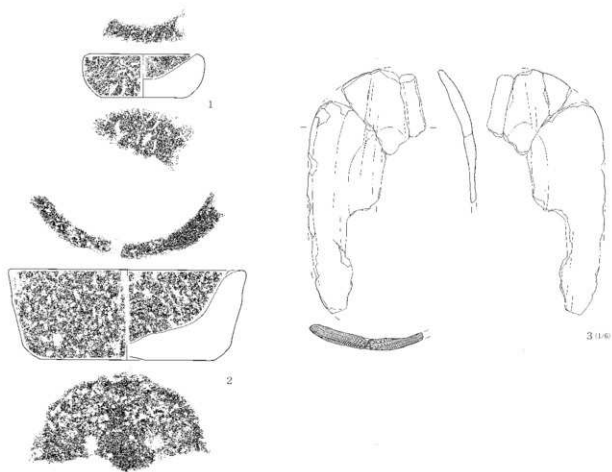


第66図 4号溝出土遺物

第67図 5号溝出土遺物 (1)



第68图 5号溝出土遺物(2)



第69图 2号旧河道跡出土遺物

第3項 時期不明（上調査区）

1. 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（第70図、P.L41・42）

位置 B・C-19・20グリッド

重複 なし 形態 隅丸正方形

主軸方位 N-40°-E

規模 長軸2.84m、短軸2.82m

壁 東辺16~21cm、西辺12~14cm、南辺6~10cm、北辺17~19cm 内部施設 ビット2基を検出した。

P1底面でわずかに焼土がみられる。ビットの規模（長径・短径・深さcm）P1：54、42、15、P2：26、25、28。

床 北西隅を除き平坦だが、硬化面はみられない。北西隅は地山礫が露呈しスロープ状に高まる。西壁近くにも焼土が滲んだ部分がある。西側に近接する1号焼土遺構からの流入も想像される。

埋没状況 調査時所见で人為埋没 出土遺物 なし。

2. ビット

ここで扱う4基のビットは、1号竪穴状遺構の周

圍に鍵の手に分布しており、確証はないが関連が想定されるため、一緒に掲載する。

12号ビット（第70図、P.L42）C-19グリッド。長辺23cm、短辺22cm、深さ18cm。

13号ビット（第70図、P.L42）B-19グリッド。長辺26.5cm、短辺24.5cm、深さ16cm。

14号ビット（第70図、P.L42）C-20グリッド。長辺21.5cm、短辺21.5cm、深さ56cm。

15号ビット（第70図、P.L42）C-20グリッド。長辺18cm、短辺17.5cm、深さ49cm。

3. 焼土遺構

1号焼土遺構（第70図、P.L42・43）C-19・20グリッド。1号竪穴状遺構の西約20cm強と接近しており、関連が想定される。規模は、長辺58cm、短辺48cm、深さ5cmである。焼け色は赤褐色で良好、ほぼ楕円形。北側は縁取り様に暗褐色土に焼けて、グラデーションを呈する。出土遺物 なし。

第4項 遺構外出土遺物（第72~82図、P.L50~54・口絵2）

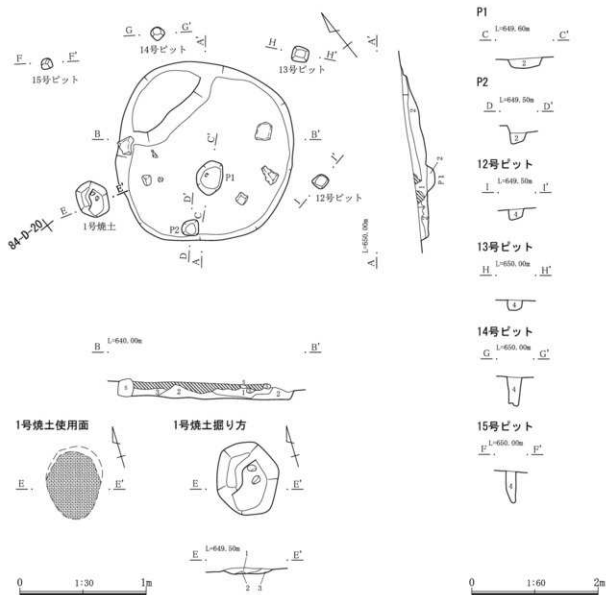
調査面積は狭いが、比較的多時期の出土遺物を見ている。

上調査区では、縄文時代前期・中期遺物もわずかに出土している。同後期堀之内~加曾利B式では、住居跡及び列石遺構に伴って、遺構から別離した遺物が多く分布している。同晩期~弥生時代にかけても1号住居跡を中心に分布が認められるが、明確な遺構を伴わない。結果として、1号住居跡周辺の凹みを利用したか、集積したものと判断して、ここに

掲載することとした。古墳時代後期および平安時代の遺物もあり、周辺に同時期の遺構分布を推測させる。

中調査区では江戸時代には埋没した旧河道跡と溝群があり、そうした遺構の堀属から離れたとみられる中近世遺物をここに掲載した。

なお、遺物の年次比定や形式名など、推定するのは巻末の観察表中に掲載してある。



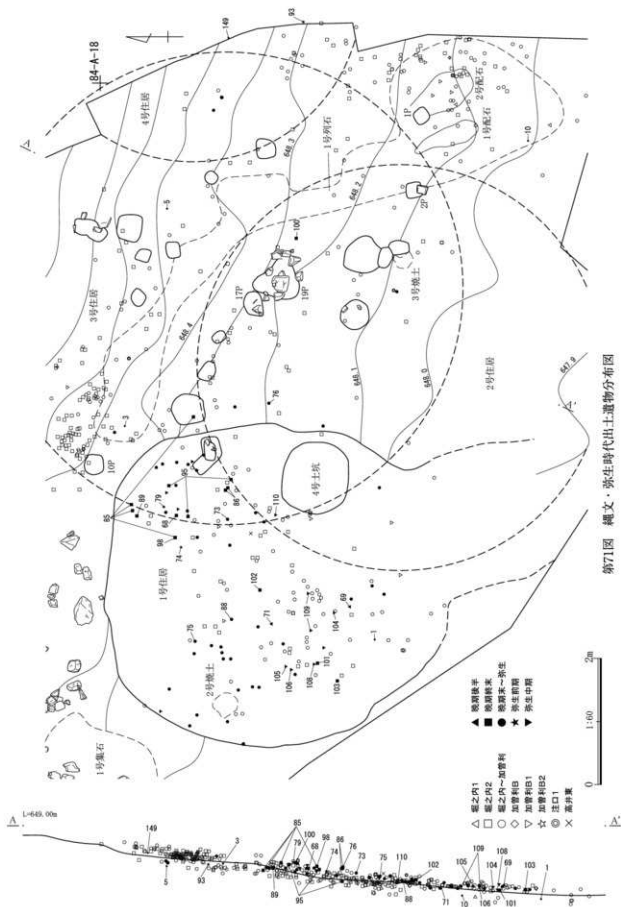
1号堅穴・ピット

- 1 黒褐色土 白色粒5%、小礫5%含む。
- 2 黒褐色土 やや粘質、5mm大黄色岩片10%含む。
- 3 褐色土 微細な白色粒わずか含む。
- 4 黒褐色土 夾雑物少ない。

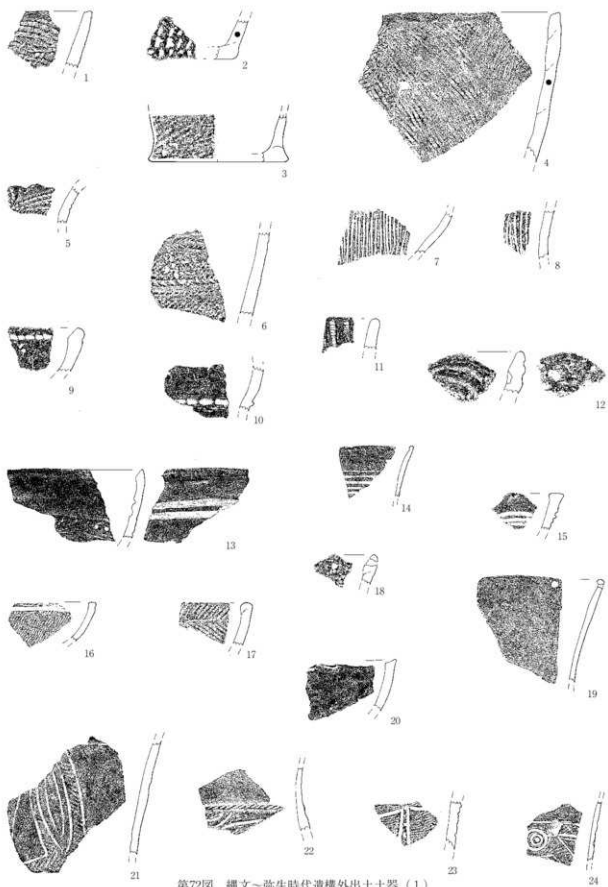
1号焼土

- 1 黄褐色～赤褐色焼土 径5mm大の炭10%含む。根拠乱大きい。
- 2 褐色焼土
- 3 黒褐色土 褐色焼土をシミ状に含む。

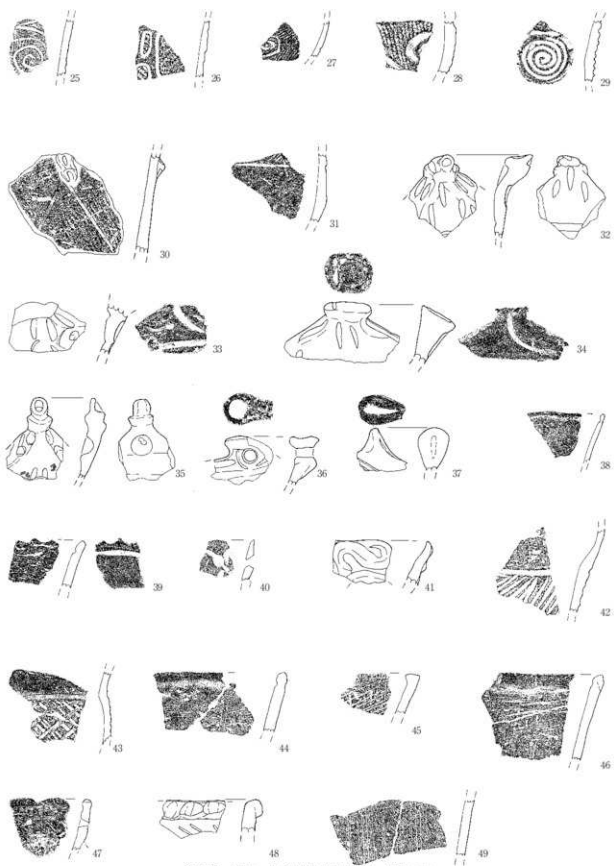
第70図 1号堅穴状遺構・1号焼土遺構・12～15号ピット



第71図 縄文・弥生時代出土遺物分布図



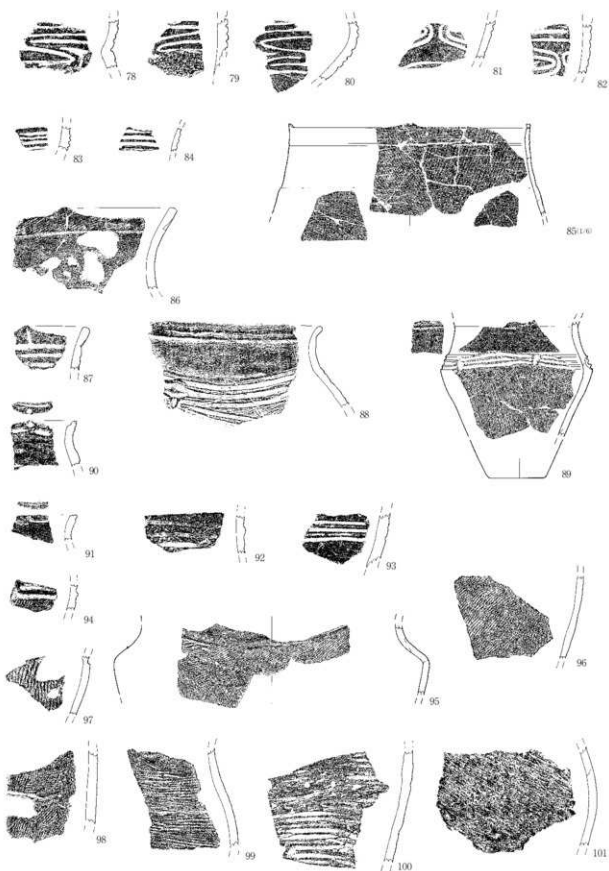
第72図 縄文~弥生時代遺構外出土器(1)



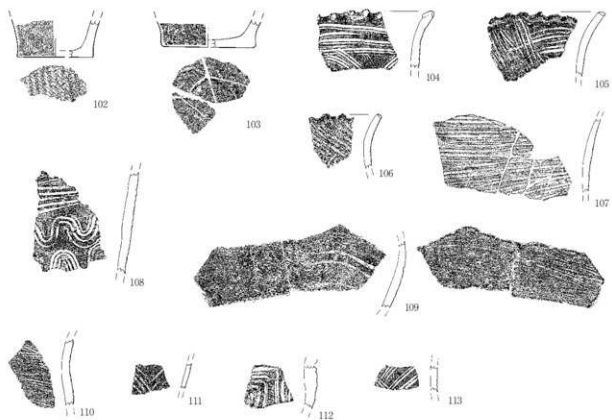
第73図 縄文~弥生時代遺構外出土器(2)



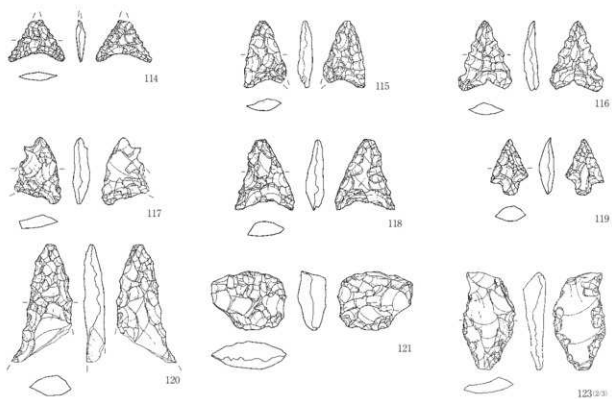
第74図 縄文～弥生時代遺構外出土土器（3）



第75図 縄文～弥生時代遺構外出土土器（4）



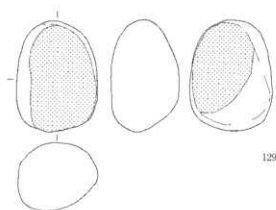
第76図 縄文～弥生時代遺構外出土土器（5）



第77図 縄文～弥生時代遺構外出土石器（1）



第78図 縄文～弥生時代遺構外出土石器（2）



129

第79図 縄文~弥生時代遺構外出土石器(3)



133



134



135



136



137



138

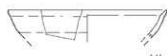


139

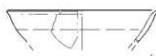


140

第80図 古墳時代遺構外出土土器



141



142



143



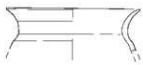
144



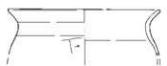
145



146



147



148



149

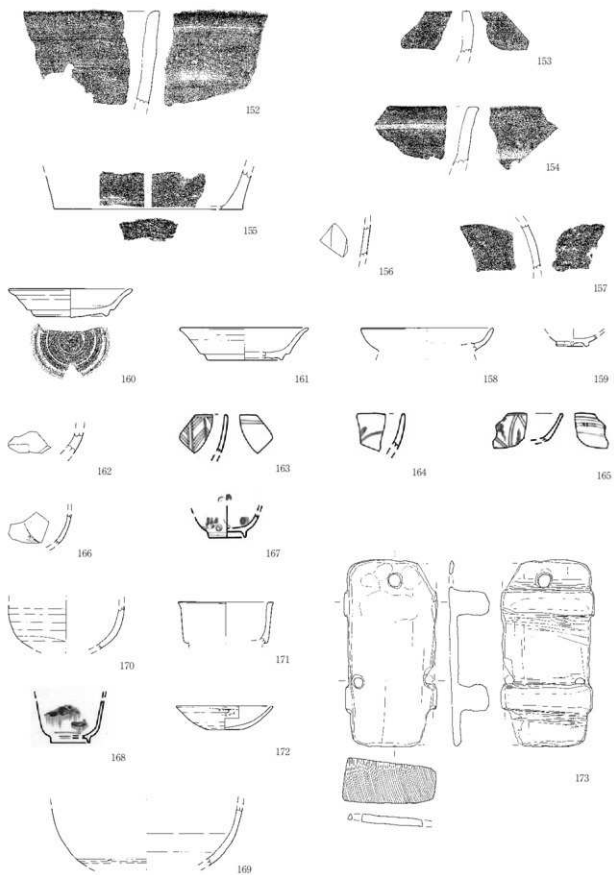


150



151

第81図 平安時代遺構外出土土器



第82図 中近世遺構外出土土器・木器

第6節 まとめ

第1項 遺構

縄文時代 後期では、堀之内2式〜加曾利B2式の堅穴住居跡4軒が見つかり、敷石を持つため、1号住居跡の状況を加味して、すべて柄鏡形ではないかと推測される。1号列石遺構及び1・2号配石遺構は1号堅穴住居跡に並存するか、後出するものの、ほぼ同時期の遺構である。林周辺では南方約100mに位置し、長野原町教育委員会が発掘調査を行った林中原I遺跡IV(★)で、同時期の堅穴住居跡1軒を検出しており、同様な注口土器を含む土器群を伴っている。立地においても、台地の縁辺であり、ほぼ同じ状況にある。おそらく、この台地の西側縁辺には同時期の遺構群が、多く分布するものと推測される。

★「町内遺跡」(長野原町教育委員会2004)で、概要が報告され、平成18年度整理作業中である。同職員富田孝彦氏のご好意により、遺物を実現することができた。

弥生時代 前代晩期終末から当代にかけて、ややまとまった遺物の出土があるが、明確な遺構は見えなかった。周辺でも未だ発見されておらず、遺構分布を解明することが今後の課題であろう。

古墳時代 6世紀前半の土器群を少量検出した。長野原町を含む西吾妻地域では、現在林地区の林宮原II遺跡(★)および下原遺跡(★)で、5世紀末から6

第2項 遺物

土器 第5表 遺構・グリッド別遺物出土数一覧および第83図 土器・石器出土割合図に示したとおり、土器出土総数1495点(近世陶磁器除く)に対して、約80%は堀之内式か加曾利B式、あるいは何れか判別不明のもので、掲載遺物を含めて1202点に及ぶ。これは遺構の状況と、一致するものである。なお、注目されるのは、縄文時代晩期終末から弥生時代中期に及ぶ土器が154点約10%を占めていること

世紀にかかる堅穴住居跡1軒ずつが発見されているだけである。本遺跡は両遺跡より山寄りであり、おそらく周辺に同時期の遺構が点在する傍証となる。

★長野原町教育委員会2004『林宮原II遺跡』
●群像文 2007『下原遺跡II』

平安時代 9世紀第2四半期および前半と、10世紀の2時期で、ややまとまった遺物の出土があるが、明確な遺構は見えなかった。同時期の遺構は八ッ場地域各所で見つかっており、近くでは前掲の林宮原II遺跡でも6軒が発見されている。林地区ではおそらく中核的な集落の存在が推測される。

中世 中調査区2号溝から古瀬戸後期IV古段階卸目付大皿(2溝1)、遺構外遺物では中国製白磁B群小杯(外159)や大窯第3段階丸皿(外158)、大窯1〜3段階天目茶碗(外162)、少量の鍋(外152〜155)が出土した。遺構外遺物も、旧河道や溝群に帰属していた可能性が高い。中世の搬入品としては充実しており、上層階級に属する何らかの遺構を想定させる。南方約200mには、「堀の内」という地名や林城が存在しているが、本遺跡が押手沢川の支流であるため、直接の関連は認めがたい。むしろ、林の烽火台の存在もあり、周辺に同時期の関連遺構の存在を想定しておきたい。北東方向にある朝林寺伝承地の存在も気がかりなところである。

近世 中調査区で、河道跡や溝を検出した。陶磁器のほか、木製品も種類豊富で、下駄も3足分を数える。生活色の豊かな遺物を伴っている。溝出土遺物

で、遺構としては未検出である点が課題である。

縄文時代後期では注口土器が破片も含め10点あるが、注口部分で数えて6個体は存在すると言える。図上復元を行った1号住26、3号住10、1号列石14の3点はいずれも堀之内2式で、丁寧に磨かれた精製土器である。文様は平行沈線や隆帯で渦巻文や同心円文を表出して区画し、尖った工具で細かな刺突を充填施文している。把手は2対であるが、上端が口唇部まで達しないのが特徴である。

第5表 遺構・グリッド別遺物出土数一覧

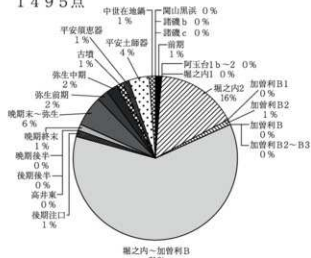
	岡山 県浜	講儀 b	講儀 c	前期 阿玉 台1b -2	中期	堀之 内1	堀之 内2	加曾 利B1	加曾 利B2	加曾 利B	堀之 内2 加曾 利B3	後期 注口	高井 塚	後期 後半	晩期 後半	晩期 終末	晩期 末- 弥生	弥生 前期		
1号住居	1		1	11			80		5		224	1	1							
2号住居							7			2	21	1						4		
3号住居				1			7				1	30	1							
4号住居							5				10							1		
4号土坑											1									
5号土坑											3									
(旧9号土城)							1				1									
1号ピット											1									
2号ピット											2									
17号ピット											1									
1号列石		1			1	1	37				100	5				1	2			
1号配石墓							3				9							1		
2号配石墓						1	7	2			1	29	1							
3号配石墓							1				2						1			
1号集石							2				1									
2号溝											2									
3号溝														1						
4号溝																				
5号溝				1																
A-16グリッド											5							1		
A-17グリッド							4				9									
A-18グリッド							2				3									
B-11グリッド											1									
B-15グリッド							1				3									
B-16グリッド							1		1	1	10						1			
B-17グリッド							1				4									
B-18グリッド											7							1		
C-16グリッド											20						1			
C-17グリッド		1	1				5				7	1								
C-18グリッド		2					15		2		1									
C-19グリッド											1									
D-17グリッド							2				3					1				
D-18グリッド							4				3									
G-10グリッド											1									
G-11グリッド							5				36							1		
G-12グリッド									1		3									
H-10グリッド							3				15									
H-11グリッド							2		1	1	11						1			
H-12グリッド							1				1									
H-17グリッド							1													
H-19グリッド							1				2									
I-10グリッド							2	1	1		17		1							
I-11グリッド	1					1	1		1	1	45			1				2		
I-12グリッド							1	1	1	1	24		2							
J-9グリッド							1		1		2									
J-10グリッド							10				29		1					1		
J-11グリッド							3				7									
K-9グリッド	1						2				22		1	1				3		
K-10グリッド							1	1	1	2	11							1		
L-7グリッド							4		1		7									
L-8グリッド							1				22									
L-9グリッド							2	1	1		1	34						4		
88KV-17グリッド											2									
上調査区表土	2					1	11		1		93			1			1	2		
中調査区表土					1		1	1			14						1	1		
下調査区表土						1												2		
カクラン																				
掘土																				
合計	5	4	2	13	2	0	5	241	7	18	7	5	909	10	6	4	1	11	88	27

第3章 上原IV遺跡

弥生 中期	古墳	平安 須恵 器	平安 土器	中世 高松 陶器	中世 高松 陶器	中世 地蔵 陶器	合計	石 蔵	ド リ ル	ス ク レ イ バ ー	ク サ ビ 形 石 器	割 片 石 器	割 片 石 器	片 其 他	た た き 石	打 茶	磨 茶	石 槌	磨 石	く ほ み 石	礫 石 器	石 棒	合計
22	1						435	4	1					20			1						51
			1				37					1	1	3							1		6
							40							4								1	5
		1					17							2									2
							1							1									1
							3							1									1
							2																0
							1																0
							3																0
							1																0
		1					149			1			7		1			1					10
							13							1									1
							41							1									1
							4																0
							3																0
		1			1		4																0
		1					2								1								1
							0														1		1
							1						1										1
							6						1	3									4
							13							1									1
			1				6							1					1				2
		1					2																0
							4						1	1									2
		1		1			16						2	2									4
							5						2	1									3
							8																0
							0						1										1
			5				33						2	3									5
							27						2	1						1			4
							1																0
							6						1										1
							7																0
							1							2									2
			6		1	49	1	1						3	1								5
							4																0
		1	5			2	26						1	1									2
			1		1	18	1			1	1		8	1						2			14
		1				3	1						4	3			1						9
							1																0
							3																0
			2	3			27						6	9									15
	1	1	10			1	67	1					16	12			2			1			32
1	3	2	1		1		38	1					2					2					3
							4						1										1
4			5				51			1			11	7									19
			1				11			1			10	5									16
2		1	2				35	1					1	2									4
			6				23						11	3									14
			2				14						2										2
3		2	5				33						3	2									5
		1	1				46						5	5									10
							2																0
	1	1	3				117	2					4										6
			3	1	1	3	30						4	1									5
							1																0
							0						1										1
							0						1										1
							0						1										1
32	8	15	63	1	3	8	1496	12	1	4	1	1	137	102	3	1	1	3	1	3	3	1	274

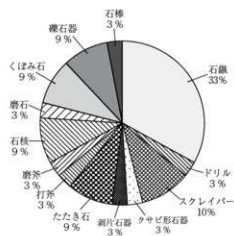
遺跡全体 (土器)

1495点



遺跡全体 (石器)

35点



	遺跡全体	石鏝・ドリル	カサビ形石器・スクレイパー・削片	石鉢	打芥・磨芥	たたき石・磨石・くぼみ石	石杵
柱貫 燧石	5	5					
チャート	1	1					
碧	1			1			
黒曜石	8	5	2	1			
安山岩	2					2	
頁岩	5	1	3		1		
黒色頁岩	1		1				
柱貫 頁岩	1			1			
粗粒輝石安山岩	4					4	
蛇紋岩	1				1		
緑色片岩	1						1
計	30	12	6	3	2	6	1

*掲載遺物のみ

第83図 土器・石器割合図・表

晩期から弥生土器は次項参照。平安時代の羽釜に関しては、掲載遺物2点とも月夜野型に属しているが、吉井型も混在する地域であることが判明してきている(*)。

中世の搬入品では、中国産白磁や古瀬戸後期卸目付皿、瀬戸美濃系大室期天目茶碗・皿が、中調査区から出土した。いずれも旧河道・溝群に由来しており、上流に領主階級遺構の存在を思わせる。在地産土器では、少量だが口縁形のタイプの異なる内耳

鍋が出土しているため、これまでの八幡ダム関連の既報告資料と比較して別述する。

近世遺物は溝出土であるため、限定的な生活資料となるが、遺構の性格上木器・木製品が豊富である。特に食器や容器を思わせる盤型の木器：5号溝7、2号旧河道3や、舟形木製品：5号溝8などが興味深い。また、下駄も3点と豊富なため、県内資料との比較を加え、別述する。下調査区の遺物は、葉師堂隣接地であるが幕末であった。

*群居文 2006「立馬1遺跡」

石器 概ね縄文時代に属すると判断している。ただし、傾向を見るために、第83図では中近世の砥石、石鉢の類は除いてある。出土総数274点中239点は削片であり、製品に限れば35点にすぎない。そのうち掲載点数は30点である。この数量で傾向をみても有効ではなからうが、石鏝が33%を占めるのは、参考となるだろう。

第3項 八ッ場ダム地域における縄文晩期
終末から弥生前期の土器

篠原 正洋

八ッ場ダム建設工事に伴う発掘調査は、平成6年度より開始され、本年度で14年目を迎える。これまでに、当事業団が発掘調査(試掘調査含む)を実施した遺跡総数は43遺跡である。

ここでは、本報告の上原IV遺跡をはじめ、当該期の良好な土器が出土する6遺跡の資料を抽出し、その特徴や系譜、編年の位置付け等について若干の考察を試みてみたい。

1 上原IV遺跡の土器

まず、上原IV遺跡の出土土器を取り扱う。器形、文様、文様描出技法、胎土等の特徴から分類し、編年の位置付けについての検討を加えたい。

変形土器・深鉢形土器 胴部上半、口縁部下に屈曲をもつ器形を変形土器、屈曲がなく口縁に向かって直線的に開く器形を深鉢形土器と便宜上しておく。

A類：85(以下、番号は報告書「第3章・5節・4項遺構外出土遺物」の掲載番号に一致する)は波状口縁の大型の甕。頸部が少し括れ、口縁がやや外反する。波状突起の頂部には、丸い棒状工具の側面により押圧が施され、双耳状の突起に見える。口縁と頸部との境界に沈線を1条廻らせ、頸部側を多少削ることによって複合口縁の効果を作出している。その口縁部には木口によると思われる横位細密条痕文が充填される。頸部には段は見えない。肩部から胴部にも同工具による横位・斜位の細密条痕文が施され、おそらく底部にまで及ぶ。胎土は砂粒やや多くざらつく。口縁部・胴部の地文が条痕文であること等を考慮すれば、荒海式の系譜であろう。荒海2～3式に比定できる。

B類：68は波状口縁の甕である。口縁部には確認できる範囲で3条の細くて浅い平行沈線文が施される。甕にもかかわらず赤色塗彩がなされている。73も波状口縁の甕。口縁部は平らに面取りされ、波状突起頂部には指頭によると考えられる浅

い刻みが施される。口縁部には4条のやや細めの浅い平行沈線文が丁寧さを欠いて、だらだらと廻る。その下位には無文部が確認できるため、頸部無文帯を伴うと思われる。頸部から口縁に向かっての外反の様子は87の甕に似ている。胎土が白く砂っぽい焼きは固い。74の甕は波状口縁の可能性が高い。口縁部は内傾気味に平らに面取りされ、残存する口縁の右端はやや肥厚し右肩上がりに移行している。口縁部には浅めの沈線が3条廻る。各沈線間では等間隔ではなく、平行とはいえない。胎土は砂粒少なく焼きは堅緻である。93は深鉢か。細めで浅い平行沈線文が3条廻る。胎土は砂粒多くざらつく。77は口縁が緩やかに外反する甕である。口縁部は内傾気味に面取りされる。太めの工具で底が丸みを帯びる沈線を3条平行にやや浅めに廻らせた後、その結果できあがった隆起部の角を丸めて浮線効果を作出しているがシャープさは全くない。胎土は砂粒多くざらつく。84は甕あるいは深鉢の口縁部付近であろう。77と同様に底が丸みを帯びる沈線を4条平行に廻らせている。隆起部の角はやや丸みを帯びるが、77ほどの浮線効果は見られない。胎土に砂粒はあまり多くなく、焼きしまっている。90は頸部の括れがやや強く口縁が外反する甕である。口縁部外面には、丸みを帯びた工具で正面から押圧を施し、その左右は横位のナデで面取り。結果、氷1式の口外帯を作出しているように見える。また、口縁部内面には細く浅い沈線が1条廻る。口縁直下には底が丸くて浅い沈線が1条廻る。この沈線は口縁部外面の押圧の直下で意図的に分断されている。頸部無文帯を挟んで、肩部にも底が丸くて浅い沈線文の一部が残る。平行沈線文もしくは変形工字文が展開したのか。頸部には段は作されていない。胎土は砂粒やや多く、焼きしまっている。91は口縁が緩やかに外反する甕である。口縁部直下と口縁部内面に細くて浅い1条の平行沈線が廻る。胎土は砂粒やや多く焼きしまる。B類は中部高地系水式の系譜の土器を集めた。

68-73-74はいずれも施文手法の簡略化や文様の崩れが確認できる。また、**77**は水Ⅰ式に主体として見られる浮線文が次第に沈線文化していく過程の様相を示しているといえる。B類は水Ⅱ式と考えた。

C類：**89**は頭部から口縁に向かって直線的に内湾し、口縁部が一転、折り返して外反する甕。**83**は、この肩部文様帯部に接合する。口縁端部は欠損するが、細かい単節LRが横位に充填された複合口縁であろう。頭部は丁寧なケズリにより、口頭界・頭胴界にはそれぞれ段が作出される。口頭界には一部沈線が施されたとも思われる部分もあるが、輪積痕のなごりの可能性もある。肩部文様帯には、口縁部と同じLRを横位施した後、やや太くて深いしっかりとした沈線が3条廻る。そして、それを分断するように、左手親指の指頭を使用したと思われるやや縦長の抉りが工字文の交点を意識して施される。抉りの両側には意識した粘土瘤の盛り上がりは見られない。3条の沈線は一見、平行にも思えるが、上から3本目は抉りと抉りの中間部分では、やや下方に弧を描くように湾曲しており、変形工字文が意識されているのかもしれない。胴部は地文に木口使用と思われる細密条痕文を施し、それはおそらく底部にまで及ぶ。胎土に砂粒は少なく焼きしまっている。**86**は波状口縁。頭部から口縁に向かって曲線的に外反する甕。口縁端部はスパッと切られたように平らに面取りされ、しっかりとした角が残る。口縁部は細かい単節LRが横位に充填され、波状突起直下には、篋状工具による細くて深い縦のスリットが刻まれる。口頭界には細く浅い沈線が1条廻り、頭部無文帯を削ることで段が作出されている。胎土は砂粒やや多く焼きしまっている。**87**も波状口縁。頭部は直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反する甕。**92**と接合する。接合の結果、口縁部にはやや太めの工具による浅い平行沈線文が4条施され、波状突起直下には、同工具による縦のスリットが、上から1本目の沈線を切って施される。工

具の動きは沈線部から波状突起の方向へ動いており、沈線上が深く次第に浅くなる。平行沈線文は一部細密条痕文と重複する。平行沈線文の下部には無文帯が確認できるので、頭部無文帯を挟んで肩が張り出す器形であろう。**95**は頭部が大きく括れ、肩が強く張り出す大型の甕である。張り出した肩部には末端結節の無節Lを横位施した後、頭部無文帯をケズリによって作出している。したがって、頭部と肩部との境界には、あまり明瞭ではないが、段が確認できる。縄文施文部以下は細密条痕文が施され、おそらく底部にまで及ぶ。胎土は砂粒やや多いが、焼きは堅緻である。肩部の最も張り出した部分に輪積痕が確認できる。C類は千網式に系譜の見える土器を集めた。**89・83**は肩部の文様帯が浮線文から次第に沈線文化する過程の様相を示している。**86**は縄文が充填される波状口縁と縦のスリットに、**87・92**は波状口縁とスリット、口縁部の多条沈線に千網式の特徴が窺える。**95**は再葬墓に使用される甕の可能性もある。C類は沖Ⅱ式前段階あるいは荒海2～3式併行期の所産と考えたい。

D類：**75**は甕の肩部破片であろう。太くて深い沈線に変形工字文をしっかりと描く。上から1本目の沈線を分断して抉りを入れ、おそらく、その両側に粘土瘤を盛り上げていると思われるが、残念ながら左側部分は欠損し確認できない。粘土瘤の頂部は平坦に調整されている。頭胴界に段はない。胎土は砂粒少量で焼きしまっている。**88**は頭部が短く肩部が大きく張り出す器形の甕。頭部から口縁に向かっては曲線的に外反する。頭部はケズリによって無文帯を作出し、その結果、口縁は複合口縁化し、頭胴界には段ができることとなる。口縁部には横位細密条痕文が充填されている。肩部も同様の細密条痕文施した後、太くて底が丸みを帯びる沈線によって文様帯が抽出される。その文様帯では上から2本目の沈線部に四字文技法による上方向への押し上げが施され、その下位では、2条の斜沈線(2本目の沈線に沿って欠けている)

を伴う変形工字文が描出されている。交点には楕円形のやや浅めの袢りが施されるが、その両脇には75のような粘土瘤の盛り上げはない。胎土に砂粒はさほど多くなく、焼きは堅緻である。D類は、太くて深い沈線で変形工字文を描く点、交点部分に粘土瘤を盛り上げる技法等から、南奥地方大洞A'式の系譜を引くものと考えられる。88は甘楽郡甘楽町天引狐崎遺跡に類例がある。D類は沖Ⅱ式前段階に比定できる。

鉢形土器・浅鉢形土器

A類：66は頸部にやや括れを有する浅鉢であろう。口縁には両側を削ることによって作出された突起状の高まりがある。これは水Ⅰ式の口外帯の手法である。頸部は無文帯である。胴部上半には4分岐の浮線文と思われる文様帯が描出される。その文様帯と胴部下半の無文帯との境界には1条の浮線が廻る。口縁部と胴部文様帯には赤色塗彩が施されている。胎土は砂粒やや多いが薄手で固い。器形は括れた頸部無文帯をもつ浅鉢であること、文様は4分岐の浮線文であること、浮線の頂部が細く尖りシャープさを残していることなどから、水Ⅰ式新段階である。

B類：67は高坏ともいえる台付鉢であろう。太くて筒状の脚部の下部には極めて細くて浅い平行沈線文が3条廻る。沈線部に僅かに赤色塗彩の痕跡が残る。砂粒やや多いが固く焼きしまっている。胎土や器形、文様等から沖Ⅱ式前段階に比定できよう。

C類：79は胴部がやや影らむ器形の鉢か。やや太くて深い沈線で切り口鋭く変形工字文を描出している。反転部の交点に粘土瘤の盛り上がりはない。胎土はやや大粒の砂粒を含み、器面外面は磨かれる。埼玉県四十坂遺跡や如来堂C遺跡などに類例がある。荒海3式併行である。

D類：78は胴部が屈曲する器形の鉢か。先の細い工具によるやや深めの沈線で反転を繰り返す変形工字文を展開する。反転部の交点には粘土瘤の盛り上がり確認できる。胎土は砂粒やや多いが焼き

は良い。80は胴部がやや影らむ器形の鉢か。78より細くて浅い沈線により反転を繰り返す変形工字文を描出する。交点の技法は78と同様である。胎土の砂粒は78より少なく焼きは固い。器面外面は磨かれる。D類は変形工字文の反転部に南奥地方大洞A'式の技法が窺える。時期は荒海2～3式併行。

E類：81は鉢形土器か。底が丸い2条の沈線により反転する変形工字文を描出する。胎土は砂粒やや多いが、焼きは固く器面内外面とも磨かれる。82も鉢形土器であろう。81と同様に、底が丸い2条の沈線により反転する変形工字文を描出する。胎土は砂粒多く含む。焼きは良い。E類の系譜は不明。おそらく弥生前期の所産であろう。

F類：76は鉢形土器。口縁端部はやや肥厚し、内傾気味に丁寧に面取りされる。口縁直下に深くてしっかりとした沈線が1条廻り、その下位には2条1単位とした沈線により三角連繋文とも呼べるような変形工字文が2段展開される。さらに下位には1条の沈線が廻っているのが確認でき、その沈線に沿って欠けている。変形工字文の交点には縦長の楕円形で底が丸いスリットが施されている。胎土は砂粒少なく焼きは極めて固い。内外面とも丁寧に磨かれ、特に内面には光沢がある。この内面のミガキは水Ⅰ式の器面調整の特徴の一つであり、沈線文化した変形工字文等を考慮して、水Ⅱ式と考える。

G類：69はやや内湾気味の口縁の鉢。口縁端部内面には太くて底が丸い沈線が1条廻る。外面は匹字文手法による変形工字文が展開する。沈線は太くて底が丸く深い。沈線を施すことにより生じた隆線部はその上面や角が丁寧に調整され、立体的で彫刻的な印象を与える。匹字の袢りの部分も丁寧に粘土が押し上げられたり、押し下げられたりしている。胎土に砂粒はやや多いが、焼きは堅緻である。天引狐崎遺跡に類例があり、沖Ⅱ式前段階に位置付けられる。

H類：70は鉢の口縁部付近であろう。極めて細かい

LRを横位施文後、細い沈線と途切れ途切れの沈線とを織り返し、結果、工字文風の文様帯を作出している。沈線は深さにばらつきがあったり、曲がったりしており、端正さには欠けている。この文様帯部は赤色塗彩が施されている。胎土に砂粒は少なく焼きは極めて堅緻である。系譜は不明。おそらく弥生前期の所産であろう。

I類：71・72は同一個体で、口縁がやや内湾気味に立ち上がる鉢。細くてやや浅めの沈線を口縁下に2条廻らせ、以下斜沈線により変形工字文を展開するものであろう。口縁部内面にはしっかりとした沈線が1条廻っている。胎土は大粒の砂粒をやや多く含み、焼きは固い。内面沈線は南奥地方の影響か。沖Ⅱ式前段階に比定される。

J類：94は鉢形土器か。底が丸くやや大きく深い沈線により変形工字文を展開するものであろう。地文に細かいLRが横位に施されている。胎土はやや大粒の砂粒を含んでいる。系譜は不明。おそらく弥生前期の所産であろう。

上原IV遺跡出土土器のうち、66の浅鉢は永I式新段階に比定される浮線文土器であるが、その他は総じて浮線文以降の土器である。従って、上原IV遺跡の土器は、永I式期以降、沖Ⅱ式期以前の土器が主体を成しているといえよう。

2 ハツ場ダム地域における周辺遺跡の土器

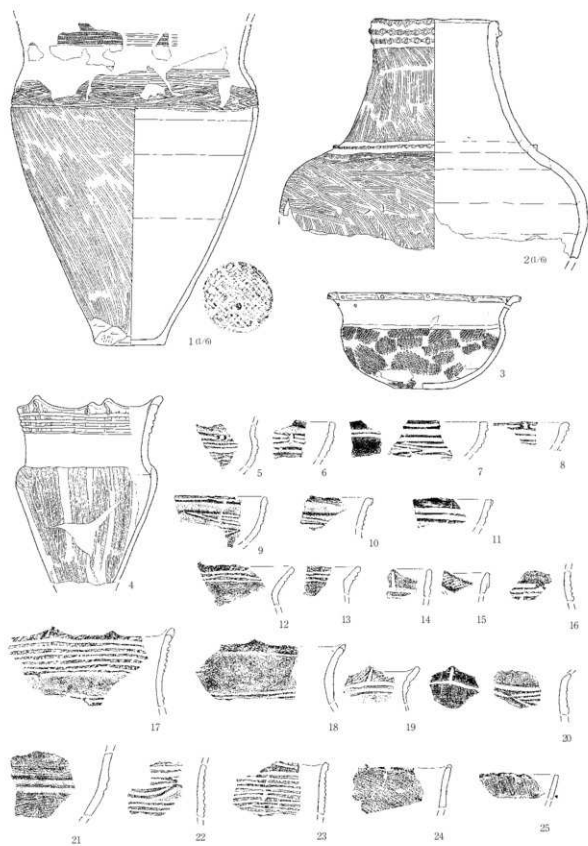
平成19年5月現在、報告書刊行に至る遺跡のうち、当該期の良好な資料が出土する遺跡には、川原湯勝沼遺跡、下原遺跡、立馬I遺跡、榎木Ⅲ遺跡、久々戸遺跡、三平I遺跡の6遺跡が挙げられる。ここでは、各遺跡の出土土器の中から一部を抽出して特徴を挙げ、その編年的位置付けについて考察を行いたい。なお、現時点で未報告の横壁中村遺跡は、質・量ともに県内屈指の良好な資料に恵まれており、今後の報告の成果を待って、後日、検討したいと考える。

(1) 川原湯勝沼遺跡 (第84図1～25)

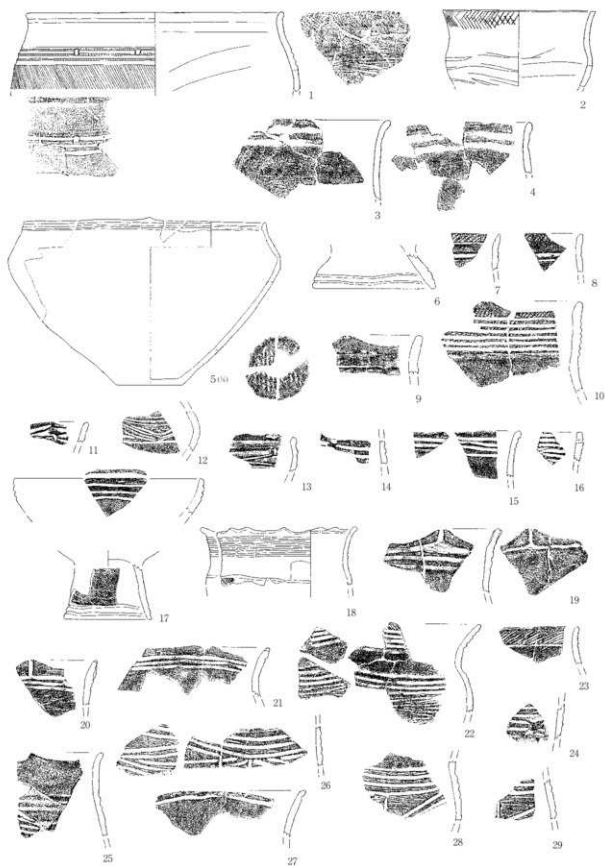
川原湯勝沼遺跡は、吾妻川右岸の中段段丘面上、大字川原湯地区にある。1は大型の甕。口縁部は残念ながら欠損するが、17が地文縄文の波状口縁と多条沈線のセットであることから、やはり波状口縁となる可能性が高い。肩部上段には平行沈線上に2箇所丸い抉りがある。肩部下段には2段構成の綾杉文が施される。胴部は木口使用による細密条痕文である。口縁部の地文に縄文が用いられること、波状口縁と多条沈線とのセットなどから推察し、1は17とともに、関東地方における浮線文土器形式の千網式に系譜を探りたい。2は大型の壺。胴下半を欠損する。口縁に2条、頸胴界に1条の押圧による突帯文が廻り、頸部から胴部は木口使用による細密条痕文が施される。東海西部条痕文土器の椀Ⅱ式に系譜が通れる中部高地系突帯文壺形土器¹¹⁾である。なお、1・2は隣接して埋設されており、初期再葬墓の可能性が高い。3は浅鉢。頸部に括れをもち、口外帯が廻る。胴部には縄文が施文される。口外帯を有するものの、永I式の浅鉢に胴部縄文のみは類例を見ない。以上、1・2・3は永I式中～新段階併行である。4はやや小振りの甕。スリットの入る波状口縁に多条沈線のセット。口縁部と胴部の地文は木口使用による細密条痕文である。4は永I式古～中段併行。5・6・7・8・9・10・11・19・21・22は、浮線文技法が顕著に見られる浅鉢あるいは甕である。12・13・15・18・19は口縁部の地文に縄文が施され、1・17と同様、千網式の系統であろう。23は10条にも及ぶ多条沈線の甕の口縁部である。旧倉岡村三ノ倉合遺跡には多条の浮線が廻る類似の甕(永I式古段階)があり関連が窺われる。このように、川原湯勝沼遺跡の土器は総じて永I式、あるいはその併行期に収まり、比較的時期幅が狭いことが特徴として挙げられよう。

(2) 下原遺跡 (第85図1～4)

下原遺跡は、吾妻川左岸の下位段丘面上、大字林地区にある。1は甕。文様は口縁部に1条の沈線、胴部に3条の平行沈線文と抉りが見られる。



第84図 川原湯勝沼遺跡出土土器



第85図 下原遺跡出土土器 (1~4)・立馬1遺跡出土土器 (5~29)



第86図 榎木Ⅲ遺跡出土土器 (1~12)
久々戸遺跡出土土器 (13)
三平Ⅰ遺跡出土土器 (14~17)

胴部は木口使用の細密条痕文である。2はやや頭部の括れる甕。口縁部に綾杉文をモチーフとすると思われる文様、胴部は粗目の条痕文である。3・4は浅くて太い2条の平行沈線文。下原遺跡に浮線文土器は見られず、1は沖Ⅱ式の平行沈線文の甕¹²⁾の系譜か。3・4は浮線が沈線化する段階であろう。2の口縁部に綾杉文は他に類例を見ない。

(3) 立馬Ⅰ遺跡 (第85図5~29)

立馬Ⅰ遺跡は、吾妻川左岸、大字林地区にある。湧水と溪流に恵まれた山間の平坦地に立地し、レベル的には最上位段丘面に相当する。5は肩部が屈曲して口縁が内傾しながら立ち上がる器形の甕。口縁部には1条の浮線文が廻るが、氷Ⅰ式に見られるシャープさはない。また口縁内面には1条の隆線が廻る。中部高地における浮線文土器型式の女鳥羽川式¹³⁾である。6・17は高坏。17は、器面内外面とも黒褐色で焼きが固く、口縁部に深くはっきりとした平行沈線文が3条廻る。ともに大洞A式である。13は4分岐の浮線文の浅鉢。交点には挟りが施され、その両側には粘土瘤が盛り上がる。おそらく口外帯を有する氷Ⅰ式である。7・8・10・18・22・23は口縁部に縄文を施文するもの。7・8は、ともにシャープさの欠ける浮線が廻り、口縁内面には1条の沈線文。10・18はどちらも波状口縁で、6条の多

条沈線文の甕である。23も口縁部にシャープさの欠ける浮線が4条廻り、肩部上段には平行沈線文、下段にはおそらく綾杉文が施される甕である。23はやや複合口縁気味の深鉢であろう。川原湯帯沼遺跡出土土器の1・17と同様、地文に縄文が用いられること、波状口縁と多条沈線とのセットなどから推察し、以上6点を干綱式に系譜を探りたい。9・19・20・21は地文に細密条痕文が施される波状口縁の甕である。口縁部には、ともに3条の平行沈線文が廻る。これらは浮線文が次第に沈線文化する段階の文様描出手法と考えられる。19・20は波状口縁にスリットの入るタイプで干綱式の系譜も辿れるが、地文が細密条痕文であることから、氷Ⅰ式に系譜を辿っておこう。浮線が沈線化しつつあることから、時期は氷Ⅰ式から氷Ⅱ式への移行期か。26・28・29は地文に細密条痕文地文を施す縦区画三角連繫文¹⁴⁾の甕である。これらは沖Ⅱ式に比定できる。このように、立馬Ⅰ遺跡の土器は、女鳥羽川式から沖Ⅱ式に至る、比較的広い時期幅を有するといえよう。

(4) 榎木Ⅲ遺跡 (第86図1~12)

榎木Ⅲ遺跡は、吾妻川左岸の上位段丘面上、大字林地区にある。4・6・7は浮線文が沈線文化、あるいは凹線化した段階の土器である。8・9は三角連繫文の可能性もある。全体的に前期中から中期前

半にかけての土器であろう。

(5) 久々戸遺跡 (第86図13)

久々戸遺跡は、吾妻川右岸の中・下位段丘面上、大字川原畑地区にある。13は水Ⅰ式の鉢形土器である。口外帯が廻り、下位に2条の浮線文が施される。

(6) 三平Ⅰ遺跡 (第86図14～17)

三平Ⅰ遺跡は、吾妻川左岸の最上位段丘面上、大字川原畑地区にある。14は地文に縄文が施される変形工字文、15は三角連繫文の可能性が。地文縄文と変形工字文のセットは沖Ⅱ式以降、岩櫃山式に再び発達する特徴である。16は太い沈線により工字文が描出される。16にやや古相が窺えもの、全体的には前期後半から中期前半にかけての所産であろう。

3 まとめ

以上、上原Ⅳ遺跡とその他6遺跡の土器を概観してみると、時期的には、晩期終末の最も古い段階の女鳥羽川式が立馬Ⅰ遺跡にはある。しかしながら、立馬Ⅰ遺跡は弥生前期後半の沖Ⅱ式まで時期幅が広い。続いて川原湯勝沼遺跡と久々戸遺跡の土器が水Ⅰ式の範疇。そして、水Ⅰ式以降、沖Ⅱ式前段階に本報告の上原Ⅳ遺跡の土器が位置付けられる。最後に、下原遺跡・楡木Ⅲ遺跡・三平Ⅰ遺跡が前期後半から中期前半に位置付けられよう。その他の特徴としては、①水Ⅰ遺跡出土土器の主体を成す水Ⅰ式中段階のシャープな浮線土器が川原湯勝沼遺跡を除いて他の遺跡に比較的少ないこと、②相対して弥生前期から中期にかけての土器の出土が各遺跡で比較的多い一方、樫王式期よりも量的には増大するであろう水Ⅰ式併行の突帯文蓋形土器が、土器片すらほとんど見られないこと、③晩期終末の土器には中部高地の水Ⅰ式、関東地方の千瀬式、及び文様のはその折衷の様相を示すものが混在すること、④南関東地方の荒海式の流入の可能性もあることなどを挙げておく。最後に、駒沢大学設楽博己氏には、川原湯勝沼遺跡及び上原Ⅳ遺跡出土土器について、実見並びに御教示を頂いた。記して感謝申し上げる次第

である。

- 註1) 設楽博己 1995 「東日本における弥生時代の始まり」『歴史考古学』
 註2)4) 鈴木正博 1987 「『流』流れて北へ」『道賢川』利根川同人 8
 註3) 中沢道彦 1993 「『女鳥羽川式』生成小考」『突帯文土器から糸織文土器へ』突帯文土器研究会

参考文献

- 国道406号線倉河村三ノ倉合遺跡調査会 1997 「三ノ倉合遺跡」
 小玉秀成 2004 「霞ヶ浦の弥生土器」玉里村立史料館
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 「ハッ場ダム発掘調査集」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004 「久々戸遺跡②・中棚Ⅱ遺跡②・西ノ上遺跡・上郷Ⅰ遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 「川原湯勝沼遺跡②」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 「立馬Ⅰ遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 「下原遺跡Ⅱ」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 「三平Ⅰ・Ⅱ遺跡」
 財団法人千葉県文化財センター 1991 「銚子市余山貝塚」
 財団法人千葉県文化財センター 1996 「市原市武士遺跡Ⅰ」
 設楽博己 1983 「関東地方の初期弥生土器」『東日本における黎明期の弥生土器』北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会
 設楽博己 1996 「弥生前期土器とその編年」『天引峯崎遺跡Ⅱ』
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 鈴木公彦 1981 「関東地方」『縄文土器大成』4 講談社
 鈴木正博 1981 「『荒海』断想」『利根川Ⅰ』利根川同人
 鈴木正博 1985 「『荒海式』生成論序説」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部
 中沢道彦 1998 「『水Ⅰ式』の編年と構造に関する試論」『水遺跡発掘調査資料図誌 第三冊』水遺跡発掘調査資料図誌刊行会
 藤岡市教育委員会 1986 「C11 沖Ⅱ遺跡」

第4項 中(近)世内耳鍋

本遺跡では中調査区遺構外で在地土器鍋（以下鍋）と思われる破片3点が出土した。これらは、内耳部がないため確実ではないが、おそらく信濃型鍋に属するものと考えられる。形態的には3点それぞれに様相が異なる。県内における信濃型鍋の出土例は少ないが、八ッ場地域では管見の限り信濃型鍋ばかりであり、これまでに刊行された八ッ場地域の報告書においても、事例が集まってきている。ここでは、既報告例と対比しながら、若干の検討を加える。なお、分類にあたっては、先行研究として、特に野村一寿・小口徹両氏の分類を主に基準とさせてもらった。また、内陸遺跡研究会の成果も参照したが、筆者の非力さから、反映できなかったことをお断りしておく（以下、図は第87図の略）。

野村・小口両氏の分類を以下に引用する。「Ⅰ類は口辺部を強く〔く〕状に外反させるもので、口辺部内面は凹凸が少なく直線的に開く（図82・84）。Ⅰ類には口唇端部に丸みをもたせて面を作り出さないものと、平坦面をもたせるものがある。前者の面を持たないものは本類のみに限られている。Ⅱ類は口辺部内面に工具（あるいは指）によって横方向のナデを行い、一周する凹凸の調整痕を明瞭に残すものがある。この一群には、凹状の調整痕を1周残すもの、2周残すもの、3周残すものがあり（図76）、それぞれ順にⅡA、ⅡB、ⅡC類と分けた。本Ⅱ類では、体部が直線的に立ち上がるものは、口辺部もそのまま自然に立ち上がるが（図66）、体部が内湾する場合、口辺部は外反気味に作られる（図67）か、逆に内湾気味に作られる（図60）ことが多い。量的にはⅡA類は少ない。Ⅲ類は口辺部内側に1周の調整を行うもので、Ⅱ類の調整痕は凹凸を明瞭に残すのに対し、調整痕幅が広く口辺部全体を外へ強く引き出し、断面がクランク状になることが多い（図70）」（野村・小口1990、図番号等筆者一部変更）。なお、年代観は以下のとおり示されている。

Ⅰ類：15世紀前半

ⅡA類：15世紀中葉～およそ16世紀前葉

ⅡB類：15世紀中葉～16世紀初頭

ⅡC類：15世紀後葉～16世紀前葉

Ⅲ類：16世紀前葉～（17世紀前葉？）

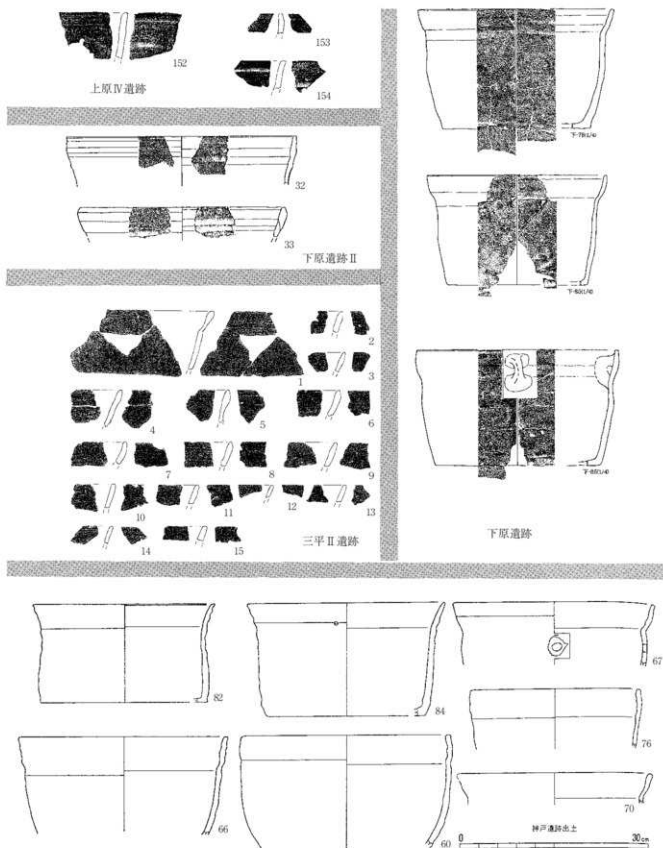
さて、八ッ場地域既報告でもっとも良好な資料となるのが、下原遺跡（群埋文2003）である。報告書本文では「泥流面以外の遺構」として片づけられているが、中世面として調査されたことは各所で述べられている。主な遺構は土坑67基、ピット204基であり、土坑には土坑墓5基、火葬跡1か所が含まれる。本文中では単体の遺構群として扱われているが、筆者は考察において中世屋敷として扱っている（飯森2003）。No.78が出土した66(中)号土坑も、筆者の認定した3号掘立柱建物跡と重複するものであり、屋敷跡と同時期と考えている。

下原遺跡の内耳鍋は、口辺部内面に横方向のナデにより一周する凹凸の調整痕を明瞭に残すもので、図80は1周、図78・86は2周残し、それぞれⅡA類、ⅡB類に相当しよう。口唇部の作りは、一様に平坦面をもたせており、薄手である。

ついでながら、下原遺跡出土の陶磁器については、近時中国陶磁器を小野正敏氏、瀬戸美濃系陶磁器を藤澤良祐氏に鑑定いただいたので、別表で紹介する。なお、古瀬戸・大窯の集計によって、信濃型鍋ⅡA・ⅡB類の年代観が下原遺跡でも確認できた。

同じく隣接する同一遺跡で調査年度の違う下原遺跡Ⅱでも、図32はⅡB類に属している。図33も明瞭な凹凸が2周しているが、器厚は厚い。小破片であるため、器形は明らかでないが、口唇部へ向かって細まり、断面三角形に作り出して、端部は平坦面を持たせている（図では不明瞭）。

三平Ⅱ遺跡は重複する掘立柱建物跡6棟を含む中世屋敷遺構であり、隣接する北側埋没谷などで鍋破片が出土している。図1は、口辺部内側に1周の調整を行うもので、調整痕幅が広く口辺部全体を外へ強く引き出し、断面がクランク状になることから、Ⅲ類に属すると思われる。また、小破片ながら三平Ⅱ遺跡は多様であり、下原遺跡Ⅱ同様に断面三角形



神戸遺跡「野村・小口論文より」
第87図 中世在地土器鍋実測図(1/4)

第3章 上原IV遺跡

第6表 下原遺跡出土中世陶磁器一覧と古瀬戸・大窯集計表

遺物No	出土位置	器種	産地	形式	年代観
下6	38(中)土坑	白磁皿	中国	DⅡ類	13世紀後半～14世紀前半
下8	6(中)焼土	染付皿	中国	BⅠ類(福反)	15世紀後半
下9	6(中)焼土	腰折皿	古瀬戸	後IV新	15世紀後半
下13	中世面№118	青磁小壺	中国		
下14	64(中)土坑	青磁碗	龍泉窯系	C類	15世紀前半～中
下15	中世面№80	飯子梅飯	古瀬戸	中期	14世紀前半
下16	中世面№125	白磁小杯	中国	B類	15世紀前半～中
下17	3(中)石頭	腰折皿	古瀬戸	後IV新	15世紀後半
下18	中世面№76	白磁碗	中国	IV類(玉縁)	12世紀
下68	1'面№22	青磁碗	龍泉窯系	BⅣ類	15世紀後半
下69	1'面№23	青磁皿	中国		
下70	1'面№91	青磁碗	龍泉窯系	BⅠ類	13世紀後半～14世紀前半
下71	1'面№27	皿	瀬戸美濃系	大窯Ⅰ～Ⅱ段階	15世紀末～16世紀前半
下72	1'面№85	丸碗	瀬戸美濃系	大窯Ⅰ段階	15世紀末～16世紀初
下76	1(1')ヤツ№2	青磁碗	同安窯系		12世紀

●*中国陶磁器：小野正敏氏、瀬戸美濃系陶磁器：藤澤良祐氏鑑定による。ただし、年代観は筆者補足。

下原遺跡	古瀬戸中期				古瀬戸後期					古瀬戸計	大窯製品				大窯計	合計
	I	II	III	IV	I	II	III	IV古	IV新		1	2	3	4		
碗類											1				1	1
小皿類									2	2					1	3
壺飯類		1								1						1

上原IV遺跡	古瀬戸中期				古瀬戸後期					古瀬戸計	大窯製品				大窯計	合計
	I	II	III	IV	I	II	III	IV古	IV新		1	2	3	4		
天日類											1				1	1
碗類												1			1	1
形皿							1			1						1

に作る図2・6・8のほか、同じく断面三角形でありながら、頸部に向かって細くなる中影れの器形となる図5と、口唇部を平坦に作る図3も見られる。また、器厚が薄く口唇部を平坦に作る図12・13、口唇部に丸みを持つ図10・11、口唇部外側にややつまみ出す図14などに分類される。遺構時期としてはⅢ類の時期が考慮されるが、多時期が混在している可能性もある。

本遺跡をみると、図153は三平Ⅱ遺跡図3に近いことが判明した。しかし、図152は器厚が厚く直立気味の器形で、ナデの調整痕は外面は顕著だが、内面は不明瞭である。口唇部は丸みを持つ。あるいはⅡA類であろうか。八ツ場地域では未だ類例をみない。また、図154も内面はナデの凹凸はなく、外反気味で頸部内面の縁は明瞭である。これはⅢ類を思わせる。参考に示した古瀬戸・大窯集計表でも、下

原遺跡よりも新しい様相があり、鍋にもこれが反映されている可能性もあろう。以上、本遺跡の鍋は、明確な遺構に伴うものではないが、既報告例にはない様相をみることができる。

- 野村一寿・小口徹 1990 「中世土器・陶磁器」『中央自動車道 長野県埋蔵文化財発掘調査報告書 松本市内その1』長野県埋蔵文化財センター
- 第2回内陸遺跡研究会「16・17世紀における内陸流通—内耳土器の動向を中心として—」レジュメ 2004

第5項. 下駄

本遺跡では、中調査区の5号溝及び上面盛土層境から下駄3点が出土している。時代は不確定だが、溝群で時期の判明した陶磁器の下限は17世紀で、不明なものも概ね18世紀代にとどまると思われる。形態はすべて連歯であり、差歯は見られない。樹種同定の結果、クリ2点・ケヤキ1点であることが判明した（次節参照。なお併せて、パレオ・ラゴ佐々木由佳氏から有益な助言をいただいた）。また、杭や板、桶はモミ属・マツ属が使用されており、周辺域からの流入の可能性が指摘されている。こうした状況を受けて、ここでは下駄の樹種について、県内の出土事例と比較しながら検討する。

第7表で示したとおり、当事業団が調査した県内報告書刊行済み遺跡と、主要な城郭遺跡である前橋城、高崎城を対象に資料収集したところ、下駄80点が判明した。そのうち、古墳時代や平安時代ものを除外して、59点が中世から近世であり、本遺跡との比較が可能となった。

第88図のとおり、樹種が判明するものは、59点中53点で、樹種は19分類群である。次節で紹介され、江戸の武家地として良好な出土事例を持つ新宿区細工町遺跡（以下、細工町）を、ここでも参考とする。細工町では、21分類群（18・19世紀）が使われている。両者を比較すると、クリ・ケヤキが30～40%を占め、共通している。一方、キリが細工町で14%に対して、県内で1点しかないのは地域差であろう。キリは軽

- 飯森康広 2003 「下原遺跡の中世掘立柱建物跡と焼土・墓・土坑をめぐる景観—イロリを伴うとみられる掘立柱建物跡を前提として—」『久々戸遺跡・中欄Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』
- 群理文 2003 「久々戸遺跡・中欄Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」
- 群理文 2006 「下原遺跡Ⅱ」
- 群理文 2006 「三平Ⅰ遺跡・三平Ⅱ遺跡」

く、流通品であったと言われる。

ところで、今回提示した県内資料53点の約6割に当たる32点は、北関東自動車道建設に伴って調査された前橋市南部から伊勢崎市北部の遺跡群である。ここでの樹種は14分類群であり、全体に大きく影響している。また、残る21点中12点は高崎城三ノ丸で、ほかは本遺跡ほか2か所となる。

前橋市南部から伊勢崎市北部の遺跡群を詳しくみると、二之宮千足遺跡で9点6種と多いが、横手湯田遺跡では7点中クリが4点、サワラ2点、カヤ1点と樹種は少ない。残る16点中、二之宮宮東遺跡4点を除く6遺跡12点では、クリ4、アカマツ3点と、ヒノキなどの針葉樹5種各1点ずつとなっている。つまり、この地域で樹種が多くなっているのは、針葉樹の樹種選択が多いためであろう。なかでもアカマツ・ヒノキ・スギ・サワラが比較的被選されている。こうしてみると、二之宮千足遺跡6種9点は、この地域の典型的な選択と思える。なお、二之宮宮東遺跡4点は、スギ2点、モミ属、ユズリハ各1点と、他と様相が異なる点で興味深い。

高崎城三ノ丸12点は、二之宮千足遺跡に近い。針葉樹はともに33%前後で、スギ以外の選択がマツ属か、ヒノキ属かの違いである。落葉樹はやや違っていて、二之宮千足遺跡はケヤキが多く、高崎城三ノ丸では、クリに次いでモクレン属を使っていて、やや特殊であろう。

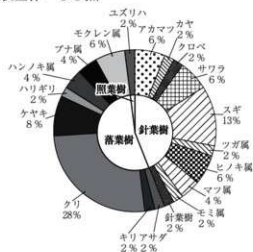
残る9点のうち、本遺跡以外はともに前橋市近郊であり、元総社寺田遺跡3点ではキリやハリギリが

第3章 上原IV遺跡

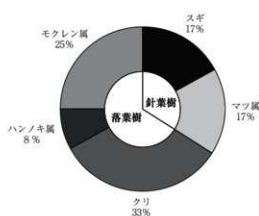
第7表 県内遺跡出土土駄一覧

遺跡名	出土遺跡名	大きさ	樹種	木取り	時代
1 上原IV遺跡	5号溝2	長 588 幅81 高41	ケヤキ/落葉樹		遺跡下駄
2	5号溝3	長176 幅77 高21	タリ/落葉樹		遺跡下駄
3	1-11アツロッド	長197 幅98 高4.7	タリ/落葉樹		遺跡下駄
4 下原IV遺跡	大明三年泥流中	長180 幅7.5		宮様	遺跡下駄
5 上郷岡前遺跡	99区1号溝				
6 南正遺跡	3-1-6 遺 埋下覆土	長210 幅90		中・古墳	
7	3-1-6 遺 埋下覆土	長146 幅43		中・古墳	
8 高崎城ニノ丸遺跡	385-ニノ丸北	長124 幅6.3 高0.5	ホクレン風/落葉樹		高崎城跡
9	385-ニノ丸 59	長165 幅4.5 高0.8	ハシ		高崎城跡
10	385-ニノ丸北	長118 幅7.5 高2.1	スギ/針葉樹		高崎城跡
11	385-ニノ丸北(下層)	長204 幅7.1 高1.8	タリ/落葉樹		高崎城跡
12	385-ニノ丸南	長 45 幅9.4 高1.0	ホクレン風/落葉樹		高崎城跡
13	385-ニノ丸南	長190 幅5.7 高2.1	タリ/落葉樹		高崎城跡
14	385-ニノ丸北	長145 幅7.5 高1.0	タリ/落葉樹		高崎城跡
15	385-ニノ丸北	長21.3 幅5.5 高1.0	ホクレン風/落葉樹		高崎城跡
16	385-ニノ丸 92	長202 幅6.8 高1.8	ワケザサ/針葉樹		遺跡二枚
17	385-ニノ丸 92	長200 幅6.7 高1.5	ワケザサ/針葉樹		高崎城跡
18	385-ニノ丸 92	長200 幅7.6 高2.0	タリ/落葉樹		高崎城跡
19	385-ニノ丸(下層)	長203 幅7.3 高3.2	スギ/針葉樹		高崎城跡
20 種高江久保遺跡	Ⅱ区1号水堀遺土	長180 幅98 厚2.2	ハシ(葉ハシ)4号風/落葉樹		古墳～近代
21	Ⅱ区2号溝土	長179 幅7.7 厚2.4	スギ/針葉樹		古墳～近代
22	Ⅱ区6号水堀遺土	長186 幅7.9 厚2.2	スギ/針葉樹		古墳～近代
23 日高遺跡	154号溝	長135 幅585 高1.8	針葉樹	榎目材	平安
24 前橋城遺跡Ⅰ	2次2号溝木埋覆土	194×70×9×21			17世紀後半～18世紀
25	南北上層M-18	21.7×96×1.4×3.4			17世紀後半～18世紀
26	R-17	20.6×(6.4)×2.0×4.2			17世紀後半～18世紀
27	R13N-18	16.7×8.2×1.1×2.1			17世紀後半～18世紀
28	R-17	21.0×9.5×1.4×2.3			17世紀後半～18世紀
29	E1JN-18	16.5×7.0×1.4×1.8			17世紀後半～18世紀
30	M-19下層				17世紀後半～18世紀
31 前橋城遺跡Ⅱ	5次4号井戸覆土	199×75×1.3			17世紀前半～18世紀
32	5次2号井戸	226×30×2.7			17世紀後半
33	5次1号井戸覆土	113×8.8			17世紀後半
34	5次48号井戸覆土	199×96×5.7			17世紀
35	5次48号井戸覆土	21.0×11.7×9.0			17世紀
36	5次62号井戸覆土	139×56×2.3			17世紀
37	5次62号井戸覆土	200×87×1.4			17世紀
38	5次62号井戸覆土	200×87×1.4			17世紀
39 前橋城ニノ丸遺跡	15号アツロ	長161 幅58 高約5.19		榎目材	鎌末～明治初期
40 光社寺寺田遺跡Ⅱ	Ⅱ区2号	長 98 幅 6.5 厚1.4	ムタロシ/落葉樹		平安
41 光社寺寺田遺跡Ⅲ	Ⅲ区9号井戸	長133 幅 6.6 厚3.1	ケリ/落葉樹	木心持	古墳
42	Ⅲ区9号井戸	長166 幅 8.5 厚1.8	ブナ属/落葉樹	榎目	古墳
43	Ⅲ区9号井戸	長212 幅10.2 厚1.9～3.5	ハリ半ワ/落葉樹	榎目	古墳
44 熊手路傍横遺跡	B86号土坑覆土	長97 幅 8.2 厚4.7～9.7	タリ/落葉樹		中世
45 橋上遺跡	L1区内(30号溝)	長 70 幅7.6 厚1.7	タリ/落葉樹		古墳
46	L1区内(30号溝)	長22.4 幅9.3 厚1.8	ホヤ/針葉樹		古墳
47	L1区内(30号溝)	長18.4 幅8.2 厚1.0	サワラ/針葉樹		古墳
48	L1区内(30号溝)	長18.2 幅9.4 厚3.9	タリ/落葉樹		古墳
49	L1区内(30号溝)	長21.0 幅8.0 厚1.6.5	タリ/落葉樹		古墳
50	L1区内(30号溝)	長13.6 幅7.8 厚2.2	サワラ/針葉樹		古墳
51	L1区内(30号溝)	長12.5 幅8.1 厚2.7	タリ/落葉樹		古墳
52 熊丸高野遺跡	B区1号溝	長162 幅80 厚3.6	クロベ/針葉樹	榎目	17世紀～18世紀
53	B区2号溝	長240 幅7.0 厚2.5	アカマツ/針葉樹	榎目	17世紀～19世紀
54	B区24号溝	長24.2 幅6.9 厚2.5	アカマツ/針葉樹	榎目	17世紀～19世紀
55	B区78号土坑	長15.3 幅7.0 厚2.1	タリ/落葉樹	榎目	中世・古墳
56 熊丸野田遺跡(2)	B区2号溝	長21.5 幅6.5 厚3.5	タリ/落葉樹	榎目	古墳
57	B区2号溝	長19.5 幅8.2 厚2.6	サワラ/針葉樹	榎目	古墳
58	B区2号溝	長21.5 幅8.5 厚3.0	ワケザサ/針葉樹	榎目	古墳
59 中内村前遺跡(1)	3-1-1 1号井戸	長15.6 幅8.4 厚2.4	針葉樹	芝友材	中世～古墳
60 二之宮宮下東遺跡	3区 169b		ケヤキ/落葉樹	榎目材	古墳時代後期
61	3区 169b		ケヤキ/落葉樹	榎目材	古墳時代後期
62	3区 169b		ケヤキ/落葉樹	榎目材	古墳時代後期
63 二之宮宮東遺跡	中央 X011	長(11.8)幅10.2 厚2(2)面)	ホノキ属/針葉樹		遺跡
64	中央 X011	長21.4 幅9.4 厚2.6	ケヤキ/針葉樹		一本作り
65	中央 X011	長22.7 幅9.2 厚4.0	スギ/針葉樹		一本作り
66	中央 X011	長16.2 幅4.5 厚2.7	スズリハ/針葉樹		古墳
67 二之宮千足遺跡	3-4区1号溝井	現長15.9 現存幅10 厚0.5	タリ/落葉樹	榎目材	江戸時代
68	3-4区1号溝井	長8.5 現存下層幅14 上層幅5.2 厚1.2	ブナ属/落葉樹	榎目	江戸時代
69	3-4区1号溝井	つぎ先部幅60 中かど部幅29	ヒノキ属/針葉樹	榎目	江戸時代
70 3-4区1号溝井	幅1.5 最大厚3	ケヤキ/落葉樹	榎目材	江戸時代	
71 3-4区1号溝井	幅1.4 最大厚4	ケヤキ/落葉樹	榎目材	江戸時代	
72 3-4区1号溝井	幅1.9 最大厚14.5 厚1.6	ケヤキ/落葉樹	榎目	江戸時代	
73 3-4区1号溝井	幅5.1 厚2.9	ヒノキ属/針葉樹	榎目	江戸時代	
74 3-4区1号溝井	厚5.5 最大幅で1.8 現存幅21.8	ケヤキ/落葉樹	榎目材	江戸時代	
75 4区2号溝井	長さ22.5 幅10 最大厚2.9	スギ/針葉樹	榎目材	18世紀	
76 高志江中層東遺跡	5号溝	長55.5 幅2.2 厚2.0	タリ/落葉樹		15世紀
77 高志江中層東遺跡	5号溝	長27.2 幅9.2 高3.8	ヒノキ/針葉樹		中・古墳以降
78 403号土坑	長25.5 幅8.8 高2.7	アカマツ/針葉樹			中・古墳以降
79 上棟木栗谷遺跡	L1区15号井戸	長20.2 幅6.0 厚5.6			中世以降
80 小角田田ノ上遺跡	S D 1・S D 2-1	長23.5 幅10(2)	榎材同定コナラ属/落葉樹		9世紀中頃以前

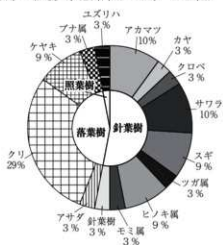
下駄全体 53点



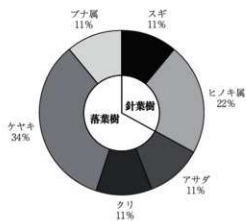
高崎城三ノ丸 12点



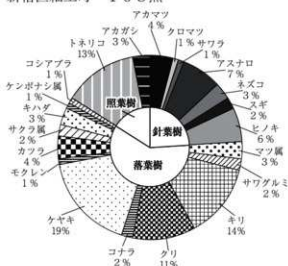
前橋南部～伊勢崎北部(44～78) 32点



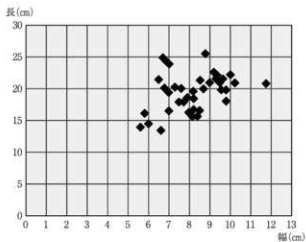
二之宮千足 9点



新宿区細工町 108点



下駄 長さ と 幅 41点



第88図 県内遺跡出土下駄の樹種および規格

あり、流通品を思わせる。また、棟高辻久保遺跡では、スギ2点、ハンノキ1点と前橋市南部などと変わらない傾向にある。なお、前橋周辺地域を代表する前橋城で樹種が報告されていないことは非常に残念である。

以上、県内地域を概観した結果から本地域を考えると、クリ・ケヤキを選ぶことは、非常によく符合しており、江戸とも共通する時代傾向である。一方で、針葉樹がないのは興味深い。本遺跡木器でも、モミ属やトウヒ属、マツ属があるが、スギやヒノキ

第7節 上原IV遺跡出土木材の樹種同定

野村 敏江 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

上原IV遺跡は群馬県長野原町林にあり、押し沢によって形成された扇状地の西端部の緩斜面に位置する。本遺跡の2号旧河道では、中世から近世にあたりと推定されている石鉢が出土している。ここでは1-11グリッド、2号旧河道、3・4・5号溝より出土した木製品12試料の樹種同定結果について報告する。

2. 方法

材組織の切片採取は群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、作成されたプレパラートは光学顕微鏡下で同定した。同定を行った試料のうち各分類群を代表する試料については写真図版(図版1~2)を添付し、その材組織を結果に記載した。なお、作成されたプレパラートは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3. 結果と考察

同定された樹種の一覧は表1に、製品別の樹種の集計は表2に示した。樹種同定の結果、全12試料中には、モミ属・トウヒ属・マツ属・クリ・ケヤキの合計5分類群が同定された。このうち、クリが7試料と最も多く産出し、次いでモミ属が2試料、トウ

ヒ属・マツ属・ケヤキが各1試料産出した。なお、マツ属は放射仮道管の肥厚の形態によってさらに亜属、種段階までの分類が行われるが、ここでは保存状態が悪く放射仮道管の肥厚を観察できなかったため、マツ属までの同定に留めた。

- 松葉礼子 1999 「沼田遺跡・汐留遺跡・墨田区三道路から出土した木製品の樹種から推定される近世江戸城周辺の木材消費」『植生史研究』7
- 能城修一 1992 「新宿区細工町遺跡から出土した木製品の樹種」『東京都新宿区細工町遺跡 新宿区厚生部遺跡調査会』

ヒ属・マツ属・ケヤキが各1試料産出した。なお、マツ属は放射仮道管の肥厚の形態によってさらに亜属、種段階までの分類が行われるが、ここでは保存状態が悪く放射仮道管の肥厚を観察できなかったため、マツ属までの同定に留めた。

次に産出した樹種について検討する。最も多く産出したクリは下駄や盤・柱などに用いられていた。同定例の多い近世江戸における下駄の樹種と比較してみると、東京都新宿区の細工町遺跡の17世紀後半から19世紀中頃にあたる出土木製品の樹種同定(能城1992)では、連歯下駄46試料において16分類群もの樹種が用いられており、クリが最も多く20%弱用いられていた。新宿区行元寺跡の樹種同定(能城・三村2003)では18世紀前半から後半にあたる下駄が13試料産出しており、針葉樹ではサワラ1試料、広葉樹ではトネリコ属が7試料、クリが3試料、このほかコナラ節とキリが1試料産出した。江戸時代初期にあたりと考えられている千代田区丸の内一丁目遺跡の樹種同定(鈴木・能城2005a)では、連歯下駄にはクリが最も多く(40試料中21試料)、このほかケヤキなどが用いられていた。また、千代田区九段南一丁目遺跡の17世紀前半にあたる樹種同定(鈴木・能城2005b)では、連歯下駄においてクリ8点に対し、スギ・ヒノキ・サワラ・アスナロなどの針葉樹材が16点同定された。

以上のように、下駄には様々な樹種が用いられるが、多くの遺跡において重硬で丈夫なクリが用い

られることは共通している。山田(1993)による日本各地の遺跡から出土した麗木材の集計では、16~17世紀に複数の広葉樹材を用いる傾向が強まり、18世紀以降にスギ・ヒノキ材・二葉松類などの針葉樹材やクリ材を極端に使用した遺跡が出てくるとしている。今回同定された下駄は3点ではあるが、クリ・ケヤキが用いられたことは、近世における樹種利用と概ね同様の傾向を示していると考えられる。

杭や板、桶にはモミ属・トウヒ属・マツ属が同定された。モミ属・トウヒ属は本遺跡周辺の山地域、または高標高域に普通に生育する樹種であることより、周辺域からの流入の可能性が考えられる。マツ属の同定に留まったが、今回同定されたマツ属には本遺跡周辺において生育するアカマツも含まれており、比較的近距离からの流入であることが示唆される。近世江戸城周辺では、ヒノキ科の樹種が優勢に産出することが明らかにされている(松葉1999)。江戸城周辺の樹種組成と点数は少ないが本遺跡からヒノキ科の樹種が産出しないことは、江戸と地方の地域間での樹種利用の違いを反映している可能性があると考えられる。

次に同定された樹種の記載を行う。

(1) **モミ属 *Abies* マツ科** 図版1 (1a-1c) No.9

仮道管および放射柔細胞によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は全て放射柔細胞によって構成され2~20細胞高になり、放射柔細胞の壁は厚く数珠状肥厚を有する。放射柔細胞の分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個存在する。

モミ属は常緑高木であり、北海道に分布するトドマツ、亜高山帯など高標高域に分布するシラビソ・オオシラビソ、標高1,000~2,000mに分布するウラジロモミ、ウラジロモミよりも低標高域に分布するモミなどがある。ウラジロモミ・モミの用途はほとんど同じとされ、材は針葉樹材のうちでやや軽軟で、切削その他の加工は容易であり割裂性も大きい。

(2) **トウヒ属 *Picea* マツ科** 図版1 (2a-2c) No.5

仮道管および放射柔細胞、放射仮道管および垂直、

水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成され、1~20細胞高になる。放射仮道管の有縁壁孔対の断面をみると、壁孔縁の先端は角張っているもの、壁孔縁に鋸歯状の突起を持つものが多い。放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型で1分野に3~6個存在する。

トウヒ属は常緑高木であり、本州に分布する主なトウヒ属にはトウヒ・イラモミ・ハリモミなどがあり、山地帯~亜高山帯に分布する。材は針葉樹材のうちではやや軽軟であり、切削そのほかの加工は容易で割裂性は大きい。

(3) **マツ属 *Pinus* マツ科** 図版1 (3a-3c) No.4

仮道管および垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞、放射柔細胞および放射仮道管によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急であり晩材部の幅も広い。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。マツ属は、放射仮道管の内壁の肥厚形態によって肥厚が鋸歯状を呈す複雑東亜属と、内壁が肥厚せず平滑である単維東亜属に区分されるが、試料の保存が悪いため放射仮道管の肥厚を観察できず、ここではマツ属までの同定に留めた。

(4) **クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科**

図版2 (4a-4c) No.8

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた道管が火災状に配列する環孔材である。放射組織は単列で同性である。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は横状である。材は耐朽性が強く、水湿に耐え、保存性がきわめて高い。

クリは北海道(石狩・日高地方以南)・本州・四国・九州の丘陵から山地に分布する落葉高木で高さ20mほどになる。

(5) **ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino**

ニレ科 図版2 (5a-5c) No.6

大型の道管が年輪界で1列に並び、孔圏外の小道

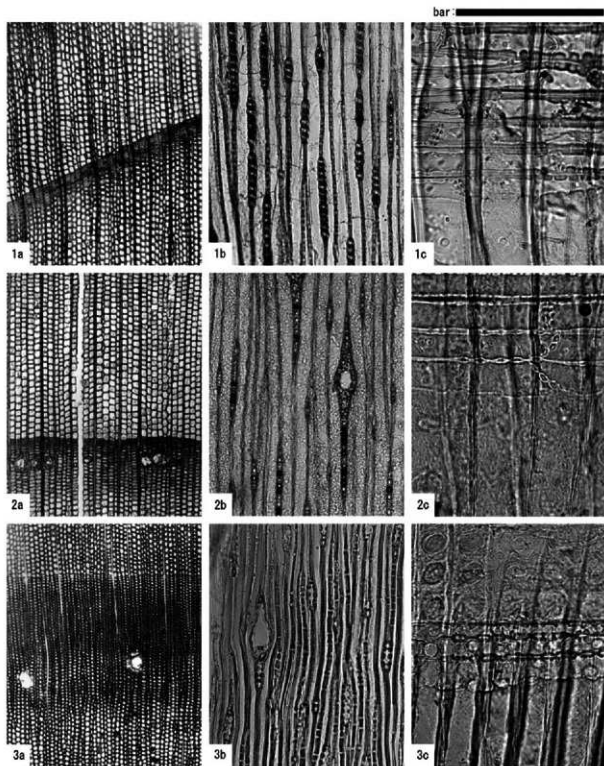
第3章 上原IV遺跡

管は数個複合して接線状に並ぶ環孔材である。放射組織は5細胞幅程度で紡錘形のものが目立ち、上下には大型の直立細胞がある。道管は単穿孔であり、小道管にはらせん肥厚がみられる。

ケヤキは北海道・本州・四国・九州の浜畔林や丘陵部、山地によく生育する高さ20mほどの落葉高木である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

引用文献

- 松業礼子 (1999) 瀛池遺跡・汐留遺跡・墨田区三遺跡から出土した木製品の樹種から類推される近世江戸城周辺の木材消費。植生史研究, 7 (2): 59-70.
- 能城修一 (1992) 新宿区細工町遺跡から出土した木製品の樹種。『東京都新宿区 細工町遺跡』: 174-187. 新宿区厚生部遺跡調査会。
- 能城修一・三村昌史 (2003) 新宿区行元寺跡より出土した木製品の樹種。『東京都新宿区 行元寺跡』: 262-270. 財団法人新宿区生涯学習財団。
- 鈴木伸哉・能城修一 (2005a) 丸の内一丁目遺跡出土の木材・木製品の樹種。『東京都千代田区 丸の内一丁目遺跡II』: 207-221. 千代田区丸の内一丁目遺跡調査会。
- 鈴木伸哉・能城修一 (2005b) 千代田区九段南一丁目遺跡より出土した木製品の樹種。『東京都千代田区 九段南一丁目遺跡』: 188-193. 千代田区九段南一丁目遺跡調査会。
- 山田昌久 (1993) 日本列島における木質出土遺跡文献集成—用材からみた人間・植物関係史。『植生史研究特別第1号』242p. 日本植生史学会。

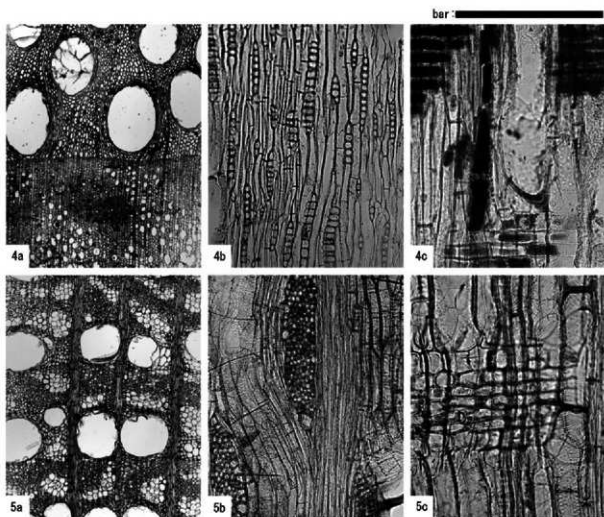


図版1 上原IV遺跡出土木製品の材組織の光学顕微鏡写真

1a-1c: モミ属 (No. 9) 2a-2c: トウヒ属 (No. 5) 3a-3c: マツ属 (No. 4)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

Scale bar=a: 1.0 mm, b: 0.4 mm, c: 0.1 mm



図版2 上原IV遺跡出土木製品の材組織の光学顕微鏡写真

1a-1c: クリ (No. 8) 2a-2c: ケヤキ (No. 6)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

Scale bar=a:1.0 mm, b:0.4 mm, c:0.2 mm

表1 上原IV遺跡出土木製品の樹種同定結果

No.	樹種	報告書 No.	器種	遺存状態	区名	位置・遺構名	層位	取り上げ 番号	時期	備考
1	クリ	外173	下駄	完形	84	I-11クリッド	II c層		近世?	
2	クリ	2河3	盤?	1/2	84	2号旧河道			近世?	
3	クリ	3溝4	柱?	破片	84	3号溝		5	近世?	
4	マツ属	3溝5	杭	ほぼ完形	84	3号溝		1	近世?	
5	トウヒ属	4溝3	桶底板	1/2	84	4号溝		5	近世?	
6	ケヤキ	5溝2	下駄	脚部	84	5号溝		1	近世?	
7	クリ	5溝3	下駄	1/2	84	5号溝		2	近世?	2つに割れる
8	クリ	5溝7	盤?	大片	84	5号溝		3	近世?	
9	モミ属	5溝4	板	破片	84	5号溝	上層		近世?	
10	モミ属	5溝5	板	破片	84	5号溝	上層		近世?	
11	クリ	5溝6	不明木製品	ほぼ完形	84	5号溝	上層		近世?	
12	クリ	5溝8	舟形木製品	略完形	84	5号溝	上層		近世?	

第8表 出土遺物観察表

1号住居跡

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
1	縄文土器 深鉢	+14.0 口縁部片	残存高 5.3	①小礫多②良好 ③褐灰	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で彫む。胴部横位縄文L R施文後、単沈線で幾何学文様表出し、器面磨き顕著。内面口唇部横位単沈線施す。堀之内2式
2	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高 4.6	①白色粒多②良好 ③赤褐	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で彫む。胴部横位縄文L R施文後、単沈線で幾何学文様表出し、器面磨き顕著。堀之内2式
3	縄文土器 深鉢	+9.4 口縁部片	残存高 6.3	①小礫多②良好 ③にぶい褐	口縁部太い隆帯貼付後、棒状工具で彫む。単沈線で幾何学文様表出し、器面磨き顕著。堀之内2式
4	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	残存高 5.6	①白色岩片②良好 ③にぶい褐	口縁部横位、胴部縦位縄文L R施文後、棒状工具により横位沈線・面割状文表出し、器面磨き顕著。堀之内2式
5	縄文土器 深鉢	握り方 口縁部片	残存高 3.3	①細砂多②良好 ③暗褐	横位縄文L R施文後、単沈線で文様表出し、器面磨き顕著。堀之内2式
6	縄文土器 深鉢	+20.3 胴部片	残存高 4.7	①小礫多②良好 ③褐灰	隆帯貼付後、横位刺突で彫む。胴部横位縄文L R施文後、器面磨き後、単沈線で文様表出し、器面磨き顕著。堀之内2式
7	縄文土器 深鉢	+22.0 口縁部片	残存高 4.0	①細砂多②良好 ③暗褐	単沈線で横位に区画後、竹管刺突施す。高井東式
8	縄文土器 深鉢	+9.5 頸部片	残存高 4.1	①小礫多②良好 ③灰褐	頸部粘土貼付後、刺突により円文表出。胴部横位縄文L R施文後、単沈線で文様表出し、器面磨き顕著。堀之内2式
9	縄文土器 深鉢	+7.2 胴部片	残存高 6.5	①白色岩片やや多 ②良好③黒褐	横位縄文L Rを短く施文後、単沈線で区画文表出し内部磨り消す。堀之内2式
10	縄文土器 深鉢	+13.3 口縁部片	残存高 8.3	①小礫多②堅 ③黒褐	横位縄文L R施文後磨り消し、横位単沈線施す。内面磨き顕著。加曾利B 2式
11	縄文土器 深鉢	1列 口縁部片	残存高 6.4	①細砂含む②堅 ③黒褐	横位縄文L Rを短く施文後、単沈線で区画文・区切文表出し、磨り消す。内面磨き顕著。加曾利B 2式
12	縄文土器 深鉢	+9.1 口縁部片	残存高 7.9	①細砂含む②堅 ③黒褐	口唇部竹管刺突。胴部横位縄文L R施文後磨り消し、横位単沈線・区切文施す。内面磨き顕著。加曾利B 2式
13	縄文土器 深鉢	表土 口縁部片	残存高 7.2	①細砂含む②堅 ③黒褐	口唇部竹管刺突。胴部横位縄文L R施文後磨り消し、横位単沈線・区切文施す。内面磨き顕著。加曾利B 2式
14	縄文土器 深鉢	+8.5 口縁部片	残存高 4.0	①小礫含む②堅 ③にぶい褐	口唇部横位縄文L R施文後磨り消し、単沈線で区画を表出後、横位刺突施す。加曾利B 2式
15	縄文土器 浅鉢	口縁部片	残存高 2.2	①細砂多②やや軟 ③にぶい黄褐	外面無文。内面口縁部に単沈線で文様表出し、器面磨き顕著。堀之内～加曾利B 2式
16	縄文土器 深鉢	+22.6 口縁部片	残存高 7.3	①小礫多②良好 ③明赤褐	外面縦位磨き、内面横位磨き後、幅5mmの横位沈線施す。堀之内2式
17	縄文土器 深鉢	床直、1列 口縁部片	残存高 5.6	①小礫多②やや軟 ③にぶい橙	無文。堀之内2式
18	縄文土器 深鉢	+19.3、握り方、 底部片	底(12.0) 残存高 6.8	①小礫やや多②良好 ③橙	無文、外面磨き。底部副代痕。堀之内～加曾利B 2式
19	縄文土器 深鉢	握り方、1列、 D-17、底部片	底(12.4) 残存高 4.6	①白色岩片やや多 ②良好③にぶい橙	底部副代痕。堀之内～加曾利B 2式
20	縄文土器 深鉢	床直 底部片	底 6.0 残存高 2.1	①小礫含む②良好 ③にぶい橙	底部葉脈痕。堀之内～加曾利B 2式
21	縄文土器 深鉢	握り方 底部片	底(6.0) 残存高 3.0	①小礫含む②堅 ③にぶい赤褐	底部副代痕。堀之内～加曾利B 2式
22	縄文土器 深鉢	+29.3 底部片	底 6.0 残存高 2.4	①白色岩片やや多 ②良好③褐灰	底部副代痕。堀之内～加曾利B 2式
23	縄文土器 深鉢	+7.9 底部片	残存高 3.0	①小礫やや多②良好 ③にぶい赤褐	底部縄文。堀之内～加曾利B 2式
24	縄文土器 深鉢	底部片	底 4.0 残存高 2.0	①細砂含む②良好 ③にぶい橙	内外面ナデ。堀之内～加曾利B 2式
25	縄文土器 深鉢	+14.1 底部片	残存高 3.8	①細砂多②やや軟 ③黒褐	外面磨き顕著。堀之内～加曾利B 2式

第3章 上原IV遺跡

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
26	縄文土器 注口土器	+5.4、3住 口縁-胴部片	口4.0 残存高9.8	①小礫含む②良好 ③赤黒褐	沈罐で円弧文表出し磨く。細い棒状工具で連続刺突文施す。壺之内2式
27	縄文土器 注口土器	+10.6 注口	残存高8.3	①赤②良好 ③にぶい褐	基部沈罐後、細い棒状工具で連続刺突文施す。壺之内2式
28	縄文土器 注口土器	+15.9 注口	残存高6.0	①小礫多②良好 ③橙	内面に巻き状の痕跡。壺之内2式
29	縄文土器 注口土器	床直 注口	残存高3.5	①小礫多②良好 ③黒褐	外面磨き顕著。沈罐で円文表出か。壺之内+加曾利B式
30	石器 石鏃	握り方 ほぼ定形	長1.8 幅1.2 厚0.3 重0.4g 黒曜石		基部一端欠損。
31	石器 石鏃	床直 3/4	長1.9 幅1.0 厚0.3 重0.4g 黒曜石		基部一端欠損。
32	石器 石鏃	+11.1 定形	長1.8 幅1.7 厚0.75 重2.0g 黒曜石		
33	石器 石鏃	床直 定形	長2.0 幅1.5 厚0.4 重0.8g チャート		基部欠損。
34	石器 石鏃	+16.1 定形	長2.4 幅1.6 厚0.6 重1.2g 柱状変質岩		
35	石器 打製石斧	床直 定形	長8.4 幅5.0 厚1.0 重33.6g 頁岩		柄部欠損。

2号住居跡

1	縄文土器 深鉢	+12.9 口縁部片	残存高11.4	①小礫やや多②良好 ③黒	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。胴部横位・斜位縄文L R施文し。細い沈罐で文様表出後磨り消す。壺之内2式
2	縄文土器 深鉢	+5.8、5ピット、 3住 口縁部片	残存高7.6	①白色岩片多②良好 ③赤黒	横位・斜位縄文L R施文後磨り消す。加曾利B式
3	縄文土器 深鉢	5ピット 口縁部片	残存高4.9	①白色岩片多②良好 ③黒	横位縄文L R施文後磨り消す。加曾利B式
4	縄文土器 深鉢	口縁部片	残存高3.9	①白色岩片やや多 ②良好③黒褐	横位縄文L R施文後、横位半沈罐施し磨り消す。壺之内2式
5	縄文土器 深鉢	+10.3、1列 底部片	底(12.0) 残存高1.6	①小礫含む②良好 ③黒	壺之内+加曾利B式
6	縄文土器 深鉢	+13.8 底部片	残存高4.5	①小礫多②やや軟 ③にぶい赤褐	胴部横位・下端縦位縄文L R施す。壺之内+加曾利B式
7	縄文土器 浅鉢	+6 胴部片	残存高2.7	①赤②良好 ③褐灰	外面磨き顕著。内面平行沈罐による渦巻文表出。壺之内2式
8	縄文土器 浅鉢	床直 口縁部片	残存高2.6	①細砂含む②良好 ③にぶい褐	外面横位磨き。内面横位沈罐後、磨き顕著。壺之内2式
9	縄文土器 注口土器	+10.4、3住 胴部片	残存高5.1	①白色岩片多②良好 ③にぶい赤褐	平行沈罐により渦巻文、弧線文を表出。壺之内2式
10	石器 削片	+17.2 定形	長4.2 幅6.2 厚1.2 重31.2g 頁岩		

3号住居跡

1	縄文土器 深鉢	+12.2 口縁部片	残存高7.8	①白色岩片多②良好 ③黒	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削み、刺突は先端とがる。細く深い沈罐で文様表出。壺之内2式
2	縄文土器 深鉢	+17.1 口縁部片	残存高5.5	①白色岩片やや多 ②良好③黒	横位縄文L R施文後、横位沈罐施し。器面内外面磨き顕著。加曾利B 2～B 3式
3	縄文土器 深鉢	+12.6 口縁部片	残存高5.1	①小礫含む②堅 ③黒褐	横位縄文L Rを短く施文。壺之内+加曾利B式
4	縄文土器 深鉢	床直、1列、 B-18、表土4/5	口(28.5) 残存高22.1	①小礫多②良好 ③にぶい褐	横位・斜位縄文L R施文後、半沈罐で文様表出。磨り消す。壺之内2式
5	縄文土器 ミニチュア 土器	16ピット 定形	口2.5 底4.0 残存高4.8	①小礫多②良好 ③にぶい橙	無文。壺之内+加曾利B式

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
6	縄文土器 ミニチュア 土器	16ビット 口縁部片	残存高 1.8	①細砂含む②やや軟 ③にぶい釉	平行沈線で文様施す。壺之内～加曾利B式
7	縄文土器 深鉢	+7.8 底部片	底 9.0 残存高 2.5	①小礫多②良好 ③橙	底部刷代痕。壺之内～加曾利B式
8	縄文土器 深鉢	16ビット 底部片	底(10.0) 残存高 5.5	①砂礫含む②良好 ③橙	底部刷代痕。壺之内～加曾利B式
9	縄文土器 深鉢	+15.1 底部片	底(5.8) 残存高 3.7	①白色岩片やや多 ②良好③黑	底部刷代痕。壺之内～加曾利B式
10	縄文土器 注口土器	床直、2住、1列、 B-18	口(11.6) 残存高 16.5	①小礫多②良好 ③灰赤	平行沈線により渦巻文を表出。器面磨き顕著。壺之内2式
11	縄文土器 注口土器	+13 飾り	残存高 4.1	①小礫多②良好 ③黒	単沈線で同心円文など表出。刺突細く深い。壺之内2式
12	石器 石棒	+32.6、6ビット 1/2	長21.2 幅2.5 緑色片岩	厚2.4 重247.5g	先端部一部、下半欠損。

4号住居跡

1	縄文土器 深鉢	+17.8、1列 胴部片	残存高 11.9	①小礫多②良好 ③暗褐	横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出、磨り消す。壺之内2式
2	縄文土器 深鉢	+9.6 胴部片	残存高 4.1	①小礫多②良好 ③黒褐	平行沈線により三角文など表出。壺之内2式
3	縄文土器 深鉢	床直 胴部片	残存高 3.1	①小礫多②良好 ③明赤褐	横位縄文LR施文後、平行沈線で文様表出、磨り消す。壺之内2式
4	縄文土器 ミニチュア 土器	+8.3 ほぼ定形	口 5.0 底 4.0 残存高 7.0	①小礫多②良好 ③明赤褐	無文。底厚に作る。壺之内～加曾利B式
5	縄文土器 鉢	胴部片	残存高 6.7	①小礫多②良好 ③褐	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。胴部横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出、磨り消す。壺之内2式
6	縄文土器 土製円盤	+5.8 定形	残存高 6.4	①細砂やや多②良好 ③褐	刷代痕。壺之内～加曾利B式

1号列石遺構

1	縄文土器 深鉢	+9.3 口縁部片	残存高 6.2	①小礫多②良好 ③暗灰	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。胴部横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出、磨り消す。壺之内2式
2	縄文土器 深鉢	+10.7、A-16 口縁部片	残存高 5.5	①小礫多②良好 ③灰褐	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。胴部横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出、磨り消す。壺之内2式
3	縄文土器 深鉢	+10.9 口縁部片	残存高 3.9	①小礫多②良好 ③暗赤褐	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。胴部横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出、磨り消す。内面磨き顕著。壺之内2式
4	縄文土器 深鉢	+13.4 口縁部片	残存高 4.2	①小礫多②良好 ③にぶい黄褐	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。壺之内2式
5	縄文土器 深鉢	床直 口縁部片	残存高 4.7	①小礫やや多②良好 ③にぶい黄褐	口唇部径2.8mm棒状工具で刺突施す。口縁部隆帯貼付後、削む。胴部横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出、磨り消す。壺之内2式
6	縄文土器 深鉢	+24.7 口縁部片	残存高 3.5	①小礫やや多②良好 ③赤褐	口縁部太い粘土器貼付後、刺突施す。内面磨き顕著。壺之内2式
7	縄文土器 深鉢	+5.6 胴部片	残存高 7.8	①小礫多②良好 ③灰黄褐	横位縄文LR施文後、単沈線で幾何学文様表出、磨り消す。壺之内2式
8	縄文土器 深鉢	+16.3 胴部片	残存高 6.4	①小礫多②良好 ③にぶい褐	横位縄文LR施文後、単沈線で幾何学文様表出、磨り消す。壺之内2式
9	縄文土器 深鉢	+20.1 口縁部片	残存高 10.9	①小礫多②良好 ③灰褐	無文。壺之内2式
10	縄文土器 深鉢	+7.8、2住、3住、 胴部片	残存高 17.7	①小礫多②良好 ③橙	縦位削り整形後、単沈線で文様表出。壺之内2式

第3章 上原IV遺跡

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法・量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色相	成・整形技法の特徴及び備考
11	縄文土器 深鉢	+18.5 口縁部片	残存高 7.8	①細砂多②良好 ③にぶい橙	黒文・堀之内2式
12	縄文土器 注口土器	+14.3 口縁部片	残存高 2.4	①小礫含む②良好 ③にぶい橙	横位縄文LR施文後、単沈線施す。堀之内～加曾利B式
13	縄文土器 注口土器	+31.8 注口	残存高 7.0	①小礫多②良好 ③灰褐	よく磨く。堀之内2式
14	縄文土器 注口土器	床直、1住、3住、 4住、A-1・17	口(8.3) 残存高 16.4	①小礫やや多②良好 ③にぶい赤褐	単沈線・陸帯により区画後、細かく刺突文施す。堀之内2式
15	石器 スクレイパー	+23.8 完形	長 4.15 幅 6.2 頁岩	厚 1.3 重 30.0g	
16	石器 石核	床直 完形	長 2.3 幅 4.2 黒曜石	厚 1.9 重 17.9g	
17	石器 たたき石	床直 完形	長 8.3 幅 3.3 安山岩	厚 1.9 重 70.3g	

1号配石遺構

1	縄文土器 深鉢	+30.9 胴～底部片	底 10.0 残存高 14.1	①小礫多②良好 ③赤褐	横位・斜位縄文LR施文後、単沈線で文様表出、磨り消す。堀之内2式
2	縄文土器 深鉢	+34.6 口縁部片	残存高 9.8	①小礫多②良好 ③にぶい黄橙	内外面磨き顕著。堀之内2式

2号配石遺構

1	縄文土器 深鉢	+21.5 口縁部片	残存高 6.0	①小礫多②良好 ③にぶい褐	口唇部単沈線施す。堀之内1式
2	縄文土器 深鉢	+31.1 口縁部片	残存高 3.9	①小礫やや多②堅 ③黒褐	外面横位ナテ整形顕著。内面漆付着か。加曾利B1式
3	縄文土器 深鉢	+20.0 口縁部片	残存高 5.1	①小礫多②良好 ③にぶい橙	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。胴部横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出、磨り消す。堀之内2式
4	縄文土器 深鉢	+14.3、1列 口縁～胴部片	残存高 9.7	①小礫多②良好 ③灰褐	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。胴部単沈線で文様表出。堀之内2式
5	縄文土器 浅鉢	+27.8 胴部片	口(15.4) 残存高 4.7	①小礫多②良好 ③黒褐	細かな縄文LR横位・縦位施文後、単沈線で区画文様表出、磨り消す。内面磨き顕著。加曾利B2～B3式
6	縄文土器 深鉢	底部片	底(11.0) 残存高 4.9	①小礫多②良好 ③明赤褐	堀之内～加曾利B式
7	縄文土器 深鉢	+34.6 底部片	残存高 2.6	①小礫多②良好 ③黒褐	底部胴代痕。堀之内2式
8	縄文土器 注口土器	+34.4 口縁部片	口(11.4) 残存高 4.1	①密②堅 ③黒褐	細い棒状工具で施文後、顕著に磨く。加曾利B1式

1号集石遺構

1	縄文土器 深鉢	胴部片	残存高 8.1	①小礫やや多②良好 ③粗灰	口縁部隆帯貼付後、棒状工具で削む。横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出。堀之内2式
---	------------	-----	---------	------------------	---

2号溝

1	陶器 釘目付大皿	サレキ層 口縁部片	口(20.0) 残存高 3.2	①密②良好 ③灰黄	ロクロ成形。内外面口縁部施釉、浅黄。内面酸化鉄付着。瀬戸美濃系
2	陶器 染付碗	サレキ層 底部片	底(6.0) 残存高 1.9	①密②良好 ③灰白	外面下部部横釉。泥付輪ハギ。肥前系

3号溝

1	陶器 鉄軸すり鉢	I-11 胴～底部片	底(15.0) 残存高 7.7	①やや粗②良好 ③にぶい黄橙	下半部斜位ナテ整形。底部回転系切未調整。全面施釉。釉略赤褐。外面細毛塗り。釉裏銀化見られる。瀬戸美濃系。江戸時代。
2	石器 砥石	1/2	長 6.0 幅 3.9 砥沢石	厚 3.1 重 115.8g	表裏下面成形時削り顕著。2面使用。
3	石器 たたき石	3/4	長 8.0 幅 9.8 安山岩	厚 6.9 重 629.0g	表面丸みを持って平直に磨る。右側、下面敲打痕顕著。

番号	種類 種類	出土位置(cm) 遺存状態	法・量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
4	木器 破片		長5.6 幅4.9 高3.2	クリ	下端部ややきれいに成形。丸みあり。
5	木器 杭	ほぼ完形	長19.5 径4.2	マツ属	樹皮残す。先端は一方から鋭利に削り込む。裏側は丸い自然面。

4号溝

1	陶器 鉄輪丸罎	胴部片	残存高 2.7	①赤②良好 ③灰白	ロクロ成形。全面施釉。漆黒。瀬戸美濃系。江戸時代。
2	陶器 キセル雁首	完形	長6.3 幅1.9 厚2.9		合わせ目で亀裂。皿部歪み顕著。
3	木器 桶成板	1/2	長18.0 幅8.8 高2.1	トウヒ属	木釘1カ所残る。

5号溝

1	陶器 皿	フク土 底部片	底(7.0) 残存高 2.2	①赤②良好 ③灰白	削りだし高台。高台内トナリ。全面施釉。長石釉。瀬戸美濃系
2	木製品 下駄	脚部	長5.8 幅8.1 高4.1	ケヤキ	連歯下駄
3	木製品 下駄	1/2	長17.6 幅7.7 高2.1	クリ	連歯下駄
4	木器 板	破片	長17.6 幅4.3 高0.4	モミ属	
5	木器 板	破片	長8.3 幅3.1 高0.5	モミ属	
6	木器 不明木製品	ほぼ完形	長8.5 幅3.0 高0.9	ケヤキ	裏面は平らだが、刺歯面の可能性あり。小形で用途不明。模造品などか。
7	木器 盤?	大片	長35.1 幅10.0 高2.9	クリ	表面やや平滑で、波状に成形痕見える。裏面自然面。皿状に上下端は反り気味。
8	木器 舟形木製品?	略完形	長23.7 幅4.2 高2.9	クリ	3面とも整形か。

2号旧河道跡

1	石器 石鉢	H-11 1/4	口(17.0) 残存高 6.8 安山岩質溶岩		口唇部荒砥二次使用。
2	石器 石鉢	1/2	口(37.4) 残存高 14.3 安山岩質溶岩		口唇部、底部中央、荒砥二次使用。
3	木器 盤?	1/2	長39.2 幅18.9 高62.0	クリ	裏面は自然面残す。

遺構外出土遺物

1	縄文土器 深鉢	1住 口縁部片	残存高 4.6	①白色岩片やや多 ②良好③にぶい赤褐	横位無節縄文R。岡山～黒沢式
2	縄文土器 深鉢	K-9 底部片	残存高 3.1	①小礫含む②良好 ③赤褐	佛歯工具による刺突文横位施文。胎土繊維。形式不明
3	縄文土器 深鉢	3住 胴～底部片	底(14.0) 残存高 5.0	①小礫多②良好 ③にぶい橙	横位縄文LR施文。前期末
4	縄文土器 深鉢	118墓地 表採 口縁部片	残存高 11.7	①小礫やや多②良好 ③にぶい褐	縦位無節縄文L。胎土繊維。岡山～黒沢式
5	縄文土器 深鉢	1列 胴部片	残存高 3.0	①小礫含む②良好 ③にぶい褐	粘土粘貼付後、半截竹管で削み、刺突文施す。諸磯b式
6	縄文土器 深鉢	C-18 胴部片	残存高 6.5	①小礫多②良好 ③橙	横位縄文LR施文。粘土粘貼付後削む。諸磯c式
7	縄文土器 深鉢	C-17 胴部片	残存高 3.3	①小礫多②堅 ③灰褐	平行沈線により縦位条線施す。諸磯c式
8	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 3.6	①小礫多②良好 ③にぶい赤褐	平行沈線により縦位条線施す。諸磯c式

第3章 上原IV遺跡

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①粘土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
9	縄文土器 深鉢	中区表土 口縁部片	残存高 3.3	①細砂多②良好 ③明赤褐	竹管による押引文施す。阿玉台1b～2式
10	縄文土器 深鉢	1列 胴部片	残存高 3.5	①白色岩片やや多 ②良好③にぶい赤褐	竹管による押引文施す。阿玉台1b～2式
11	縄文土器 深鉢	3溝 口縁部片	残存高 2.5	①小礫多②良好 ③橙	縦位キタビラ文施す。形式不明
12	縄文土器 深鉢	下区表土 口縁部片	残存高 3.3	①小礫多②良好 ③赤褐	幅5mmの工具で沈線施す。堀之内1式
13	縄文土器 深鉢	L-9 口縁部片	残存高 5.3	①小礫やや多②堅 ③黒褐	磨き後、沈線・刺突施す。内面沈線後磨き顕著。加曾利B2～B3式
14	縄文土器 深鉢	D-18 口縁部片	残存高 4.0	①白色岩片含む②堅 ③黒褐	横位単沈線施す。堀之内2～加曾利B式
15	縄文土器 深鉢	J-10 口縁部片	残存高 2.8	①小礫多②良好 ③にぶい褐	深い沈線施す。堀之内2式
16	縄文土器 鉢	I-11 口縁部片	残存高 3.0	①細砂多②良好 ③暗赤褐	細かい横位縄文LR施文後、単沈線施す。加曾利B2～B3式
17	縄文土器 深鉢	J-10 口縁部片	残存高 3.4	①小礫多②良好 ③にぶい黄褐	口縁部横位、胴部縦位縄文LR施す。堀之内～加曾利B式
18	縄文土器 深鉢	上区表土 口縁部片	残存高 2.3	①細砂多②やや軟 ③にぶい黄褐	内面より円孔穿す。堀之内2式
19	縄文土器 深鉢	D-18 口縁部片	残存高 8.1	①細砂含む②堅 ③暗褐	内外面磨き顕著。堀之内2式
20	縄文土器 鉢	B-16 口縁部片	残存高 4.0	①小礫多②堅 ③黒褐	口唇部押圧により小突起表出。加曾利B式
21	縄文土器 深鉢	D-18 胴部片	残存高 8.7	①小礫多②良好 ③にぶい黄褐	横位・縦位縄文LR施文後、単沈線で文様表出。磨り消す。堀之内2式
22	縄文土器 深鉢	C-18 胴部片	残存高 5.0	①小礫多②良好 ③褐	口縁部隆帯貼付後初め。横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出。堀之内2式
23	縄文土器 深鉢	3溝 胴部片	残存高 3.9	①小礫多②良好 ③にぶい橙	斜位縄文LR施文後、単沈線・刺突で文様表出。後期後半
24	縄文土器 深鉢	C-18 胴部片	残存高 4.7	①小礫多②良好 ③にぶい褐	横位・斜位縄文LR施文後、単沈線で同心円文など表出。磨り消す。堀之内2式
25	縄文土器 深鉢	C-18 胴部片	残存高 4.3	①白色岩片多②良好 ③橙	横位・縦位縄文LR施文後、単沈線で文様表出。磨り消す。堀之内2式
26	縄文土器 深鉢	C-17 胴部片	残存高 4.3	①細砂多②良好 ③にぶい赤褐	横位・縦位縄文LR施文後、単沈線で文様表出。磨り消す。堀之内2式
27	縄文土器 鉢	C-18 胴部片	残存高 2.7	①細砂含む②良好 ③黒褐	横位縄文LR施文後、単沈線で同心円文表出。磨り消す。堀之内2式
28	縄文土器 深鉢	上区表土 胴部片	残存高 4.0	①小礫多②良好 ③橙	横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出。磨り消す。堀之内1式
29	縄文土器 深鉢	中区表土 胴部片	残存高 4.8	①白色岩片含む ②良好③にぶい橙	幅3mmの棒状工具で高巻き文表出。堀之内2式
30	縄文土器 深鉢	C-18 胴部片	残存高 7.9	①白色岩片多②良好 ③暗赤褐	横位縄文LR施文後、単沈線施す。堀之内2式
31	縄文土器 深鉢	上区 胴部片	残存高 5.2	①小礫多②良好 ③にぶい橙	横位縄文LR施文後、単沈線で文様表出。磨り消す。内面磨き顕著。加曾利B2式
32	縄文土器 深鉢	B-16 口縁部片	残存高 6.5	①細砂含む②良好 ③灰褐	幅4mmの棒状工具の短い沈線で文様表出。加曾利B2式
33	縄文土器 深鉢	H-11 胴部片	残存高 4.0	①白色岩片やや多 ②良好③灰褐	幅4mmの棒状工具の短い沈線で文様表出。加曾利B2式
34	縄文土器 深鉢	L-9 口縁部片	残存高 4.5	①細砂含む②良好 ③暗褐	幅4mmの棒状工具の短い沈線で文様表出。加曾利B2式
35	縄文土器 深鉢	G-12 口縁部片	残存高 6.2	①小礫多②良好 ③黒褐	棒状工具回転により大きく円文を穿す。加曾利B2式
36	縄文土器 深鉢	I-10 口縁部片	残存高 3.8	①細砂多②良好 ③暗褐	粘土貼り付けにより円形透かし表出。内外面磨き顕著。加曾利B2式

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
37	縄文土器 深鉢	C-18 口縁部片	残存高 3.2	①白色岩片やや多 ②良好③黒	口唇部幅 4mmの棒状工具で文様表出。内外面磨き顕著。加曾利B 2式
38	縄文土器 深鉢	D-17 口縁部片	残存高 3.9	①細砂含む②良好 ③黒	内面磨き顕著。瓶之内2式
39	縄文土器 鉢	I-11 口縁部片	残存高 3.8	①細砂含む②良好 ③にぶい橙	口唇部指頭押圧により波状突起表出。内面磨き顕著。加曾利B 2式
40	縄文土器 深鉢	K-10 口縁部片	残存高 3.2	①小礫多②良好 ③にぶい橙	幅 3mmの棒状工具の短い沈線で文様表出。加曾利B 2式
41	縄文土器 深鉢	H-11 口縁部片	残存高 3.5	①白色岩片含む ②良好③黒褐	粘土細貼り付けによりS字状の隆帯表出。加曾利B 2～B 3式
42	縄文土器 深鉢	C-18 胴部片	残存高 6.3	①白色岩片やや多 ②良好③黒褐	棒状工具により横位・斜位沈線施す。内面磨き顕著。加曾利B 2式
43	縄文土器 深鉢	L-7 胴部片	残存高 5.6	①細砂多②良好 ③黒褐	棒状工具により斜格子文表出。内面磨き顕著。加曾利B 2式
44	縄文土器 深鉢	K-10 口縁部片	残存高 4.5	①小礫含む②良好 ③黒褐	縦位細沈線施す。加曾利B 2式
45	縄文土器 深鉢	J-9 口縁部片	残存高 3.1	①細砂多②良好 ③にぶい橙	斜位細沈線施す。加曾利B 2式
46	縄文土器 深鉢	I-12 口縁部片	残存高 6.6	①小礫やや多②良好 ③黒褐	内面磨き顕著。加曾利B 2式
47	縄文土器 深鉢	I-12 口縁部片	残存高 4.0	①小礫多②良好 ③黒褐	斜位細沈線施す。内面より円孔穿つ。加曾利B 2式
48	縄文土器 深鉢	L-9 口縁部片	残存高 2.5	①白色岩片多②良好 ③赤褐	口唇部粘土細貼り付け後、指頭押圧。斜位細沈線施す。加曾利B 1式
49	縄文土器 深鉢	K-10 胴部片	残存高 4.2	①白色岩片やや多 ②良好③にぶい赤褐	縦位細沈線施す。加曾利B 2式
50	縄文土器 鉢	I-11 底部片	底 7.0 残存高 1.4	①細砂多②良好 ③黒褐	高台状貼り付け。瓶之内～加曾利B 2式
51	縄文土器 深鉢	I-11 底部片	底 8.0 残存高 2.8	①小礫多②良好 ③にぶい赤褐	底部葉脈痕。瓶之内～加曾利B 2式
52	縄文土器 深鉢	I-12 口縁部片	残存高 4.0	①白色岩片やや多 ②良好③黒褐	外面口縁部U字形の粘土細貼り付け。口唇部突起割げか。内面縦位縄文L R施文。瓶之内～加曾利B 2式
53	縄文土器 浅鉢	D-18 口縁部片	残存高 6.4	①白色岩片やや多 ②良好③黒褐	粘土貼り付けにより円形透かし表出。内外面磨き顕著。瓶之内2式
54	縄文土器 注口土器	C-18 把手部	残存高 7.7	①細砂多②良好 ③にぶい橙	単沈線により渦巻き文表出。瓶之内2式
55	縄文土器 注口土器	I-10 胴部片	残存高 2.0	①白色岩片多②良好 ③暗褐	内外面磨き顕著。瓶之内～加曾利B 2式
56	縄文土器 注口土器	G-11 注口部片	残存高 4.0	①細砂含む②良好 ③橙	磨き顕著。瓶之内2式
57	縄文土器 注口土器	C-18 注口	残存高 5.3	①細砂多②良好 ③にぶい橙	瓶之内～加曾利B 2式
58	縄文土器 台付鉢	I-11 脚部	残存高 4.1	①細砂多②良好 ③黒	細い沈線により横位波状文表出。加曾利B 2式
59	縄文土器 鉢	I-11 胴部片	残存高 4.5	①細砂含む②堅 ③黒	太い粘土細貼り付け後、細かく削む。器面磨き顕著。後期後半
60	縄文土器 深鉢	I-12 口縁部片	残存高 4.5	①細砂多②良好 ③黒褐	横位縄文L R施文後、単沈線施し、磨り消す。内面磨き顕著。高井東式
61	縄文土器 深鉢	J-10 口縁部片	残存高 4.4	①小礫多②堅 ③にぶい赤褐	内外面磨き顕著。高井東式
62	縄文土器 深鉢	I-10 口縁部片	残存高 2.9	①細砂多②良好 ③灰褐	粘土貼り付けによる瘤状突起。幅 5mmの浅い沈線施す。高井東式
63	縄文土器 深鉢	K-9 把手部	残存高 7.0	①白色岩片多②良好 ③黒褐	粘土貼り付けによる円形突起に刺突施す。高井東式
64	縄文土器 深鉢	I-12 口縁部片	残存高 4.4	①小礫多②良好 ③黒褐	太い粘土細貼り付け後、刺突により削む。高井東式

第3章 上原IV遺跡

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
65	縄文土器 深鉢	L-9 口縁部片	残存高 3.2	①細砂多②良好 ③黒褐	粘土貼付後、凹みを施す。内面沈線後磨く。高弁束式
66	縄文土器 浅鉢	中区表土 口縁部片	口(14.0) 残存高 4.5	①白色岩片やや多 ②良好③にぶい橙	浮線により4分岐網状文施す。口唇部・胴部焼成前赤色塗彩。晩期終末
67	弥生土器 台付鉢	L-9 底一脚部	底9.2 残存高 7.2	①小礫含む②良好 ③灰褐	横位沈線施し、外面赤色塗彩。内面塗彩不明。前期
68	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 3.7	①小礫やや多②良好 ③暗赤褐	横位沈線後、器面磨く。外面赤色塗彩。前期
69	縄文土器 深鉢	1住 口縁部片	残存高 5.9	①小礫含む②堅 ③橙	浮線により工字文表出。晩期後半
70	弥生土器 鉢	中区表土 胴部片	残存高 5.1	①細砂含む②良好 ③灰褐	L R横位後、沈線で工字文表出し。赤色塗彩。前期
71	弥生土器 鉢	1住 口縁部片	残存高 3.5	①片岩多②良好 ③橙	沈線により文様施す。口唇部内外面スス付着顕著。前期
72	弥生土器 鉢	1住 口縁部片	残存高 4.4	①片岩多②良好 ③橙	沈線により文様施す。口唇部内外面スス付着顕著。71と同一個体か。前期
73	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 5.5	①細砂含む②良好 ③にぶい橙	口唇部突起に割く切む。横位沈線後、器面磨く。前期
74	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 4.5	①細砂含む②良好 ③にぶい褐	横位沈線後、内外面磨く。前期
75	弥生土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 3.6	①白色岩片やや多 ②良好③褐灰	横位沈線後、器面磨く。前期
76	弥生土器 鉢	2住 口縁部片	残存高 5.0	①小礫含む②良好 ③灰褐	沈線により文様表出後、内外面磨く。前期
77	弥生土器 壺	J-10 口縁部片	残存高 2.6	①細砂多②良好 ③褐	横位浮線施す。前期
78	弥生土器 鉢	1住 胴部片	残存高 3.6	①小礫やや多②良好 ③にぶい橙	深い沈線により文様施す。前期
79	弥生土器 鉢	1住 胴部片	残存高 4.4	①白色岩片やや多 ②良好③灰褐	深い沈線により文様表出後、器面磨く。前期
80	弥生土器 鉢	C-17 胴部片	残存高 4.5	①小礫やや多②良好 ③にぶい橙	深い沈線により文様表出後、器面磨く。前期
81	弥生土器 鉢	1住 胴部片	残存高 3.0	①白色岩片やや多 ②良好③褐灰	沈線により文様施す。前期
82	弥生土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 3.9	①小礫やや多②良好 ③にぶい橙	沈線により文様施す。前期
83	弥生土器 壺	1住 胴部片	残存高 1.8	①小礫含む②良好 ③にぶい橙	浮線により文様施す。89と同一個体。前期
84	弥生土器 壺	上区表土 胴部片	残存高 1.9	①細砂やや多②良好 ③灰褐	浮線により文様施す。前期
85	縄文土器 壺	1住、2住 口縁-胴部片	口(38.0) 残存高 14.5	①細砂多②良好 ③暗褐	口縁部横位条痕、突起棒状工具で割む。胴部磨く。胴部横位・下半斜位条痕。晩期終末～弥生前期
86	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 6.6	①白色岩片多②良好 ③黒褐	口縁部横位縄文L R後磨き、突起下判文により割む。前期
87	弥生土器 壺	中区表土 口縁部片	残存高 3.3	①小礫含む②良好 ③にぶい黄橙	斜位条痕後、横位沈線、突起下沈線により割む。前期
88	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 6.5	①小礫やや多②良好 ③暗褐	条痕後沈線により文様施す。前期
89	弥生土器 壺	1住 胴-胴部片	胴(16.0) 残存高 12.2	①白色岩片含む②堅 ③にぶい黄褐	胴部横位縄文L R後、深い横位沈線・太い割み施す。胴部斜位条痕。83と同一個体。前期
90	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 3.3	①細砂多②良好 ③灰褐	口唇部横位沈線、突起棒状工具で割む。前期
91	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 2.0	①細砂多②良好 ③灰褐	口唇部横位沈線施す。前期
92	弥生土器 壺	上区表土 胴部片	残存高 3.1	①小礫含む②良好 ③にぶい橙	斜位条痕後、横位沈線施す。前期

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
93	弥生土器 深鉢	4住 胴部片	残存高 4.3	①細砂多②良好 ③褐灰	横位沈線後、器面磨く。前期
94	弥生土器 鉢	1住 胴部片	残存高 2.0	①小礫多②良好 ③にぶい橙	横位縄文LR後、沈線施す。前期
95	弥生土器 壺	1住 胴部片	胴(32.0) 残存高 7.3	①小礫やや多②良好 ③褐	肩部横位縄文Lの遺付未施施文。胴部斜位条痕。前期
96	縄文土器 深鉢	C-17 胴部片	残存高 6.4	①白色岩片多②良好 ③褐灰	横位無節縄文L施す。晩期終末
97	縄文土器 深鉢	H-11 胴部片	残存高 4.5	①白色岩片多②良好 ③黒	横位無節縄文L施す。晩期終末
98	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 5.8	①小礫含む②良好 ③黒褐	斜位・横位に短く単節縄文LRを施す。晩期終末
99	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 7.6	①白色岩片含む ②良好③にぶい黄褐	横位条痕施す。晩期終末
100	縄文土器 深鉢	1列 胴部片	残存高 8.8	①小礫多②良好 ③にぶい黄橙	横位に粗い条痕施す。晩期終末
101	縄文土器 深鉢	1住 胴部片	残存高 7.7	①片岩多②良好 ③明褐	斜位条痕施す。晩期終末
102	縄文土器 深鉢	1住 底部片	底(8.0) 残存高 3.8	①白色岩片多②堅 ③にぶい赤褐	胴部縦位条痕、底部削代痕。晩期終末
103	縄文土器 深鉢	1住 底部片	底(10.0) 残存高 2.8	①小礫多②良好 ③にぶい褐	底部条痕痕。晩期終末
104	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 4.5	①細砂多②良好 ③褐	口唇部棒状工具で初む。口縁部横位、胴部斜位髷歯状工具 による条痕施す。内面横位刷毛目調整。中期前半
105	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 5.2	①細砂多②良好 ③にぶい赤褐	口唇部棒状工具で初む。口縁部横位、縦位髷歯状工具による 条痕施す。中期前半
106	弥生土器 壺	1住 口縁部片	残存高 4.2	①細砂多②やや軟 ③にぶい赤褐	口唇部棒状工具で初む。口縁部斜位髷歯状工具による条痕 施す。中期前半
107	縄文土器 壺	1住、C-17 胴部片	残存高 5.8	①細砂やや多②良好 ③にぶい褐	斜位条痕施す。内面磨く。晩期終末
108	弥生土器 壺	1住 胴部片	残存高 7.8	①小礫多②堅 ③橙	竹管により平行沈線、波状文を施す。中期前半
109	弥生土器 壺	1住 胴部片	残存高 5.4	①小礫多②やや軟 ③にぶい橙	横位縄文LR施文後、沈線を弧状に施す。内面横位刷毛目 調整。中期前半
110	弥生土器 壺	1住 胴部片	残存高 4.9	①細砂やや多②良好 ③橙	髷歯状工具による斜線文施す。中期前半
111	弥生土器 壺	1住 胴部片	残存高 1.9	①白色岩片多 ②やや軟③にぶい橙	髷歯状工具による山形文施す。中期前半
112	弥生土器 壺	1住 胴部片	残存高 3.4	①細砂やや多②良好 ③褐灰	沈線により文移施す。中期前半
113	弥生土器 壺	1住 胴部片	残存高 2.1	①細砂やや多②良好 ③灰褐	髷歯状工具による斜格子文施す。中期前半
114	石器 石鏃	上区表土 3/4	長1.1 幅1.5 厚0.25 重0.2g 黒曜石		刃部欠損。
115	石器 石鏃	上区表土 完形	長1.8 幅1.1 厚0.4 重0.6g 珪質変質岩		
116	石器 石鏃	I-11 完形	長1.85 幅1.4 厚0.35 重0.7g 珪質変質岩		
117	石器 石鏃	H-12 3/4	長1.75 幅1.2 厚0.4 重0.7g 珪質変質岩		基部一隅欠損。
118	石器 石鏃	G-11 完形	長1.85 幅1.5 厚0.5 重1.0g 珪質変質岩		
119	石器 石鏃	K-9 完形	長1.5 幅1.0 厚0.4 重0.3g 黒曜石		
120	石器 石鏃	I-12 3/4	長3.1 幅1.2 厚0.35 重2.1g 頁岩		基部欠損。

第3章 上原IV遺跡

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
121	石器 クサビ形石器	H-11 完形	長1.5 幅2.0 黒曜石	厚0.75 重2.0g	
122	石器 スクレイパー	J-10 完形	長2.1 幅2.0 頁岩	厚0.45 重1.9g	
123	石器 スクレイパー	H-11 完形	長3.9 幅2.0 黒曜石	厚0.85 重4.9g	
124	石器 スクレイパー	J-11 完形	長4.0 幅2.4 黒色頁岩	厚1.0 重8.8g	
125	石器 石核	I-11 完形	長2.2 幅4.7 柱状頁岩	厚1.9 重24.3g	
126	石器 石核	I-11 完形	長6.6 幅5.5 碧玉	厚2.9 重106.8g	
127	石器 磨製石斧	H-12 1/2	長6.4 幅4.2 蛇紋岩	厚2.6 重128.7g	刃部欠損。後部荒れ顕著。
128	石器 たたき石	G-11 完形	長7.1 幅4.6 安山岩	厚2.9 重148.1g	表面風化顕著。
129	石器 磨石	A-18 完形	長8.7 幅6.2 粗粒輝石安山岩	厚5.3 重459.8g	表裏二面平滑に磨る。
130	石器 くぼみ石	H-11 完形	長11.0 幅6.4 粗粒輝石安山岩	厚4.3 重414.7g	表面平滑に磨る。酸化鉄付着顕著。
131	石器 くぼみ石	H-11 完形	長12.2 幅7.6 粗粒輝石安山岩	厚3.8 重436.9g	
132	石器 くぼみ石	C-18 完形	長9.2 幅6.6 粗粒輝石安山岩	厚4.0 重348.0g	
133	土師器 杯	I-12 口縁部片	口(14.0) 残存高2.8	①細砂含む②良好 ③赤褐	外面口縁部横ナデ、体部横位へタ削り。内面横ナデ後、へタ削き。6世紀前半
134	土師器 杯	I-11 口縁部片	口(14.0) 残存高2.2	①細砂含む②良好 ③赤褐	外面口縁部横ナデ、体部横位へタ削り。内面ナデ。6世紀前半
135	土師器 杯	B-16 底部片	底(12.0) 残存高3.3	①小礫含む②良好 ③橙	外面体部へタ削り。6世紀前半
136	土師器 甕	I-12 口縁部片	口(18.0) 残存高3.9	①細砂含む②良好 ③灰褐	内外面横ナデ。6世紀前半
137	土師器 甕	I-12 口縁部片	口(18.0) 残存高4.0	①小礫含む②良好 ③にふい赤褐	外面口縁部横ナデ、体部斜位へタ削り。内面横ナデ。6世紀前半
138	土師器 甕	I住 口縁部片	口(20.0) 残存高3.8	①小礫やや多②良好 ③にふい橙	内外面横ナデ。6世紀前半
139	土師器 小型甕	B-11 胴部片	残存高5.5	①小礫多②やや軟 ③橙	風化ひどく、整形不明。6世紀前半
140	土師器 甕	上区 口縁部片	口(18.0) 残存高3.6	①小礫多②良好 ③橙	内外面横ナデ。6世紀前半
141	須恵器 杯	3溝 口縁部片	口(17.0) 残存高3.1	①小礫わずか ②還元焙普通③黄灰	クロコ成形(右回転)、9世紀第2四半期
142	須恵器 杯	H-12 口縁部片	口(16.0) 残存高4.0	①白色岩片含む ②還元焙普通③灰	クロコ成形、回転方向不明。9世紀第2四半期
143	須恵器 碗	K-9 口縁部片	口(14.0) 残存高4.1	①赤②還元焙普通 ③灰	クロコ成形、回転方向不明。9世紀第2四半期
144	須恵器 杯	L-8 底部片	底(8.0) 残存高1.0	①赤②還元焙普通 ③灰	クロコ成形(右回転)、底部回転糸切未調整。9世紀第2四半期
145	須恵器 碗	2溝 底部片	底(8.2) 残存高1.9	①白色岩片やや多② 還元焙普通③暗青灰	クロコ成形(右回転)、高台貼り付け後、ナデ。高台内回転糸切未調整。9世紀第2四半期
146	須恵器 碗	I-11 脚部	底(4.8) 残存高2.3	①赤②酸化腐やや軟 ③赤褐	ナデ整形。9世紀第2四半期

番号	種類 器種	出土位置(cm) 遺存状態	法量(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴及び備考
147	土器 壺	G-11 口縁部片	口(14.0) 残存高 4.6	①やや粗定酸化焙普通③橙	内外面横ナデ。9世紀前半
148	土器 壺	H-10 口縁部片	口(16.0) 残存高 4.8	①密定酸化焙普通③灰褐	外面口縁部横ナデ。胴部縦方向へ丸割り。内面横ナデ。9世紀前半
149	須恵器 羽釜	4住 口縁部片	口(20.0) 残存高 5.2	①白色岩片多 ②還元焙やや軟③黒	ロクロ成形。回転方向不明。胴部縦方向へ丸割り。内外面施し処理。10世紀 月夜野型
150	須恵器 羽釜	上区表土 跡	残存高 4.9	①小礫多定酸化焙や や軟③にぶい橙	ロクロ成形。回転方向不明。胴部縦方向へ丸割り。10世紀 月夜野型
151	須恵器 大甕	I-12 胴部片	残存高 3.6	①白色岩片わずか ②酸化焙普通③灰	内外面横ナデ。
152	在土土器 鍋	H-11 口縁部片	残存高 7.9	①細砂多定酸化焙普通③にぶい褐	内外面横ナデ。外面黒色処理。胴部のくびれが無く、内湾気味に立ちあがる。信濃型。
153	在土土器 鍋	中区表土 口縁部片	残存高 3.2	①細砂多定酸化焙普通③にぶい褐	内外面横ナデ。口唇部平面処理。外面黒色処理。信濃型？。
154	在土土器 鍋	中区表採 口縁部片	残存高 4.6	①細砂多定酸化焙普通③褐	内外面横ナデ。外面黒色処理。
155	在土土器 鍋	H-10 胴～底部片	底(20.0) 残存高 4.2	①細砂多定酸化焙普通③黒褐	平底。内外面黒色処理。
156	中国青磁 碗	I-11 胴部片	残存高 2.7	①密②良好 ③灰白	連弁文。輪調良、明緑灰。龍泉窯系B1～B2。13～15C。
157	越前陶器 壺?	I-10 胴部片	残存高 3.4	①密②堅 ③灰	外面透明釉。外面内、内面暗赤釉。
158	陶器 灰輪皿	I-12 口縁部片	口(14.0) 残存高 2.5	①密②良好 ③浅黄	ロクロ成形。全面施釉、オリープ。
159	磁器 碗	中区 底部片	底3.5 残存高 1.1	①密②堅 ③灰白	ロクロ成形。削りだし高台。内面全面施釉乳白色、外面高台にかかる。産地不明
160	陶器 灰輪皿	J-10 口縁～底部	口13.2 底2.4 残存高 2.9	①密②良好 ③灰	ロクロ成形。削りだし高台。高台内子目3ヶ所。全面施釉、オリープ黄。貫入顯著。見込み輪ト子付着。瀬戸美濃系、速房。
161	陶器 灰輪皿	G-11、I-10 口縁～底部	口(13.5) 底(8.0) 残存高 3.4	①密②良好 ③灰	ロクロ成形。削りだし高台。全面施釉、オリープ黄。見込み輪ト子目か。瀬戸美濃系、速房。
162	陶器 天目茶碗	中区 胴部片	残存高 1.6	①密②良好 ③淡黄	ロクロ成形。輪軸厚い。漆黒。産地不明
163	磁器 染付碗	下区表土 口縁部片	残存高 3.0	①密②良好 ③灰白	外面矢羽模文。内面2重線。釉色透明。肥前系
164	磁器 染付碗	下区表土 口縁部片	残存高 2.8	①密②良好 ③灰白	外面草花文。釉色明緑灰。波佐見系
165	磁器 皿	上区表土 口縁部片	残存高 2.1	①密②良好 ③灰白	肥前系
166	磁器 碗	下区表土 胴部片	残存高 2.4	①密②良好 ③灰白	外面菊散らし文。釉色透明。肥前系
167	染付磁器 碗	上区表土 底部片	底(4.0) 残存高 2.4	①密②良好 ③灰白	瀬戸美濃系?近代
168	染付磁器 小杯	下区表土 底部片	底(4.0) 残存高 4.3	①密②良好 ③灰白	瀬戸美濃系?近代
169	陶器 鉢	下区表土 胴部片	残存高 6.2	①やや粗定良好 ③浅黄	ロクロ成形。下縁部削り整形。輪ハギ。内面全面施釉。オリープ黄。瀬戸美濃系
170	陶器 大碗	B-11 胴部片	残存高 4.6	①密②良好 ③にぶい黄	ロクロ成形。回転方向不明。外面上半、内面全面施釉。オリープ釉。瀬戸美濃系。
171	陶器 香炉	上区表土 口縁部片	口(10.0) 残存高 4.2	①密②良好 ③にぶい黄	ロクロ成形。下縁部削り整形。外面体部全面、内面口縁部施釉。黄褐白濁顯著。口唇部輪ハギ。瀬戸美濃系
172	陶器 灯明皿	下区表土 口縁～底部	口10.2 底3.4 残存高 2.5	①密②良好 ③淡黄	ロクロ成形。胴部下半横方向削り。外面口唇部、内面全面施釉。釉色浅黄、貫入あり。外面口縁部スチ付着。
173	木製品 下駄	I-11 完形	長19.7 幅9.8 高4.7	クリ	連漕下駄。表面両部肉端成形痕顯著。

幸 神 遺 跡

第4章 幸神遺跡

第1節 調査に至る経緯と経過

幸神遺跡の調査は、ハットダム建設に伴う工事用進入路（一本松～幸神進入路）及び県道林長野原線建設に伴い調査された遺跡である。工事用進入路は、平成6年度から発掘調査の始まった長野原一本松遺跡から開始され、幸神遺跡では平成8年度と平成9年度に発掘調査が行われた。工事用進入路部分の道路は、最終的に一部が南側に移動することになり、その部分の調査を平成9年度と平成17年度に発掘調査を行った。

県道林長野原線建設に伴う発掘調査は、土地の解決している一部(F区)を平成14年度におこない、他の部分(G区)は平成17年度に行った。他に流路工事が遺跡の一部で計画されている。

常木沢防災ダム工事（その3）事業に伴い幸神遺跡東端部分から遺跡外の北に延びる道路建設が予定された。平成12年10月に県教育委員会文化財保護課が試掘調査を実施しそこに遺跡の無いことが確認された。

当初の開発計画では、遺跡内において2本の道路以外にも開発が計画されていた。しかし平成18年度の計画変更により、開発は道路部分に限定されることとなった。

平成8年度の調査概要（29地区91区・28地区100区）(A区)

平成6年度から調査の開始された長野原一本松遺跡の工事用進入路の延長として、長野原一本松遺跡との一連調査で7月から11月にかけて調査が行われた。発掘調査の結果、縄文時代早期後半の条痕文を施す土器片の出土があった。遺構としては縄文時代の土坑1基（陥穴）の他は明治時代以降の溝や時代の不明な風倒木痕跡等が確認されただけであり、長野原一本松遺跡で確認された住居や陥穴等は存在していなかった。旧石器時代の確認調査も実施したが、石器の出土は無かった。

平成9年度の調査概要（29地区91・92区、39地区2

区）(B・C・D・E区)

平成8年度に調査された西側部分である。発掘調査は平成9年7月から12月である。

調査対象地は、工事用進入路と最終的にこの道路が少し南に造り替えられる付替工事用進入路部分である。発掘調査の結果C区から、耕作方向の違う古代の畑2面と縄文時代の住居2軒と縄文時代の土坑31基が調査された。土坑1基からはほぼ完形の縄文時代中期の土器が出土している。付替工事用進入路部分のB・D区では、遺構や遺物は無かった。

平成14年度の調査概要（39地区1・2区）(F区)

県道林長野原線建設部分の調査である。土地問題の解決している部分のトレンチ調査である。発掘調査は平成14年12月である。調査対象地内に雑木林・杉・栗・たらの木等がありそれを避けての調査である。その結果遺構の存在は確認できなかった。発掘調査の出来なかった部分は、土地問題が解決した平成17年度に調査を実施し、数基の陥穴を調査した。

平成17年度の調査概要（39地区1・2区、29地区92区）(G・H・I区)

県道林長野原線建設部分のG区と付け替え工事用進入路部分H・I区の調査である。県道林長野原線工事計画の確定に伴い、発掘調査を実施した。G区では、当初東側の土地の一部が解決していなかったため、その部分を省いて調査し、解決後再度発掘調査を実施し、当遺跡の県道林長野原線建設部分の発掘調査は終了した。発掘調査は平成17年11月～12月と平成18年3月である。発掘調査の結果、土坑15基が調査された。15基中12基が陥穴であり、時期は平安時代である。土坑3基は浅く、そのうちの2基から平安時代の土器が出土している。陥穴を含めて15基の土坑はすべて平安時代のものと思われる。小穴も多く調査されたが、覆土の状態等から最近のものと思われる。H・I区では遺構や遺物は無かった。

第2節 調査の方法

調査は掘削機（バックホー）を用いて表土除去を行い、作業員による遺構確認を行う。遺構を確認し発掘調査を進めた。C区は古代の畠面と縄文時代の2面調査となった。

出土遺物は、遺構から出土したものとそれ以外から出土したものがある。遺構内から出土したものは遺構番号・遺物番号・出土位置・標高を記録し取り上げた。遺構外から出土したものは、後述するグリ

ッド単位で取り上げた。また出土位置を記録したものは、遺構出土のものと同様に取り上げた。

遺構測量は、測量会社に委託した。縮尺については、住居・土坑とも1/20を基本として、埋窠や炉や竈は、1/10を基本とした。全体図は1/200で作成した。

遺構の個別写真は主に35mmモノクローム・35mmリバーサル・6×7版モノクロームで撮影した。

第3節 調査区の設定

調査区の設定に関しては「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集[長野原一本松遺跡(1)]」に詳しいので、詳細はそちらを参照していただきたい。

本遺跡の調査区は、地区(大グリッド)と呼称する。発掘調査対象地全体に設定した1kmグリッドでは、28・29・39地区の3地区に及んでいる。その地区を1辺100mの正方形で100区分した「区」(中グリッド)

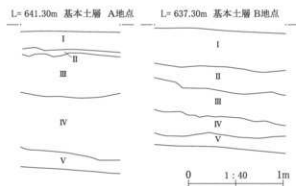
では28地区で100区、29地区で91区・92区、39地区で1区2区と合計5区が該当する。遺構名称は、区ごとに付けている。そのために小さな遺跡であるが、1号土坑が4つ存在する。その場合識別が困難なので、29区1号土坑のように区を付けて遺構番号とした。区をまたぐ遺構の場合は、遺構の主体と考えられる区の番号を付している。以上の調査区とは別に年度ごとの調査区域をA～I区と呼称した。

第4節 基本土層

幸神遺跡は、長野原地区の吾妻川左岸で、白砂川より東側の上位段丘面に位置する。この区域には、詳細分布調査によって2遺跡が確認されている。中央にあたる沢によって東西に画される段丘面のうち、東側が幸神遺跡・西側が一本松遺跡である。幸

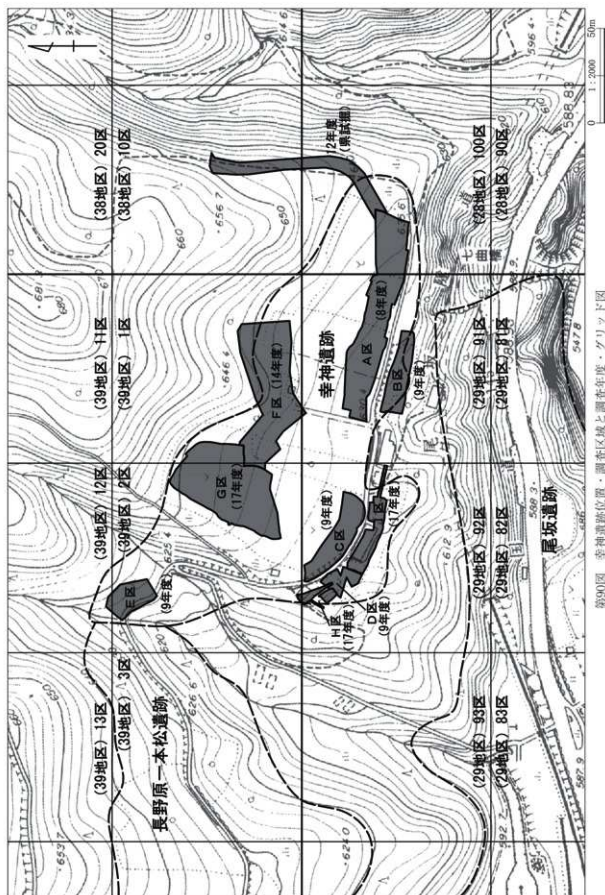
神遺跡は南にむかう緩傾斜面で、平坦面が広く南に広がっているが、遺跡中央部には南の急傾斜地に向かって南北に走る小埋没谷が確認されている。

調査地点は、傾斜の強い面の北側とならかな南側に別れ、北側は平安時代の陥穴が中心で、南側は古代の畠と、縄文時代の住居及び土坑が中心であった。基本土層はG区で、A・Bの2地点を表示した。



第89図 39地区2区基本土層図

- I. 表土
- II. 黒色土 軟質（平安時代）
- III. 黒褐色土 1～5mmの白色軽石を含む。（縄文時代）
- IV. 黒褐色土 0.5～1cmの黄褐色軽石を含む。（縄文時代）
- V. ローム新移層。



第90図 幸神遺跡位置・調査区域と調査年度・グリッド図

第5節 検出された遺構と遺物

1 概要

検出された遺構

発掘調査により、縄文時代の住居跡2軒・縄文時代の土坑32基、平安時代の土坑15基・天明3年以前の畠2面が検出された。

住居跡2軒は、平成9年度に調査された。2軒とも残りが悪く、1号住居跡は炉周辺の調査であり、住居規模も明らかでない石囲炉を持つ住居跡である。2号住居跡は、1号住居跡の西側に位置する。住居全体の調査は出来たが、遺構確認面から床面までが浅かった。住居中央部に土器埋設炉が造られていた。明瞭な柱穴は確認出来なかった。

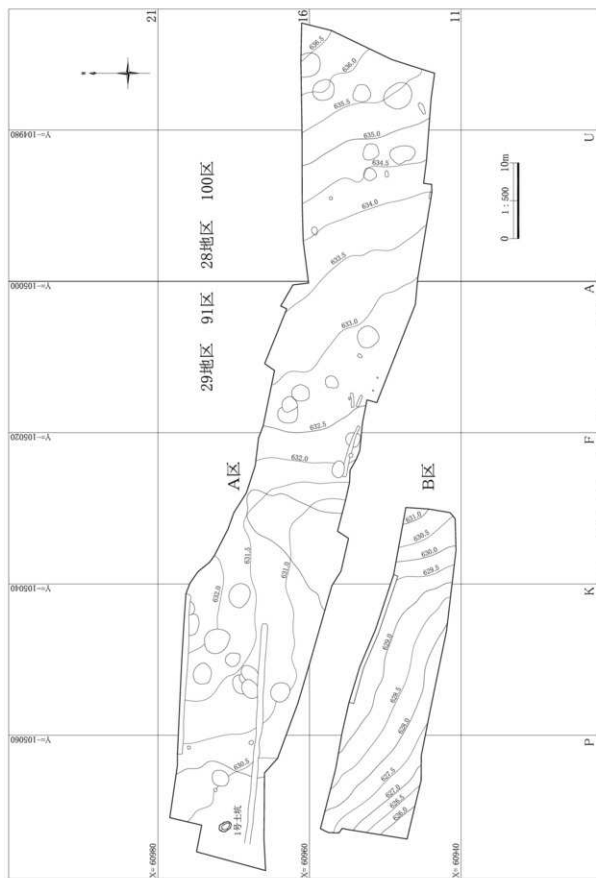
土坑は、土器を出土した土坑として、ほぼ完形の縄文時代中期の阿玉台II式の土器を埋置した92区32号土坑と、平安時代の甕の口縁部を出土した2区10・12土坑があげられる。他の土坑は、縄文時代と平安時代の陥穴と縄文時代と平安時代の土坑である。調査区南側の29地区91・92区では、全て縄文時代であり、北側の39地区1・2区の土坑は全て平安時代に属すると思われる。

畠は、29地区92区で確認されている。調査範囲内で10m近くの間隔をおいて2カ所確認された。西側の畠は、地形の等高線に直行するような状態で、横が密集していた。横の間隔は45cm前後である。東側の畠は、等高線に平行しており、横の間隔は60cm前後に1本程度である。

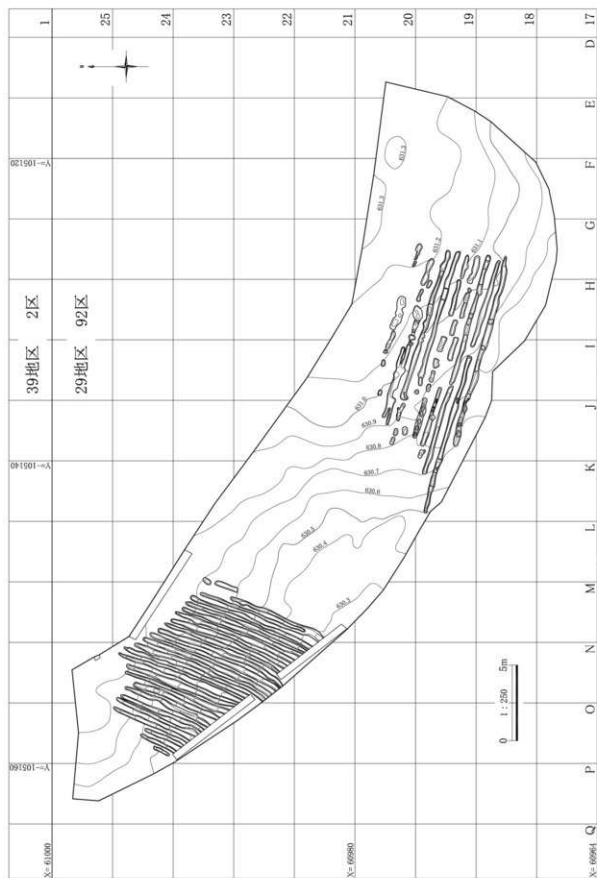
どのような作物が栽培されていたのかについて、自然科学分析（植物珪酸体分析）を行った。その結果浅間A軽石（As-B 1783年）の下層からイネやオオムギ族（穀の表皮細胞）が検出された。しかしこの畠の土壌からはイネ科栽培植物に由来する分類群は検出されていないために、どのような植物が栽培されていたかは不明である。

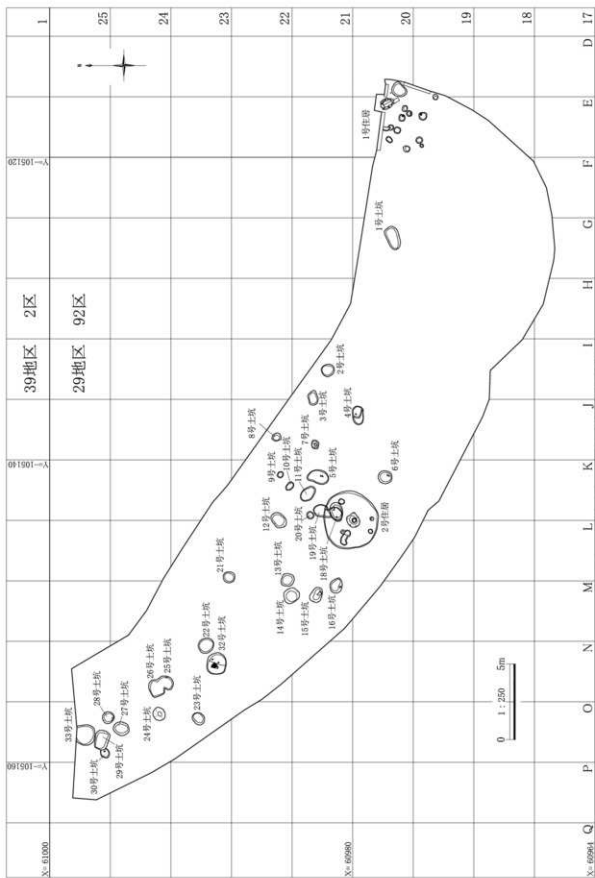
検出された遺物

縄文時代の土器が主であり、次に多いのが石器である。1号住居跡からは縄文時代中期後半の加曾利E3段階の深鉢が前期末の土器の破片とともに出土している。2号住居跡からは中期後半の加曾利E1段階の焼町土器が土器埋設炉として使用されていた。他に前期末や阿玉台式の土器の破片が出土している。土坑から出土した遺物として、92区32号土坑から縄文時代中期前半の阿玉台式土器のほぼ完形品が出土している。他に2区10・12号土坑から平安時代9世紀の土師器甕の口縁部が出土している。グリッド遺物としては、縄文早期・前期・中期・後期・晩期から弥生前期また平安時代の土器と多くの縄文時代の石器が出土している。早期の土器は稲荷原式土器など、前期末から中期初頭の土器は十三菩提式から五領ヶ台式にかけて、中期の土器は、勝坂式・阿玉台式・焼町土器が、後期の土器は五領ヶ台式が出土している。石器は石鏃・ドリル・打斧・削器・石核・石刃・磨石・たたき石・スタンプ形石器等である。ほかに平安時代の甕の口縁部と江戸時代の寛永通宝の破片と思われる銭が出土している。

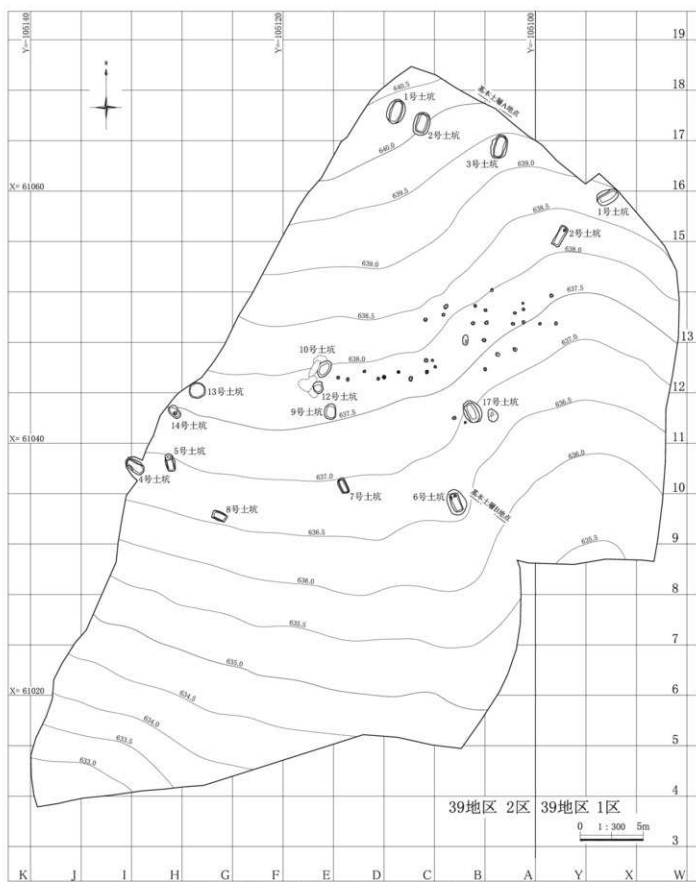


第91図 28地区100区・29地区91区 (A・B区) 土坑全体図





第933図 29地区92区 (C区) 住居・土坑全体図



第94図 39地区1・2区 (GIX) 土坑・小穴全体図

2 竪穴住居跡 (29地区92区)

1号住居跡 (第95図、第97図、P.L59・68)

位置 29地区92区 D・E—19・20グリッド

概要 C区東端部で確認された。北と東側は調査範囲外であり、住居の一部の発掘調査である。石囲炉と土器の存在から住居跡が確認されたが、住居跡の範囲は確認できなかった。東側の住居範囲は断面で掘込面を確認した。北側と東側は調査範囲外であったために、調査できなかった。

重複 なし **形状** 不明 **規模** 不明

床面 部分的に貼床が認められた。

炉 扁平な円礫を主体とする方形の石囲炉、床面で石囲炉を確認した段階では、南面を除く5個の炉石が確認できた、断ち割り調査の結果床面段階では確認できなかった南側の炉石が、床面下に埋もれた状態で2個確認出来た。炉内の土層断面調査の結果、炉廃棄段階で意図的に炉内を南側に向かって影りこんで炉の一部を壊した。そのときに南側にあった炉石2個が掘られ深く埋められたものと思われる。炉の規模は、石囲炉の石の短軸方向で0.68m、長軸方向では、南側の石が動かされているために不明である。

現状では0.96mを計ることが出来る。

柱穴 小穴は多く確認されたが、明らかな柱穴は確認できなかった。小穴は、直径が40から50cmで炉周辺の高さからの深さは11cm～40cmほどある。それぞれの小穴の深さは図上で示した。

遺物 炉南側を中心に中期後半の唐草文・加曾利E3及び前期末～中期初頭の土器片が多く出土した。

時期 中期後半である。

2号住居跡 (第96図、第98・99図、P.L60・68)

位置 29地区92区 K・L—20・21グリッド

概要 C区中央部で確認された。住居全体を発掘することが出来たが、残りは悪かった。

重複 なし **形状** ほぼ円形

規模 東西方向3.8m 南北方向3.6m、壁高は残りのよい東面で0.19m 残りの悪い西面では1cm。

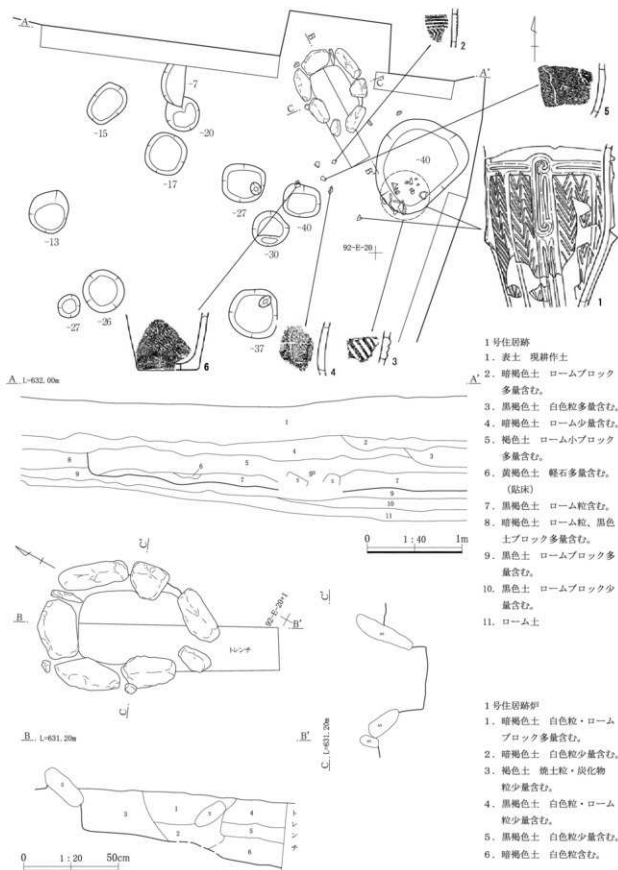
床面 残りが悪く、床面は残っていないかった。

炉 住居中央部分に、土器埋設炉が造られていた。埋設土器は胴下半を欠いた焼町土器を使用し、口縁部を上にした状態で埋められていた。埋設土器周辺を精査したが、埋設土器を囲むような石囲炉として石を並べた痕跡は無かった。しかし炉の確認面が低かったために浅い石で囲まれていた可能性は考えられる。埋設土器内の覆土下部には、多くの焼土粒が残っていたために、炉として使用されていた。埋設土器外側は、少し低くなっていたが、焼土及び炭化物は、確認されなかった。その部分を含めた炉の規模は、長軸方向0.90m、短軸方向78cm 深さは埋設炉頭部から掘込面底部までで0.25mであった。

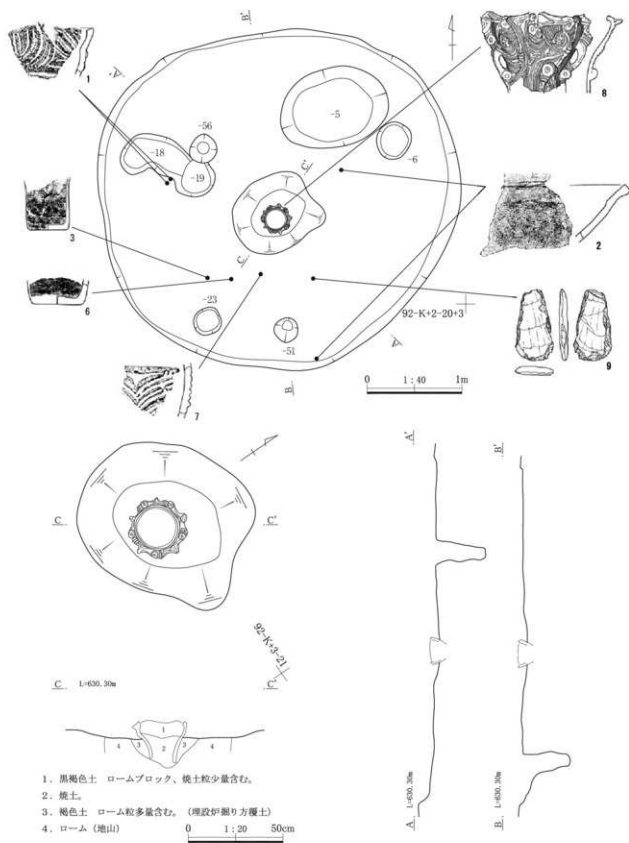
柱穴 小穴は多く確認されたが、明らかな柱穴は確認できなかった。小穴は、直径が27から115cmで炉周辺の高さからの深さは4cm～54cmほどある。それぞれの小穴の深さは図上で示した。

遺物 焼町の埋設土器のほかには、炉の周辺から阿玉台・焼町・及び前期末～中期初頭の土器片が出土した。

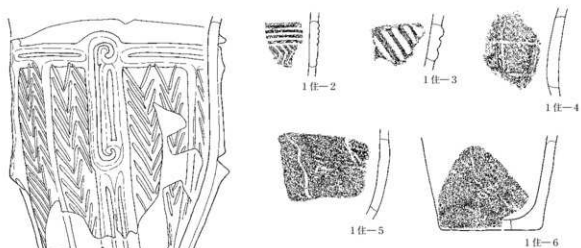
時期 中期中頃である。



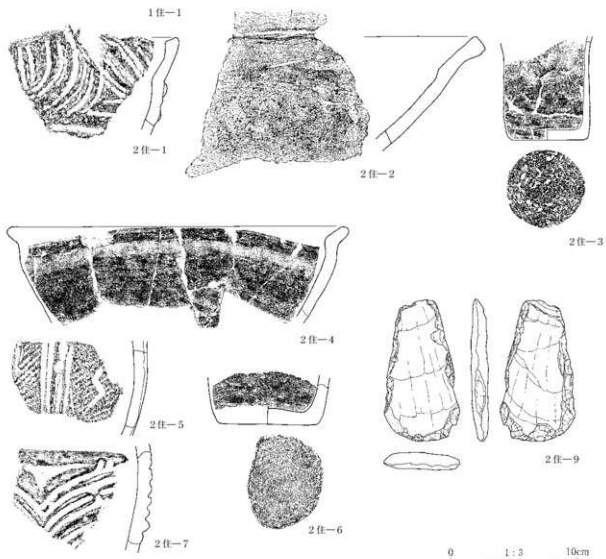
第95図 29地区92区1号住居跡



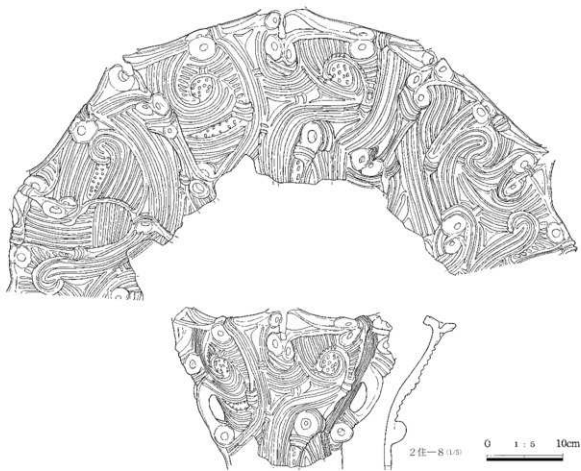
第96図 29地区92区2号住居跡



第97图 92区1号住居出土遺物



第98图 92区2号住居出土遺物(1)



第99図 92区2号住居出土遺物(2)

第9表 住居跡出土遺物観察表

92区1号住居

番号	器種	残存状態 計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	胴部 胴部16.5 残存高20.6	雲母粒を少量含む。良好。橙色。	口縁部と胴下半部欠、他の部分はほぼ定形。3条の隆帯による縦管文を4ヶ所、その間に1条の隆帯を垂下させる。縦管文上部を2状の横位隆帯で結び区画している。区画内を矢羽状沈線で施文する。	中期後半 磨草文系
2	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。橙色。	深鉢胴部の小破片。細い平截竹管による集合沈線。上部は、横位方向、下部は矢羽状に施文する。	前期末
3	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。灰褐色。	深鉢胴部の小破片と思われる。やや太い平截竹管による集合沈線。	前期末
4	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。橙色。	深鉢胴部の小破片。縦位L Rの縄文。 沈線を垂下させる。	加曾利EⅢ 4・5・6同一個体
5	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。橙色。	深鉢胴部の小破片。縦位L Rの縄文。 蛇行する沈線を垂下させる。	加曾利EⅢ 4・5・6同一個体
6	深鉢	底部片	砂粒を少量含む。良好。黒褐色。	器表面が荒れているが、縦位L Rの縄文の痕跡が残る。	加曾利EⅢ 4・5・6同一個体

92区2号住居

1	深鉢	口縁部片	小さな雲母を多く含む。良好。赤褐色。	口縁部が内傾し凹状になっている。突起がつく欠損、口縁部に曲線縦文、下部に横方向隆帯、隆帯にそって複数の沈線を施文。	焼町
2	浅鉢	口縁部片	小さな雲母を多く含む。良好。暗褐色。	口縁部は内側に段を持つ。内外面横方向のへら磨き、施文無し。	阿玉台

番号	器種	残存状態 計測値	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考			
3	深鉢	胴下半1/3～ 底部完形	小さな雲母を多く含む。 良好。赤褐色。	小さな深鉢である。胴部の器内が薄い。器表面は磨かれて光沢をもつ。施文なし。	中期中葉			
4	浅鉢	口縁部1/2	雲母を多く含む。良好。	口縁部は短く外反する。施文無し。	中期中葉			
5	深鉢	胴部片	小さな雲母を多く含む。 良好。	施文は縦位のR L織文を施文。垂下隆線に沿って2条の沈線。織文の間に縦位の波状沈線文。	中期中葉			
6	深鉢	胴下半～底部 2/3	小さな雲母を多く含む。 良好。褐色内面黒色。	外面と底部よく磨かれている。施文無し。	中期中葉			
7	深鉢	胴部片	小さな雲母を多く、長石を少量含む。良好。褐色。	下部に曲隆線文、上部中央に三叉状の印刷文。隆帯に沿って複数の沈線。二ヶ所に刺突文が認められる。	後期			
8	深鉢	体部下平欠損	石英・雲母を含む。良好。褐色。	口縁部波状突起5単位、(欠損している)口縁部突起の下に5個の反環状突起、口縁部突起の間に横方向の反環状の小突起5個、胴部に反環状の小突起5個、横状突起2単位、位置が不規則、沈線は平行沈線重複施工後調整を加える。	後期 埋設伊 口縁部の突起は埋塞 知のために欠損			
番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
9	打製石斧	完形	111	59	14	120.2	雲母輝石普通輝石安山岩	

3. 土坑 (第100～108回、第109回、P L61～67・69)

土坑は全部で32基調査した。縄文時代が32基で、平安時代の土坑が15基であると考えられる。土坑に時代をどのように決めるかは難しい問題であるが、当遺跡では以下の理由から時代を決めた。

遺構から出土する土器を持って、時代を決めることが、最良の方法であるが、土坑から出土する遺物は少なく、まして完形品に近い遺物が埋められている例はさらに少ない。当遺跡では、29地区92区32土坑から縄文時代中期の阿玉台の完形品が埋められた状態で出土した。縄文時代に掘られた土坑である。他に39地区2区10号と12号土坑から、平安時代の9世紀中頃の土器器裏の破片が出土している。大きな破片でないために、流れ込みの可能性もあるが、両土坑が近接し、土坑の形態も近いために、平安時代に掘られた土坑であると考えられる。

出土物の他に、土坑の覆土の違いや土坑の形態で時期の推定も可能である。当遺跡では縄文時代の住居の覆土には、少量のローム粒子を含む黒褐色を主として、平安時代の土器を出土している土坑の覆土上層は、ローム粒子を含む量の少ない黒色土が多い。29地区の土坑は、91区1号土坑以外上層覆土は暗褐色土または褐色土であり、縄文時代の可能性が高い。39地区の土坑は、覆土上層にローム粒をほとんど含まない黒色土となっており、平安時代の可能

性が高い。

また形態の違いから、時代を推定することも、可能である。39地区の土坑の多くで陥穴と考えられている土坑は、これまで立馬遺跡や現在調査中の上ノ平1遺跡調査の調査例から、平安時代の住居を掘り込んで作られている例が知られている。この楕円形の深い土坑はおそらく平安時代の陥穴と考えられる。

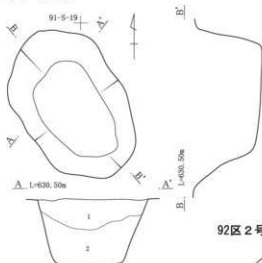
また、土坑の位置するところに、他の遺構がどのように造られていたかによって、土坑の時期の推定も出来る。29地区で、土坑の確認できる調査面からは確認された住居と阿玉台式の関係の土器を出土した土坑は、縄文時代である。39地区で土器を出土している2区10・12号土坑は平安時代と考えられる。このように、出土土器・覆土・形態から検討した結果、29地区では91区1号土坑以外は全て縄文時代、39地区では全て平安時代に属する。

土坑の用途は、29地区92区32号土坑に完形の縄文時代中期の阿玉台式の土器を出土している土坑は、墓塚の可能性が高い。29地区91区1号土坑・39地区1区1・2号土坑・39地区2区1～9号土坑・14号土坑・17号土坑が平安時代の陥穴と考えられる。他の土坑の用途は不明である。

第10表 土坑一覧表

	土坑 番号	平面形態	規模 (cm)			グリッド	調査年度	備考
			長軸	短軸	深さ			
29地区91区	1	楕円形	167	117	70	R・S-18	平成8年度	平安時代陥穴
29地区92区	1	楕円形	156	87	30	G-20	平成9年度	縄文時代
29地区92区	2	円形	86	84	30	I-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	3	楕円形	93	65	45	I・J-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	4	楕円形	123	73	34	J-20	平成9年度	縄文時代
29地区92区	5	楕円形	143	97	34	K-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	6	円形	91	85	43	K-20	平成9年度	縄文時代
29地区92区	7	円形	57	50	46	J-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	8	円形	62	55	42	J-22	平成9年度	縄文時代
29地区92区	9	円形	43	40	36	K-22	平成9年度	縄文時代
29地区92区	10	円形	64	43	50	K-22	平成9年度	縄文時代
29地区92区	11	楕円形	118	80	38	K-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	12	楕円形	114	84	62	K・L-22	平成9年度	縄文時代
29地区92区	13	円形	95	88	77	L・M-22	平成9年度	縄文時代
29地区92区	14	円形	107	95	90	M-21・22	平成9年度	縄文時代
29地区92区	15	楕円形	102	76	65	M-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	16	楕円形	100	81	43	M-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	18	楕円形	95	89	47	K-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	19	楕円形	128	83	40	K-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	20	円形	51	50	44	K-21	平成9年度	縄文時代
29地区92区	21	円形	77	72	40	L-23	平成9年度	縄文時代
29地区92区	22	円形	105	97	59	N-23	平成9年度	縄文時代
29地区92区	23	円形	88	71	45	O-23	平成9年度	縄文時代
29地区92区	24	円形	90	78	35	O-24	平成9年度	縄文時代
29地区92区	25	楕円形	107	78	48	O-24	平成9年度	縄文時代
29地区92区	26	楕円形	116	95	45	N-24	平成9年度	縄文時代
29地区92区	27	楕円形	117	100	59	O-24	平成9年度	縄文時代
29地区92区	28	円形	80	79	60	O-25	平成9年度	縄文時代
29地区92区	29	円形	128	85	54	O-25	平成9年度	縄文時代
29地区92区	30	長方形	72	59	49	O-25	平成9年度	縄文時代
29地区92区	32	円形	142	129	80	N-23	平成9年度	縄文時代中期阿玉台式土器の ほは(定形品)出土
29地区92区	33	円形	135	125	54	O-25	平成9年度	縄文時代
39地区1区	1	楕円形	175	112	65	X-15	平成17年度	平安時代陥穴
39地区1区	2	長方形	175	68	85	Y-15	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	1	楕円形	194	149	126	C-17	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	2	楕円形	185	126	137	C-17	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	3	楕円形	184	131	78	A-16・17	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	4	楕円形	153	92	112	H・I-10	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	5	長方形	139	82	63	H-10	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	6	楕円形	205	143	175	B-9	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	7	長方形	130	65	105	D-10	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	8	長方形	120	72	80	G-9	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	9	楕円形	124	90	55	E-11	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	10	楕円形	147	95	25	E-12	平成17年度	平安時代9世紀の奥口縁部出土
39地区2区	12	楕円形	95	80	36	E-12	平成17年度	平安時代9世紀の奥口縁部出土
39地区2区	13	円形	130	125	42	G-11・12	平成17年度	平安時代
39地区2区	14	楕円形	114	75	84	H-11	平成17年度	平安時代陥穴
39地区2区	17	楕円形	186	135	114	B-9-11	平成17年度	平安時代陥穴

91区1号土坑



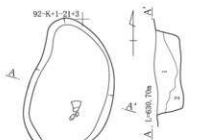
1. 黒色土 炭化物含む。
2. 黒褐色土 黒色土ブロックに含む。

92区4号土坑



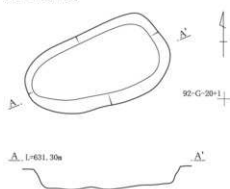
1. 暗褐色土 白色粒、ローム粒・ブロック少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
3. 黒褐色土 白色粒、ロームブロック多量、ロームブロック少量含む。

92区5号土坑

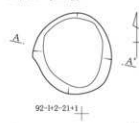


1. 暗褐色土 白色粒多量、ローム粒・ブロック少量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒・ブロック少量含む。

92区1号土坑

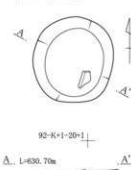


92区2号土坑



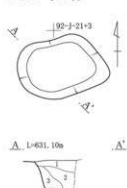
1. 暗褐色土 ローム粒・ブロック少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
3. 褐色土 ロームブロック少量含む。

92区6号土坑



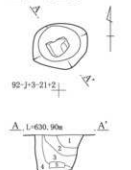
1. 暗褐色土 ローム粒・ブロック少量含む。
2. 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
3. 褐色土 ロームブロック多量含む。

92区3号土坑



1. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒、ブロック少量含む。
3. 黒褐色土 ロームブロック少量含む。

92区7号土坑



1. 暗褐色土 白色粒少量含む。
2. 暗褐色土 白色粒、ロームブロック少量含む。
3. 黒褐色土 白色粒、ロームブロック少量含む。
4. 暗褐色土 (地山)

0 1:40 1m

第100図 29地区91区1号土坑・29地区92区1～7号土坑

92区8号土坑



△ L=630, 90m

1. 褐色土 白色粒、ローム粒多量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
3. 暗褐色土

92区9号土坑



△ L=630, 90m

1. 暗褐色土 ローム粒、白色粒含む。
2. 暗褐色土 白色粒少量含む。
3. 黒褐色土

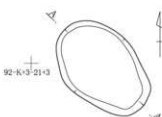
92区10号土坑



△ L=630, 80m

1. 暗褐色土 白色粒少量含む。
2. 暗褐色土 白色粒、YPK多量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4. 暗褐色土

92区11号土坑



△ L=630, 70m

1. 暗褐色土 白色粒、ローム粒少量含む。
2. 暗褐色土 白色粒、ローム粒多量含む。
3. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。

92区12号土坑



△ L=630, 70m

1. 褐色土 白色粒、ロームブロック多量含む。
2. 暗褐色土 白色粒、ローム粒少量含む。
3. 褐色土 白色粒、ロームブロック少量含む。

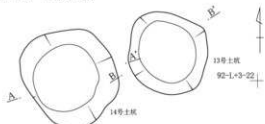
92区15号土坑



△ L=630, 40m

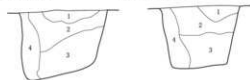
1. 暗褐色土 ローム粒・ブロック少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・ブロック微量含む。
3. 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒・ブロック少量含む。

92区13・14号土坑



△ L=630, 50m

△ A', B, L=630, 50m

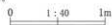


13号土坑

1. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
3. 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒少量含む。

14号土坑

1. 暗褐色土 白色粒、ロームブロック少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック多量、白色粒、ローム粒少量含む。
3. 黒褐色土 白色粒、ローム粒、ロームブロック少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒少量含む。



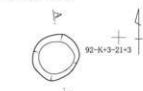
第101図 29地区92区8～15号土坑

92区16号土坑



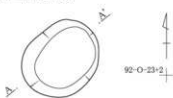
1. 暗褐色土 ローム粒微量含む。
2. 褐色土 ローム粒少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック多量含む。
4. 暗褐色土 ロームブロック微量含む。

92区20号土坑



1. 暗褐色土 YPK少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

92区23号土坑



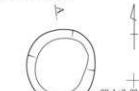
92区18・19号土坑



18号土坑

1. 暗褐色土 白色粒少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒多量含む。

92区21号土坑



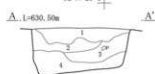
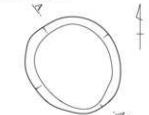
1. 暗褐色土 白色粒、ローム粒少量含む。
2. 褐色土 白色粒、ロームブロック多量含む。
3. 暗褐色土 白色粒、ロームブロック少量含む。



19号土坑

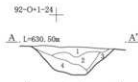
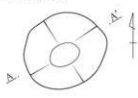
1. 暗褐色土 YPK少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

92区22号土坑



1. 暗褐色土 白色粒、ロームブロック少量含む。
2. 褐色土 白色粒、ロームブロック多量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
4. 褐色土 白色粒、ローム粒・ロームブロック少量含む。

92区24号土坑



23号土坑

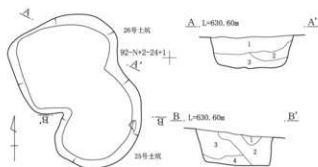
1. 暗褐色土 ローム粒微量含む。
2. 褐色土 ロームブロック・白色粒多量含む。
3. 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。
5. 地山

24号土坑

1. 暗褐色土 白色粒・ローム粒微量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
3. 褐色土 ロームブロック微量含む。
4. 褐色土 ロームブロック・白色粒少量含む。

第102図 29地区92区16・18～24号土坑

92区25・26号土坑



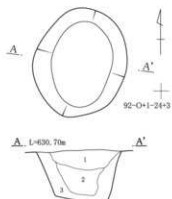
25号土坑

1. 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック・白色粒微量含む。
3. 褐色土 ロームブロック多量含む。
4. 暗褐色土 白色粒微量含む。

26号土坑

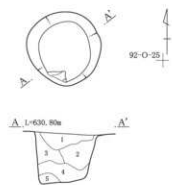
1. 褐色土 ロームブロック多量、ローム粒・白色粒少量含む。
2. 黒褐色土 ロームブロック・白色粒微量含む。
3. 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒・白色粒少量含む。

92区27号土坑



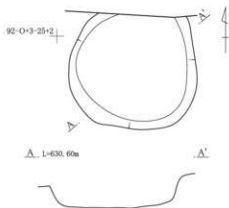
1. 暗褐色土 ローム粒少量含む。
2. 褐色土 ローム粒・白色粒少量含む。
3. 褐色土 白色粒多量、ロームブロック・ローム粒少量含む。

92区28号土坑

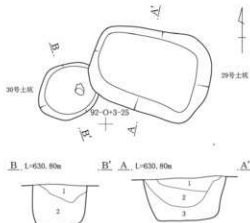


1. 暗褐色土 ローム粒微量含む。
2. 褐色土 ロームブロック主体、黒色土混入。
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒微量含む。
5. 褐色土 ロームブロック主体土、黒色土少量混入。

92区33号土坑



92区29・30号土坑

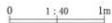


29号土坑

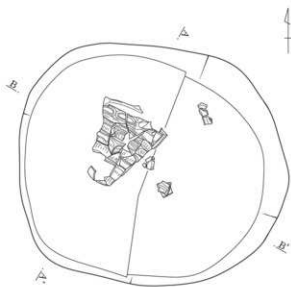
1. 暗褐色土 ローム粒・白色粒少量含む。
2. 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。
3. 褐色土 ローム粒多量含む。

30号土坑

1. 暗褐色土 ローム粒微量含む。
2. 褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。



92区32号土坑



92-N°2-23

A. L=630.10m



B. L=630.10m



92区32号土坑 (第104図, 第109図, P. L. 64・65・69)

平成9年度調査区西側で単独で検出された。北東に22号土坑が近接し、北西に23～26号土坑等が群在するように、西側土坑群の一隅を占める位置である。周辺は南西への緩やかな傾斜地形であり、黒褐色土の堆積が厚く、遺構確認は黒褐色土中に留めたが、土坑埋土も黒褐色土や暗褐色土を主体としており、そのため平面形や壁の検出に際して判断に苦慮した。長軸を西北西に持ち、平面形は、約1.5×1.3m程の不整形円形を呈し、深さは約45cmを測る。土坑底面付近の基盤層は黄褐色土で、延長する壁の立ち上がりは直立気味でしっかりとした掘り込みである。土坑底面は、僅かな凹凸が見られる程度で、ほぼ平坦面を築く。

尚、土坑底面東半は調査時の過掘による段差である。出土遺物は、土坑中央やや北東寄りに阿玉台式の深鉢(32土-1)が横位に潰れた状態で出土している。土坑底面より数cm浮いた状態で、口縁部を北東に向ける。突起・底部の一部を欠損するがほぼ完形の出土といえよう。土器本体の傾斜は顕著ではなく、平坦に埋置した状態が想起されよう。

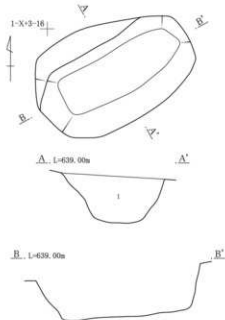
その他の出土遺物には、同一個体の勝坂式の胴部破片(32土1・2)、碧玉製削器(32土-4)が伴出している。阿玉台式土器は個体としては、単体の出土であり良好な共伴例ではないものの、出土状態は、意図的に埋置された例であり、土坑の性格として墓塚等の有機的な用途が想定できよう。調査区内には同様な例が無いが、群馬県内では土坑単体出土の阿玉台式土器の例は多く、本例も吾妻川中流域の一例に加えることができよう。土坑の時期は出土土器から阿玉台Ⅱ時期と判断したい。

(山口)

0 1:20 50cm

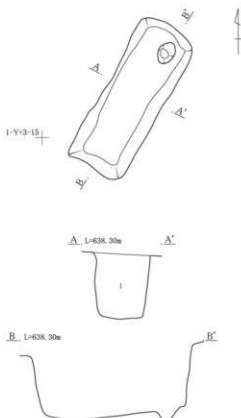
第104図 29地区92区32号土坑

1区1号土坑



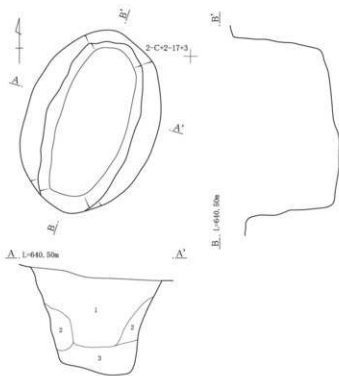
1. 黒色土 ローム粒・YPK含む。

1区2号土坑



1. 暗褐色土 ローム粒・YPK含む。

2区1号土坑



1. 黒色土 黄軽石含む。
2. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック含む。
3. 暗褐色土 YPK含む。

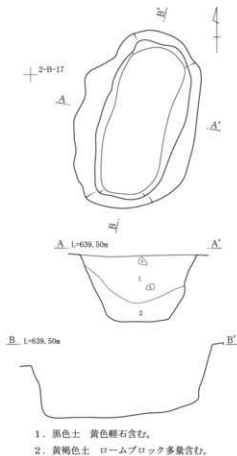


第105図 39地区1区1・2号土坑 2区1号土坑

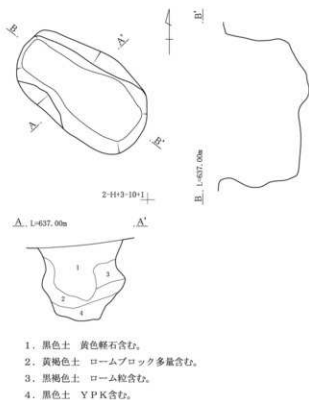
2区2号土坑



2区3号土坑



2区4号土坑



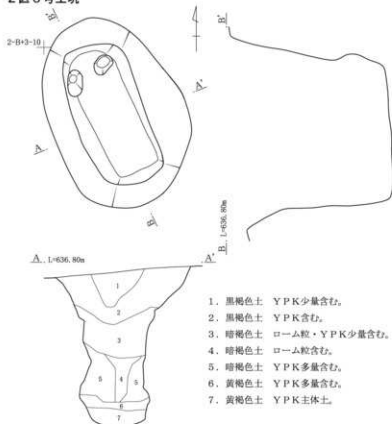
2区5号土坑



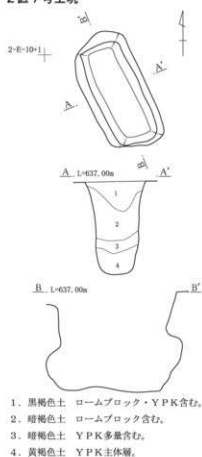
0 1:40 1m

第106図 39地区2区2～5号土坑

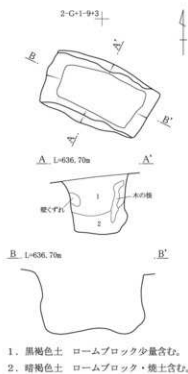
2区6号土坑



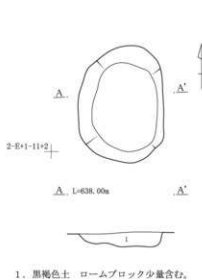
2区7号土坑



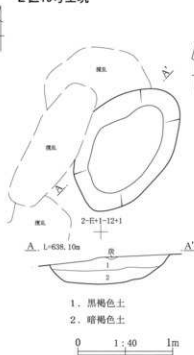
2区8号土坑



2区9号土坑

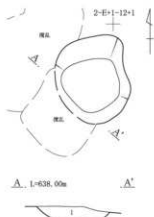


2区10号土坑



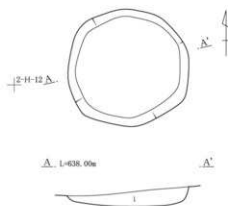
第107図 39地区2区6～10号土坑

2区12号土坑



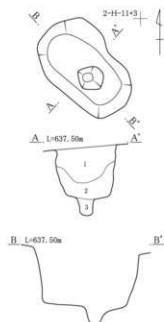
1. 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒多量含む。

2区13号土坑



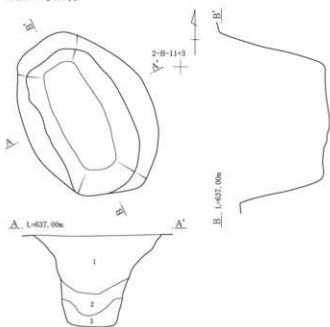
1. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。

2区14号土坑

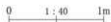


1. 黒色土 黄色軽石含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・Y P K含む。
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック含む。

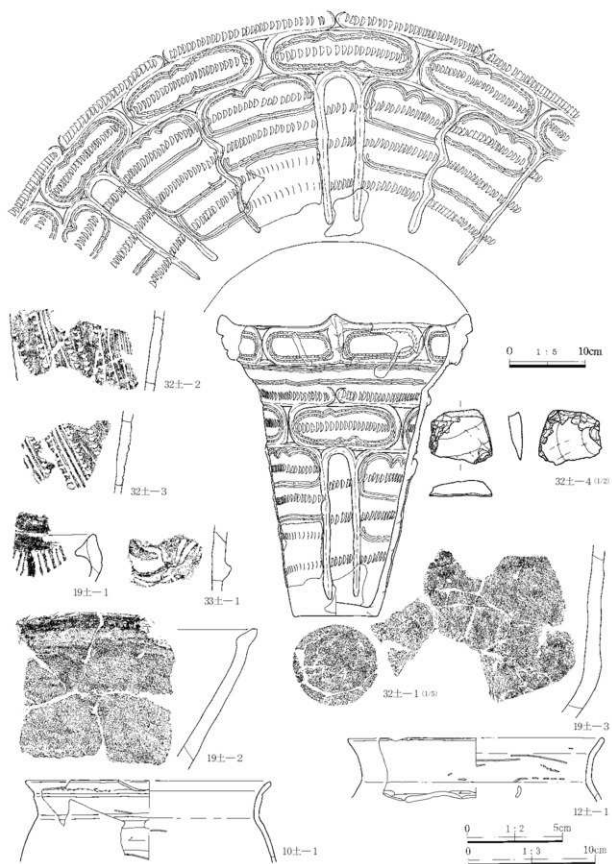
2区17号土坑



1. 黒褐色土 ローム粒含む。
2. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック含む。
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・Y P K多量含む。



第108図 39地区2区12~14・17号土坑



第109図 92区19・32・33 2区10・12号土坑出土遺物

第4章 幸神遺跡

第11表 土坑出土遺物観察表

92区32号土坑

番号	器種	残存状態 計測値(cm)	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
1	深鉢	高さ38.8(突起 40.0)口径28.5 (突起34.0)底部 11	石英・雲母多量に含む。 普通。褐色。	口縁部小波状突起と2列の楕円区画4単位、頸部複列の縮節 沈線2段、体部上半楕円区画4単位、体部下半波状懸垂文と 2条の垂下陰線交互配列、2a+2b4単位 底部に編文 がわずかに残る。体部に横位刻目が多数に配される特色を 持つ。	阿玉台Ⅱ 体部上半と内面体 部下半に窪付着
2	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。普通。 赤褐色。	4本の沈線を縦位に施した後、左右に刺突文	磨坂
3	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。普通。 赤褐色。	4本の沈線を縦位に施した後、左右に刺突文	磨坂

番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
4	煎器	完形	28	32	7	7.5	碧玉	

92区19・33号土坑

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
19号土坑1	深鉢	口縁部	石英と長石を含む細砂粒をや や多く含む。良好。褐色。	口縁部内側にせり出している。口縁部に横と縦方向の 陰帯その間を複数の沈線。	焼町
19号土坑2	深鉢?	口縁-胴部	雲母と石英を多く含む。良好。 にぶい褐色。	口縁部が外反する。内外器表面積まで。	3と同一 中期中葉
19号土坑3	深鉢	胴下部片	雲母と石英を多く含む。良好。 にぶい褐色。	胴下半から底部にかけての破片。内外器表面積まで。	2と同一 中期中葉
33号土坑1	深鉢	胴部片	雲母と石英を多く含む。良好。 赤褐色。	曲陰帯とその周りに複数の沈線。扉体LRの単筋斜線文	焼町

2区10・12号土坑

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・備考
10土坑	甕	口縁部片	砂粒を少量含む。良好。褐色。	口縁部横まで、胴上部横方向へら削り。	9世紀中頃
12土坑	甕	口縁部片	砂粒を少量含む。良好。褐色。	口縁部横まで、頸部両端に沈線、胴上部横方向へら削り。	9世紀中頃

4. 畠跡 (第110~113回、P.L57・58)

畠跡は、C区とした29地区92区に位置する調査区で確認された。これは、畠の横に相当する溝状の耕作痕と考えられる。

耕作痕の確認状況は、土層断面の2b層下・3a層上面において、2b層を覆土とする溝状のプランが確認できた。また、この溝状プランは、集中する形で調査区の東側と西側の2箇所を確認された。

調査区の東側は、台地状に高まる地形を呈し、近現代の耕作による攪乱で不明瞭な部分もあったが、等高線に沿うように東西方向に走る溝状の耕作痕が確認された。この形状は、西側のもの比べて溝間の間隔が広く、溝の底面には耕作の単位とも見られる細かな凹凸が看取された。

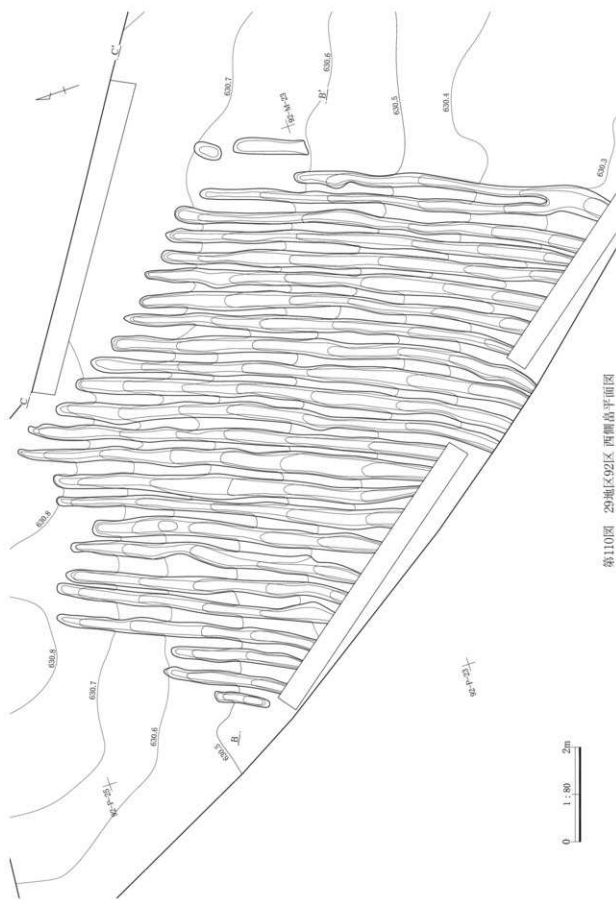
調査区の西側は、谷地状の凹地が埋没している地形で、黒色土の堆積が厚く、等高線が褶曲している。溝状の耕作痕は、等高線に直交するように南北方向に走り、形状は溝間の間隔が狭く密集する様相で、溝の底面も整然として明瞭な凹凸は看取され

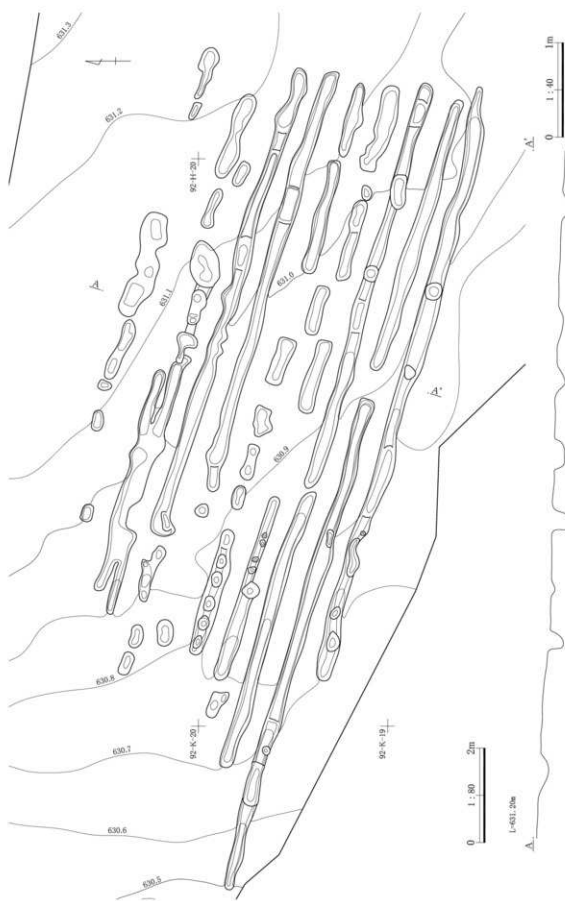
なかった。

この耕作痕の年代について、自然科学分析の結果では、耕作の基底面が浅間柏川テフラ (As-Kk、1128年) 以前である可能性が示唆されている。これは、土層断面の2b層の中位において、テフラ起源と見られるシルト質土のブロックが看取され、これが浅間Bテフラ (As-B、1108年) か、浅間柏川テフラに比定されたことによる。

しかし、このテフラは二次的なものと考えられ、耕作痕の形成過程としては、テフラを含む2b層を攪拌する耕作が3a層まで及んだために、その痕跡が溝状にプリントされたものと考えられる。

また、2a層にある浅間A軽石 (As-A、1783年) が2b層まで及ばない点を踏まえると、この溝状耕作痕の年代は、平安時代以降で中世を経て、浅間A軽石以前にあたる近世までの時間幅に位置づけられるものと考えたい。(諸田)



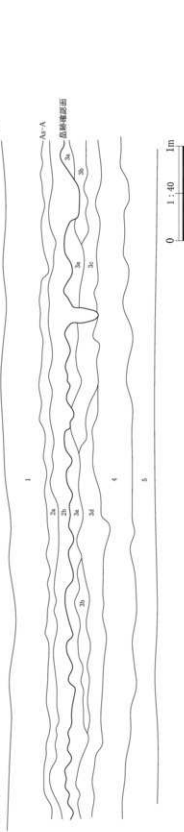


第111图 29地区92区 東舞島 平面・断面図



第112図 29地区32区 西部島 断面図

C. L-631. 706



1. 表土

2a. 黒褐色土 やや灰色を帯びる, As-A 軽石を微量含む。

2b. 黒褐色土 やや灰色を帯びる, 2a層と同質, As-A 軽石を含まない。

3a. 黒褐色土 細かい黄色粒子を微量含む。

3b. 黒褐色土 3a層と同質であるがしまりが強い, 細かい黄色粒子を少量含む。

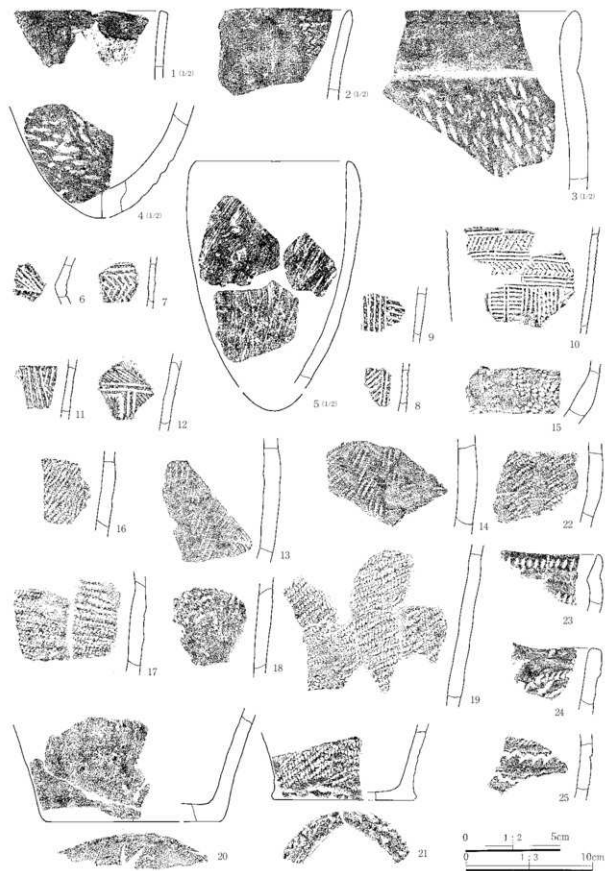
3c. 黒褐色土 3a・3b層と同質であるが細かい黄色粒子を多量に含む。

3d. 黒褐色土 3cと同質であるが, 色調が暗い。

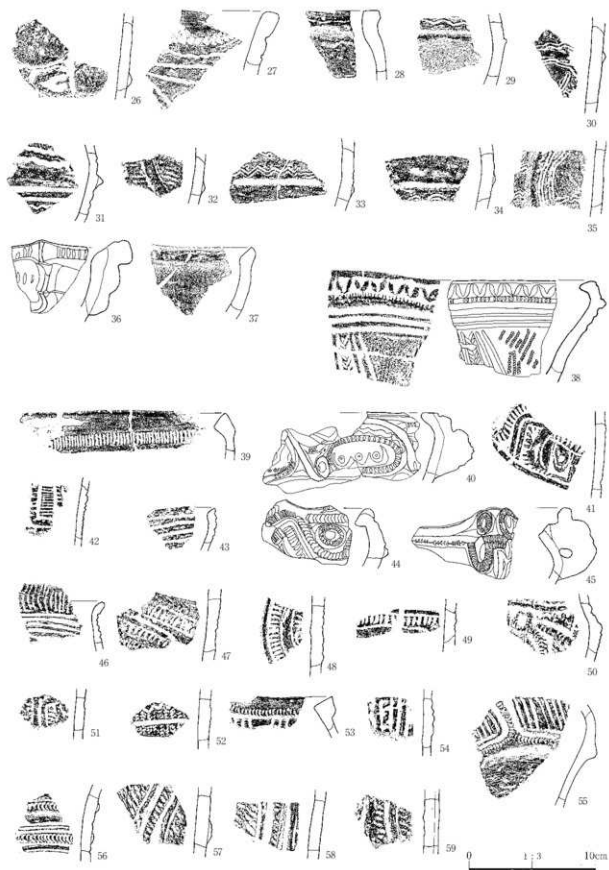
4. 黒褐色土 色調は3層より明るい, ロームブロック, 白色・黄色粒子を大量に含む硬質の層。

5. 黒色土 粘性がやや強く, 白色・黄色粒子を微量含む。

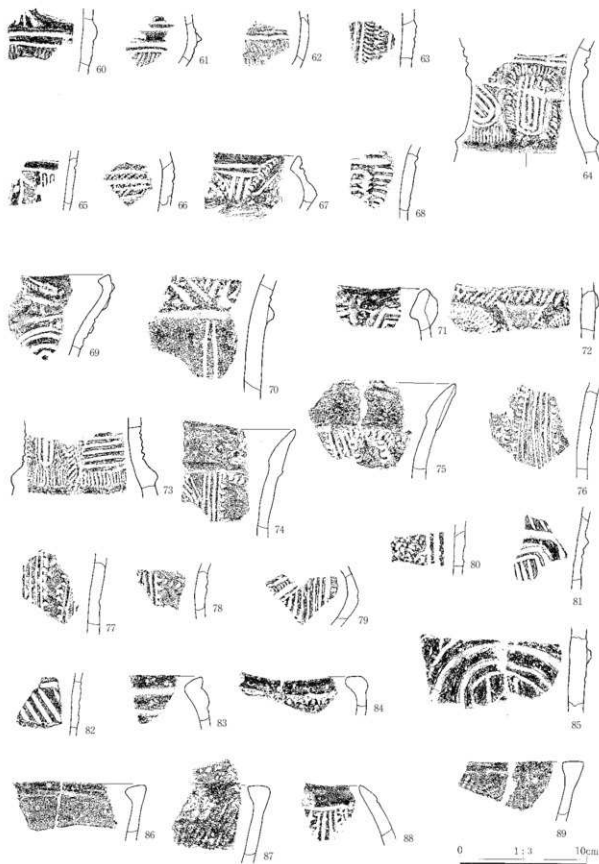
※ 2b層下と3a層上面で, 煙跡の層である層状遺構を認め, 古環境研究所の鑑定により表土と2a層との間がAs-A 軽石層下の時期にあたることが判明しており, この煙跡は, 少なくとも天保3年(1789年)以前のものと考えられる。



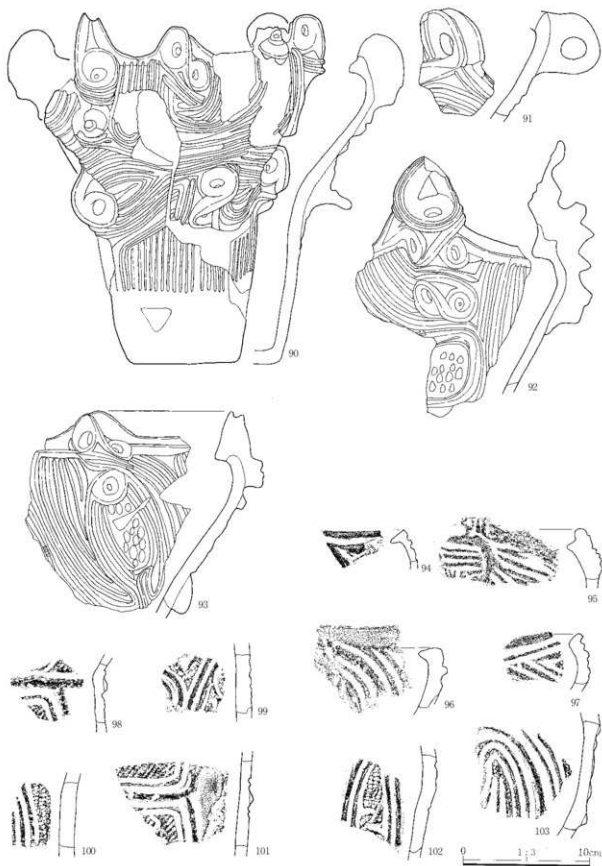
第114図 遺構外出土遺物(1)



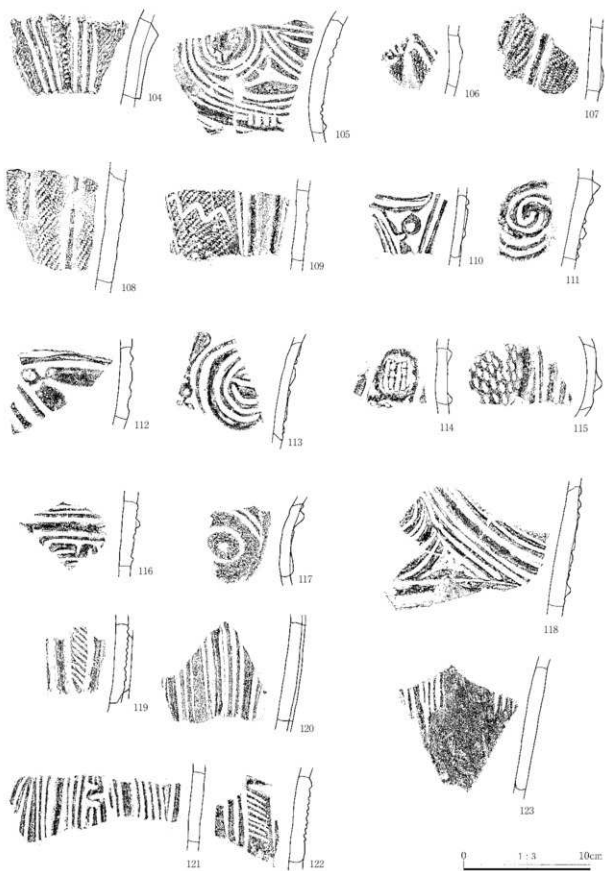
第115図 遺構外出土遺物(2)



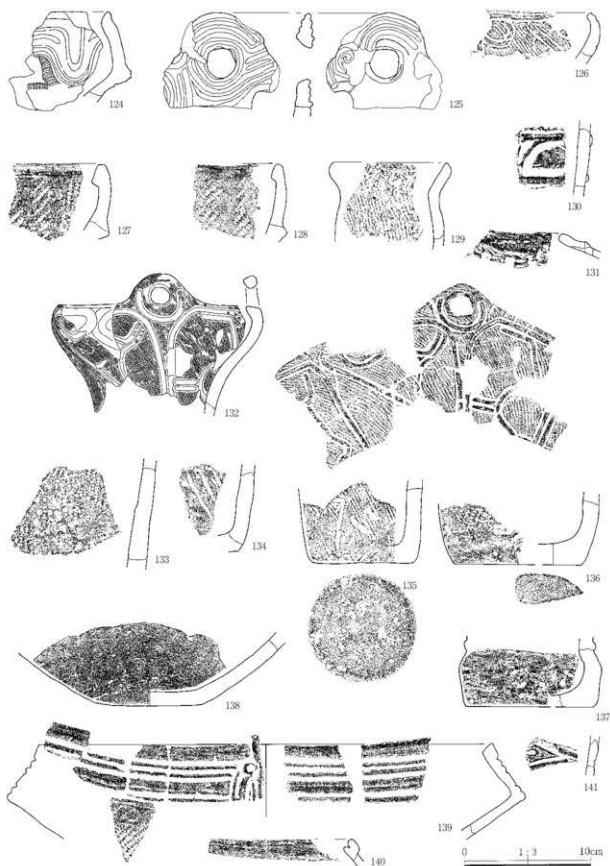
第116図 遺構外出土遺物(3)



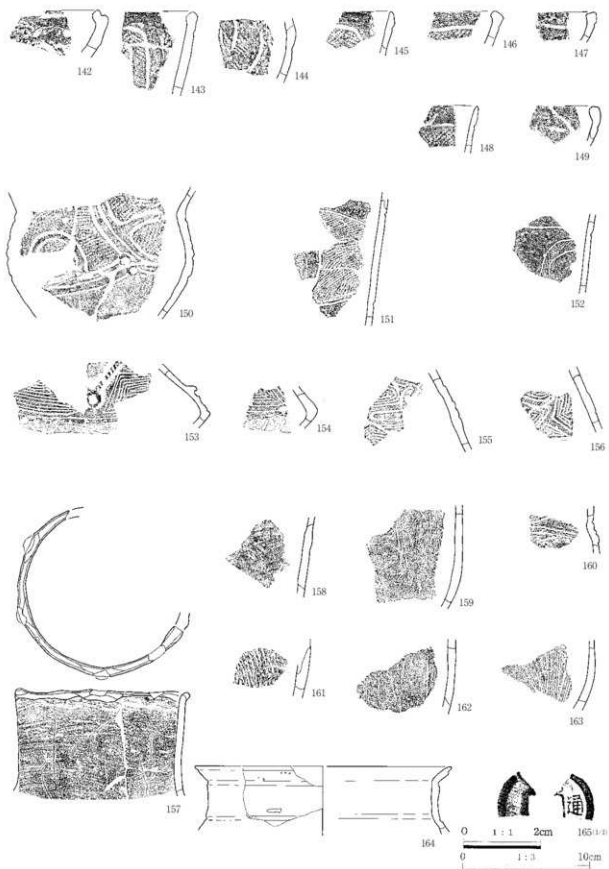
第117図 遺構外出土遺物(4)



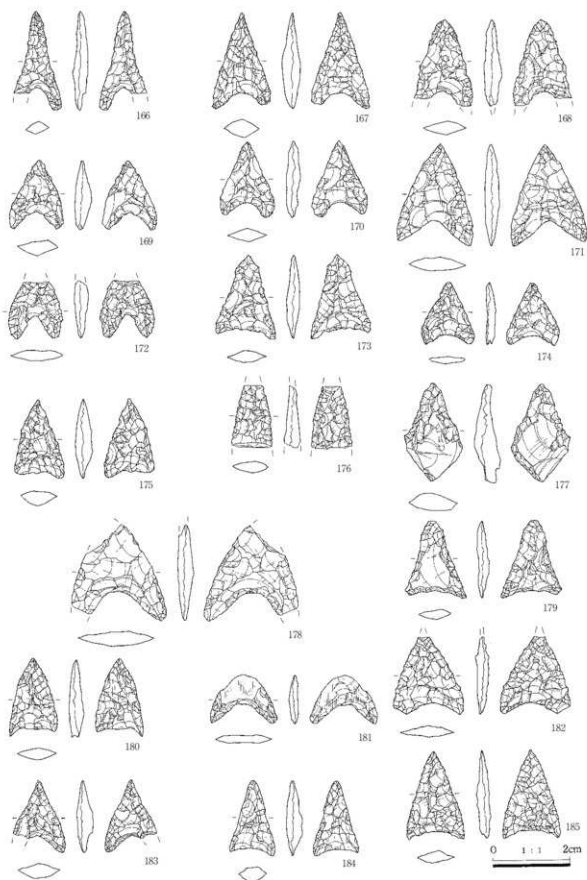
第118図 遺構外出土遺物(5)



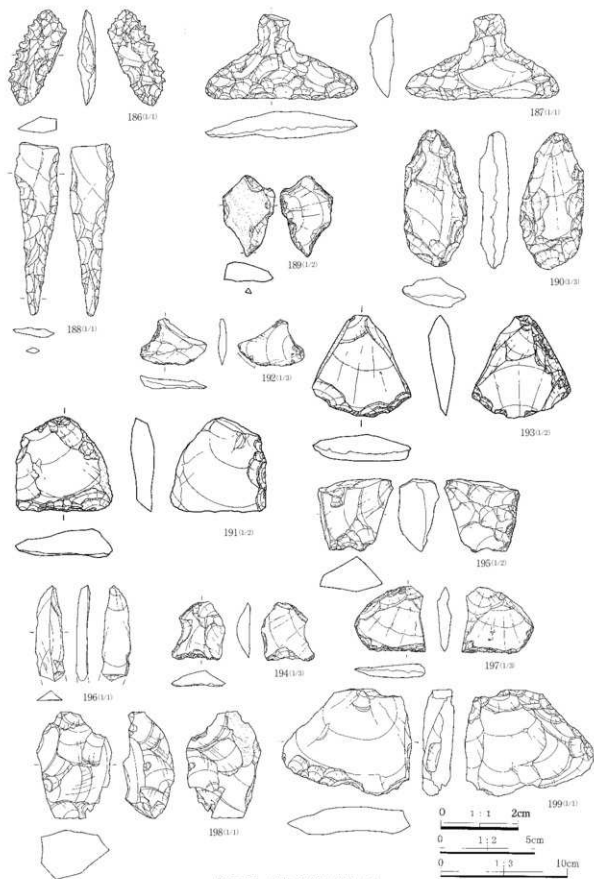
第119図 遺構外出土遺物(6)



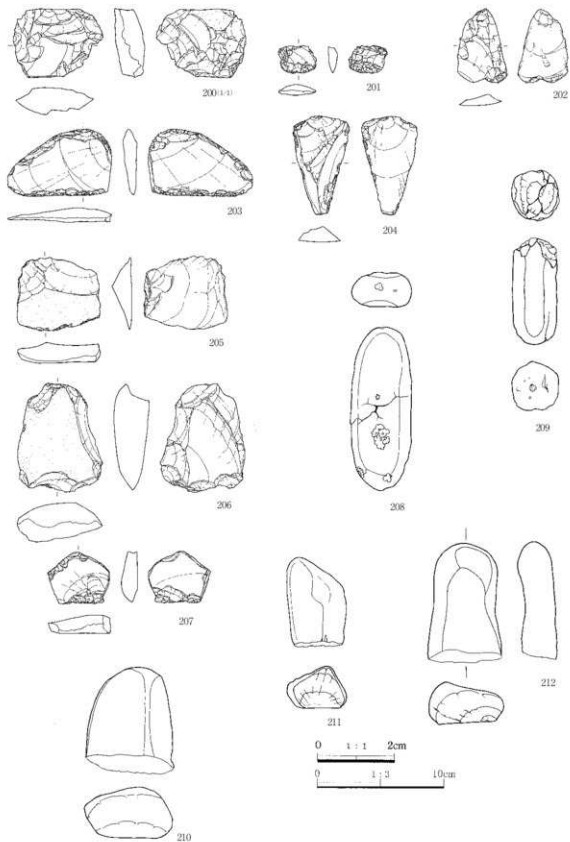
第120図 遺構外出土遺物(7)



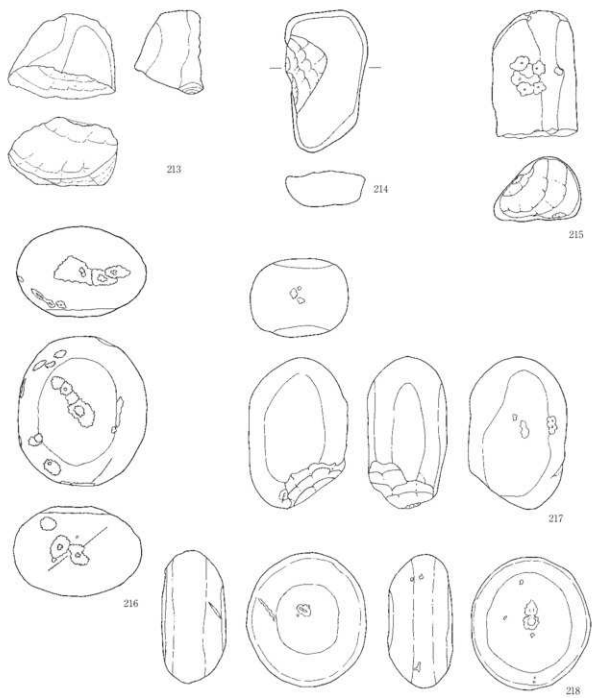
第121図 遺構外出土遺物(8)



第122図 遺構外出土遺物(9)



第123図 遺構外出土遺物(10)



第124図 遺構外出土遺物(11)

第12表 遺構外出土遺物観察表

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・出土地・備考
1	深鉢	口縁部片	細砂粒を少量含む。良好。外面黒褐色、内面暗褐色。	口唇部水平に削っている。器表面などで無文内面施。	早期 925/O-23
2	深鉢	口縁部片	大量の石英を含む。良好。黒褐色。	器表面縦方向のなでにより密、内面などでやや疎、山形押文を縦位帯状施文する。	早期 925/L-22
3	深鉢	口縁部片	大量の石英・長石を含む。良好。褐褐色。	口縁部と胴部との間に浅い凹部を持つ。内面横方向へら磨きにより光沢を持つ。口縁部外面横方向へら磨き、胴部外面燃赤文Rを縦位施文	早期
4	深鉢	胴下半部片	大量の石英・長石を含む。良好。褐褐色。	内面や荒れている。外面へら磨き後燃赤文Rを縦位施文。	早期 3と同一か？ 925/N-24
5	深鉢	口縁部～胴下半	砂粒を多く含む。良好。外面褐色、内面黒褐色。	器表面に縦方向の筋跡、内面黒褐色で荒れている。	早期 尖底 925/JK-20J-21LP-24
6	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。褐色。	上部斜め方向の集合沈線。下部横方向の平行沈線	前期末～中期初頭 925/H-20
7	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。褐色。	深鉢胴部の小破片と思われる。細い半截竹管による集合沈線。上部は、横方向、下部は縦斜状に施文する。	前期末～中期初頭 925/K-21
8	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。褐色。	垂直及び斜め方向の集合沈線	前期末～中期初頭 925/H-20
9	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。褐色。	垂直及び横方向の集合沈線	前期末～中期初頭 925/H-20
10	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。褐色。	上部斜め方向平行沈線、その上に細い粘土もを格子状に貼り付ける。四本単位の横方向の平行沈線文の間に、矢羽状の平行沈線文。下半は縦と横方向の平行沈線文。縦方向の平行沈線文の一部に瓦状結節沈線文。	前期末～中期初頭 925/H-20
11	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。褐色。	縦方向と横方向連続状の沈線文。	前期末～中期初頭 925/P-20
12	深鉢	胴部片	雲母を多く含む。良好。外面黒・断面褐色。	斜めの沈線で区画内を埋めている。	前期末～中期初頭 925/L-20
13	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。暗褐色。	縄文を縦位と横位のR Lで縦の羽状を形成している。内面は荒れて凹凸が激しい。14と同一個体か？	前期末～中期初頭 925/O-24
14	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。暗褐色。	縄文を縦位と横位のR Lで施文している。内面は荒れて凹凸が激しい。13と同一個体か？	前期末～中期初頭 925/O-23
15	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。黄褐色。	隆帯(外れている)脇を縄文斜位R Lで埋めている。	前期末～中期初頭 925/N-23
16	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。外面黒褐色、内面暗褐色。	縄文を横位のR Lで施文している。	前期末～中期初頭 925/N-22
17	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。外面黄褐色、内面黒褐色。	縄文を斜位のL Rで施文している。19・21と同一個体か？	前期末～中期初頭 925/J-21
18	深鉢	胴部片	石英と長石を含む砂粒をやや多く含む。良好。赤褐色。	胴部下平の破片、無文である。	前期末～中期初頭 925/L-20
19	深鉢	胴部片	砂粒を少量含む。良好。外面黄褐色、内面黒褐色。	縄文を斜位のL Rで施文している。17・21と同一個体か？	前期末～中期初頭 925/J・K-21
20	深鉢	胴下半～底部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色、内面暗褐色。	内外面ナデにより器表面密、無文である。	前期末～中期初頭 925/K-21
21	深鉢	胴下半～底部片	砂粒を少量含む。良好。外面黄褐色、内面褐色。	縄文を横位と斜位のL Rで施文している。17・19と同一個体か？	前期末～中期初頭 925/L-21
22	深鉢	胴部片	砂粒を多量に含む。良好。褐色。	縄文を縦位のR Lで施文している。	前期末～中期初頭 925/J-21
23	深鉢	口縁部片	大量の雲母を含む。良好。黒褐色。	口縁部隆帯上に押し引き文、下部にも押し引き文を施文している。	阿玉台 925/N-22
24	深鉢	口縁部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	口縁部隆帯に漆でベン先状の押し引き文を施文する。器表面全体が磨かれて密になっている。	阿玉台

第4章 幸神遺跡

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・出土地・備考
25	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	顕歯状の押引・顕歯状の沈線・平行沈線を施文する。	阿玉台 925N-22
26	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面黄褐色、内面黒色。	隆帯の脇を結節の平行沈線で施文する。	阿玉台 925M-22
27	深鉢	口縁部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	口縁部隆帯の脇にベン先状の押引文を施文する。3列の横方向波状沈線を施文する。	阿玉台 925L-20
28	深鉢	口縁部片	金雲母粒を多く含む。良好。褐色。	口縁内外面ミガキ、無文。	阿玉台 925M-22
29	深鉢	胴部片	金雲母粒と長石粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯と波状沈線を施文する。 33・34と同一個体か?	阿玉台 925J-21
30	深鉢	胴部片	金雲母粒と長石粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯と波状の平行沈線を施文する。	阿玉台 925L-20
31	深鉢	胴部片	石英粒と長石粒を多く含む。良好。褐色。	高い隆帯と顕歯状の押引・沈線・顕歯状の沈線を施文している。	阿玉台 925L-22
32	浅鉢	胴部片	石英と雲母を含む。良好。褐色。	斜めの隆帯と横位R Lの縄文を充填施文している。	阿玉台又は勝坂 925N-22
33	浅鉢	胴部片	金雲母粒と長石粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯と波状の平行沈線を施文する。 29・34と同一個体か?	阿玉台 925M-24
34	浅鉢	胴部片	金雲母粒と長石粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯と波状の平行沈線を施文する。 27・33と同一個体か?	阿玉台 925M-22
35	深鉢	胴部片	金雲母粒と長石粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯の右側は隆帯に添って幾列の結節沈線、横位波状文、隆帯左側は横位波状文を施文する。	阿玉台 925O-23
36	深鉢	口縁部片	金雲母粒と長石粒を大量に含む。良好。褐色。	口縁部隆帯の上に細目、小波状突起、積門の中にも口縁部同様の細目を施文している。	阿玉台 925N-22
37	深鉢	口縁部片	金雲母粒を多く含む。良好。黒褐色	口縁内外面ミガキ、無文。	中期中葉 925K-21
38	深鉢	口縁部片	片岩と小礫を含む細砂粒をやや多く含む。良好。明赤褐色。	口唇部内縁は突出する。口縁部に印刷的な手法により連ハの字状の連続文様と横方向の連続沈線。胴部上半は3本横位沈線その下は斜位沈線と矢羽模文文様、施文の縄文は縦位と斜位のR L。	勝坂 925M-22
39	深鉢	口縁部片	石英と長石を含む砂粒を含む。良好。黄褐色。	口縁断面三角、下段にキャタピラ文。	勝坂 925N-25
40	深鉢	口縁部片	長石と小礫を含む細砂粒をやや多く含む。良好。橙褐色。	環状突起を中核とした楕円区画文を口縁部文様帯とする。隆帯上には筋目を施す。区画内は円形刺突文と連続三叉文が充填される。	勝坂 925M-22
41	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。外面赤褐色内面黒褐色。	半隆起状区画内を平行沈線とキャタピラ文・ベン先状刺突文で充填する。	勝坂 925N-22
42	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	交互刺突文、沈線、刺切文を充填する。	勝坂 925J・K-21
43	深鉢	口縁部片	砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	口縁部に多くの平行沈線文。	勝坂 925H-30
44	深鉢	口縁部片	砂粒を多く含む。良好。暗褐色。	口唇部内縁は突出する。隆帯の脇にキャタピラ文とベン先文、円形隆帯上に爪形文を施文する。	勝坂 925K-32
45	深鉢	口縁部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	口縁部外側に左右、内側に1個計3個からなる環状突起、その下に中空状の双環状突起。隆帯上に爪形文、三叉文が印刷されている。	勝坂 925L-22
46	深鉢	口縁部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色内面黒褐色。	口縁部に縄文R Lの押引痕、その下に平行沈線文。	勝坂 925I-20
47	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色内面黒褐色。	ベン先文、キャタピラ文、平行沈線で施文されている。	勝坂 925M・N-22
48	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	沈線とベン先文で区画、その中にキャタピラ文で充填する。	勝坂 925N-22
49	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	沈線とベン先文で区画、その中にキャタピラ文で充填する。	勝坂 925M-22

第5節 検出された遺構と遺物

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・出土地・備考
50	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	隆帯の上に爪形文、口縁部に近い隆帯に沿って竹筥による凸状の圧痕。	勝坂 925L-23
51	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色内面黒褐色。	平行沈線と斜め方向のキャタピラ文。	勝坂 925M-22
52	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	横文R Lを施した後、1条の沈線。	勝坂 925N-23
53	深鉢	口縁部片	砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	外側口縁部下端に横方向爪形文、口縁部下に2列の縦方向の爪形文。	勝坂 925L-23
54	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色内面暗褐色。	平行沈線文と交互刺突文。	勝坂 925J-20
55	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色内面暗褐色。	隆帯の脇に1条の平行沈線、その中を平行沈線、隆帯の上は爪形文。	勝坂 925N-22
56	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色内面暗褐色。	隆帯の脇に1条の沈線、隆帯の上は爪形文。	勝坂 925M-22
57	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯の脇に1条の平行沈線、隆帯の上と地文の縄文は、O段多条R横回転。58と同一か。	勝坂 925N-23
58	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯の脇に1条の平行沈線、隆帯の上と地文の縄文は、O段多条R横回転。57と同一か。	勝坂 925M-23
59	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯の上と平行沈線の外にL Rの縄文。	勝坂 925N-23
60	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	隆帯の下に平行沈線、その下にR Lの斜め方向の縄文。	勝坂 925O-22
61	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色内面暗褐色。	隆帯の脇に内皮使用の平行沈線文、その下にR Lの縦方向の縄文。	勝坂 925M-22
62	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	沈線とR Lの横方向の縄文。	勝坂 925T-20
63	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。外面褐色内面暗褐色。	横平行沈線とキャタピラ文、および刺突文。	勝坂
64	深鉢	胴部片	大きな長石と粗砂粒を多量に含む。良好。褐色。	横位隆帯の脇と縦位隆帯上にキャタピラ文、隆帯に囲まれた中を沈線による縦位の沈線文様。	勝坂 925M-22
65	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。褐色。	内皮使用の平行沈線に囲まれた中に蓮華文。	勝坂 925L-23
66	深鉢	胴部片	粒を多く含む。良好。褐色。	平行沈線の上からL Rの横方向の縄文。	勝坂 925K-22
67	深鉢	口縁部片	多くの石英・長石を含む。良好。外面赤褐色内面暗褐色。	口縁部横位、斜位方向の隆帯。隆帯上は爪形文、隆帯の間は沈線文。	勝坂 925L-23
68	深鉢	胴部片	多くの石英・長石を含む。良好。外面赤褐色内面暗褐色。	隆帯と平行沈線文、連続交互刺突文。	勝坂 925P-24
69	深鉢	口縁部片	石英と長石を多く含む。良好。赤褐色。	口縁部隆帯の脇をベン先文、円形の隆帯と沈線文。	勝坂 925M-22
70	深鉢	胴部片	石英と長石を含む。普通。外面褐色内面暗褐色。	横位と斜位の隆帯、三角形区画文か?。下部に2本の縦位沈線文。	勝坂 925T-20
71	深鉢	口縁部片	石英と小礫を含む砂粒を多く含む。良好。褐色。	口縁部外側に割目を持つ突起(小波状)、隆帯の間は沈線文。	勝坂 925O-24
72	深鉢	胴部片	長石を多く含む。良好。黄褐色。	幅広い横位隆帯上に斜め方向のキャタピラ文、隆帯の脇にキャタピラ文。	勝坂 925J-21
73	深鉢	胴部片	長石を多く含む。良好。外面赤褐色内面暗褐色。	横位隆帯の脇にキャタピラ文、縦位隆帯の上に斜位キャタピラ文、隆帯の内側に平行沈線文。	勝坂 925M-22
74	深鉢	口縁部片	石英と長石をやや多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	肥厚口縁の下に縦位列と縦位と斜位の平行沈線文。 75～78まで同一個体か?	勝坂 925E
75	深鉢	口縁部片	石英と長石をやや多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	肥厚口縁の下に縦位列と縦位と斜位の平行沈線文。 74・76・77・78は同一個体か?	勝坂 925E
76	深鉢	胴部片	石英と長石をやや多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	縦位の縦位列と縦位の平行沈線文。 74・75・77・78は同一個体か?	勝坂 925E

第4章 幸神遺跡

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・出土地・備考
77	深鉢	胴部片	石英と長石をやや多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	縦位の散列列と縦位の平行沈線文。 74～76・78は同一個体か？	徳町 925N-23
78	深鉢	胴部片	石英と長石をやや多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	縦位の散列列と縦位の平行沈線文。 75～78まで同一個体か？	徳町 925M-23
79	深鉢	胴部片	石英と長石をやや多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	横位と斜位の隆帯、隆帯の上には爪形文、隆帯に沿って平行沈線文。	徳町 925M-22
80	深鉢	胴部片	石英と長石をやや多く含む。良好。黄褐色。	縦位平行沈線文。縄文の施文の痕跡あり、器表面荒れていて不明。	徳町
80	深鉢	胴部片	石英と長石をやや多く含む。良好。黄褐色。	縦位平行沈線文。縄文の施文の痕跡あり、器表面荒れていて不明。	徳町
81	深鉢	胴部片	石英・長石・金雲母を含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	隆帯の脇に沈線文、他平行沈線文。	徳町 925K
82	深鉢	胴部片	石英・長石・金雲母を含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	幅広い平行沈線文。	徳町 925N-23
83	深鉢	口縁部片	石英・長石を含む。良好。暗褐色。	口縁部中段に隆帯、施文は無い。	徳町 925O-25
84	深鉢	口縁部片	石英・長石を含む。良好。暗褐色。	口縁部隆帯の下に竹管による刺突文。	徳町 925M-22
85	深鉢	胴部片	石英・小礫を多く含む。良好。外面橙褐色内面黒褐色。	隆帯を縦長の楕円形に貼付して文様帯を区画し、区画内は平葎竹管を用いた平行沈線文。	徳町 925O-25
86	深鉢	口縁部片	石英・長石を含む。良好。暗褐色。	断面三角形の口縁部。口縁外面無文。	徳町 925M-N-23
87	深鉢	口縁部片	石英・長石・雲母を多量に含む。良好。暗褐色。	断面三角形の口縁部。L Rの縦方向縄文。	徳町 925N-24
88	深鉢	口縁部片	石英・長石含む。良好。表面暗褐色断面褐色。	平行沈線文と交互刺突文。	徳町
89	深鉢	口縁部片	石英・長石を含む。良好。暗褐色。	断面三角形の口縁部。R Lの縦方向縄文。	徳町 925K
90	深鉢	口縁部1/2 胴部2/3 胴下半～底部 完形 器高24.4	石英・長石・小礫を含む砂粒を多く含む。良好。橙褐色。	斜位環状突起とコイル状突起を連続した大型突起を4単位付す。突起下端より、横位隆帯が派生し口縁部文様帯を画す。体部上位にも斜位環状突起とコイル状突起を付し、各突起間を反転する隆帯でつなぐ。体部突起より隆帯が分岐懸垂する。体部下半は磨蝕し無文。隆帯間には内皮使用の平行沈線文を光焼する。口縁部内縁は突出する。	徳町 925L-20
91	深鉢	把手片	石英・長石・小礫を含む砂粒を多く含む。良好。暗褐色。	滑車状突起と弧状の内皮使用の平行沈線文。流状口縁波流部か？	徳町 925M-22
92	深鉢	口縁部～胴上部片	石英・長石・金雲母を含む。良好。暗褐色。	横位双環状突起とコイル状突起を連続し、頂部にくちばし状突起、突起下端には隆帯による円形区画文、区画内は刺突文を光焼する。隆帯には内皮使用の平行沈線文が流う。口唇部内縁は突出する。	徳町 925L-20
93	深鉢	口縁部～胴上部片	石英・長石・金雲母を含む。良好。暗褐色。	口縁部流状突起下に斜位双環状突起とコイル状突起及び環状突起を付す。突起下端に隆帯による楕円状区画が配され、刺突文を光焼する。隆帯の側縁に平行沈線文を施す。内縁は突出する。	徳町
94	深鉢	口縁部片	長石・小礫をやや多く含む。良好。暗褐色。	口唇部内縁はやや突出する。口唇部に1条の沈線が流い、以下三文文を施す。	徳町 925L-20
95	深鉢	口縁部片	石英・長石をやや多く含む。良好。暗褐色。	口唇部内縁はやや突出する。口縁部の小突起下端より隆帯が弧状に垂下し空白部を横位沈線文が光焼される。	徳町 925O-25
96	深鉢	口縁部片	石英・長石・小礫を多量に含む。良好。暗褐色。	口唇部内縁は突出する。口唇部より弧状隆帯が派生する。隆帯には平行沈線文が流う。	徳町 925L-23
97	深鉢	口縁部片	石英・長石を多量に含む。良好。暗褐色。	口唇部に2条の沈線が流う。斜位沈線文と三文文が施される。	徳町 925L-20

第5節 検出された遺構と遺物

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・出土地・備考
98	深鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を多く含む。良好。明赤褐色。	横位隆帯より弧状隆線が垂下する。隆帯には一本書きの沈線が流う。区画内には縦位R Lを施文。	中期中葉 92IX-M-25
99	深鉢	胴部片	長石・小礫を多量に含む。普通。暗褐色。	内皮使用の平行沈線による弧状区画、区画内はR Lの横文、中位に三叉文。	中期中葉 92IX-M-21
100	深鉢	胴部片	石英・長石を多量に含む。良好。暗褐色。	内皮使用の平行沈線文。R Lの斜位横文を施文。	中期中葉 92IX-L-23
101	深鉢	胴部片	石英・長石を含む砂粒を多量に含む。良好。外面赤褐色内面黒色。	隆帯による懸垂文、側縁が2条の沈線、区画内は縦位沈線、横文は縦位R L。	中期中葉 92IX-L-21
102	深鉢	胴部片	石英・長石を多量に含む。良好。暗赤褐色。	内皮使用の平行沈線文、縦の楕円区画か? 区画内は大胆な刺突文と横文斜位のR L。	中期中葉 92IX-M-21
103	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。暗褐色。	弧状隆線の脇に内皮使用の平行沈線文。地文の横文が残る。	中期中葉 92IX-M-22
104	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。暗褐色。	縦位隆帯上に刻み、隆帯の側面に内皮使用の平行沈線文、地文の横文は縦方向のR L。	中期中葉 92IX-M-22
105	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	円形区画文内部に刺突文、円形区画文と曲隆帯に添って内皮使用の沈線文、隆帯の一部に刺突文、沈線文の空白部に三叉文を施文する。	晩期 92IX-M-23
106	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。赤褐色。	内皮使用の平行沈線文と縦位R Lの横文を施文する。	中期中葉 92IX-L-22
107	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。赤褐色。	地文は斜位のR L横文を施文。縦方向に2条の隆帯。	加曾利E 2 92IX-N-23
108	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。赤褐色。	地文は縦位のR L横文を施文、隆帯を懸垂する。	中期中葉 92IX-N-23
109	深鉢	胴部片	石英・長石・金雲母を多く含む。良好。外面暗褐色内面黒色。	地文は縦位のR L横文を施文。縦方向に2本の隆帯。隆帯の間は磨消、横文の間に横位の流状文。	加曾利E 2 92IX-L-21
110	深鉢	胴部片	石英・長石・金雲母を含む砂粒を多量に含む。普通。にふい褐色。	斜位隆線及び一本書きの沈線、区画中位に円形刺突文と三叉文を施す。	新巻類型 92IX-L-21
111	深鉢	胴部片	砂粒を多く含む。良好。暗褐色。	渦巻状に隆線を配置し、隆線に添って内皮使用の沈線文を施文する。	晩期 92IX-L-22
112	深鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒色。	斜位隆線に2条の沈線が流う。区画内は円形刺突文と三叉文を施す。	新巻類型 92IX-M-22
113	深鉢	胴部片	石英・長石・雲母・小礫を含む砂粒を多量に含む。良好。赤褐色。	弧状隆線に2条の沈線が流う。区画内は沈線文による円形意匠を配す。空白部は円形刺突文と三叉文を施す。	新巻類型 92IX-L-20
114	深鉢	胴部片	石英・長石を含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	隆帯による楕円形区画内に5列の結節沈線文。隆帯の脇に単列の沈線文。	晩期 92IX-N-21
115	深鉢	胴部片	石英・長石・雲母・小礫を含む。良好。外面黒色内面暗褐色。	隆線による楕円形区画内を刺突文で充填される。隆線脇には単沈線を3条加える。隆線隆線は内皮使用の平行沈線文。	晩期 92IX-L-20
116	深鉢	胴部片	石英・長石・雲母・小礫を含む。良好。外面褐色内面黒色。	横位隆線と弧状隆線が流う。空白部には交互刺突による蛇行文を配する。	中期中葉 92IX-H-30
117	深鉢	胴部片	石英・長石・金雲母を含む砂粒を多量に含む。良好。褐色。	弧状突起と隆線による円形区画か、区画中位に円形刺突文を施す。隆線横線に沈線を流す。	新巻類型 92IX-M-23
118	深鉢	胴部片	石英・長石・金雲母を含む砂粒を多量に含む。良好。褐色。	横位隆線と弧状隆線による三角区画文。隆線には平行沈線文が流い、区画中位には流線な三叉文を刻む。	新巻類型 92IX-M-23
119	深鉢	胴部片	石英・長石・金雲母を含む。良好。黄褐色。	隆帯による楕円形区画、区画内は斜位単沈線を充填する。	晩期 92IX-O-23
120	深鉢	胴部片	石英・長石を多量に含む。良好。赤褐色。	2本の隆帯を垂下させ、その間を内皮使用の平行沈線文で充填する。	晩期 92IX-N-24・O-25
121	深鉢	胴部片	石英・長石を多量に含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	2本の隆帯を垂下させ、その間を内皮使用の平行沈線文で充填する。平行沈線の中央に交互刺突文が施文されている。	晩期 92IX-N-24・O-25

第4章 幸神遺跡

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・出土地・備考
122	深鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を少量含む。良好。橙色。	横位沈線以下縦位沈線3条による懸垂文構成、空白部に斜位沈線文を充填する。	焼町 925M-21
123	深鉢	胴下半部片	石英・長石を多量に含む。良好。赤褐色。	隆帯を垂下させ、隆帯のまわりを内皮使用の平行沈線文で施文する。胴部下半は研磨し無紋。	焼町 925N-25
124	深鉢	口縁部片	小礫を多く含む。良好。暗褐色。	隆帯に添って内皮使用の沈線文1本、沈線に添ってキャタピラ文。器表面全面にわたり研磨され光沢を持つ。	勝坂Ⅱ 925M-22・L-30
125	深鉢	口縁部突起片	小礫を多く含む。良好。外面灰褐色断面黄褐色。	中空条突起の一部である。円形の中空に添って内皮使用の沈線が多く施文されている。	焼町 925L-23
126	深鉢	口縁部片	小礫を多く含む。良好。外面灰褐色断面黄褐色。	口唇部外側に内皮使用の平行沈線文、口縁部は施文に横方向のR Lを施文し、弧状と斜め方向の沈線を施文する。 132と同一個体	勝坂Ⅲ 925L-20・M-23
127	深鉢	口縁部片	小礫を多く含む。良好。外面暗褐色内面赤褐色。	外面の器表面広い。縦位のR Lを縁に施文。	中期中葉 925M-23
128	深鉢	口縁部片	小礫を多く含む。良好。外面灰褐色断面黄褐色。	外面の器表面広い。縦位のR Lを縁に施文。	中期中葉 925N-22
129	深鉢	口縁部片	石英・長石粒を多量に含む。良好。外面赤色内面黒褐色。	全面施文する。R L斜位。	勝坂Ⅲ 925N-22
130	深鉢	胴部片	石英・長石粒を多量に含む。良好。外面赤色内面黒褐色。	横位沈線を2条添付し、隆帯による半槽円状区画を配する。	勝坂Ⅱ 925I-20
131	右孔部付土器	口縁部片	石英・長石粒を多量に含む。良好。黄褐色。	口縁部は内傾し直下に径5mm程度の孔を穿つ。孔周辺に浅い斜位沈線文を施す。	勝坂Ⅱ・Ⅲ 925M-21・N-23
132	深鉢	口縁～胴部上半1/2	砂粒を多く含む。良好。外面赤褐色内面黒褐色。	口縁部の円環状突起は1単位か？胴部文様は一体化し内皮使用の平行沈線文より縦位に区画される。4単位か？区画内は平行沈線文による意匠文が配される。地文縄文縦位R L。	勝坂Ⅲ 126と同一個体 925N-22
133	深鉢	胴部片	石英・長石粒を多量に含む。良好。黄褐色。	地文縄文縦位R L、内外器表面覆れている。	中期中葉 925O-23
134	深鉢	胴部片	小礫を含む砂粒をやや多く含む。良好。外面黄褐色内面黒色。	3条の垂下沈線文。	加曾利E2
135	深鉢	底部片	石英・長石含む。良好。外面赤褐色内面黒色。	2条の垂下沈線による懸垂文構成、区画内を横位・縦位成状沈線・クラク文を施す。地文はR L縦位施文。	中期中葉 925O-25
136	深鉢	底部片	石英・長石含む。良好。外面黄褐色内面黒色。	R L縦位施文。	中期中葉 925M-22
137	深鉢	底部片	石英・長石含む。良好。外面赤褐色内面黒色。	体部下半に横位沈線を施す。無文。	勝坂Ⅲ 925M-23
138	浅鉢	胴下半～底部	石英・長石粒を多量に含む。良好。赤褐色。	無文、内外面研磨。	中期中葉 925M-22
139	浅鉢	口縁部片	石英・長石・金雲母を含む砂粒を多量に含む。良好。灰白色。	口縁に小突起を付す。口縁部文様帯は内皮使用の平行沈線文で構成される。円形刺突文と弧線文が突起下に配される。唇部には刻目が施され、体部縄文は横位R L。	中期中葉 北陸系浅鉢 925N-23
140	浅鉢	口縁部片	石英・長石・金雲母を含む砂粒を多量に含む。良好。灰白色。	口唇部端部に深い沈線文を1条通らす。	中期中葉 北陸系浅鉢 925N-23
141	深鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒をやや多く含む。良好。橙色。	内皮使用の平行沈線による小三角形区画。区画内は三叉文か？	中期中葉 925K-22
142	深鉢	口縁部片	石英・長石を多く含む。良好。灰白色。	口唇部に1条の沈線文をめぐらす。体部に沈線文。	称名寺 925O-23
143	深鉢	口縁部片	石英・長石を多く含む。良好。灰白色。	口唇部が肥厚する。沈線文により施文部と無文部を区画する。区画内をR Lの縄文を横位と縦位で充填する。	称名寺 925N-21
144	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。灰白色。	沈線により施文。施文内は無文である。区画内に縦位R Lが施文されている。	称名寺 925L-23

番号	器種	残存状態	胎土・焼成・色調	器形・文様の特徴	時期・出土地・備考			
145	深鉢	口縁部片	石英・長石を多く含む。良好。灰白色。	口縁部内側が欠損している。沈線文により施文部と無文部を区画する。区画内をR Lの縄文を横位と縦位で充填。	称名寺 925KM-21			
146	深鉢	口縁部片	石英・長石を多く含む。良好。表面灰白色断面黒色。	口縁部が肥厚する。沈線文により施文部と無文部を区画する。区画内をR Lの縄文を縦位で充填する。	称名寺 925L-21			
147	深鉢	口縁部片	石英・長石を多く含む。良好。灰白色。	口縁部が肥厚する。沈線文により施文部と無文部を区画する。区画内をR Lの縄文を縦位で充填する。	称名寺 925KM-23			
148	深鉢	口縁部片	石英・長石を多く含む。良好。灰白色。	口縁部が肥厚しない。沈線文により施文部と無文部を区画する。区画内をR Lの縄文を縦位で充填する。	称名寺			
149	深鉢	口縁部片	石英・長石を多く含む。良好。灰白色。	口縁部が肥厚する。沈線文により施文部と無文部を区画する。区画内の施文は不明。	称名寺 925KM-21			
150	鉢	胴部一胴部片	長石・小礫を含む細砂粒をやや多く含む。良好。灰褐色。	円形刺突文を施し、2～3条1組の沈線文で不定形区画文を画する。区画内はR Lの縄文を充填する。	堀之内 925M-21・N-23			
151	鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を多く含む。良好。外面黒褐色内面灰褐色。	沈線により弧状に区画され、区画内は細縄文R Lを充填する。器壁の厚さ5mm以下と薄く、器表面内外面磨かれて密。	堀之内			
152	鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を多く含む。良好。灰褐色。	沈線により弧状に区画され、区画内は細縄文R Lを充填する。	堀之内 925N-24			
153	鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を多く含む。良好。外面黒褐色内面褐色。	細隆線と円形凸付文及び沈線による重区画文が配される。器面は研磨されている。154と同一個体か?	堀之内 体部屈曲鉢 925M-22・N-23			
154	鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を多く含む。良好。外面黒褐色内面褐色。	重区画文が配される。器面は研磨されている。153と同一個体か?	堀之内 体部屈曲鉢			
155	鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を多く含む。良好。外面暗褐色内面褐色。	円形凸付文と沈線による重区画文か、細縄文R Lを施文。	堀之内 925M・N-22			
156	鉢	胴部片	小礫を含む細砂粒を多く含む。良好。外面暗褐色内面褐色。	重区画文が配される。器面は研磨されている。	堀之内 925M-22・N-23			
157	深鉢	口縁部片	長石と小礫を含む砂粒を多量に含む。良好。赤褐色。	無文、口縁部外帯の退化したような帯を持つ。158と同一か?	晩期～弥生初期か? 925N-23			
158	深鉢	胴部片	長石と小礫と砂粒を多量に含む。良好。赤褐色。	無文、縦方向のへら筋りあり。	晩期～弥生初期か? 925M-22・N-23			
159	深鉢	胴部片	長石と小礫を多量に含む。良好。赤褐色。	上部に染痕による整形痕が残る。他無文	時期不明			
160	深鉢	胴部片	石英・小礫・赤色粒子を多く含む。良好。橙色。	横と斜め方向の沈線で施文されている。	時期不明 925P-18			
161	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。褐色。	縦方向の無で、無文である。	縄文晩期か? 925R-15			
162	深鉢	胴部片	石英・長石を多く含む。良好。褐色。	8本単位の縦方向細密条痕。	縄文晩期～弥生前期			
163	鉢	胴部片	石英・長石を含む。良好。黒褐色。	小口による細密条痕。	縄文晩期～弥生前期 2区H-20			
164	甕	口縁部	1mm以下の砂粒を多く含む。良好。明褐色。	胴部両端に沈線文を持つ。胴部に横方向のへら筋り。	9世紀中頃 2区			
165	銭	破片		寛永通宝の破片と思われる。	江戸時代 92区			
番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
166	打製石礫	脚の一部欠	-26	-12	4	0.6	黒曜石	
167	打製石礫	完形	25	15	5	1	黒曜石	92区
168	打製石礫	脚の一部欠	23	-15	5	1.1	黒曜石	92区N-22
169	打製石礫	完形	18	14	4	0.7	黒曜石	92区K-20
170	打製石礫	完形	21	14	4	0.6	黒曜石	92区M-22
171	打製石礫	完形	28	19	4	1.3	黒曜石	91区
172	打製石礫	先端部欠	-15	14	4	0.6	黒曜石	92区
173	打製石礫	完形	23	15	3	0.7	黒曜石	925L-22

第4章 幸神遺跡

番号	器種	残存	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
174	打製石鏃	完形	17	14	2	0.4	黒曜石	92区
175	打製石鏃	完形	22	13	4	0.8	黒曜石	92区R-19
176	打製石鏃	先端部欠	16	11	4	0.7	黒曜石	92区
177	打製石鏃	未製品	26	15	6	1.4	黒曜石	92区M-22
178	打製石鏃	先端部欠	27	23	4	1.8	黒色安山岩	92区I-18
179	打製石鏃	完形	21	16	3	0.6	流紋岩	92区C-19
180	打製石鏃	完形	21	13	4	0.7	黒曜石	2区M-22
181	打製石鏃	完形	13	16	2	0.4	安山岩	92区J-20
182	打製石鏃	先端部欠	-21	19	3	0.9	黒曜石	92区P-19
183	打製石鏃	脚の一部欠	20	-13	4	0.5	黒曜石	91区M-12
184	打製石鏃	完形	20	12	4	0.7	碧玉	91区M-12
185	打製石鏃	完形	24	15	4	0.8	黒曜石	92区P-19
186	打製石鏃	1/3欠	26	-10	5	1	黒曜石	92区L-21
187	石匙	完形	22	40	7	4.1	チャート	92区O-23
188	ドリル	完形	46	11	5	1.1	安山岩	92区P-19
189	ドリル	完形	42	27	11	12.8	珪質安山岩	92区O-24
190	打製石斧	完形	108	49	21	124.4	安山岩	92区N-22
191	削器	完形	49	50	12	39	頁岩	92区N-24
192	削器	完形	37	50	6	10.9	頁岩	92区A-19
193	削器	完形	54	50	12	35.8	頁岩	92区N-22
194	削器	完形	46	39	10	19.3	凝灰岩	92区M-21
195	石槌	完形	38	38	21	29.3	頁岩	92区K-21
196	石刃	完形	25	7	3	0.5	チャート	92区J-21
197	削器	完形	51	53	10	34.3	頁岩	92区N-22
198	石槌	完形	28	20	14	6.4	黒曜石	
199	打製石鏃	未製品	28	34	8	8.4	珪質安山岩	92区O-24
200	打製石鏃	未製品	18	24	8	3.6	珪質安山岩	
201	削器	完形	21	27	7	5.1	珪質安山岩	
202	削片	完形	55	38	8	17.6	珪質安山岩	92区L-22
203	削器	完形	53	80	11	54.5	黒色安山岩	92区N-25
204	削片	完形	77	43	12	41	凝灰岩	92区J-21
205	削器	完形	58	65	16	65.2	黒色安山岩	92区N-23
206	礮器	完形	84	67	27	184.9	安山岩	92区M-21
207	削器	完形	40	49	13	36.3	凝灰岩	92区J-19
208	磨石	完形	128	48	27	236.1	石英閃緑岩	92区M-22
209	たたき石	完形	84	36	36	167.1	安山岩	92区J-20
210	スタンプ形石器	完形	84	68	40	285.2	石英閃緑岩	92区K-22
211	スタンプ形石器	完形	70	45	31	143.9	安山岩	92区J-21
212	スタンプ形石器	完形	94	54	28	240	安山岩	92区O-23
213	スタンプ形石器	完形	67	85	55	356.7	安山岩	92区L-20
214	たたき石	完形	110	64	28	348.5	安山岩	92区K-20
215	スタンプ形石器	完形	100	66	50	508.7	デイスイト	92区J-21
216	磨石	完形	119	101	71	77.2	粗粒輝石安山岩	92区J-21
217	磨石	完形	116	78	60	87.2	粗粒輝石安山岩	92区N-25
218	磨石	完形	105	94	49	674.6	粗粒輝石安山岩	92区M-22

第6節 まとめ

1. 遺跡内出土土器について

縄文時代

縄文時代の遺構として調査されたのは、92区が大部分であった。中期中葉の焼町土器を出土した2号住居と中期後半の唐草文系の土器を出土した1号住居、また32号土坑からはほぼ完形の中期前半の阿玉台式土器が出土している。他に19号土坑から焼町土器と中期中葉の土器が、33号土坑から焼町土器と中期中葉の土器が、33号土坑から焼町土器が出土している。92区では他にも多くの土坑が確認されており、おそらく中期中葉段階から後半を中心とする遺跡であったものと思われる。

遺跡内全体から出土した土器全体量について調べてみると、出土個体数は少ないが前期から晩期まで出土している。その個体数を表とグラフで示した。

出土総数で見ると、調査した狭い範囲ではあるが、この遺跡は中期中葉を中心とした遺跡であることを示している。中期中葉の焼町土器を出土する住居は1軒のみであったが、1・2号住居北側にさらに多くのこの時期の住居の存在を考えたい。

縄文晩期～弥生時代

縄文晩期～弥生時代の遺構は確認されていない。92区から出土した土器5点を図示した、他に21個の破片が出土している。

平安時代

平安時代の遺構は39地区1・2区で調査された土坑がこの時代のものである。遺物を出土しているのは2区10・12号土坑であるが、陥穴を含めて平安時代の土坑と思われる。図示した甕の口縁部3個以外に61個の破片が出土している。全て9世紀中頃の「コの字状口縁」甕の口縁部と胴部の破片であった。

中近世

甕がこの時期の遺構である。出土遺物として「寛永通寶」を図示した。他に17片の陶磁器が出土しているが、いずれも小破片であり、江戸時代以降のものである。

2. 遺跡内出土土器について

本遺跡からは、多種の石器が堅穴住居と土坑の遺構や遺跡内での表採の形で数多く出土しているが、器種分類の後に特定の石器について実測・写真撮影を実施した。以下にその概要について記述する。

抽出した石器の総点数は55点で、内訳は打製石鏃は23点（製品20点、未製品3点）、石匙は横型の1点、削器10点、石錐2点、打製石斧2点、スタンプ形石器5点、たたき石2点、磨石4点、礮器1点、石核2点、石刃1点、加工痕ある剥片2点である。

まず、打製石鏃の細分については、従来の形を踏襲する。それによれば、形態が判明している19点すべてが凹基無茎に分類される。石材も黒曜石が17点と多く、打製石鏃の約74%を占める。その次にこの地域を産出地とする珪質変質岩が2点で約9%である。この珪質変質岩は、三平Ⅰ遺跡と三平Ⅱ遺跡で打製石鏃とその未製品の10%程度を占めており、長野原一本松遺跡のこれまでの報告分でも、110点中22点と約20%を占めている。横壁中村遺跡など他の遺跡でも同様に高い割合を示しており、本遺跡での割合もほぼ同等と考えられる。また、この石材は打製石鏃だけでなく、石匙、削器、石錐などの小型の精製の石器に多く用いられており、遠距離の長野県和田峠周辺が産出地であり、貴重な黒曜石の補充を図っている可能性が高い。

また、提示した石器の中で打製石鏃の割合が約42%とほぼ半分を占めており、周辺の遺跡でも同様の傾向が認められることから、この地域では生業での狩猟への依存度が高い可能性が考えられる。

さらに、未製品も3点出土しているが、三平Ⅰ遺跡や三平Ⅱ遺跡でも同様の傾向があり、遺跡内での製作がなされていた可能性が高いと言える。

この様な事例の比較の中から、この地域での縄文時代早期から中期前半にかけての時期の石器組成と石材組成を検討することで、様々な様相が垣間見えるものと考えられる。今後は、さらに他の遺跡との比較検討を継続し、この地域での生業の様子をより具体的に把握することを目指していきたい。(麻生)

第4章 幸神遺跡

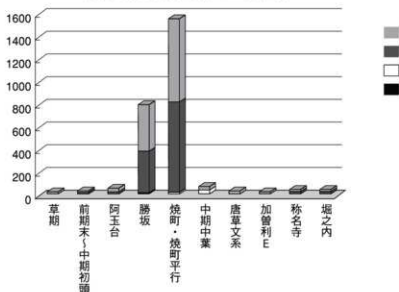
第13表 遺跡内時期別出土土器集計表

	早期	前期末 ～中期 初頭	阿玉台	勝坂	焼町・ 焼町平 行	中期中 葉	唐草文 系	加曾利 E	称名寺	堀之内	縄文晩 期～弥 生前期	縄文 時期不 明	9世紀	中近世	計
1号住居	0	2	0	0	0	0	9	1	0	0	0	3	0	0	15
2号住居	0	0	1	1	8	28	0	0	0	0	0	3	0	0	41
92区19号土坑	0	0	0	0	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	10
92区32号土坑	0	0	4	9	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	14
92区33号土坑	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2区10号土坑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
2区12号土坑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	9
遺構外	5	17	27	388	763	7	0	1	22	20	23	1971	62	18	3324
計	5	19	32	398	780	37	9	2	22	20	23	1978	74	18	3417

掲載	早期	前期末 ～中期 初頭	阿玉台	勝坂	焼町・ 焼町平 行	中期中 葉	唐草文 系	加曾利 E	称名寺	堀之内	縄文晩 期～弥 生前期	縄文 時期不 明	9世紀	中近世	計
1号住居		2						3	1						6
2号住居			1		3	4									8
19号土坑					2	2									4
32号土坑			1	2											3
33号土坑					1										1
2区10号土坑													1		1
2区12号土坑													1		1
遺構外	5	17	15	63	83	7			1	8	8	5	2	1	216

未掲載	早期	前期末 ～中期 初頭	阿玉台	勝坂	焼町・ 焼町平 行	中期中 葉	唐草文 系	加曾利 E	称名寺	堀之内	縄文晩 期～弥 生前期	縄文 時期不 明	9世紀	中近世	計	
1号住居								6				3			9	
2号住居				1	5	24						3			33	
19号土坑					6										6	
32号土坑			3	7								1			11	
33号土坑															0	
2区10号土坑													2		2	
2区12号土坑													8		8	
遺構外			12	325	680					14	12	18	1969	61	17	3108

遺跡内縄文時代時期別出土土器(全体)



3. 幸神遺跡における縄文中期土器

本遺跡は、上越国境に端を発する白砂川と吾妻川の合流点から南側の吾妻川左岸に位置する。北側の山地地形から連続して、本遺跡周辺で緩やかな南斜面となり、東西及び南側は崖状の急斜面地形となり台地を画する形状となる。周辺は遺跡としては、長野原一本松遺跡の東側に接する位置関係にある。現状も大字長野原地内になり、長野原一本松遺跡とは小河川を隔てるとはいえ、同一地区の範疇で扱われてきた。調査着手前は山林と畑地ではあるが、人家も無く、静謐な佇まいの中、地権者の方々が農作業を営まれていた。

発掘調査は平成9年度から着手され、3回にわたって調査されている。西接する長野原一本松遺跡の縄文時代中期～後期集落跡に比して、遺構密度は少なく、継続的な拠点集落としては位置付けられない遺構量である。しかしながら、幸神遺跡出土土器を概観すると、長野原一本松遺跡では少量しか出土しなかった中葉段階の阿玉台式土器や中葉末に見られる特徴的な「焼町類型」が見られ、後葉段階で集落が定着する長野原一本松遺跡に比して、先行する様相を示している。長野原地区における中期集落が安定化する後葉段階へと移行する際の、前駆的な集落跡と捉えられよう。

ここでは、幸神遺跡より出土した中期土器を個別に観察し、幾つかの問題点を抽出することによって、まとめのかわりとした。

1. 92区1号住出土土器について (第97図)

調査区東端で調査区域外にかかって調査された住居跡であるが、極めて残りが悪く、出土土器1個体を復元図示するに留まる。出土土器は、加曾利EⅢ式段階の深鉢で、隆線による懸垂文構成の間を縦位矢羽根状沈線が埋める。越後地域に見る腕骨文が見られるが、全体観は「唐草文系土器」に近く、信州地域の影響下と判断できよう。長野原地区の中期後半の集落跡では、このような「唐草文系土器」と聞

山口 逸弘

東系の加曾利E式土器が共存する例が普遍的であり、幸神遺跡の「唐草文系土器」も破片ながら加曾利EⅢ式を伴出している。極めて乏しい出土量ながら、同時期の土器を多出する長野原一本松遺跡の様相と対照的であり、中期後半段階における幸神遺跡の性格を窺うべき資料である。

2. 92区2号住出土土器 (第99図2住-8)

1号住と同様に、平面形・床面の検出に手間取り、結果的に残存状態の良くない住居跡検出となった。床面のほぼ中央に埋裏炉を設ける。埋裏炉(2住-8)は「焼町類型」が使用されており、体部下半及び口縁部突起を欠損する。特に口縁部突起は意図的な欠損が施されたものと捉えられよう。

口縁部の5単位突起が特徴である。「焼町類型」は4単位の構成が比較的知られるが、本例は対称性を崩した突起配列となる。体部中位の橋状把手も5単位突起に影響され、正位置ではなく変則的な配置となる。このような変則的な文様構成ながら、全体観は整然とした印象が強く、「焼町類型」内部の文様構成方法が保持されている個体である。半隆起状沈線-半載竹管内皮使用の沈線は深く、側線と同時に充填文要素となっている。空白部は三叉文が刻まれ、円形区画内は刺突文が充填される、「焼町類型」特有の文様が充てられる。また、口縁部内後も突出する。

時間的な位置は、明瞭な共存資料に恵まれていないが、概ね「焼町類型」新段階(山口2004他)に相当しよう。体部文様はおそらく一体であり、口縁部から派生する懸架状の隆線懸垂文が主な文様構成であろう。側線沈線は半隆起状も重複施文され、空白部も沈線充填による箇所が目立つ。川原田遺跡(堤他1997)や道調前遺跡(長谷川他2001)に見る、勝坂3式に併行する一群に類似が見られよう。ただ、空白部の半内形状の三叉文や、突起形状が全体的に小型であり様相を踏まえると、古相も残存するようだ。また、5単位突起例も類例を踏まえて注意する

必要がある。

「焼町類型」が埋燬炉として使用された状況を考えてみよう。県内では「焼町類型」を埋燬炉として検出した遺跡は筆者の管見には触れておらず、おそらく極めて稀な例として位置付けられよう。「焼町類型」の出土量が豊富な長野県東信地域でも、川原田遺跡等に近い例が若干見られるのみで、多くが住居跡床面・埋土出土や土坑内出土である。埋燬炉として使用された型式が地域の主体型式として一概には位置付けられないが、少なくとも当時の生活必需品として、「焼町類型」が幸神2号住で使用されていた状況が判断できよう。また、炉址として使用される「焼町類型」を考えると、装飾に溢れる個体ながら、埋燬炉として利用する行為は、当時の土器装飾に対する、価値観の差が窺えよう。

3. 遺構外出土土器

さて、2号住出土土器は、共存資料に恵まれてはいないが、遺構外出土遺物として掲載された、「焼町類型」3個体(第117図90・92・93)は、2号住居跡と同じグリッド出土であり、あるいは本住居跡に帰属する可能性も想定された。調査時より、住居跡の平面形範囲を検出しつつ、その帰属を模索した土器群である。

90は大小の双環状突起とコイル状突起4単位を口縁部に配した深鉢で、突起下端を弧状隆線で繋ぎ口縁部文様を画す。体部文様帯も中位に付けられた斜位双環状突起と横位弧状隆線と上下に分帯され、下位は分岐懸垂文構成、上位は横位隆線充填構成となる。体部下半は強い横位撫で調整が及び、無文処理されている。2号住炉体土器が体部一帯構成の文様構成に比して、当資料は口縁部・体部2帯と3帯に分帯された「焼町類型」である。しかしながら、分帯されているとはいえ、全体印象は曲隆線と内皮使用の沈線文で占められ、口縁部～体部の同一印象を受ける文様を充てる。また、体部中位の突起と横位弧状隆線の在り方は、「焼町類型」の一部に見られる体部上半の幅状の文様帯と同様の効果が見られる。このような「焼町類型」内部における文様構成方法

の多様性は、例えば川原田遺跡J-12号住出土土器にみる「焼町類型」数個体にも認められ、同時期共存の特徴ある土器群にも複数の文様構成方法が存在することが観察されよう。本例は2号住炉体土器と共存関係ではないが、文様構成差を窺う良好な例であろう。

92・93は同一個体の口縁部破片と思われるが、口縁部大型突起下の円形区画と刺突文充填施文が2号住炉体土器との共通性を窺わせる。

90・92・93とも「焼町類型」新段階に相当し、2号住炉体土器との時間的な差は少ない。しかしながら、調査担当者として、調査時よりこれらの遺物を住居跡帰属としてその可能性を探った経緯から、これらは住居跡平面形から僅かにずれた箇所出土であり、2号住出土土器として確定的な共存例と判断できなかった。やむなく共存資料としては扱わず、遺構外資料として掲載するに至った。

その他のグリッド出土土器としては、第119図132の深鉢と同図139の浅鉢が特徴的で注意したい。

132は小型の深鉢で、小型の円環状突起を口縁部に付す。口縁部文様帯を持たず、体部一体構成と思われる。半載竹管内皮使用の平行沈線による意匠文が配されるが、意匠単位や全体の様相は不明である。地文縄文で、沈線に残存する。グリッド出土126と同一個体と思われ、126の口縁部細片部分が2号住と同じグリッド出土であることから、2号住炉体土器や他のグリッド出土土器(90・92・93)との関連も窺われるが、これも確定的ではなく可能性のみを示唆しておきたい。時期も類例がなく判断としないが、おそらく勝坂3式併行期と見做せよう。

139の浅鉢は北陸系の浅鉢あるいは越後地域に見る例である。破片資料ながら、口縁部文様帯は横位沈線を主体とした施文で、おそらく口縁部の逆U字状意匠は対称性を持った双状突起をなすものと考えられる。また、僅かな破片ながら体部の横位LR縄文が特徴的である。関東地方・信州地方の中期浅鉢には体部施文する構成方法は無く、他地域からの搬

入と考えたい。色調も淡褐色を呈し、他の土器群との強い色彩差を見る。県内の類例資料としては、道前遺跡13号住、沼南遺跡319号坑、白井大宮Ⅱ遺跡230号土坑が挙げられよう。本資料とは若干の時期差が存在するであろうが、阿玉台Ⅱ式段階に併行する資料群である。おそらく本資料も当該期に時期を求めて良いだろう。

4. 92区32号土坑出土土器

最後に、92区32号土坑出土土器を考えてみよう。ほぼ完形の阿玉台Ⅱ式土器である。共存資料としては、破片資料で勝坂1式の深鉢体部破片2点と碧玉製の削器1点を見る。阿玉台式は横位に出土しており、墓壙に供された土器として、碧玉製削器とともにその用途を想起させるが、人骨や装身具の出土も無く、32号土坑の性格を墓として位置付けるのは躊躇する。ただし、阿玉台式は明らかに埋置された状態とみることができ、幸神遺跡およびその周辺に何等かの意図を持った「埋置者」が存在した証左となる。残念ながら、幸神遺跡および長野原一本松遺跡においても、当該期の住居跡は確認されておらず、「埋置者」の背後は窺い知れないが、少なくとも勝坂1式との共存が果たされていた土器環境を確信できよう。さらに、本資料を観察すると、体部文様帯の懸垂文構成を繋ぐ横位刻み目列及び結節沈線文は、体部を多段化する効果を示しており、勝坂1式やその他の異系統土器群との共存が果たされた土器環境の中、本資料の埋置者が阿玉台式土器を選択した行為に注意しておきたい。また、群馬県における阿玉台式土器の優位性はⅠb式～Ⅱ式にかけて観測され、これまで、利根川本流域や鍋川流域にその現象が報告されている。今回、吾妻川流域の幸神遺跡において、安定した阿玉台式土器が出土した状況を踏まえ、阿玉台式土器の濃密な分布を想定することができよう。本遺跡より更に上流の嬭恋村今井東平遺跡でも包含層（捨て場遺構）出土ながら、阿玉台Ⅰb式やⅡ式が出土している（松島他2004）。長野県を面す峠を臨む当地域で、阿玉台式土器が安定化

する様相は、中期中業段階では利根川流域の土器文化が吾妻川上流域にまで波及した現象が把握できよう。

以上のように、幸神遺跡における中期土器を個別観察というやや偏的な分析方法でまとめてみた。

中期後半段階以降、集落が設置され賑わいを見せる長野原一本松遺跡に較べて、幸神遺跡は中期中業～後半段階に極めて静かな集落環境が営まれるようだ。大型集落の至近距離にある、前駆的な小規模集落の在り方を幸神遺跡に見ることができよう。

確かに、出土土器群としてのまとまりは欠くが、各個体毎の特徴と問題点を抽出し、当地域の該期土器様相を補強することができた。今後、資料の蓄積を重ね、様々な分析を試みる際に一助となるべき資料群として評価したい。

参考文献

- 堀 隆他 1997 『川原田遺跡』長野県御代田町教育委員会
 寺内隆夫 1997 『川原田遺跡縄文時代中期中業の土器群について』川原田遺跡 御代田町教育委員会
 寺内隆夫 2004 『千曲川流域の縄文時代中期中業の土器 - 「焼町土器」、および北関東地域との関係を中心に - 』国立歴史民俗博物館研究報告 第120集 国立歴史民俗博物館
 長谷川福次 2001 『道前遺跡の焼町土器』道前遺跡 北構村教育委員会
 松島榮治・福田貫之・山口逸弘 2004 『嬭恋村今井東平遺跡の紹介』研究紀要 22 (財)群馬県縄文文化財調査事業団
 山口逸弘 2004 『群馬県における「焼町類型」の位置 - 異系統土器共存の一視角 - 』

第7節 幸神遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1項 幸神遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県域の後期更新世以降に形成された地層中には、赤城山、浅間火山、榛名火山など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の始良カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層が検出された幸神遺跡でも、土層や年代に関する資料を求めるために、地質調査を行って土層の層序について記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行って、示標テフラの層位を求めることになった。調査分析の対象となった地点は、92区北壁および92区中央地点の2地点である。

2. 土層の層序

(1) 92区北壁 (C区)

この地点では、下位より細粒の黄色軽石混じり黒褐色土（層厚27cm以上、軽石の最大径3mm）、細粒の黄色軽石混じり色調の暗い暗褐色土（層厚12cm、軽石の最大径2mm）、暗褐色土（層厚17cm）、色調の暗い暗褐色土（層厚8cm）、白色軽石混じり暗褐色土（層厚8cm、軽石の最大径5mm）、白色軽石を多く含む褐色土（層厚26cm、軽石の最大径14mm）、褐色作土（層厚14cm）が認められる（図1）。発掘調査では、これらの土層のうち、最下位の黒褐色土の上面に凹凸が認められたことから、畚のサクの可能性が考えられた。

(2) 92区中央地点 (C区)

この地点では、細粒の黄色軽石混じり暗褐色土（層厚20cm以上、軽石の最大径3mm）の上面に、暗褐色土で埋まった凹地が認められた。これについても、畚のサクの可能性が考えられた。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラが認められた層準およびテフラの検出される可能性が考えられた土壌試料8試料について、テフラ検出分析を行い、含まれるテフラ粒子の特徴から示標テフラの検出同定を試みることにした。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料番号19には、比較的発泡の良い灰色軽石（最大径1.7mm）が比較的多く認められた。また、試料番号11には、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石（最大径2.6mm）が比較的多く含まれている。そして、試料番号7には、比較的良く発泡した暗褐色軽石（最大径1.8mm）が比較的多く認められた。さらに試料番号1には、比較的良く発泡した白色軽石（最大径3.1mm）が多く認められた。これらのうち、産状から試料番号1付近に降灰層準があると考えられる白色軽石は、その特徴から、1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A）に由来すると考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

とくに起源が不明であった92区北壁の試料番号15、11、7の3試料中に含まれるテフラについて、屈折率測定を行い、示標テフラとの同定を試みた。測定は位相差法（新井、1972）による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表1に示す。試料番号15には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められた。含まれる火山ガラス（n）と斜方輝石（y）の屈折

率は、各1.507-1.517と1.706-1.709である。このテフラについては、その特徴から約5400年前に浅間火山から噴出した浅間六合軽石 (As-Kn, 早田, 1990, 1996) に由来する可能性が考えられる。

また、試料番号11には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められた。含まれる火山ガラス (n) と斜方輝石 (γ) の屈折率は、各1.517±と1.706-1.709である。このテフラについては、その特徴から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C, 新井, 1979, 早田, 1990) に由来すると考えられる。

試料番号7にも、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が認められた。含まれる斜方輝石 (γ) の屈折率は、1.707-1.710である。このテフラについては、その特徴から、1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B, 新井, 1979) または1128 (大治3) 年に浅間火山から噴出した浅間粕川テフラ (As-Kk, 早田, 1991, 1996) に由来すると考えられる。

したがって、仮に黒褐色土上面のサクが実際の畠の基底を示しているとするれば、その年代はAs-C降灰後で、少なくともAs-Kk降灰前と考えられる。

5. 小結

幸神遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、浅間六合軽石 (As-Kn, 約5400年前)、浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉)、浅間Bテフラ (1108年) または浅間粕川テフラ (As-Kk, 1128年) に由来する軽石、浅間A軽石 (As-A, 1783年) を検出することができた。本地区において検出された畠のサクの層位は、As-Cより上位で、少なくともAs-Kkより下位にあると考えられた。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東並地北西部地域の第四紀層年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p. 1-79.
 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p. 254-269.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no. 53, p. 41-52.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

早田 勉 (1990) 群馬県自然と風土。群馬県史通史編, 1,

p. 39-129.

早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, no. 53, p. 2-7.

早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史。御代田町誌, 自然編, p. 22-43.

早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, Ⅷ, p. 256-267.

※この報告は、1997年に行われた発掘調査に伴い行われた分析結果である。

現在遺跡名が変更となっているので、編纂者が本文中に使われた遺跡名を変更して掲載した。

表1 92区におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
北壁	1	+++	白	3.1
	3	++	白	2.4
	5	++	暗褐	1.7
	7	++	暗褐	1.8
	9	++	灰白	1.9
	11	++	灰白	2.6
	13	+	灰	1.8
	15	+	灰	1.8

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度,
 +: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は, mm.

表2 屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)
92区北壁	7	opx>cpx	-	1.707-1.710
	11	opx>cpx	1.517±	1.706-1.709
	15	opx>cpx	1.507-1.517	1.706-1.709

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, 屈折率の測定は, 位相差法(新井, 1972)による

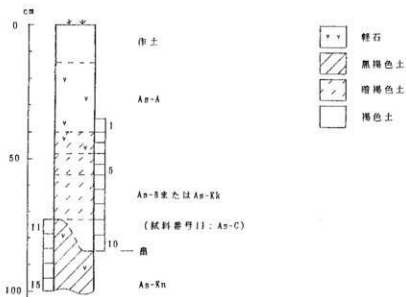


図1 幸神遺跡92区北壁の土層柱状図 数字はテフラ分析の資料番号

第2項 幸神遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。

2. 試料

分析試料は、92区北蔵および92区中央地点から採取された7点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対して直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加
(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 鏡検・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94、ヨシ属は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、ネザサ属は0.48、クマザサ属(チシマザサ属・チマキザサ属)は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来: イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(ススキ属など)、ウシクサ族型、ウシクサ族型(大型)、Aタイプ(くさび型)、Bタイプ
 籾の表皮細胞由来: オオムギ族(ムギ類)

[イネ科-タケ亜科]

機動細胞由来: ネザサ属型(おもにメダケ属ネザサ属)、クマザサ属型(チシマザサ属やチマキザサ属など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

はめ絵バズル状(アナ科ブナ属など)、多角形板状(アナ科コナラ属など)

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクヒエが含まれる)、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとオオムギ族が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性につい

て考察する。

1) イネ

イネは、As-Aの下層（試料1、2）から検出された。密度はいずれも700個/gと低い値である。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は、As-Aの下層（試料1、2）から検出された。ここで検出されたのは、ムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井、1989）である。密度は700~2,200個/gと比較的低い値であるが、穎（籽粒）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺で、ムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族型（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、全体的に棒状珪酸体やその他（未分類）が多量に検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型、ネザサ節型、クマザサ属型なども検出された。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、全体的にヨシ属が卓越していることが分かる。

以上の結果から、As-Cの下層からAs-Aの下層にかけては、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではススキ属やチガヤ属、ク

マザサ属なども見られたものと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、浅間A軽石（As-A、1783年）の下層からはイネやオオムギ族（穎の表皮細胞）が検出され、調査地点もしくはその近辺でイネやムギ類が栽培されていた可能性が認められた。なお、浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）より上位の畠状遺構からは、イネ科栽培植物に由来する分類群は検出されなかった。

As-Cの下層からAs-Aの下層までの堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺ではススキ属やチガヤ属、クマザサ属なども見られたものと推定される。

参考文献

- 杉山直二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号, p. 27-37.
- 杉山直二・石井克己 (1989) 群馬県子持村, F P直下から検出された灰化物の植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析. 日本第四紀学会要旨集, 19, p. 94-95.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標準と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.

※この報告は、1997年に行われた発掘調査に伴い行われた分析結果である。

現在遺跡名が変更となっているので、編集者が本文中に使われた遺跡名を変更して掲載した。

表1 群馬県幸神遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度(単位:×100個/g)

分類群 \ 試料	92区北壁					92区中央	
	1	2	3	4	5	6	1
イネ科							
イネ	7	7					
オオムギ族(穎の表皮細胞)	22	7					
キビ族型	29		22	83	67	85	36
ヨシ属	43	29	37	23	37	64	80
ススキ属型	14	74		15		21	15
ウシクサ族型	43	37	59	60	52	50	44
ウシクサ族型(大型)			7				
Aタイプ(くさび型)	7						
Bタイプ			15				
タケ亜科							
ネザサ節型	22	15	7	8	7		
クマザサ属型	29	15	15		45	21	44
未分類等	22	29	66	91	178	71	131
その他のイネ科							
表皮毛起源	36	15	7		7		7
棒状珪酸体	416	383	425	378	482	418	479
未分類等	516	441	550	483	527	574	544
樹木起源							
はめ絵バスル状(ブナ属など)		7		8			
多角形板状(コナラ属など)				8			
植物珪酸体総数	1205	1060	1210	1155	1402	1305	1379

おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m²・cm)

イネ	0.21	0.22					
ヨシ属	2.72	1.86	2.31	1.43	2.34	4.03	5.04
ススキ属型	0.18	0.91		0.19		0.26	0.18
ネザサ節型	0.10	0.07	0.04	0.04	0.04		
クマザサ属型	0.22	0.11	0.11		0.33	0.16	0.33

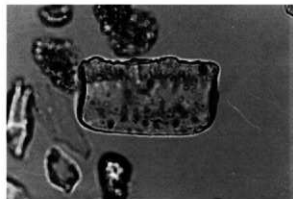
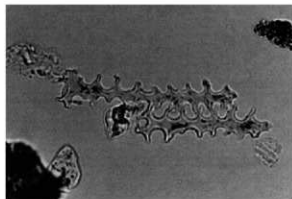
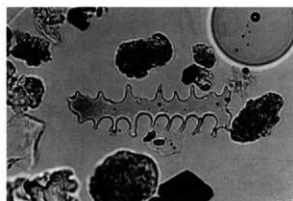
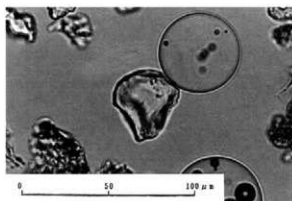
タケ亜科の比率(%)

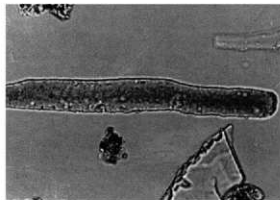
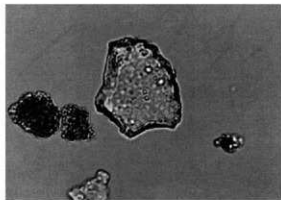
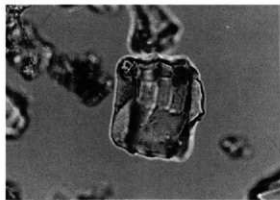
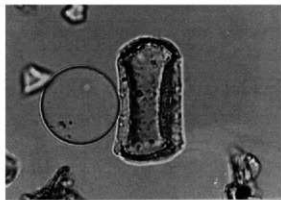
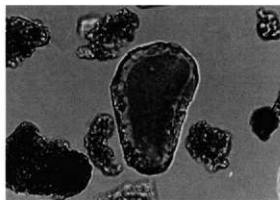
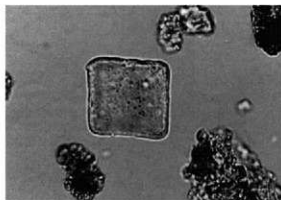
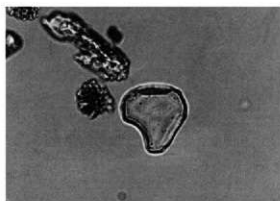
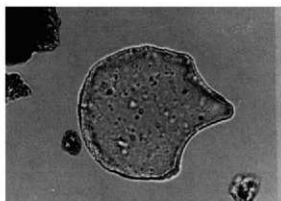
ネザサ節型	32	39	24	100	10		
クマザサ属型	68	61	76		90	100	100

植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	92区北壁	2
2	オオムギ族 (穎の表皮細胞)	92区北壁	1
3	オオムギ族 (穎の表皮細胞)	92区北壁	1
4	キビ族型	92区北壁	1
5	ヨシ属	92区中央	1
6	ススキ属型	92区中央	1
7	ウシクサ族型	92区中央	1
8	ウシクサ族型(大型)	92区北壁	3
9	イネ科B	92区北壁	3
10	ネザサ節型	92区北壁	2
11	クマザサ属型	92区中央	1
12	棒状珪酸体	92区北壁	6





報 告 書 抄 録

書名ふりがな	やまねさんいせき
書名	山根Ⅲ遺跡
副書名	ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	429
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	17
編著者名	瀧川伸男 藤巻幸男 飯森康広
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080315
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	やまねさんいせき
遺跡名	山根Ⅲ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんがのはらまちおおあざよこかべ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字横壁
市町村コード	10424
遺跡番号	0029
北韓(日本測地系)	363211
東経(日本測地系)	13840408
北韓(世界測地系)	363244
東経(世界測地系)	1384030
調査期間	20010827-20010925 20060417-20060523
調査面積	1180
調査原因	ハツ場ダム建設工事
種別	集落
主な時代	縄文
遺跡概要	集落-縄文-堅穴住居3+土坑39-土器+石器/その他-中近世-溝1+陶磁器
特記事項	縄文時代中期後半期の集落。早期後半～後期の遺物出土。
概要	本遺跡は、吾妻川右岸の中段段丘上の緩やかな北向きの傾斜地に位置する。標高はおよそ590～600mの間で、西側に深沢、北側に吾妻川が隣接する。縄文時代中期後半加曾利E3式期の堅穴住居3軒の他に、土坑39基、平石を採取したと思われる採石遺構1基、中世以降の溝が1条検出された。

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	うえはらよんいせき
書 名	上原IV遺跡
副 書 名	八ツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	429
シ リ ー ズ 名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	17
編 著 者 名	飯森康広 篠原正洋
編 集 機 関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 年 月 日	20080315
作 成 法 人 I D	21005
郵 便 番 号	377-8555
電 話 番 号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	うえはらよんいせき
遺 跡 名	上原IV遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまくんながのほらまらおおあざはやし
遺 跡 所 在 地	群馬県吾妻郡長野原町大字林
市町村コード	10424
遺 跡 番 号	0044
北緯(日本測地系)	363233
東経(日本測地系)	1384042
北緯(世界測地系)	363245
東経(世界測地系)	1384030
調 査 期 間	20030801-20030915
調 査 面 積	890
調 査 原 因	八ツ場ダム建設工事
種 別	集落/ 散布地
主 な 時 代	縄文/弥生/平安/中世/近世
遺 跡 概 要	集落-縄文-竪穴住居4+土坑6+埴土2+列石遺構1+配石遺構2+集石遺構1-土器+石器/散布地-弥生-土器/散布地-古墳-土師器/散布地-平安-土師器+須恵器/その他-中近世-溝5-陶磁器+木器
特 記 事 項	縄文時代後期の敷石住居
概 要	本遺跡は吾妻川左岸、林集落が営まれる扇状地地形の西側扇端部に位置し、西側谷地を押し沢川が流れる。主な時代は縄文時代後期であり、竪穴住居跡4軒が重複し、更に重なって列石遺構1基・配石遺構2基や土坑6基が検出された。1号住居跡周辺では、縄文晩期から弥生時代の遺物がやや多く出土した。台地縁では、近世の溝5条、更に下層で旧河道跡を検出した。旧河道跡は出土遺物から中世以降に埋没したと考えられる。近世の溝からは、木器が多く出土している。

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	さいのかみいせき
書名	幸神遺跡
副書名	ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	429
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	17
編著者名	中沢 悟 麻生敏隆 山口逸弘 諸田康成
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080315
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	さいのかみいせき
遺跡名	幸神遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんがのはらまちおおあざながのはら
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字長野原
市町村コード	10424
遺跡番号	0062
北緯(日本測地系)	363238
東経(日本測地系)	1383932
北緯(世界測地系)	363249
東経(世界測地系)	1383920
調査期間	19960401-19970331/19970701-19971219/20021218-20021220/20051114-20060328
調査面積	10097
調査原因	ハツ場ダム建設工事
種別	集落/生産地/散布地
主な時代	縄文/弥生/平安/近世
遺跡概要	集落-縄文-竪穴住居2+土坑32-土器+石器/生産地-近世-畠/散布地-縄文-土器+石器/散布地-弥生-土器/散布地-平安-土師器/その他-土坑15-平安-土師器
特記事項	縄文時代中期の埋甕炉を持つ竪穴住居
概要	本遺跡は上越国境に端を発する白砂川と吾妻川の合流点から東側の吾妻川左岸に位置する。北側の山地地形から連続して、本遺跡周辺で緩やかな南斜面となり、東西及び南側は崖状の急斜面地形となり大地を測する形状となる。周辺の遺跡としては、長野原一本松遺跡が西に近接している。調査区の遺構の主な時代は縄文時代中期の竪穴住居跡2軒と土坑32基及び平安時代の土坑15基である。2号住居跡では埋甕炉として「焼町類型」が使用されている。32号土坑内からはほぼ完形の阿玉台Ⅱ式の土器が出土している。西に接する中期後半段階を主とする大規模集落遺跡である長野原一本松遺跡の前面的な小規模集落である。

写真図版



1. 23・24区遠景 (南西から)



2. 平成18年度調査区全景 (北西から)



1. 平成13年度調査第1面全景（北東から）



2. 24区J-2グリッド露出土状況（東から）



1. 24区2号住居跡全景（東から）



2. 同掘り方全景（炉・埋ガメ除く）（北から）



1. 24区2号住居跡炉検出状況 (西から)



2. 同炉セクション (南から)



3. 同炉全景 (西から)



4. 同炉全景 (南から)



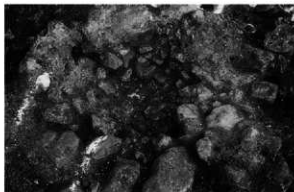
5. 同埋ガメ確認及び掘出土状況 (北から)



6. 同埋ガメ出土状況セクション (北から)



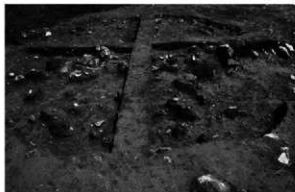
7. 同埋ガメ全景 (北から)



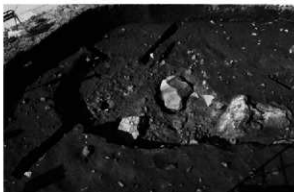
8. 同埋ガメ掘り方全景 (北から)



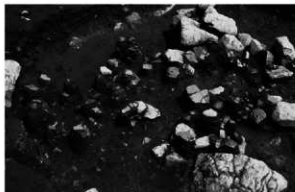
1. 24区3号住居跡使用面全景（南から）



2. 同セクション（南から）



3. 同掘り方全景（南西から）



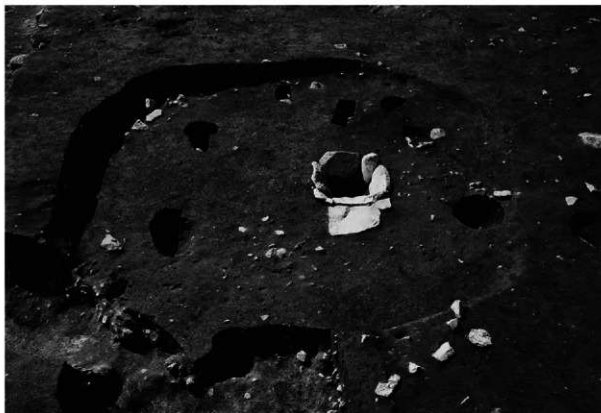
4. 同遺物出土状況近景（南から）



5. 同遺物出土状況近景（西から）



1. 4号住居跡遺物出土状況（東から）



2. 同使用面全景（南東から）



1. 24区4号住居跡掘り方全景 (東から)



2. 同遺物出土状況 (東から)



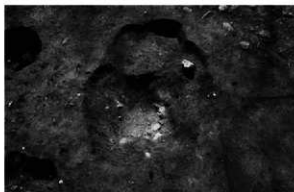
3. 同石囲炉全景 (西から)



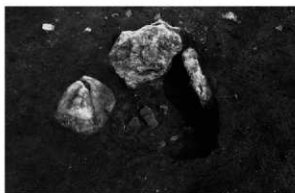
4. 石囲炉掘り方東西セクション (南から)



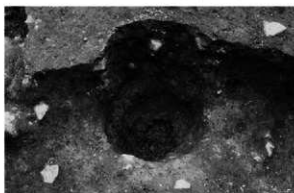
5. 同石囲炉掘り方全景 (西から)



6. 同石囲炉掘り方全景 (西から)



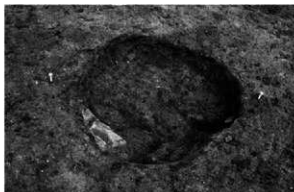
7. 同石組全景 (西から)



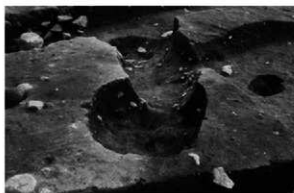
8. 同P5全景 (東から)



1. 23区2号土坑セクション (南東から)



2. 同3号土坑全景 (東から)



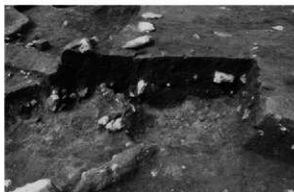
3. 同4・5号土坑全景 (北東から)



4. 同6号土坑セクション (北から)



5. 同7号土坑セクション (南から)



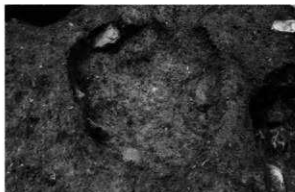
6. 同8号土坑セクション (南から)



7. 同9号土坑全景 (北から)



8. 同6・8・10・11号土坑全景 (南東から)



1. 23区12号土坑全景 (東から)



2. 同14号土坑セクション (北東から)



3. 24区17号土坑セクション (東から)



4. 同18号土坑全景 (西から)



5. 同19号土坑全景 (西から)



6. 同20号土坑全景 (南から)



7. 同21号土坑全景 (東から)



8. 同22号土坑セクション (西から)



1. 24区23号土坑セクション (北から)



2. 同24号土坑セクション (西から)



3. 同25号土坑セクション (北から)



4. 同26号土坑全景 (北から)



5. 同27号土坑セクション (西から)



6. 同28号土坑全景 (東から)



7. 同29号土坑全景 (東から)



8. 同30号土坑全景 (東から)



1. 24区31号土坑セクション (北から)



2. 同32号土坑全景 (西から)



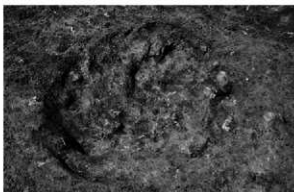
3. 同33号土坑セクション (南から)



4. 同34号土坑全景 (南西から)



5. 同35号土坑全景 (北東から)



6. 同36号土坑全景 (北東から)



7. 同37土坑セクション (北から)



8. 同38・39号土坑全景 (西から)



1. 24区40号土坑セクション (南から)



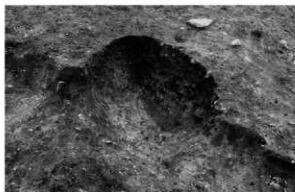
2. 同37・40・41号土坑セクション (北東から)



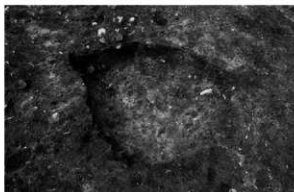
3. 同42号土坑全景 (東から)



4. 同43号土坑セクション (南から)



5. 同43号土坑全景 (南から)



6. 同44号土坑全景 (南から)



7. 同45号土坑全景 (東から)



8. 同1号溝全景 (北から)



1. 24区3号採石遺構セクション (南から)



2. 同その1 (東から)



3. 同その1 (南から)



4. 同その2 (南から)



5. 同その3 (南から)



6. 同その4 (北から)



7. 同割れ口近接 (東から)



8. 同取り上げ状況 (東から)

P L 14

山根Ⅲ遺跡



2B-1



2B-5



2B-6



2B-7



2B-8



2B-9



2B-10



2B-11



2B-2



2B-3



2B-4



2B-12



2B-13

24区2号住居(1)



2住-14



2住-15



2住-16



2住-17



2住-18



2住-19



2住-20



2住-21



2住-22



2住-23



2住-27



2住-24



2住-25



2住-26



2住-28



2住-29



3B-1



3B-2



3B-3



3B-4



3B-5



3B-6



3B-7



3B-8



3B-9



3B-10



3B-11



3B-12



3B-13



3B-14



3B-15



3B-16



3B-17



3住-20

3住-18



3住-21



3住-22



3住-23



3住-24



3住-19



3住-25



3住-26



3住-27

24区3号住居(2)

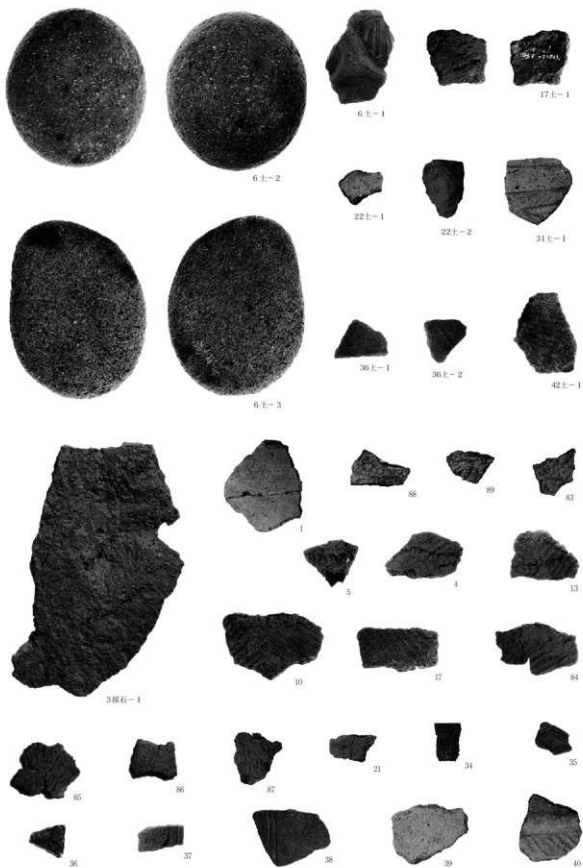


24区4号住居(1)



P L 20

山根Ⅲ遺跡

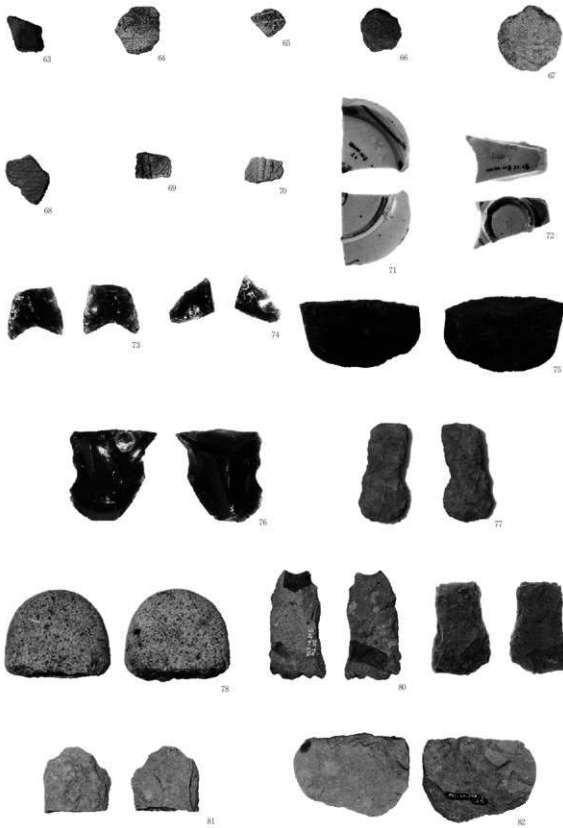


23・24区土坑・遺構外出土遺物(1)



P L 22

山根Ⅲ遺跡



遺構外出土遺物(3)



1. 遺跡周辺風景（南から王城山方面）



2. 遺跡遠望（吾妻川対岸丸岩周辺より）



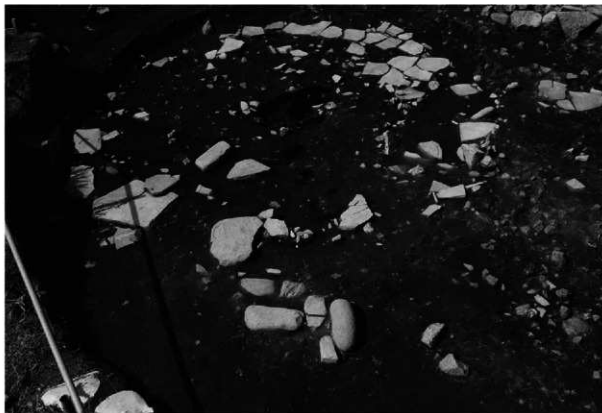
1. 上調査区全景



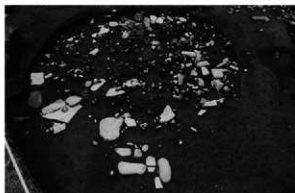
2. 中調査区全景



3. 上調査区近景



1. 1号住居跡全景



2. 同遺物出土状態



3. 同土層断面



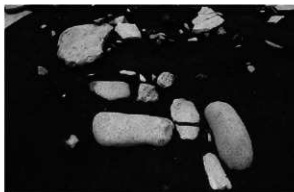
4. 同掘り方全景



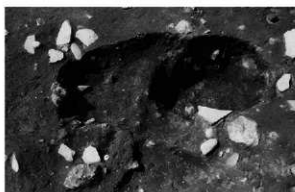
5. 同掘り方土層断面



1. 1号住居跡焼土確認状況



2. 同柄部石出土状態



3. 同内土坑全景



4. 同内土坑土層断面



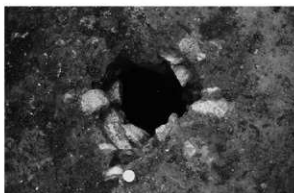
5. 同石囲全景



6. 同石囲掘り方全景



7. 同P1全景



8. 同P3全景



1. 2号住居跡全景



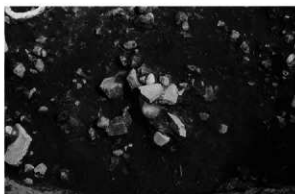
2. 同掘り方全景



3. 同敷石部分近景



4. 同遺物出土状態



5. 同柄部石出土状態



1. 2号住居跡P11全景



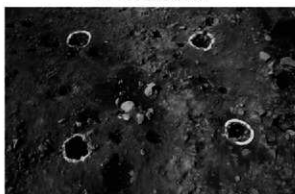
2. 同P9全景



3. 3号住居跡全景



5. 同遺物出土状態



4. 同全景



6. 同遺物出土状態



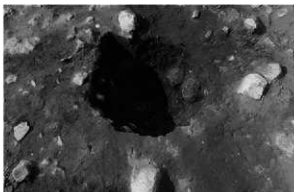
8. 同掘り方土層断面



7. 同遺物出土状態



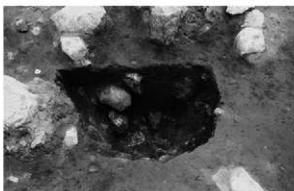
1. 3号住居跡炉全景



3. 同P15全景



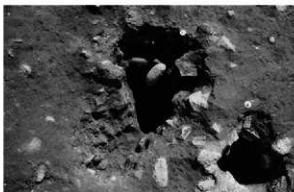
2. 同炉土層断面



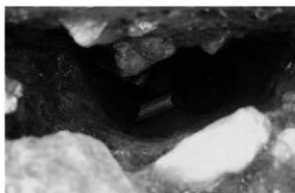
4. 同P15土層断面



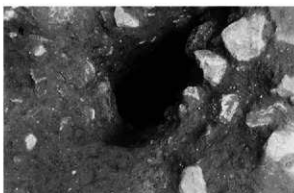
5. 同P6全景



7. 同P16全景



6. 同P6石棒出土状態



8. 同P16ミニチュア土器出土状態



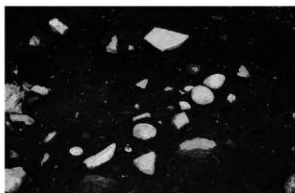
1. 4号住居跡全景



2. 同遺物出土状態



3. 同遺物出土状態



4. 同遺物出土状態



5. 同P1土層断面



1. 1号土坑全景



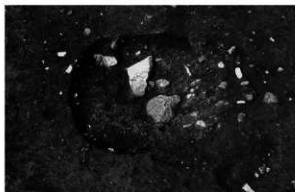
3. 2号土坑全景



2. 1号土坑土層断面



4. 3号土坑全景



6. 4号土坑全景



5. 3号土坑土層断面



7. 4号土坑土層断面



8. 6号土坑全景



1. 6号土坑土層断面



2. 7号土坑全景



4. 1号列石確認状況



3. 7号土坑土層断面



5. 1号列石全景



1. 1号列石全景



2. 同北側部分遺物出土状態



3. 同注口土器出土状態



4. 同下層断面



5. 同掘り方全景



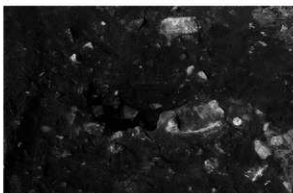
1. 1号列石掘り方全景



2. 1号ピット土層断面



3. 2号ピット土層断面



4. 10号ピット土層断面



5. 1・2号配石遺構全景



1. 1号配石遺構全景



2. 同遺物出土狀態



3. 同埋設土器出土狀態



4. 同埋設土器土層断面



5. 2号配石遺構全景



1. 2号配石遺構遺物出土状態



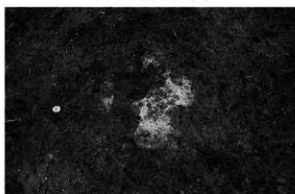
2. 2号配石遺構土層断面



3. 1号集石遺構全景



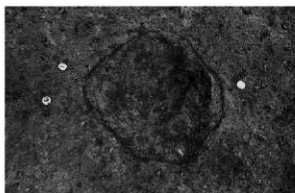
4. 1号集石遺構土層断面



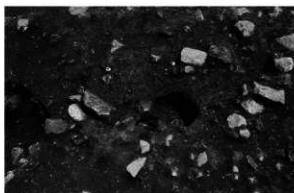
5. 2号焼土遺構確認状況



6. 2号焼土遺構断ち割り断面



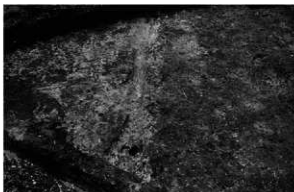
7. 2号焼土遺構掘り方全景



8. 3号焼土遺構全景



1. 3号焼土遺構断ち割り断面



2. 1号溝全景



3. 2～4号溝全景



4. 2～4号溝全景



5. 2号溝全景



1. 2号溝土層断面



2. 3号溝遺物出土状態



3. 4・5号溝全景



4. 4・5号溝全景



5. 4号溝土層断面



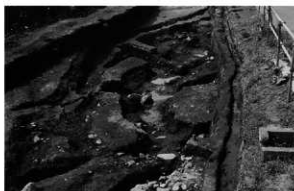
1. 4・5号溝土層断面



2. 4号溝キセル出土状態



3. 4号溝桶底板出土状態



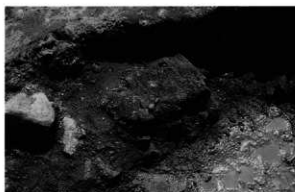
4. 5号溝全景



5. 同石出土状態



6. 同下駄出土状態



7. 同下駄出土状態



8. 同木材片出土状態



1. 2号溝上層石投棄状況



2. 1・2号旧河道跡全景



3. 同全景



4. 同西壁土層断面



5. 同西壁土層断面



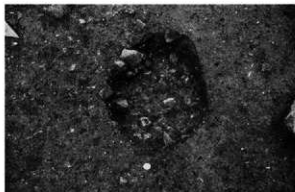
1. 2号旧河道跡石鉢出土状態



2. 同石鉢出土状態



3. 1号壑穴状遺構全景



4. 同P1号全景



5. 同P1土層断面



1. 1号竪穴状遺構P 2 全景



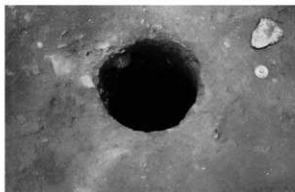
2. 同土層断面



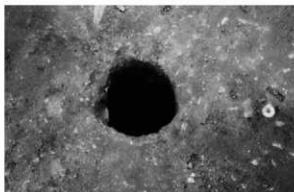
3. 12号ピット土層断面



4. 13号ピット全景



5. 14号ピット全景



6. 15号ピット全景



7. 1号焼土遺構確認状況



8. 同断ち割り断面



1. 1号焼土遺構掘り方全景



2. I・J-10-12グリッド遺物出土状態



3. K-9・10グリッド遺物出土状態



4. I-11グリッド下駄出土状態



5. 2号トレンチ調査状況



6. 1号トレンチ調査状況



7. 上調査区調査前の風景



8. 中調査区盛土下状況



1. 下調査区調査前の風景



2. 下調査区調査前撤去物置礎石状態



3. 3号トレンチ調査状況



4. 下調査区西脇墓地



5. 薬師堂



6. 薬師堂裏の中世宝塔



7. 伝朝林寺跡供養地蔵

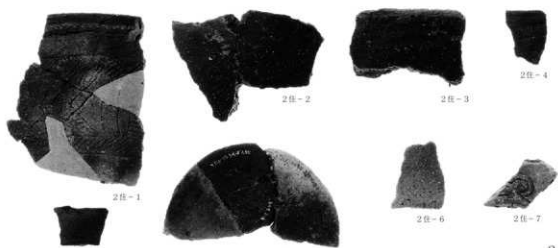


8. 同由来説明板





1 住



2 住



3 住

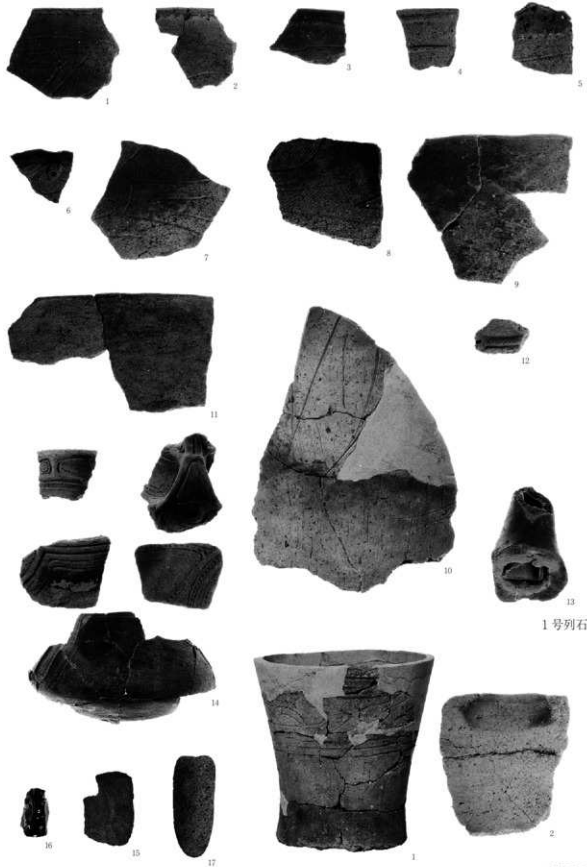


3 住

4 住

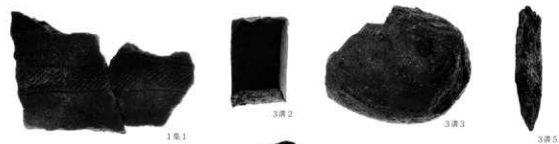
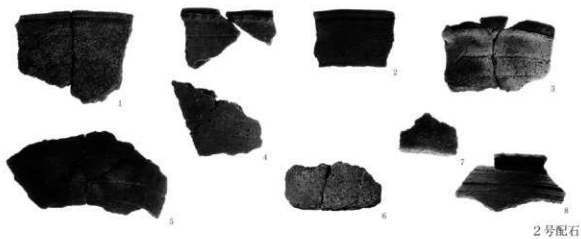
P L 48

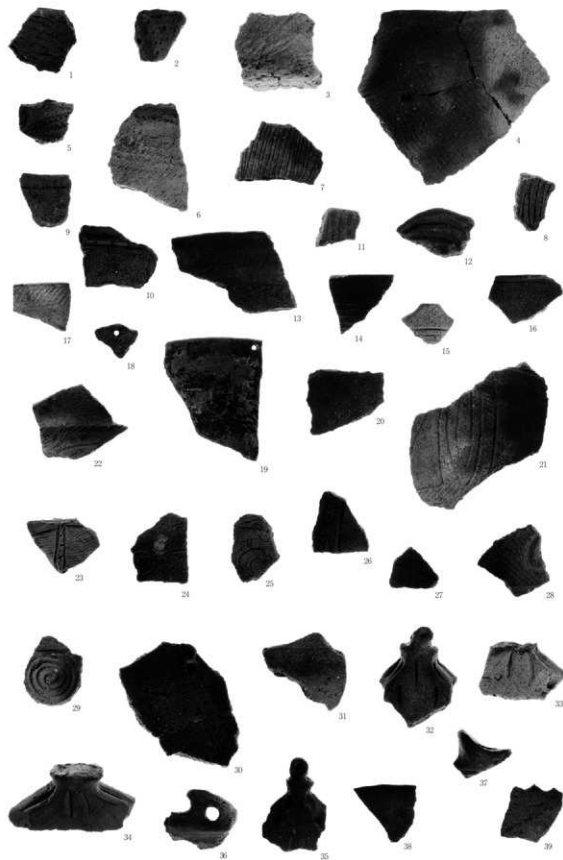
上原IV遺跡



1号列石

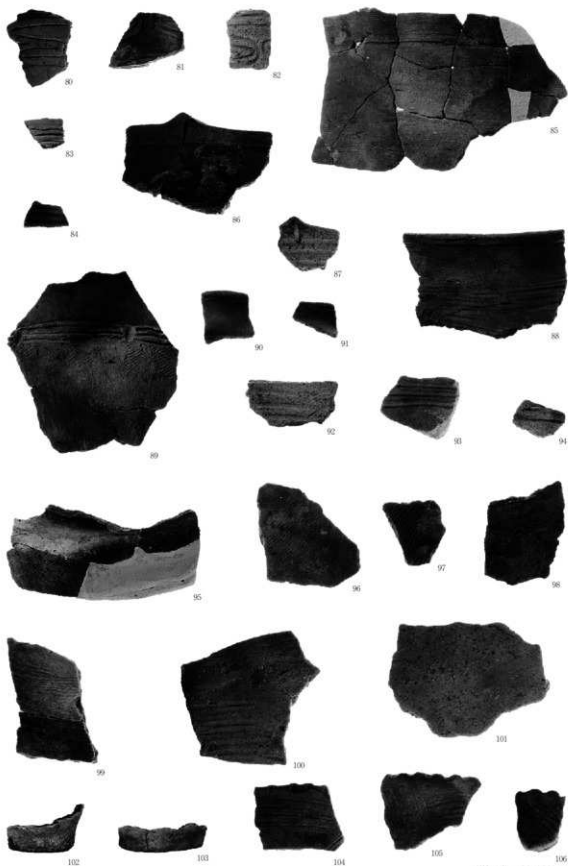
1号配石







遺構外出土遺物(2)

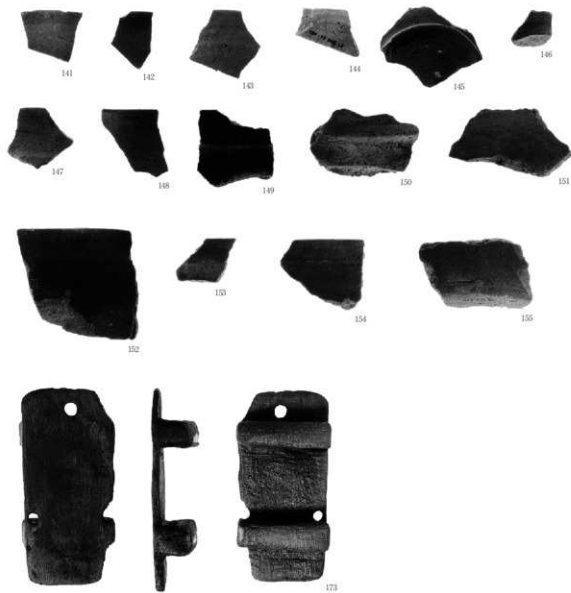


遺構外出土遺物(3)



P L 54

上原IV遺跡



遺構外出土遺物(5)



1. 調査区全景 (29地区91区) (西から)



2. 調査区全景 (39地区1・2区) (西から)



1. 調査区全景 (39地区1・2区) (北から)



2. 調査区全景 (39地区1・2区) (北東から)



1. 92区西側 (南東から)



2. 同中央部分 (北西から)



3. 同東側 (北西から)



4. 同東側 (南東から)



5. 同西側畠跡全景 (北西から)



1. 92区東側畠跡全景（南東から）



2. 同西側畠跡全景（北西から）



1. 92区1号住居跡全景 (南から)



2. 同遺物出土状況 (南西から)



3. 同遺物出土状況 (南東から)



4. 同石囲炉セクション (西から)



5. 同石囲炉 (南から)



1. 92区2号住居跡全景 (南から)



2. 同埋設炉 (西から)



3. 同埋設炉



4. 同埋設炉断面 (西から)



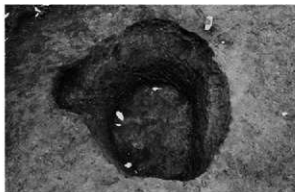
5. 同埋設炉断面 (南西から)



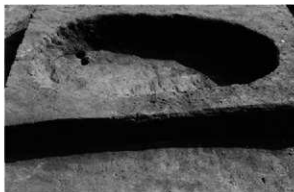
1. 92区土坑群 (東から)



2. 92区土坑群 (西から)



1. 91区1号土坑 (南東から)



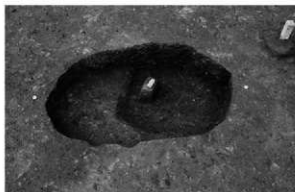
2. 同 (北から)



3. 同2号土坑 (北から)



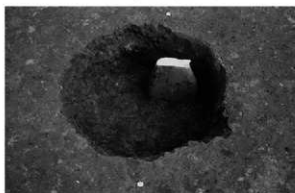
4. 同3号土坑 (北から)



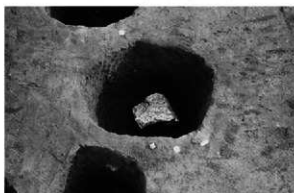
5. 同4号土坑 (南から)



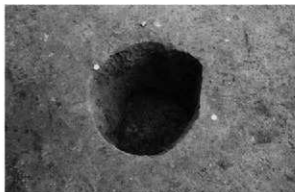
6. 同5・11号土坑 (西から)



7. 同6号土坑 (西から)



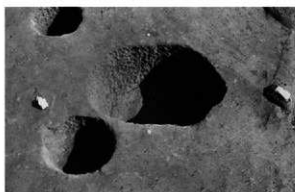
8. 同7号土坑 (北から)



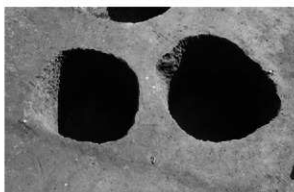
1. 92区8号土坑 (西から)



2. 同9・10号土坑 (西から)



3. 同12号土坑 (西から)



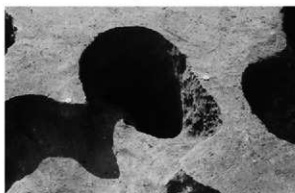
4. 同13・14号土坑 (西から)



5. 同15号土坑 (東から)



6. 同16号土坑 (東から)



7. 同18号土坑 (東から)



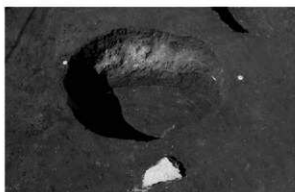
8. 同19・20号土坑 (東から)



1. 92区21号土坑 (西から)



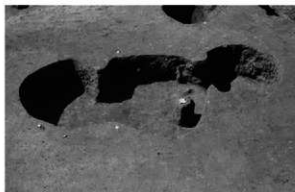
2. 同22号土坑 (東から)



3. 同23号土坑 (東から)



4. 同24号土坑 (東から)



5. 同25・26号土坑 (北から)



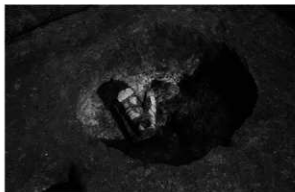
6. 同27・28号土坑 (南から)



7. 同29・30号土坑 (西から)



8. 同32号土坑 (西から)



1. 92区32号土坑 (南から)



2. 同 (東から)



3. 同33号土坑 (南から)



4. 1区1号土坑 (西から)



5. 同2号土坑 (西から)



6. 2区1号土坑 (北から)



7. 同2号土坑 (北から)



8. 同セクション (南から)



1. 2区3号土坑 (北から)



2. 同4号土坑 (南東から)



3. 同5号土坑 (南東から)



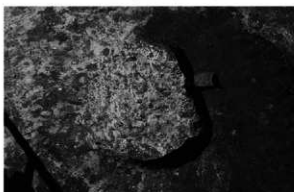
4. 同6号土坑 (北から)



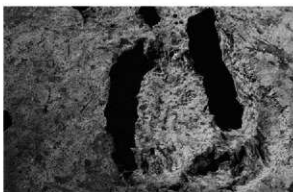
5. 同7号土坑 (北から)



6. 同8号土坑 (西から)



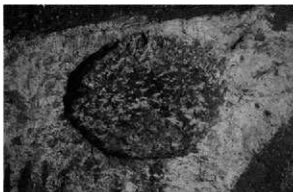
7. 同9号土坑 (南から)



8. 同10号土坑 (北から)



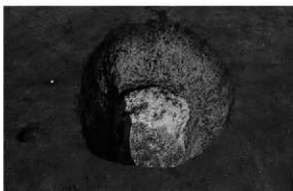
1. 2区12号土坑 (南から)



2. 同13号土坑 (南から)



3. 同14号土坑 (東から)



4. 同17号土坑 (南から)



5. 92区L-20グリッド遺物出土状況



6. 同M-23グリッド遺物出土状況 (南から)



7. 同N-23グリッド遺物出土状況 (西から)



8. 同19年2月19日現在の幸神 (北から)

P L 68

幸神遺跡



92区1号住居



92区2号住居

幸神遺跡

P L 69



92K19土-1



92K19土-2



92K19土-3



92K32土-1



92K32土-2



92K32土-3



表



裏

92K32土-4



92K33土-1



92K10土-1

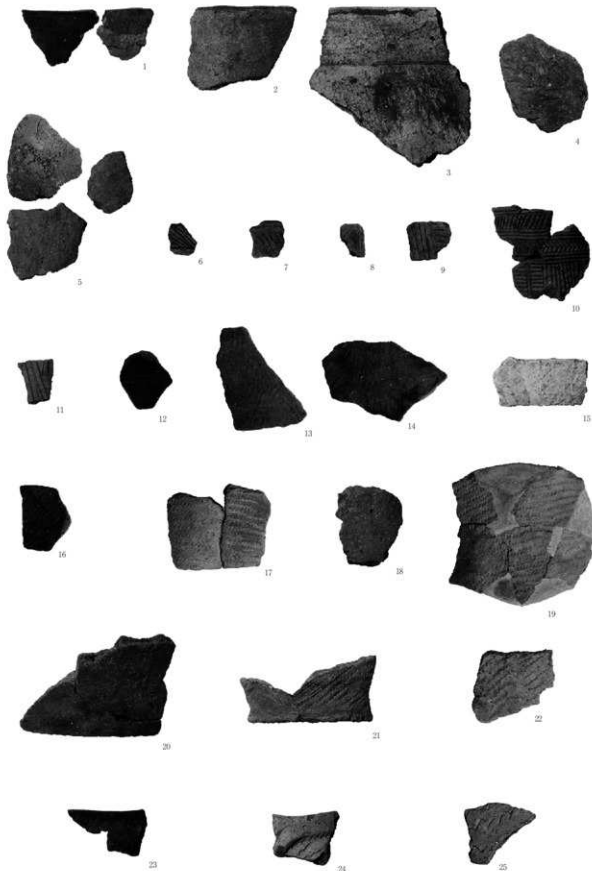


92K12土-1

92区土坑

P L 70

幸神遺跡



遺構外出土遺物(1)





60



61



62



63



65



66



67



68



64



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



P L 74

幸神遺跡



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122



123

遺構外出土遺物(5)

幸神遺跡

P L 75



124



125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



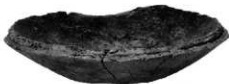
135



136



137



138



139



140



141



142

遺構外出土遺物(6)

P L 76

幸神遺跡



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



156



157



158



159



160



161



162



163



164

遺構外出土遺物(7)



106



107



108



109



170



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



183



184



185



186





208



209



210



211



212



213



214



215



216



217



財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団調査報告書第429集

山根Ⅲ遺跡(2)・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡

ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

平成20年3月1日 印刷

平成20年3月15日 発行

発行／編集 財団法人 群馬埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

電話 0279-52-2511 (代表)

URL <http://www.gunmaibun.org/>

印刷 株式会社開文社印刷所

